

# 接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化 に関する計画論的研究

中江, 亮太

<https://doi.org/10.15017/1654988>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（工学）, 論文博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と  
顕在化に関する計画論的研究

The Theory for Planning Coastal Landscape Elements from  
the View of People's Accessibility

中江 亮太

Ryota NAKAE

平成 28 年 2 月

## －目次－

<b>第1章 研究の背景及び目的</b> .....	1
1-1 研究の背景 .....	2
1-1-1 海辺に関連する我が国の国土施策 .....	2
1-1-2 海辺景観の捉え方 .....	9
1-1-3 海辺景観の活用と保全・再生に関するスケール別の捉え方 .....	11
1-2 研究の目的 .....	13
<b>第2章 研究概要</b> .....	14
2-1 論文の構成 .....	14
2-2 本研究の調査対象地と調査手法の考え方 .....	17
2-2-1 調査対象地の設定 .....	18
2-2-2 調査単位の考え方 .....	20
2-3 海辺への接近に関する調査・分析方法の設定 .....	21
2-4 海辺の景観要素抽出に関する調査方法の設定 .....	22
2-5 広域スケールにおける海辺の距離景別の設定 .....	24
2-6 広域スケールにおける高次都市・中心市から海辺までの 時間距離の指標設定 .....	25
<b>第3章 広域地方計画区域からみた海辺景観に資する         基礎的空間構成の把握・類型化</b> .....	26
3-1 調査単位の設定 .....	26
3-2 土地利用基本計画に基づく海辺の利用区分の現状 .....	27
3-3 接近性からみた海辺の類型 .....	29
3-4 空間構成からみた海辺の類型 .....	31
3-4-1 海岸線の整備状況からみた海辺の類型 .....	31
3-4-2 海域の計画範囲からみた海辺の類型 .....	33
3-4-3 陸域の計画範囲からみた海辺の類型 .....	35
3-5 広域地方計画区域からみた海辺景観に資する 基礎的空間構成の把握・類型化 .....	40
3-6 考察結果 .....	42
<b>第4章 詩歌作品からみた海辺の景観要素の抽出</b> .....	44
4-1 海辺景観要素の整理における継時的区分の設定 .....	44
4-2 詩歌作品からみた海辺の景観要素の抽出 .....	45

4-3	詩歌作品からみた港の景観要素の抽出	48
4-4	考察結果	51
<b>第5章 自然公園における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件</b> ……52		
5-1	調査単位の設定	52
5-2	玄海国定公園の海辺の現状	53
5-2-1	海岸線の整備状況からみた海辺の類型化	53
5-2-2	特別地域の割合	56
5-3	接近性からみた海辺の類型化	59
5-4	自然公園における海辺景観要素の抽出・類型化	61
5-4-1	自然が多くみられる海辺の景観要素	61
5-4-2	印象的な自然景観からみた海辺の類型化	63
5-5	自然公園における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件	66
5-6	考察結果	68
<b>第6章 港湾における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件</b> ……69		
6-1	調査単位の設定	69
6-2	空間利用ゾーニングの状況	70
6-3	接近性からみた海辺の類型化	71
6-4	港における景観要素の抽出・類型化	73
6-5	港湾における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件	81
6-6	考察結果	83
<b>第7章 海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件と計画論的意義</b> ……84		
7-1	中心市・高次都市からの時間距離からみた海辺への接近性	84
7-2	自然公園・港の存在率からみた海辺の類型	86
7-2-1	自然公園の面積率からみた海辺の類型	86
7-2-2	港の箇所数（千haあたり）からみた海辺の類型	86
7-3	海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件と計画論的意義	89
<b>参考文献</b>		93
<b>図表リスト</b>		99
<b>参考資料</b>		102

## 第 1 章 研究の背景及び目的

## 第1章 研究の背景及び目的

高度経済成長期における量的拡大、開発型の社会から成熟型社会への転換に伴い、我が国の国土施策では、全国総合開発計画に代わって国土形成計画が2008年に制定されており、災害対応や景観形成、あるいは東アジアとの交流などを目標に掲げつつ、ハード・ソフトを織り交ぜた様々な取組を進めている。

またこの計画では、国主導から地方主導の国土施策を展開するために、国内全体を対象とする「全国計画」のほかに、8つの地方ブロック（東北圏、首都圏、北陸圏、中部圏、近畿圏、中国圏、四国圏、九州圏）を対象とする「広域地方計画」を設けることを定めている。この広域地方計画では、ブロックごとに、国の地方支分局や都道府県間が協力しながら、地域の特徴や資源を活かした地方独自の計画を策定することを定めており、地方が自立的な発展を目指すことのできる計画体系となっている。

このような状況で、活用が考えられる地域の特徴や資源の一つとして、四方を海で囲われた我が国には、海辺がある。海辺は、砂浜や海食崖など、長きにわたる自然現象によって形成された自然海岸や、砂防林目的によって植樹された白砂青松の海岸、あるいは海運の効率化のために整備された人工海岸のように、多様な空間で構成されている。このような海辺を、印象深い景観資源として保全し、活用することは、地方の魅力形成につながり、ひいては広域地方計画における地方の自立的な発展に寄与する可能性があると考えられる。

一方、このような海辺は、港湾法や海岸法、自然公園法などの個別の法制度に基づき、護岸や自然林などが整備・保全されることによって、空間が構築されている。よって、海辺景観の創出や活用を検討する場合、これらの個別の制度の目的や規制内容などを考慮する必要がある。

また、広域地方計画では、独自の事業に関する予算が設定されておらず、計画の推進は、地方支分局、都道府県など、各構成機関の個別事業にゆだねられている。広域地方計画を推進するために設けられる広域連携プロジェクトは、テーマ別にこれらの個別事業をユニット化しとりまとめ、事業を実施する構成機関が協力・連携しながら進めることとなっているが、具体的な連携手法は示されていない。このことは、地方ブロック単位となる広域スケールで、関連する個別の制度を横断的・包括的に捉えながら、印象深い海辺景観を構成する要素の潜在量を把握すると共に、その魅力を創出し、活用する（顕在化する）ための合理的な計画条件を設定する必要があることを示している。

そこで本章では、研究の背景として、国内の法制度や既往の文献及び研究事例の基礎認識を通じて、本研究で提示する、接近性からみた海辺景観を構成する資源（以下、海辺景観資源）の潜在量把握と顕在化の計画条件に関する考え方・捉え方を以下に示した。

## 1-1 研究の背景

自然海岸や人工海岸など、多様な様相がみられる海辺景観は、土地利用基本計画（国土利用計画法）を上位計画として、港湾計画（港湾法）、海岸保全計画（海岸法）に基づく防波堤・護岸の整備や、自然公園計画（自然公園法）に基づく砂浜や松林などの保全などによって、その全体像が構築されている。そこで本節では、海辺景観の全体像を形成する場合の土台となる、海辺の整備や保全に関わる関連計画の内容を把握し、海辺景観の創出や活用の検討に当たって配慮すべき基礎的な制度として整理した。また、研究事例などから、景観そのものの考え方・捉え方を概観し、本研究における海辺景観の定義を以下に示した。更には、広域スケール下における近年の人々の活動圏域や、政策展開、また海辺景観の活用に関する研究事例を踏まえ、本研究における接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画論に関する有用性を以下に示した。

### 1-1-1 海辺に関連する我が国の国土施策

近年、地域の特性に応じた地方の自立的発展のために、道州制が議論されているなど、県境を超えた広域スケールでの施策が検討されている。2008年に策定された国土形成計画では、高度経済成長期における開発型社会から成熟型社会への転換に合わせて、ハード施策のほかにソフト施策を織り交ぜながら、全国総合開発計画における開発基調からの転換を図っている。また、この計画では、地域の自立的な発展を目的に、従来の全国計画のほか、北海道と沖縄を除く8つの地方ブロックごとに広域地方計画を設け、「国と地方の協働によるビジョンづくり」を進めているなど、道州制に先行した広域スケールでの施策を展開している。更には、2011年3月に発生した東日本大震災や、本格的な人口減少社会の到来に伴い、平成26年には、国土の新たな理念・考え方を示す「国土のグランドデザイン 2050」が策定されており、これらに伴い、国土形成計画（全国計画）、広域地方計画の見直し（中間整理）も進められている。

表 1-1 これまでの全国総合開発計画と国土形成計画の概要<sup>1)</sup>

計画名	閣議決定年次	背景	基本理念
全国総合開発計画(全総)	昭和 37 年 10 月	1 高度成長経済への移行 2 過大都市問題、所得格差の拡大 3 所得倍増計画(太平洋ベルト地帯構想)	【地域間の均衡ある発展】 都市の過大化による生産面・生活面の諸問題、地域による生産性の格差について、国民経済的視点からの総合的解決を図る。
新全国総合開発計画(新全総)	昭和 44 年 5 月	1 高度成長経済 2 人口、産業の大都市集中 3 情報化、国際化、技術革新の進展	【豊かな環境の創造】 基本的課題を調和しつつ、高福祉社会を旨ざして、人間のための豊かな環境を創造する。
第三次全国総合開発計画(三全総)	昭和 52 年 11 月	1 安定成長経済 2 人口、産業の地方分散の兆し 3 国土資源、エネルギー等の有限性の顕在化	【人間居住の総合的環境の整備】 限られた国土資源を前提として、地域特性を生かしつつ、歴史的、伝統的文化に根ざし、人間と自然との調和のとれた安定感のある健康で文化的な人間居住の総合的環境を計画的に整備する。
第四次全国総合開発計画(四全総)	昭和 62 年 6 月	1 人口、諸機能の東京一極集中 2 産業構造の急速な変化等により、地方圏での雇用問題の深刻化 3 本格的国際化の進展	【多極分散型国土の構築】 安全でうるおいのある国土の上に、特色ある機能を有する多くの極が成立し、特定の地域への人口や経済機能、行政機能等諸機能の過度の集中がなく地域間、国際間で相互に補完、触発しあいながら交流している国土を形成する。
21世紀の国土のグランドデザイン	平成 10 年 3 月	1 地球時代(地球環境問題、大競争、アジア諸国との交流) 2 人口減少・高齢化時代 3 高度情報化時代	【多軸型国土構造形成の基礎づくり】 多軸型国土構造の形成を目指す「21 世紀の国土のグランドデザイン」実現の基礎を築く。 地域の選択と責任に基づく地域づくりの重視。
国土形成計画	平成 20 年 7 月	1 人口減少・高齢化時代 2 地球環境への負荷 3 東アジアとの連携 4 大規模災害の懸念	【量的拡大「開発」基調から「成熟社会型の計画」へ】 【国主導から二層の計画体系(分権型の計画づくり)へ】 多様な広域ブロックが自立的に発展する国土を構築するとともに、美しく、暮らしやすい国土の形成を図る。
国土のグランドデザイン 2050	平成 26 年 7 月	1 急激な人口減少・少子化 2 異次元の高齢化の進展 3 都市間競争の激化などグローバル化の進展 4 巨大災害の切迫、ITの老朽化 5 食料・水・エネルギーの制約、地球環境問題 6 ICTの劇的な進歩など技術革新の進展	【実物空間と知識・情報空間が融合した「対流促進型国土」の形成】 地球表面の実物空間(「2 次元的空間」と知識・情報空間が融合した、いわば「3 次元的空間」と、数多くの小さな対流が創発を生み出し、大きな対流へとつながっていく、「対流促進型国土」を形成する。
新たな国土形成計画(全国計画)	平成 27 年 7 月	同上	・多様な個性を持つ様々な地域が相互に連携し、イノベーションをもたらす「対流促進型国土」を形成する。 ・医療・商業等の機能をコンパクトに集約し、ネットワークでつながる重層的かつ強靱な国土を形成する。 ・東京一極対流を解消し、人の流れを変える。 ・魅力ある地方の創生と東京の国際競争力を向上させる。

また、国土形成計画と一体的に定められるものとして、国土利用計画がある。国土形計画が、国土の利用、整備及び保全(国土の形成)を推進するための総合的かつ基本的な計画で、総合的な国土の形成に関する施策の指針を示すものに対し、国土利用計画は、国土の利用に関して、

国の他の計画の基本となるものを定めており、その下位計画における土地利用基本計画では、国土全体を都市地域、農業地域、森林地域、自然公園地域、自然保全地域の5地域に区分し、各地域の土地利用上の規定事項を定めている。

表1-2 5地域の概要<sup>2)</sup>

地域名	国土利用計画法上の規定	運用
都市地域 (10,143千ha)	一体の都市として総合的に開発し、整備し、及び保全する必要がある地域	都市計画法に基づく都市計画区域として指定されることが相当な地域
農業地域 (17,230千ha)	農用地として利用すべき土地があり、総合的に農業の振興を図る必要がある地域	農業振興地域の整備に関する法律に基づく農業振興地域として指定されることが相当な地域
森林地域 (25,397千ha)	森林の土地として利用すべき土地があり、林業の振興又は森林の有する諸機能の維持増進を図る必要がある地域	森林法に基づく国有林及び地域森林計画対象民有林として指定されることが相当な地域
自然公園地域 (5,440千ha)	優れた自然の風景地で、その保護及び利用の増進を図る必要がある地域	自然公園法に基づく国立公園、国定公園及び都道府県立自然公園として指定されることが相当な地域
自然保全地域 (105千ha)	良好な自然環境を形成している地域で、その自然環境の保全を図る必要がある地域	自然環境保全法に基づく原生自然環境保全地域、自然環境保全地域及び都道府県自然環境保全地域として指定されることが相当な地域

※注：( ) の面積は全国値であり、平成22年3月31日時点のものを示す

一方、海辺は、広辞苑で「海のほとり、海岸近くの所」と示されており、同義語とされる「海岸」では、「陸と海の相接する地帯」<sup>3)</sup>と示されている。また、環境庁（現環境省）の自然環境保全基礎調査では、海辺（海岸）を、「通常大波の限界線（満潮時の線）より陸側100mの区域」<sup>4)</sup>と定義しており、これら陸側100m部分は、土地利用基本計画に基づき、5地域のいずれかによって区分されている。

更に海辺は、5地域区分の規定を基本としつつ、更に「海岸法」や「港湾法」などに基づき、開発や整備に関する詳細な規定が定められている。「海岸法」では、津波、高潮、波浪等による被害から海岸を防護することを目的に、海岸保全基本計画を策定すると共に、この計画に基づき、防波堤、防潮堤などの整備を進めている。「港湾法」では、港湾の秩序ある整備と適正な運営と、航路を開発し保全することを目的に、港湾計画の策定を定めると共に、この計画に基づき、岸壁や荷捌き地、泊地の浚渫などの整備が進められている。また貴重な自然景観や生態系などがみられる海辺では、「自然公園法」や「自然環境保全法」によって、開発や整備に関する規制・制限（保全規定）が設定されている。

これらの法制度の下に、近年の海辺は開発・整備が進み、人工海岸や自然海岸など、現在の様々な様相を呈している。ここで、基礎認識として、これら法制度の策定経緯も含め、我が国の海辺に関する開発・整備・保全に係る歴史を以下に整理した。

海辺景観の変化に特に影響のあるものでは、土地の大きな改変が伴う港の開発が挙げられる。輸送の主流が海運となっていた我が国では、7世紀に佐賀県杵島郡にて干拓の形跡がみられており、本格的な築港が開始したのは、平安時代後期の平清盛であるとされている。以降、輸送・交通としての海運は、江戸時代に鎖国によって国外貿易が一部を除き閉鎖されるものの、国内の物流をつなぐ主要ラインとして発達し、江戸・大阪航路、東北地方への太平洋東回り航路、日本海側の西回り航路の三大航路が成立したとされている<sup>5)</sup>。明治時代になると、欧米先進諸国から近代文明が導入され、野蒜港(宮城県)を皮切りに本格的な築港がはじまり、大正10年には公有水面埋立法、昭和25年には港湾法が制定され、以降各地で港湾整備が進められている<sup>6)</sup>。また昭和20年代に発生した伊勢湾台風、チリ地震津波、第2室戸台風による津波などの被害を受け、これらの災害地から後背地の財産を守るため、昭和31年に海岸法が制定し、各地の海辺で防潮堤・防波堤の整備が進められている<sup>7)</sup>。昭和40年代になると、港湾では、海上輸送の効率化を優先した整備を進めてきた一方で、環境問題などの弊害が生じるようになり、これを受けて、昭和48年には、港湾法において緩衝緑地帯や修景厚生地区の設置などを盛り込んだ港湾環境整備事業が制定されている。さらに、平成11年の海岸法改定では、前述のごとく水際線の防護目的から、新たに「環境」、「利用」の目的が追加され、防波堤単体による海岸線に沿った線的整備から、海浜なども交えた面的防護方式への転換などが図られてきている。最近では、平成16年の景観法策定に伴い、港湾及び海岸の景観形成に着目し、ガイドラインとして「港湾景観形成ガイドライン(平成17年,国土交通省)」及び「海岸景観形成ガイドライン(平成18年,国土交通省、農林水産省)」が作成されている。

この他、先に示した全国総合開発計画は、昭和37年に策定されており、以降平成10年まで、時代の変化に合わせて、5次にわたる総合計画が策定されている。また平成17年には、成熟型社会の到来に伴い、全国総合開発計画に代わって、国土形成計画が策定されている。

国土利用計画法は昭和49年に策定されており、この法律では、国土の利用に関する基本構想、国土の利用目的に応じた区分ごとの規模の目標等を定めた国土利用計画と、該当地域の土地利用に関する諸計画を総合的に調整する、土地利用に関するマスタープランとして、先に示した土地利用基本計画を定めることとしている<sup>8)</sup>。

表 1-3 国内の海辺に関わる主な出来事<sup>9)、10)、11)</sup>

時代	出来事
7世紀	佐賀県杵島郡にて干拓
天平年間(729~748)	大阪湾~瀬戸内海沿岸に、櫻生泊、韓、魚住泊、大輪田泊、川尻泊の五泊が開港
律令時代~平安時代	大陸との交易の場として博多那ノ津が繁栄
平安時代後期	平清盛(1118~81)が、日宋貿易のため、大輪田泊(現神戸市)を修築
鎌倉時代	鎌倉の由比ヶ浜に和賀江嶋港を開港
室町~戦国時代	港湾都市として対明貿易における堺(港特有の都市文化)が開港
江戸時代初期	鎖国により外交は長崎出島のみとなる 国内千石船の寄港地として廻船の湊開港
江戸時代	江戸・大阪航路、東北地方への太平洋東回り航路、日本海側の西回り航路の三大航路の成立、野中兼山による、わが国最初の掘り込み港湾である高知県の手結・室津・津呂などが開港
江戸時代末期	アメリカの黒船による開国：長崎・新潟・横浜・兵庫・函館の開港
明治11年	野蒜築港(宮城県)の開発(日本初の洋式近代港湾)
明治32年	横浜港にて港湾施設のための埋立開始
大正10年4月	公有水面埋立法制定
昭和25年5月	国土総合開発法
昭和25年5月	港湾法制定
昭和31年5月	海岸法制定
昭和37年9月	臨海工業地帯開発計画の策定
昭和37年10月	全国総合開発計画の策定
昭和44年5月	新全国総合開発計画の策定
昭和48年7月	港湾法一部改正
昭和48年9月	公有水面埋立法改定
昭和49年6月	国土利用計画法制定
昭和52年11月	第三次全国総合開発計画の策定
昭和62年6月	第四次全国総合開発計画の策定
平成2年6月	公有水面埋立法改定
平成4年3月	ビーチ利用促進モデル地区制度創設
平成4年3月	シーブルー計画策定
平成6年3月	「新たな港湾環境政策ー環境と共生する港湾(エコポート)をめざしてー」策定
平成10年3月	全国総合開発計画「21世紀の国土のグランドデザイン」の策定
平成11年5月	海岸法一部改定
平成12年3月	港湾法改定
平成14年7月	SOLAS条約(海上における人命の安全のための国際条約)の改定
平成15年7月	美しい国づくり政策大綱策定
平成16年6月	景観法制定
平成17年3月	港湾景観形成ガイドライン策定
平成17年7月	国土形成計画法改定(全国総合開発計画法から名称変更)
平成18年1月	海岸景観形成ガイドライン策定
平成20年7月	国土形成計画(全国計画)策定
平成21年9月	国土形成計画(広域地方計画)策定

また、開発・整備以外では、我が国の海辺景観を形成してきた主要な出来事として、後背地を塩害や砂風から守るため実施された松の植林活動がみられる。

我が国の主な植林活動の歴史を図1-1に示した。全般的に見て日本海沿岸の砂丘地帯に多く、太平洋沿岸に関するものは少なくなっており<sup>12)</sup>、これは、日本海沿岸に砂丘地が多いこと、侵食海岸が多いことなどが主な理由とされている。この植林活動は、明治時代まで全国各地で続けられており、また後に滋賀重昂が著書「日本風景論」のなかで松と白砂の海辺を「白砂青松」と名づけるなど<sup>13)</sup>海辺の貴重な景観資源となっており、現在、その多くは、「自然公園法」に基づく自然公園区域や、「文化財保護法」に基づく名勝地などに指定され、適宜、保全・保護のための利用に関する規制などが定められている。



図1-1 国内における主な植林活動の背景

以上のことから、現状の海辺は、海運利用のための開発・整備や、松の植栽に関する自然の保全など、長期にわたる様々な取組の積み重ねによって形成されていることが窺えた。

海辺空間は、これらの制度を基に、開発や保全が進められてきているが、その特徴は、大きくは、「人工物の多い海辺」と「自然物の多い海辺」の2つに分けることができる。

そこで、埋立や護岸整備などの人工物が多くみられる海辺と、貴重な植生などの自然物が多

くみられる海辺の2つの視点から、景観検討に関する既往研究例を以下に概観した。

### ①人工物が多くみられる海辺における景観検討の既往研究例

海辺の人工構造物に対する景観に配慮した研究では、松原や宇多らが、離岸堤の代替えとして、人工リーフを整備した場合の景観向上の価値評価についてCVM及びTCMの2つの手法を用いて検討しており<sup>14)</sup>、<sup>15)</sup>、岡田は、ソフト施策も含め、海辺において防波堤などの構造物を設置しない対応法について検討するなど、人工構造物そのものの存在を希薄にすることで、景観の向上を検討している<sup>16)</sup>。また河野らは、傾斜堤の覆石としてかんらん岩を活用し、周囲の景観と調和する事例やその効果を評価したものなど、人工構造物に修景整備を施すことで、景観の向上を検討している<sup>17)</sup>。一方で岡田らは、港湾施設そのものに着目し、ヒアリング調査を通じて港湾施設の景観的位置づけ(順位)や港湾施設と他の景観要素との好ましい組み合わせについて検討しており<sup>18)</sup>、また盛岡らは、人工海浜に対し、景観要素も含めた費用対便益をアンケート調査に基づいて分析するなど、人工構造物そのものの景観評価について検討している<sup>19)</sup>。また柴山らは、海辺景観に対する世代を超えて存在する砕波の景観に着目し、その景観を還元し得る海岸構造物について検討するなど、人工構造物がもたらす副次的景観について検討している<sup>20)</sup>。

上島らは、海浜リゾート都市の事例を収集分析し、快適で魅力的な水際空間におけるデザイン規模指標を抽出、設定しており<sup>21)</sup>、また、夜間時を対象に、人工空間の景観構成を分析・評価しているものでは、西林らが、臨海部の夜景描写に着目し、光源の種類や水面反射光の分類から、夜景のパターンを類型化しており<sup>22)</sup>、安藤らは、港の夜間照明から、光の発散度から光害問題も踏まえた今後の夜間景観整備の方向性について明らかにしている<sup>23)</sup>。

### ②自然物が多くみられる海辺における景観検討の既往研究例

海辺の植生や地形など、自然の特徴から景観要素を捉えたものでは、山田らが、現存植生図を用いて、沿岸部における植生群落の特徴を把握・整理し、植生景観の特徴として類型及び評価を行っている<sup>24)</sup>。一方浅見らは、松原を対象に、当初予定されていた保全形態と現状を比較することで、植生管理の問題点と今後の方向性を検討しており<sup>25)</sup>、また南里らは、水郷におけるヨシ原を対象に、その変化の要因を分析することで、水郷の文化的景観の保全等のあり方について考察するなど、海辺の自然景観に対する人為的管理の有用性を論じている<sup>26)</sup>。

植生以外では、志摩らが野鳥及びその生息地を、海岸景観の一構成要素として捉え、生息地形態を分類することでその景観的特徴を明らかにしており<sup>27)</sup>、また沢本は、海岸の砂のサンプルから、海岸の砂の色を定量化について検討している<sup>28)</sup>。

以上、①、②の既往研究の概観では、海辺における人工物や自然物などの個別具体的な対象に

着目し、その特徴などを分析・整理することで、海辺景観の活用や保全に関する示唆を得ているものが多くみられた。

一方、景観そのもの捉え方や評価は、海辺に訪れる人の意見に基づくものや、文化的価値として認められたもの、固有の自然を対象としたものなど、様々な設定がみられる。このことから、本研究における海辺景観の考え方や捉え方について、一度整理する必要があると考えられる。そこで、次節では、景観に関する書籍や既往研究から、景観の考え方・捉え方を概観すると共に、これらを踏まえた本研究の海辺景観の捉え方を以下に示した。

### 1-1-2 海辺景観の捉え方

景観は、ドイツ語の Landschaft に対し、1902年、植物学者の三好学が訳語として当てたのが最初とされており、その後、地理学、生態学、工学、緑地学など、様々な分野に波及した<sup>29)</sup>とされている。景観は、広辞苑では「けしき、ながめ」<sup>30)</sup>とされており、「ある土地において自然と人間の交渉によって形成される可視的環境のこと」や、「地上の眺め。環境の眺め。景色は眺めと同じく目に映る客観的な姿形」と定義されているなど、視覚領域として捉えられている場合がみられる。<sup>31)</sup>また進士は、景観を「工学的アプローチによって把握できるフィジカルな側面からの視覚像を指す」ものとしており、視覚領域以外のことは、別途「風景」とし、「人間にとって認知される視覚環境の全体像や総合像（文学的）であり視覚像をめぐる人間の意識、記憶、思想、精神をつかさどるもの」と定義づけしている<sup>32)</sup>。一方、久保は、時間経過に伴い変化する都市の変容を「生き物」と称し、「建物・街路・オープンスペース・車・植物・水・人間等が有機的に関係づけられ、その関係を通じて生き生きとした生命観に満ちた快適な環境体であることが望まれている。」と示しており、さらに「景観計画や景観整備という面から考えると、これらの相互関係から生じる知覚的環境としての全体景観（Total Landscape）の質が非常に重要になってくる。」と述べるなど<sup>33)</sup>、快適な景観形成のために、周辺と人間との関係を時間的変容も含めた総体的な感覚でとらえることの必要性を示している。また、知覚的環境としての景観の意味では、杉本が、「人間の視覚面を中心に考えるのではなく、人間の知覚機能、すなわち、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚、想覚、その他の覚を通じて把握される総体である。」と定義しており、景観を五感で捉えることの重要性を示している<sup>34)</sup>。さらに、平成17年の文化財保護法の改定では、「文化的景観」を、「所与のもの・静態的なものとしてではなく、有形・無形の諸要素が有機的に関係しつつ一体として成立しているもの、あるいはそれらが時間的に積み重なったもの、個人又は集団の記憶において象徴的な意味を持つものなど、地域の人々がその中で暮らす『生きられた空間』として景観を描写すること」と示している<sup>35)</sup>。これらのことや、昨今のバリアフリー対応を考慮すると、海辺におい

て景観の享受を計画的に検討する際は、景観を知覚的感覚（五感）で体感できる様々な要素を含めた総体的な環境（空間）に配慮すると共に、体感の対象となる景観について、内包する主体・構造・意味などの諸要素を、海辺の時間的変容（地歴）も踏まえながら把握・整理することが、今後重要になると考えられる。

以上の景観に関する捉え方・考え方を踏まえて、関連する既往文献・研究事例を、「①海辺利用者の印象から景観を捉えたもの」、「②海辺における継時的要素から景観に関する示唆を得たもの」の2つの視点で、以下に整理した。

### ①海辺利用者の印象から景観を捉えたもの

実際に海辺の利用者の印象から景観を捉えたものとしては、松原、熊谷、松島らが、海辺周辺の居住者を対象に、アンケート調査などから海辺に対する印象を把握・整理し、海辺景観の構成要素などを分析している<sup>36)、37)、38)</sup>。松島や徐本、押田、辻本、三溝らは、大学生や小学生を対象に、アンケート調査から、海辺に対するイメージ（心象風景）を把握・分析し、海辺の空間認識や、特に印象深い景観要素を抽出・整理することで、海辺の利用効果や、海辺の景観整備などの示唆を得ている<sup>39)、40)、41)、42)、43)</sup>。また井上や松島らは、実際に海辺を訪れている人を対象にアンケート調査を実施し、海辺における利用行動と合わせて、景観や環境に対する意識把握調査などを実施し、利用者の視点から海辺景観を評価しており<sup>44)、45)</sup>、竹沢らは、漁港において、訪れた人を対象としたアンケート調査に基づき、「美観度」を設定することで、景観の定量的評価方法について検討している<sup>46)</sup>。さらに内田らは、港景景観に対する利用者の支払意志額を調査し、CVMの視点から海辺のアメニティに対する価値評価の手法を検討し、またその結果に基づくアメニティ整備のあり方について考察している<sup>47)</sup>。

東島や上島らは、港を対象としたフォトコンテストの写真から、船舶などの景観構成要素を抽出・整理することで、港の景観構造を分析するとともに、鑑賞法などの楽しみ方に関する示唆を得ており<sup>48)、49)</sup>、また東島らは、観光地のパンフレットにおける海辺景観の記述表現の分析から、海岸の現象と人の認識構造の関係を把握している<sup>50)</sup>。

### ②海辺における継時的要素から景観に関する示唆を得たもの

海辺の継時的要素などを踏まえた海辺景観に関する既往研究では、岡田や星野らが、海辺に現存する砲台や要塞跡に着目し、その眺望や訪れる人々の評価などから、景観の価値について検討している<sup>51)、52)</sup>。また、田村らは、名勝地となっている海浜の松原を対象に、その景観の形成過程から、魅力的な海岸整備への示唆を得ている<sup>53)</sup>。坂出や飯田、岡田らは、江戸時代の浮世絵や幕末期・明治期の写真資料などの資料から、描写されている歴史的に価値のある景観要素を抽出・分類することで、現在の海辺における整備や保全・利用の際の基礎的指標とし

てとりまとめている<sup>54)、55)、56)</sup>。また上島や西田、吉田らは、地域の民族学的資料や、紀行文、古地誌などから、白砂青松などの従前の海辺の自然風景を把握・分析し、あるいは古代から現代にかけての日本人の海辺の景観の捉え方によって、現代の海辺景観の形成に活用するための基礎資料としてとりまとめている<sup>57)、58)、59)</sup>。さらに、北原は、地元の小中学校や高等学校の校歌に着目し、その校歌にうたわれた景観要素から、市民のイメージの中に形成されている景観構造について分析している<sup>60)</sup>。

以上、①、②の基礎認識から、海辺景観の捉え方について、海辺の利用者の意見から海辺景観の要素に関する示唆を得たもの、また絵画や文献に基づく歴史的背景から、かつての海辺景観の要素を抽出・整理したものなどが窺えた。しかしながら、海辺景観を知覚的感覚（五感）で捉えることに配慮し、景観領域を踏まえた研究例や、海辺の長年に至る継時的変化の積み重ねに配慮した研究例はほとんどみられない。

これらのことから、海辺への接近性も含め、海辺景観を、知覚的感覚で認識可能な範囲で捉えることに考慮し、かつ、海辺景観の要素を継時的に捉え、海辺景観を構成する資源の潜在量を把握することとは、きわめて重要であると考ええる。

### 1-1-3 接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握に関する捉え方

海辺景観を享受しようとする際、多くの人は、居住地や宿泊地から相応の時間距離を経て海辺を訪れているが、この国内における時間距離は、近年、交通網の整備によって短縮傾向となっている。二層の広域圏に資する総合的な交通体系に関する検討委員会最終報告資料では、「1965年で全国平均約30%であった、国内における1日で移動可能な交通圏内（全国主要都市間で日帰り可能な交通圏）の人口が、2003年時点で60%となった」<sup>61)</sup>と示されているなど、「時間距離の短縮化」は「移動圏の広域化」に繋がっており、海辺にも、遠方から様々な人が訪れている。

また、これらの移動範囲の広域化は、生活圏や自治圏などの広域化に繋がっており、市町村では、隣接する自治体間が協働し、公共交通体系や公共施設の一体的な利用・整備を進めているなど、広域的なまちづくりが展開されている。1999年以降は、各地で市町村合併によって行政区域が広域化しており<sup>62)</sup>、また総務省では、近接する市町村間で都市機能の核となる中心市と、多くの自然や文化を供する周辺市町村が連携し、基礎的な生活圏を形成する定住自立圏の策定を推進している<sup>63)</sup>。

このように、移動範囲が広域化している状況において、海辺景観を活用すべく、接近性を検討する際は、一定の広域スケールで考える必要があると考えられる。

ここで広域スケールの視点からみた海辺景観の活用に関する研究例をみると、全国スケール

でみた研究では、宇都多らは、国内の沿岸域を対象に、気象特性や、主要駅数、インターチェンジ数などの地理的条件及び史跡名勝などの観光資源数などを基に、海洋性レクリエーションとしての沿岸域の類型化を行っており<sup>64)</sup>、敷田は、沿岸域の自然を生かしたエコツーリズムの現状を分析し、国内における将来的な発展の可能性と問題点について検討している<sup>65)</sup>。

また、地方ブロックスケールでみた研究では、浅田は、北海道におけるシーニックバイウェイ北海道の指定ルートに着目し、20m間隔で撮影した景観画像の解析からシークエンス景観の構造特性と変動特性を客観的に評価している<sup>66)</sup>。更に、都道府県等の範囲を対象とした地域スケールでは、中岡らが、神奈川県江ノ島を事例に、日帰り観光の受け入れ実態や成立条件について検討しており<sup>67)</sup>、山上は、神戸・横浜などの港湾都市を対象に、観光資源化された港湾空間の活性化のあり方などについて検討している<sup>68)</sup>。

これらの既往研究では、いずれも海辺景観を活用した地域活性の一環として、広域スケールでの検討を進めており、これらは、広域地方計画の目的である「文化・伝統や個性ある景観など美しい国土の再構築」や「広域ブロックが自立的に発展する国土を構築」とも一致すると考えられる。

しかし海辺は、土地利用基本計画の「5 地域」の規定に基づくだけでなく、「海岸法」や「港湾法」含め、様々な法制度に基づき、整備や保全が進められており、実際の現場は、自然海岸や人工海岸などによって複雑な空間構成となっていることから、海辺によっては、広域スケールで、海辺景観への接近のしやすさや、海辺景観資源を効率的に把握できない状況が想定される。

このことは、海辺景観の保全・活用などに資する潜在量の把握を検討する場合に、広域的な視点から詳細な視点まで、段階的にスケールを変えながら検討を進める必要がある事を示唆しているが、これまでの既往研究では、同様の事例はみられない。

そこで本研究では、これまでの基礎認識を基に、広域地方計画（国土形成計画）における広域地方計画区域の海辺を対象に、土地利用基本計画の5地域区分の割合や海辺の地理的特徴を把握することで、広域スケールにおいて、海辺景観の基礎となる空間構成の把握・整理すると共に、海辺の特徴的な土地利用がみられるエリアとして、自然海岸が多くみられる「自然公園区域の海辺」と、人工海岸が多くみられる「港湾」に着目し、それぞれの対象範囲内において印象深い海辺景観要素を抽出することで、より詳細なスケールでの海辺景観資源の潜在量把握を検討する。また、海辺景観の活用の可能性を探るため、スケール別の海辺へのアクセスのしやすさを把握し、接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を示すものとする。このことは、移動圏が広域化した現在において、スケール別に、段階的かつ効果的・効

率的な海辺景観の保全や活用のための計画を検討する上で、きわめて重要であると考える。

## 1-2 研究の目的

前節では、海辺景観の形成に関する基礎的認識として、国土形成計画や国土利用計画に基づく基礎的制度や、海辺の開発・自然の保全に関する歴史認識及び、さらに海岸法、港湾法、自然公園法などの法制度から、現在の海辺の空間構成の特徴について概観した。また、景観に関する既往研究や文献を概観することで、知覚的感覚に基づく景観享受の考え方や、景観の継時的積み重ねの考え方を示し、本研究における印象深い海辺景観の捉え方を示した。さらに、昨今の移動範囲の広域化と、多様化する海辺空間を背景に、接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件の必要性を示した。

そこで本研究では、これらの基礎認識を踏まえ、広域スケールとなる広域地方計画区域と、特に海辺空間を特徴づける自然公園区域及び港湾に着目し、それぞれの計画範囲における海辺への接近性と、海辺景観資源の潜在量を把握すると共に、海辺景観の効率的・効果的な活用と保全に資する計画条件の明確化と、その計画論的意義の探求を目的とした。具体的には、上記3つの対象範囲ごとの条件を捉えることを前提に、以下の5つの主な目的を設定した。

- ①広域地方計画区域において、海辺景観に資する基礎的な空間構成を把握し、顕在化の条件を明らかにすること
- ②国内の詩歌作品から自然物・人工物に関する印象深い海辺景観要素を継時的に明らかにすること
- ③自然公園における海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにすること
- ④港湾における海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにすること
- ⑤広域地方計画区域における自然公園と港湾の潜在量把握と顕在化のための計画条件を明らかにし、スケール別の計画論的意義を探求すること

## 第 2 章 研究方法

## 第2章 研究方法

本章では、1章で示した5つの目的に応じた研究方法として、広域スケールとなる広域地方計画区域の海辺と、自然海岸の多い自然公園の海辺、人工海岸の多い港をケーススタディに、それぞれの対象範囲のスケールに応じた調査手法の設定を示した。

### 2-1 論文の構成

本論文は、図2-1の研究の構成に示す通り、7章からなる。

第1章では、海辺に関わる国土施策や、海辺の開発、松の植林に関する歴史の変遷を概観することで、人工海岸や自然海岸など、現在に至る海辺の空間的特徴を把握した。さらに既往研究などから景観の考え方を把握・整理し、本研究における海辺景観の捉え方を設定した。また、近年の国内交通ネットワークの進展に伴う移動範囲の広域化によって、海辺の活用を検討する際は、俯瞰的な検討が必要であることを示した。これらの諸条件を踏まえ、広域スケールから個別具体の計画範囲まで、段階的に海辺景観資源の潜在量を把握し、接近性からみた海辺景観の顕在化の計画条件に関する示唆を得ることを目的とした。

第2章では、第1章で示した前提条件と5つの主要な研究目的に応じた研究方法を設定した。具体的には、広域地方計画区域（広域スケール）、自然公園区域（地域スケール）及び港湾計画範囲（地区スケール）の3つのスケール毎に、流域（集水域）に基づく海辺の調査単位の設定や、道路長、滞留用地面積から海辺への接近性を設定する方法、詩歌作品に基づく海辺の景観要素の抽出方法を設定した。また広域スケールに基づく中心市から海辺までの時間距離に関する分析方法を設定した。

第3章では、第1章で示した研究課題①に対応するため、広域地方計画区域の「九州圏」を対象に、現状の海辺の接近性や、海辺景観に資する基礎的な空間構成の特徴を把握・整理した。具体的には、海辺における道路長率から、海辺への接近性を捉えると共に、海辺の地理的特徴についてクラスター分析を行い、「浜辺型」や「人工型」などに類型化することで、広域スケールにおいて、接近性からみた海辺景観に資する基礎的な空間構成要素を潜在量の把握と顕在化に関する計画条件を明らかにすることとした。

第4章では、第1章で示した研究課題②に対応するため、国内の詩歌作品から、自然の海辺と港の印象深い海辺景観要素を抽出すると共に、我が国の海辺の歴史的出来事に沿って継時的に把握・整理することとした。

第5章では、第1章で示した研究課題③に対応するため、自然公園区域となる「玄海国定公園」を対象に、3章と同様、海辺の道路長率を設定し、海辺への接近性から自然公園の保全・

活用の可能性を示した。また、4章の詩歌から得られた自然の海辺景観要素に対応する資源を、国土地理院地形図を用いて抽出・整理することで、自然公園（地域スケール）において、接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにすることとした。

第6章では、第1章で示した研究課題④に対応するため、都市計画区域における「博多港」を対象に、不特定多数の人が滞留可能な用地の面積率から、港の活用の可能性を示した。また、第4章の詩歌から得られた港の海辺景観要素に対応する資源を、港湾計画図を基に抽出・整理することで、港（地区スケール）において、接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにすることとした。

第7章では、第1章で示した研究課題⑤に対応するため、広域スケールの視点で、中心市から海辺までの時間距離を把握し、時間的接近性から海辺景観の活用の可能性を把握すると共に、自然公園及び港の存在率から、海辺景観の潜在量を把握することで、接近性からみた海辺景観の顕在化の計画条件を示し、計画論的意義を探究した。

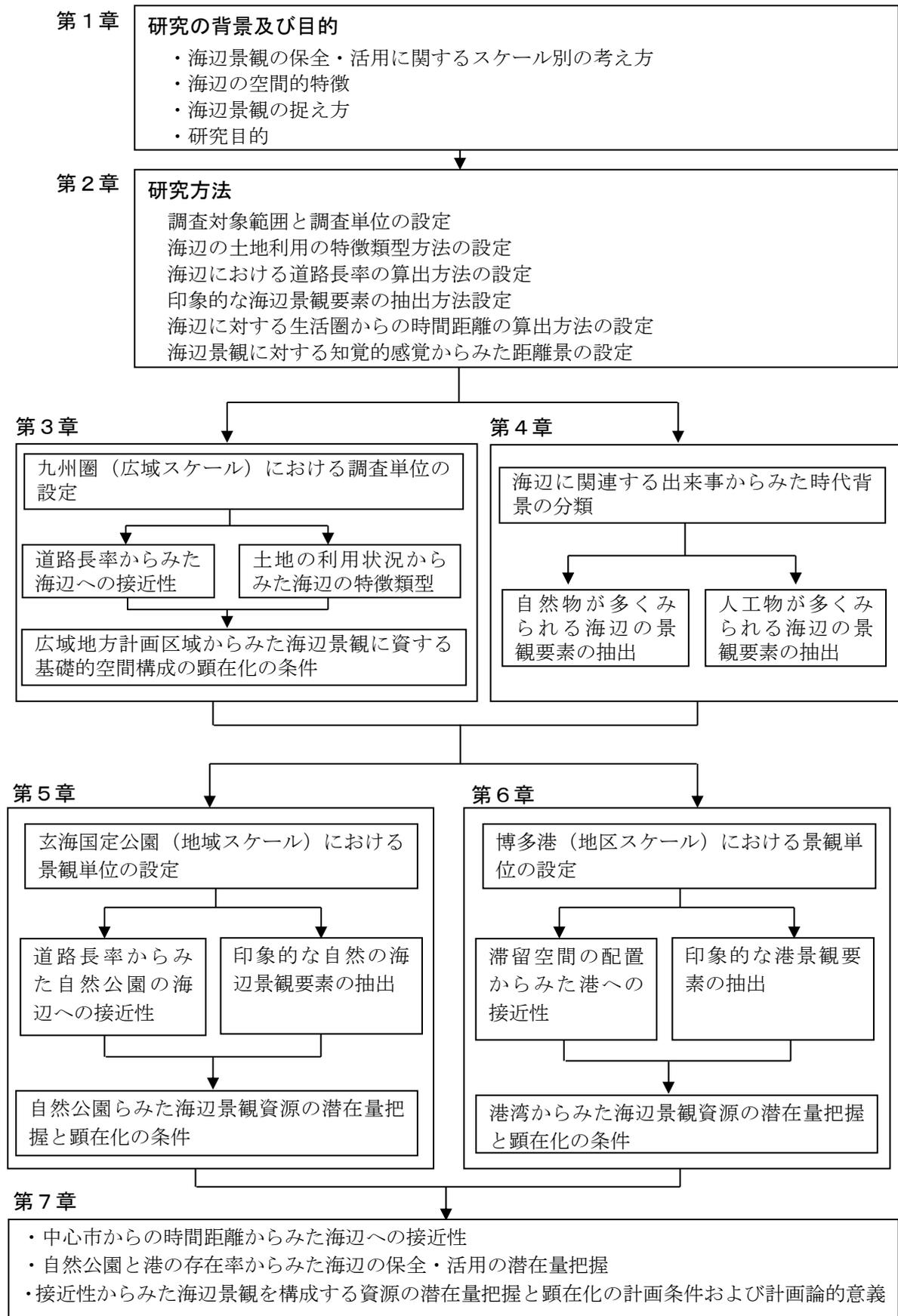


図2-1 研究の構成

## 2-2 本研究の調査対象地と調査手法の考え方

本節では、スケール別に、接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化に関する計画条件を得るため、3つのスケールに着目し、以下の調査対象地を設定した。

### 2-2-1 調査対象地の設定

#### 1. 広域スケールの海辺における考え方と調査対象地の設定

第1章では、昨今の交通ネットワーク下において、海辺への接近性や景観の保全・活用に資する要素を把握するには、広域スケールで俯瞰的に捉えることの有用性を示した。そこで本研究では、既往の施行された制度のうち、地方ブロックが対象となる「広域地方計画区域」に着目し、調査対象地として、「九州圏」をケーススタディに検討するものとした。

九州圏は、日本列島の南西部に位置し、四方を海で囲まれた圏域である。なお、本研究では、広域地方計画区域（国土形成計画法：昭和25年法律第205号、前国土総合開発法）に基づき、九州圏に該当する福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県の7県の海岸線約4,300kmを対象とした<sup>69)</sup>。なお、離島については、人々が景観を享受する観点から、有人島のみ限定するものとした。

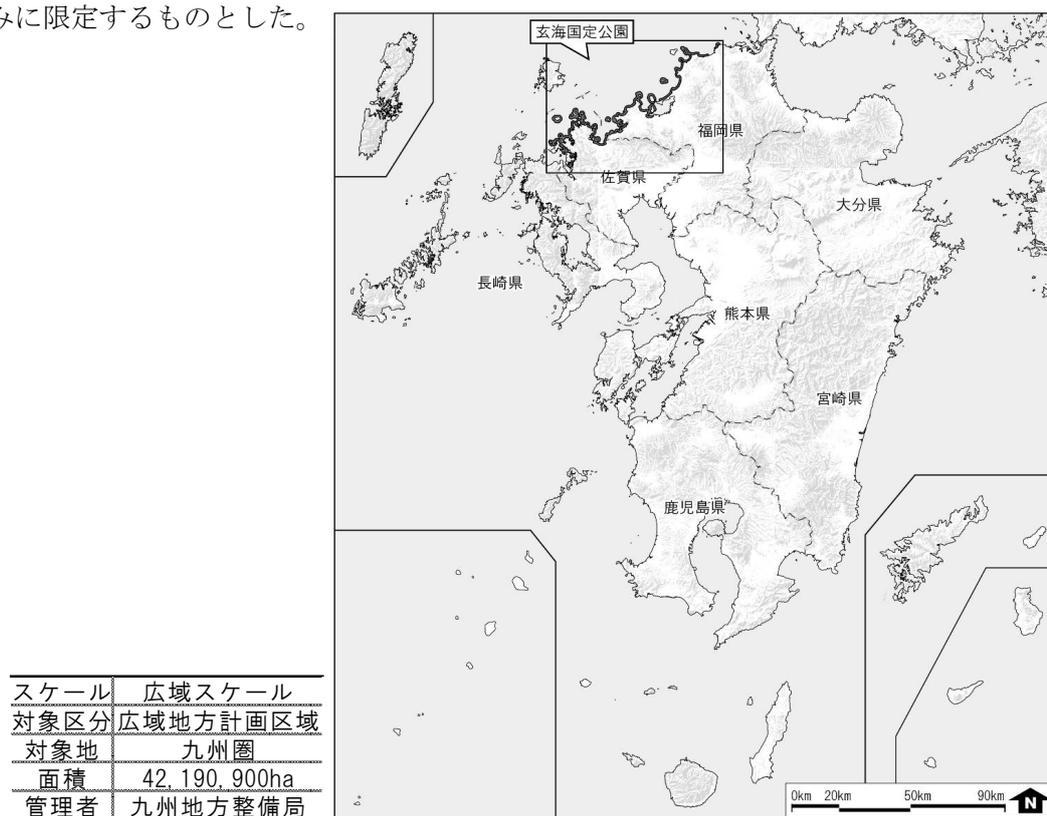


図2-2 九州圏と玄海国定公園

#### ■ 広域地方計画区域

国土形成計画法（平成17年律第89号）に基づき指定された区域。複数の都府県に跨り、一体として総合的な国土の形成を推進するために策定された区域で、全国で8つのブロックに区分された、道州単位のスケールとなる。

## 2. 特徴的な海辺の調査対象地の設定

広域スケールに基づく俯瞰的な分析に加え、さらに特徴的な海辺を対象に、海辺景観の保全・活用に関する必要性を把握するため、貴重な自然が多くみられる自然公園区域の「玄海国定公園」と、人工整備された海辺が多くみられる港湾計画範囲の「博多港」を、調査対象地として設定した。

玄海国定公園は、玄界灘に面し、東は遠見ヶ鼻から、西は長崎県の鷹島までとなっており、総面積は 101.58km<sup>2</sup>となっている（2001年3月31日現在）<sup>70)</sup>。対象地内には、虹の松原や海の中道など「白砂青松 100 選」<sup>71)</sup> に選ばれた風景地があるほか、その他名勝・景勝地<sup>72)</sup> がみられる。

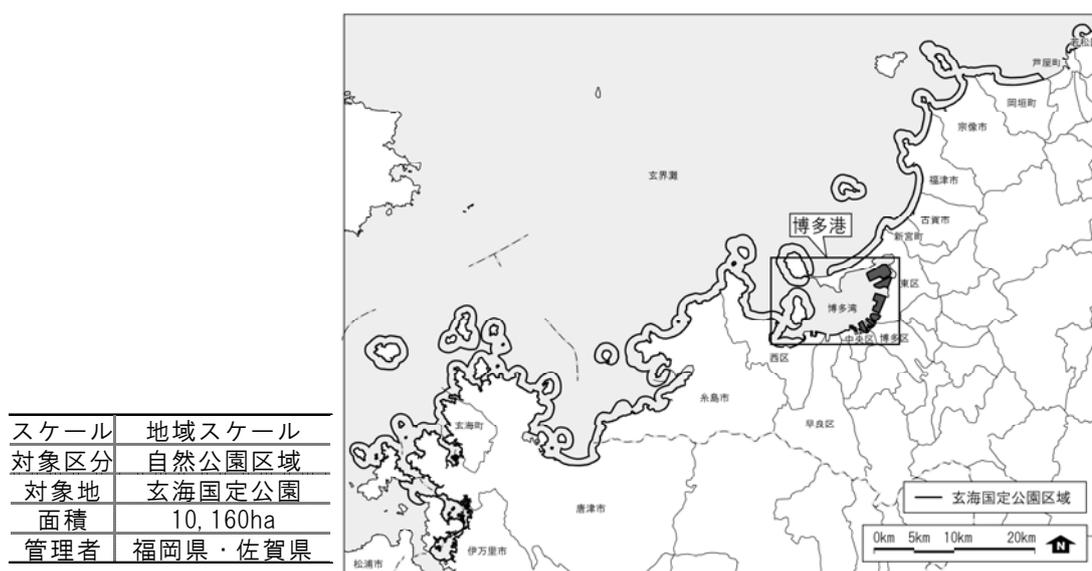


図 2 - 3 玄海国定公園と博多港（特定重要港湾）

### ■ 自然公園区域

自然公園法（昭和 32 年法律第 161 号）に基づいて指定された区域。優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図ることにより、国民の保健、休養及び教化に資すること等を目的に設定された区域となる。国土計画上では 3 県以上にまたがる地域スケールとなる。

博多港は、北部九州に位置し、福岡平野、海の中道、糸島半島の三方を囲まれ、日本海と東シナ海を結ぶ玄界灘に面しており、その範囲は、陸域 1,100ha、水域 7,600ha の臨海部となる<sup>73)</sup>。

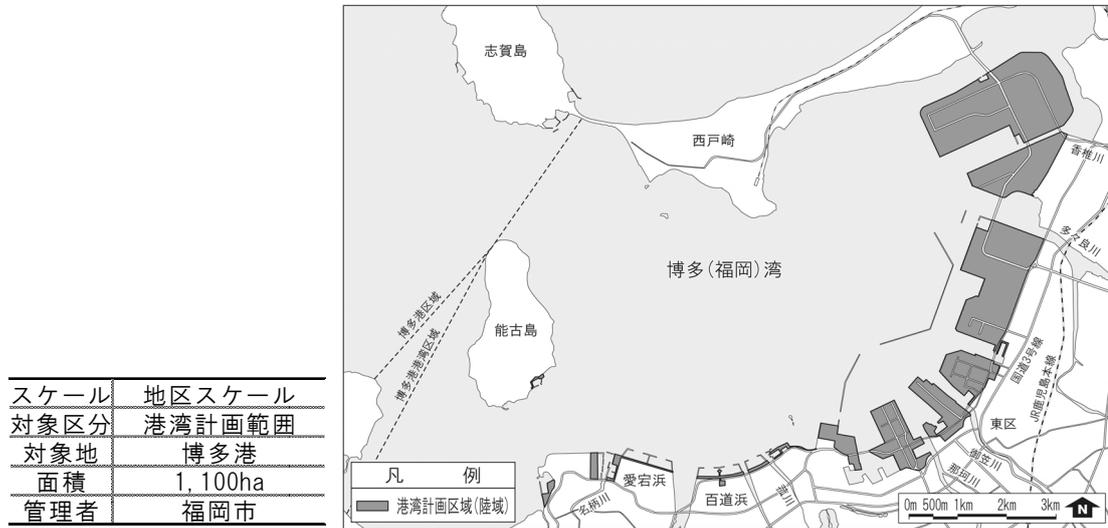


図 2-4 博多港港湾計画範囲

■ 港湾計画範囲

港湾法（昭和 25 年法律第 218 号）に基づいて指定された範囲。海運において、船舶が安全に停泊し、効率的に人の乗降や荷役が行えることを目的に、埋立や浚渫、岸壁などが整備されている人工海岸区域となる。都市計画上では臨港地区に該当する地区スケールとなる。

2-2-2 調査単位の考え方

景観などを対象とした分析を行う場合は、空間を一定のまとまりをもって分けするなど、計画的な検討にも資する調査単位を設定する必要があると考えられる。これらの調査単位について、中瀬は「調査単位は、都市のスケール、地域のスケール等スケールに対応した単位の設定および計画の目標に対応した単位の設定を合わせて配慮する必要がある」と述べ、さらに「分析単位は、調査単位の集合（1つ以上）した単位であり、この単位は分析の目的・手法に基づいて設定されるべき性格のものである。」<sup>74)</sup>と述べている。また同論文では、現在広く一般的に使われている調査・分析、計画に関与する単位として、以下を示している。

- ① 行政区域を基礎とする単位：街区、町丁、市町村、都道府県等
- ② メッシュ：第一次地域区画、第二次地域区画、第三次地域区画、分割メッシュ、1/4 分割メッシュ、1/16 分割メッシュ、任意区画メッシュ等
- ③ 特定地域の利用圏的な単位：商圈、駅勢圏等
- ④ その他：生活圏や流域等、特定の目的別単位

このうち、景観の概念を取り入れる場合の領域設定には、その単位として、「流域」の概念が用いられる。「流域」は、地表流に関して比較的閉鎖したシステムを持っており、人が流域界ラインを超えて何かを認知することはほとんどないとされている。つまり人間が一度に認知できる範囲が完結する単位で、その可視景観の骨格の抽出が可能となる単位とされている<sup>75)</sup>。このことから、海辺も含めた特定の地理的条件下で、景観享受に資する各種要素を分析する場合、流域は基礎的単位として有効であると考えられる。

そこで本研究では、各調査対象エリアとして、④の「生活圏や流域等、特定の目的別単位」である「流域」の概念を用いるものとし、調査スケールに合わせて、以下の調査単位を設定した。

#### ■調査単位設定

一次流域：九州圏（広域スケール）を対象とし、林野庁の森林管理区分図の流域界や国土地理院 50 万分の 1 地方図によって判読される尾根線をベースに、海岸線平均約 200km となる基礎調査単位を設定。

二次流域：玄海国定公園（地域スケール）を対象とし、国土地理院 20 万分の 1 地勢図によって判読される尾根線をベースに、海岸線平均約 10km となる基礎調査単位を設定。

三次流域：博多港（地区スケール）を対象とし、下水道計画図によって判読される流域（集水域）をベースに、海岸線長平均約 3km となる基礎調査単位を設定。

### 2-3 海辺への接近に関する調査・分析方法の設定

海辺景観を享受するためには、第一に、海辺に接近することが必要である。そこで、第一章における基礎認識を踏まえ、海辺への接近に関する調査手法について、以下に示した。

海辺へのアクセスの不可避を判断する有効な指標の一つとして、海辺における道路の整備状況を把握することが考えられる。海辺での道路長が長い場所ほど、海辺への接近が容易で、景観を活用する可能性も高くなると考えられる。

そこで九州圏及び玄海国定公園における海辺への接近場所の把握・分析では、図 2-5 に示す如く、環境庁自然環境保全基礎調査<sup>76)</sup>で定義されている「海岸陸域」に基づき、陸側 100m 以内で車両が通行可能な幅員 1.5m 以上の一般道路の長さを、国土地理院 5 万分の 1 地形図などを元に判読・抽出し、それを海辺への接近性として整理した。

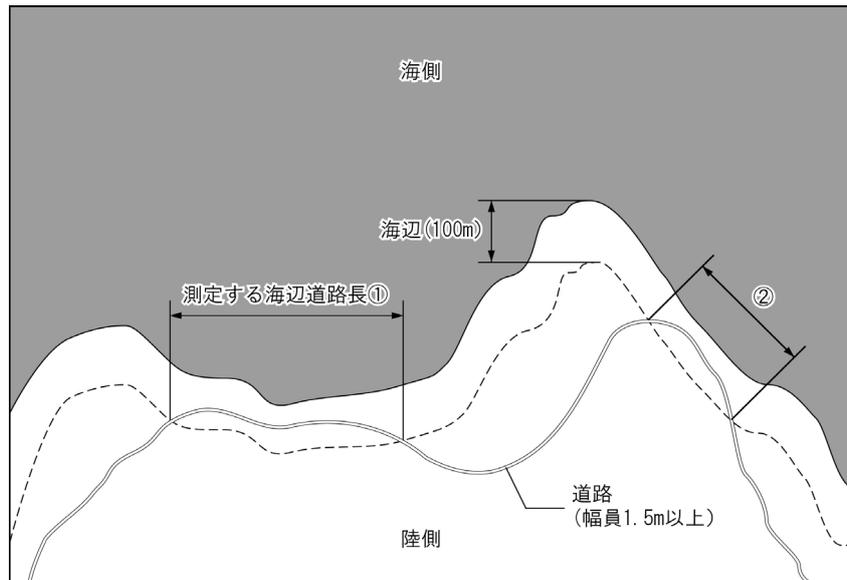


図 2-5 「海辺への接近性」の判断基準イメージ

一方、港湾計画範囲では、荷役作業時の危険防止や、改正 SOLAS 条約<sup>77)</sup>のために、立ち入り禁止の場所が多く、港湾関係者以外の人々にとって、海岸線に接近することが可能な場所は、限定されている。このことから、博多港（地区スケール）における海辺への接近場所の把握・分析では、港湾計画における「レクリエーション用地」、「交流拠点用地」、「緑地」、「その他緑地」、「埠頭用地・港湾関連用地における旅客施設用地」を、不特定多数の人々が訪れ、海辺に接近できる場所（滞留用地）として設定した。

#### 2-4 海辺の景観要素抽出に関する調査方法の設定

土地利用が明確な玄海国定公園及び博多港では、その目的に応じた印象深い景観要素の抽出方法として、各時代の海辺に対する人々の印象の評価分析が可能な詩歌を活用することとした。詩歌は、小説と異なり、概して作者周辺に取材し、旅の哀れや作者の目に映る自然の風景を詠むことを中心としており、また5感のほか、知覚も含めた著者のイメージの要素も含まれているとされている。このことについて、石川らは、「特に詩に詠まれた環境は、風景のみでなく音や光・風・月等の多様な環境が包含され、人間の五感を通してとらえられた環境イメージの投影である。」<sup>78)</sup>と述べており、また積田らは、詩歌上で、言葉・言語によって表現された風景に対し、「視覚や聴覚、味覚などの五感を通して過去の様々な記憶から連想され形成したものとして読み解く事ができる。」<sup>79)</sup>と指摘している。さらに金らは、詩歌が作成される過程において、「詩人のある光景に対する感動を伴う発見に伴い、その感動の内容を言葉に定着させ、

他人に伝えたい願望によって詩が生まれる」と述べており、さらに「その詩が媒介となって、詩人の発見の感動や感じ方が聞き手に伝わり、聞き手の感じ方や想像力を刺激することによって、その感動をより深めることになる。」<sup>80)</sup>と指摘している。また中村らは、「特定の社会集団あるいは特定の文化圏内で暮らしている人びとのあいだには、ある種の風景的イメージが共有されるのがふつうである」<sup>81)</sup>と述べているなど、一つの詩歌には、その時代の生活してきた人々の共感も内包されていることが窺える。

以上の記述から、詩歌には、各時代の景観に対する多くの人の共感を伴う印象が表現されており、これらを継時的に分析することは、時間の積み重ねによる印象深い景観要素を得る上で、有用なデータであると考えた。そこで本研究では、国内の詩歌作品から、自然公園及び港の景観要素を抽出することとした。

なお、活用する我が国の主な詩歌の特徴は、以下に示す通りとなる<sup>82)</sup>。

#### ○短歌

和歌の歌体の一つであり5・7・5・7・7の5句31音を原則とする。万葉集(?～759)によって成立し、私的・個人的な感情を表現する抒情詩として、広く大きな短歌的世界を発展させたとされている。歌い手のほとんどは貴族などの知識人であり、直接経験に基づき作歌に取り組んだとされている。また中世初頭になると、貴族の没落と武士の台頭によって、一般市民にも歌われるようになり、金槐和歌集(1213～)のような、武家によって編纂された和歌も登場したとされている。

#### ○連歌

連歌は、平安時代に登場したものであり、まじめで公な和歌(短歌)とは対照的に、遊びの文学として行われていたとされている。連歌は歌の上の句と下の句を二人で読みあう即興的な言い捨ての遊びであり、その機知・滑稽さを謡っていたものである。中世の鎌倉時代に入ると、二句の唱和にとどまらず、長く詠み続ける「くさり連歌」も行われるようになり、その後二条良基によって機知・滑稽さが排斥された、情趣本位の連歌集として、菟玖波集(1356～)が編纂された。なお、連歌においては、二人で詠みあう二句唱和など、その一座にいる人、その場にいる人々が当面の読者であり、しかもその読者は協同製作者として次の段階では作者に変身しているところにその特性があり、作者と読者の一体化が一層明瞭になったとされている。

#### ○俳諧

連歌が二条良基によって情趣本位の文学として歌と肩を並べるようになった一方で、俳諧は、人々によって親しまれていた機知・滑稽的連歌を詠った「俳諧之連歌」から成立したものであるとされている。その後、江戸時代に入ると、連歌の形骸化に対して、「俳諧」と呼ばれて全

国に流行するようになったとされている。また、松永貞徳は、「俳諧」の文学的地位を高めるために、極端に脾臓滑稽な句を退けて、その滑稽の程度を微温的に抑え、言葉のおかしみや、古典・故事・ことわざのもじりなどを用いたとされている。さらに松尾芭蕉によって、ありのままの日常生活を詠った情趣本位の俳諧が成立したとされている。

#### ○俳句

明治維新後の文明開化により、文学においても西洋詩歌の形式・思想を取り入れて作り出された新体詩などが作られ、ロマン主義による情熱的な詩歌が詩われたとされている。そのような時代背景のなか、正岡子規は万葉集和歌を復興させ、伝統文学の革新を行ったとされている。また正岡子規は、見たままの風景をそのまま表現し、その深みを味わう「写実主義」成立させ、それを基に、俳諧革新運動より芭蕉の俳諧文などから写生表現の発句のみの形式を独立させた俳句を完成させたとされている。

## 2-5 広域スケールにおける海辺の距離景別の設定

実際の海辺における景観享受では、前章の通り、人と周辺との相互関係を知覚的環境（5感）で捉えることが重要であることを示した。そこで本研究では、景観を「人間のあらゆる体感（5感）を通じて捉えられるもの」として定義するものとした。この定義に基づき、一定の広がりが見られる九州圏（広域スケール）の空間的特徴の分析では、人間の5感覚の認知距離から、距離区分を以下のように設定した。

人間の五感覚の認知限界距離は、視覚で10km～0km、聴覚で1km～500m、嗅覚で30～10m、その他の感覚で2～0m<sup>83)</sup>とされている。また、また景観を享受する知覚場は、回遊などによって、一点に留まらず、移動するものと考えられる。戸沼は、「飽きない歩行距離は、地形勾配の程度やその日の心理状況によって変化し、一義的に定義できないが、距離の切れ目としてもっともはっきりしているのが100m前後の地上距離であるとされ、歩行者にとって約100mの距離はほんの1～2分のもので、歩くのに容易な距離である」<sup>84)</sup>と述べている。さらに海岸線100m範囲は、前節で示した通り、自然環境保全基礎調査の海辺の陸域範囲となり、海岸の状況を判別する基礎範囲となる。

そこで本研究では、図2-6に示す如く、海辺における知覚場を、歩行による移動範囲も含めて海岸線から陸域100mとして捉え、その場所では、視覚も含めたさまざまな体感をできる場所として、近距離景とし、以降、陸側・海側に向かって、聴覚、視覚が届く範囲である1kmまでを中距離景、視覚情報のみになる1～10kmの距離を遠距離景と設定した。

- 近距離景：0～100m あらゆる体感を味わうことのできる領域
- 中距離景：100～1km 視覚、聴覚のみ体感できる領域
- 遠距離景：1～10km 視覚のみの領域

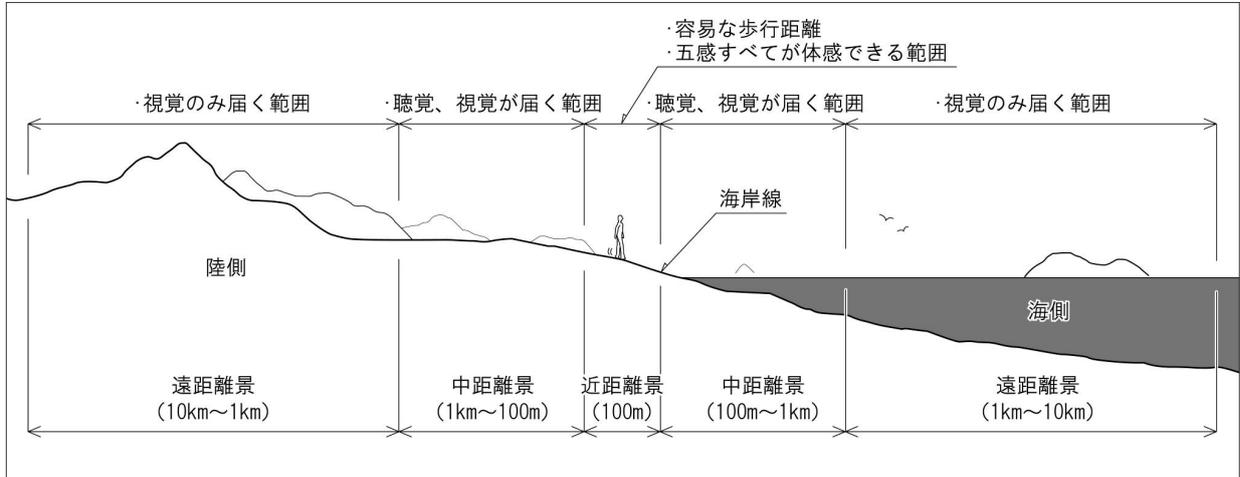


図 2-6 景観距離域の設定イメージ

## 2-6 広域スケールにおける高次都市・中心市から海辺までの時間距離の指標設定

海辺景観を享受するため、海辺の「どこを訪れるか」、また「どれだけの時間がかかるか」を検討する際、多くの方は、確保できる日数・時間に合わせて、「移動可能な範囲」を想定し、来訪する場所を決定する。また前章で述べたとおり、「移動可能な範囲」は、国内では、交通網の整備に基づく時間距離の短縮化によって、広域化が進んでいる。これらのことは、海辺の「どこを訪れるか」、また「どれだけ時間がかかるか」の情報を整理する際、滞在地から海辺までの範囲を、広域的なスケール視点で把握・整理する必要があることを示唆していると考えられる。更には、これらの検討で、移動時間が短いと判断された海辺は、海辺景観の活用頻度が高く、また海辺景観の保全に留意すべき可能性が高い場所として考えることが可能になるなど、計画検討時の基礎的指標となると考えられる。

一方、平成 20 年 5 月に策定された定住自立圏構想（総務省）では、都市機能が集約された基本的な生活サービスの核となる都市として、中心市を設定し、これら都市を中心とした生活圏を形成することを目的としている。また、人口が 20～30 万人規模となる中心市は、高次都市と設定されており、駅や広域交通機関の結節点として、あるいは観光客にとっての宿泊拠点としての機能を有していると考えられる。

そこで本研究では、九州圏を対象とした広域スケールでの調査方法として、多くの人にとって生活や宿泊の拠点となる、中心市・高次都市から海辺への時間距離を測ることで、海辺の活用の可能性を把握することとした。具体的には、表 2-1 に示す中心市・高次都市の要件に該

当する自治体を抽出し、各エリアからの時間距離を算出した。

表 2-1 中心市・高次都市要件

中心市要件	①人口	5万人程度以上（少なくとも4万人超）
	②昼夜間人口比率	1以上（合併市の場合は、人口最大の旧市の値が1以上も対象とする）
	③地域	三大都市圏の都府県（埼玉、千葉、東京、神奈川、岐阜、愛知、三重、京都、大阪、兵庫、奈良）の区域外の市
	④複眼型中心市	隣接する2つの市（それぞれ昼夜間人口比率要件及び地域要件を満たすもの）の人口の合計が4万人を超える（2つの市を合わせて1つの中心市とみなす）
高次都市要件	中心市のうち、人口が20～30万人規模の都市	

※本研究では、中心市要件における人口を4万人超、高次都市要件における人口を20万人以上で算出している。なお人口及び昼夜間人口比率は平成12・17年国勢調査を引用

各エリアの時間距離は、海岸線と流域界の接点及びその中央点の3点と、中心市・高次都市の市役所までの3つの時間距離を算定し、その平均値によって設定した（島嶼部の場合は、し島周辺の海岸線3～6箇所から市役所までの時間距離の平均値で設定）。

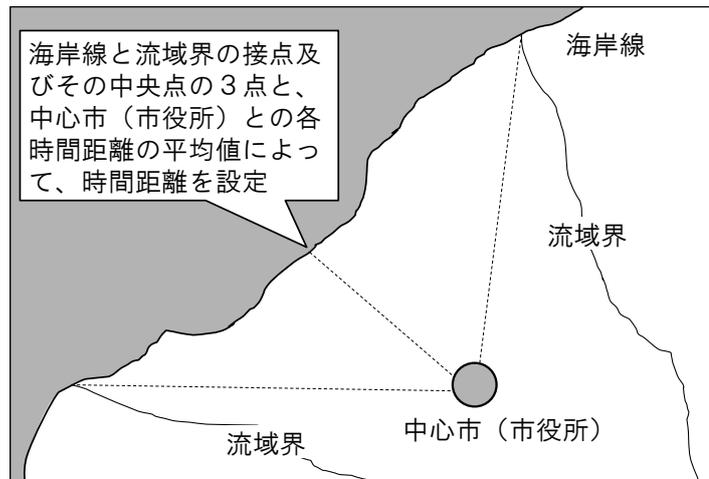


図 2-7 中心市と海岸線の時間距離算出法イメージ

### 第3章 広域地方計画区域からみた海辺景観に 資する基礎的空間構成の把握・類型化

### 第3章 広域地方計画区域からみた海辺景観に資する

#### 基礎的空間構成の把握・類型化

本章では、1章で示した主要な研究の目的①「広域地方計画区域における海辺空間の特徴把握と活用の可能性を明らかにすること」に対応するため、海辺への接近場所を明らかにすると共に、海辺の空間的特徴を土地利用状況などによって捉えることで、広域スケールからみた海辺景観に資する基礎的空間構成を把握・類型化し、顕在化のための計画条件を明らかにした。

#### 3-1 調査単位の設定

調査単位は、第2章で示した如く、広域スケールにおける景観の基礎単位として、「一次流域」を活用し、その分け方を図3-1に示した。設定に当たっては、広域スケールの視点として、九州圏を管轄する林野庁の「九州森林管理局管内図<sup>85)</sup>」及び「国土地理院数値地図<sup>86)</sup>」を参考に一次流域界を判読し、図3-1に示す如く、40エリアを設定した。各指標の測定は、官公庁などで公表されているGISデータを用い、世界測地系・平面直角座標で測定した。



※九州本島の流域界は九州森林管理局管内図を基本に作成したが、本来の分水嶺でない河川上の県境などを流域界として設定している箇所がみられることから、本研究では、国土地理院数値地図を用い、海岸線から1km以内にある標高100m以上の山々の尾根線を参考に、流域界を修正・追加した。

図3-1 九州圏と一次流域界に基づく調査単位

### 3-2 土地利用基本計画に基づく海辺の利用区分の把握

前節で設定した調査単位を基に、海辺の空間構成を概観するため、土地利用基本計画(国土利用計画法)の5地域区分(都市地域・農業地域・森林地域・自然公園地域・自然保全地域)の海辺における面積率を、国土数値情報<sup>87)</sup>におけるGISデータを用いて表3-1及び図3-2に整理した。さらに、面積率30%以上の区域を基準に、その組み合わせによって、12タイプに類型した。

エリア3は、都市地域が93.3%で「都市型」となり、そのエリアの多くが都市的利用である。エリア16は、都市地域が68.1%、農業地域が70.5%の「都市・農業型」となり、都市と農業の重複利用が窺える。エリア13は、森林地域が53.8%、自然公園地域が64.9%の「森林・自然型」となり、自然地に近い土地利用となった。

表3-1 土地利用基本計画に基づく利用区分

I7 番号	海岸線から 100m陸域 (ha)	都市地域	農業地域	森林地域	自然公園 地域	自然保全 地域	類型※
3	1371.2	93.3	3.4	6.6	0.7	0.0	都市型
4	688.7	92.5	20.5	11.7	7.5	0.0	都市型
15	1501.9	89.2	46.5	14.0	22.6	0.0	都市型
2	269.9	85.0	16.8	41.8	41.5	0.0	都市型
1	1826.2	78.7	22.4	32.4	36.2	0.4	都市型
6	1404.9	75.9	41.5	15.4	14.6	0.0	都市型
10	770	41.2	22.3	19.4	11.7	0.0	都市型
20	2009.3	25.2	77.8	41.0	36.3	0.0	農業型
32	3165.9	31.4	75.7	39.4	30.6	0.0	農業型
21	1857.9	23.5	75.2	28.0	29.2	0.0	農業型
24	2315.6	18.4	63.9	23.2	26.5	0.0	農業型
36	9588.3	4.7	26.6	70.6	37.5	2.3	森林型
8	1025.5	25.6	3.4	25.5	68.1	0.0	自然型
11	865.3	42.2	6.6	27.4	85.9	0.0	自然型
39	1284.3	0.0	16.8	26.5	45.1	0.0	自然型
5	945.1	50.3	76.1	24.4	26.1	0.0	都市・農業型
16	761.2	68.1	70.5	23.8	27.5	0.0	都市・農業型
25	1450.2	44.7	56.3	0.5	10.1	0.0	都市・農業型
26	780.1	38.2	64.1	5.3	1.0	0.0	都市・農業型
9	741.1	77.1	4.5	27.4	52.1	0.0	都市・自然型
18	808.9	52.7	26.3	27.9	50.7	0.0	都市・自然型
38	3784.3	18.6	48.6	36.2	6.4	0.0	農業・森林型
40	8112.4	7.9	50.7	46.9	28.7	0.0	農業・森林型
13	1003	0.0	29.3	53.8	63.8	0.0	森林・自然型
37	1623	0.0	9.9	42.5	44.2	0.0	森林・自然型
33	1514.8	75.2	65.2	28.7	58.4	0.0	都市・農業・自然型
19	567	63.6	76.4	23.7	46.9	0.0	都市・農業・自然型
28	2644.6	51.7	36.0	33.5	23.6	0.0	都市・農業・森林型
29	3633.9	67.4	57.3	30.2	20.6	0.0	都市・農業・森林型
7	3652.6	13.0	51.4	41.4	75.5	0.0	農業・森林・自然型
22	3039.7	2.5	79.2	55.6	52.5	0.0	農業・森林・自然型
23	1078.4	1.8	66.1	54.8	63.9	0.0	農業・森林・自然型
31	1399.3	3.7	71.1	53.9	43.8	0.0	農業・森林・自然型
34	1520.2	3.9	57.2	41.6	32.3	0.0	農業・森林・自然型
35	6689.4	1.5	38.2	83.9	56.2	1.0	農業・森林・自然型
12	742	30.5	38.4	30.5	44.4	0.0	混在型
14	831.4	45.4	61.4	48.8	73.1	0.0	混在型
17	1175.3	43.1	73.8	42.7	59.7	0.0	混在型
27	1161.5	44.8	56.0	34.2	41.2	0.0	混在型
30	2606.7	33.5	30.2	65.3	54.5	0.0	混在型

※ **太字** : 70.0%以上 **太字** : 69.9~50.0% **細字** : 49.9~30.0%

※30%以上の指標の組み合わせにより、面積率の大きさによって類型

70%以上かつ30%以上50未満の組み合わせの場合は、70%以上のみで類型

30%以上50未満の指標のみの場合、他の指標と15%以上離れていた場合に主たる面積

として類型に引用

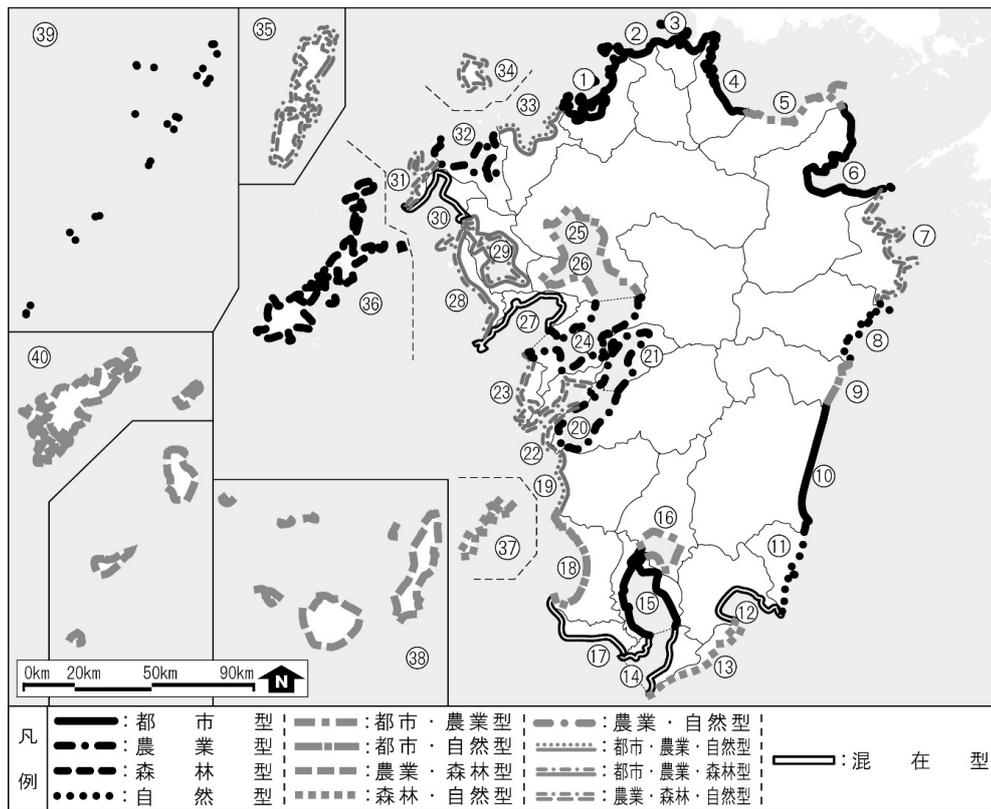


図 3-2 土地利用基本計画に基づく利用区分

### 3-3 接近性からみた海辺の類型

海辺景観の活用や保全の基礎的指標となる海辺への接近性を把握するため、第2章の図2-7で示した調査・手法の考え方に従い、一般道路（車両が通行可能な幅員1.5m以上の道路）のGISデータ<sup>88)</sup>を用いて、海辺1ha当り道路長を算出し、表3-2及び図3-3に示した。なお表3-2は、1ha当り道路長が長い順番に並び替え、四分位数で4類型した。

1ha当り道路長が最も長いエリアは、有明海に接するエリア25の125.2m/haとなり、次いでエリア24の104.0m/haとなった。これら道路長が長いエリアは、他のエリアと比較して海辺への接近が容易であり、海辺を活用しやすい空間である一方、貴重な自然などの保全に留意すべきエリアであることが窺える。

一方、最も道路長が短いエリアは、トカラ列島のエリア39の8.7m/haや、対馬のエリア35の27.3m/haなど、離島部で多くみられた。

表 3-2 海辺における道路長

E17 番号	海岸線から100m陸域			
	面積 (ha)	道路長 (km)	1ha当り道路長 (m/ha)	
25	1450.2	181.5	125.2	●
24	2315.6	240.8	104.0	●
16	761.2	74.0	97.2	●
26	780.1	74.6	95.6	●
15	1501.9	141.8	94.4	●
6	1404.9	132.3	94.2	●
2	269.9	22.6	83.7	●
1	1826.2	143.3	78.5	●
33	1514.8	117.3	77.4	●
21	1857.9	167.9	90.4	●
29	3633.9	260.8	71.8	■
3	1371.2	86.5	63.1	■
4	688.7	43.9	63.7	■
5	945.1	68.5	72.5	■
28	2644.6	183.1	69.2	■
27	1161.5	89.6	77.1	■
7	3652.6	247.8	67.8	■
23	1078.4	73.6	68.2	■
20	2009.3	154.4	76.8	■
22	3039.7	203.8	67.0	■
10	770	33.2	43.1	▲
32	3165.9	174.4	55.1	▲
11	865.3	52.9	61.1	▲
18	808.9	45.5	56.2	▲
17	1175.3	53.1	45.2	▲
9	741.1	46.2	62.3	▲
19	567	33.0	58.2	▲
14	831.4	49.2	59.2	▲
34	1520.2	84.4	55.5	▲
40	8112.4	368.5	45.4	▲
8	1025.5	35.5	34.6	+
12	742	27.1	36.5	+
30	2606.7	106.9	41.0	+
31	1399.3	55.9	39.9	+
36	9588.3	405.1	42.2	+
13	1003	19.5	19.4	+
38	3784.3	104.6	27.6	+
37	1623	41.0	25.3	+
35	6689.4	182.4	27.3	+
39	1284.3	11.2	8.7	+

※ ●:134.7~77.5m/ha, ■:77.4~63.2m/ha,  
▲:63.1~43.2m/ha, +:43.1~8.7m/ha

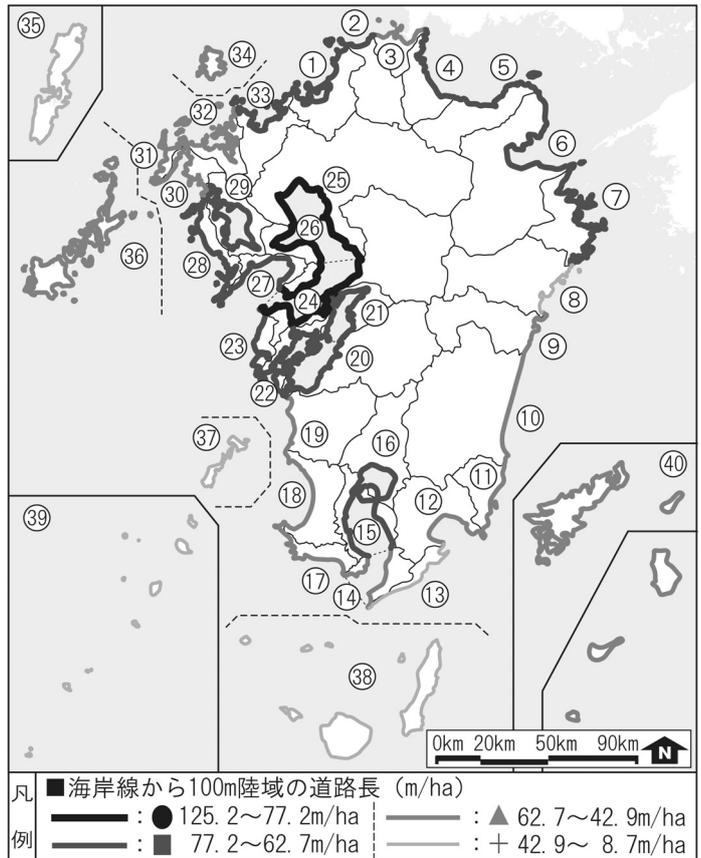


図 3-3 海辺の道路長率

### 3-4 空間構成からみた海辺の種類

本節では、海辺景観の形成を検討する上で把握が必要な、海辺空間の特徴を把握すべく、自然海岸や人工海岸などの整備状況や、距離景別の海側及び陸側の空間構成に関わる基本的な指標を以下に把握・整理した。

#### 3-4-1 海岸線の整備状況からみた海辺の種類

各エリアの海岸線の状況を、「第5回海辺調査<sup>89)</sup>」のGISデータを用いて以下に示した。

海岸線の種別はその特徴から、自然海岸を浜辺（砂浜・礫浜・磯浜・泥浜）、海食崖等の2区分し、さらに半自然海岸、人工海岸、及び河口部の計5種類の延長を測定し、各エリアの海岸線長に対する割合を表3-4示した。また、各エリアの種別面積比を基に、ウォード法に基づくクラスター分析によって類型し（以下クラスター類型）、その特徴から「浜辺型」、「海食崖型」、「人工型」、「混在型」の4つに類型し、表3-4及び図3-6に示した。

「浜辺型」として特徴的な海辺は、エリア19となり、全体で58.3%と、半分以上が浜辺となっている。また「海食崖型」では、エリア13が71.8%の海食崖等となっており、そのほとんどが海食崖の海岸となっている。さらに「人工型」ではエリア3で人工海岸が84.6%となるなど、そのほとんどが人工型の海岸となっている。これらのエリアは、一望できる海辺がほぼまとまりのある景観として構成されている可能性がある。

一方、エリア1、エリア20など、際立った海岸線の種別がなく、「混在型」となったエリアは、多様な景観を享受できる可能性のある海辺であることが窺える。

表 3-4 海岸線の整備状況からみた海辺の類型

I77 番号	海岸線 (km)	河口部	自然海岸		半自然 海岸	人工 海岸	類型
			浜辺	海食崖等			
			(%)				
19	96.7	0.9	<b>58.3</b>	9.5	8.7	22.7	浜辺型
34	238.4	0.0	<b>56.4</b>	14.2	4.8	24.6	浜辺型
12	115.7	1.3	<b>51.0</b>	8.5	10.4	28.8	浜辺型
10	85.9	3.2	47.3	0.0	20.8	28.7	浜辺型
18	105.1	2.6	47.0	17.3	11.3	21.7	浜辺型
14	114.4	1.8	41.7	25.7	15.9	14.9	浜辺型
27	143.1	0.3	34.4	25.7	22.0	17.6	浜辺型
38	629.6	0.5	<b>51.5</b>	35.1	6.0	6.9	浜辺型
40	1103.1	0.3	45.6	31.9	9.8	12.5	浜辺型
2	35.3	0.9	35.1	6.9	33.4	23.7	浜辺型
13	150.4	0.4	22.3	<b>71.8</b>	3.0	2.4	海食崖型
35	1022.0	0.1	22.2	<b>63.3</b>	1.2	13.2	海食崖型
31	186.0	0.1	13.6	<b>58.9</b>	19.8	7.6	海食崖型
8	205.2	0.4	18.3	<b>60.9</b>	3.9	16.6	海食崖型
30	429.8	0.1	28.2	43.0	17.1	11.5	海食崖型
39	162.3	0.0	34.6	<b>59.9</b>	2.2	3.3	海食崖型
37	250.4	0.1	33.8	<b>51.7</b>	4.3	10.1	海食崖型
17	197.8	0.5	31.7	44.4	10.3	13.1	海食崖型
36	1471.7	0.1	35.1	45.4	9.7	9.8	海食崖型
3	171.2	0.7	9.8	4.1	0.8	<b>84.6</b>	人工型
25	141.9	4.9	6.7	0.9	7.3	<b>80.3</b>	人工型
4	82.4	0.6	12.7	0.4	12.7	<b>73.6</b>	人工型
5	108.7	2.6	13.2	6.0	15.8	<b>62.4</b>	人工型
6	171.5	1.6	11.6	10.0	16.5	<b>60.2</b>	人工型
21	248.0	0.9	16.2	18.4	5.4	<b>59.0</b>	人工型
1	242.7	0.5	34.4	10.7	18.0	36.2	混在型
20	261.9	0.8	30.3	20.6	10.7	37.6	混在型
33	201.2	0.4	35.1	18.7	10.9	34.9	混在型
11	141.9	0.9	31.3	25.8	13.0	29.0	混在型
22	440.8	0.1	30.8	23.2	16.3	29.6	混在型
23	185.8	0.4	25.1	26.6	21.0	26.9	混在型
28	389.0	0.3	26.5	28.6	12.0	32.6	混在型
32	433.1	0.1	26.1	32.0	11.4	30.3	混在型
7	533.6	0.3	11.1	34.2	10.3	44.0	混在型
9	123.7	1.3	17.1	48.6	4.8	28.2	混在型
15	187.7	1.6	9.7	18.2	21.1	49.4	混在型
24	255.5	0.9	14.7	10.1	25.3	49.1	混在型
16	92.0	2.7	10.5	22.4	28.4	36.0	混在型
29	465.6	0.4	18.0	23.5	22.8	35.4	混在型
26	81.0	1.1	10.0	1.6	<b>66.9</b>	20.3	混在型

太字 : 70.0%以上 太字 : 69.9~50.0% 細字 : 49.9~30.0%

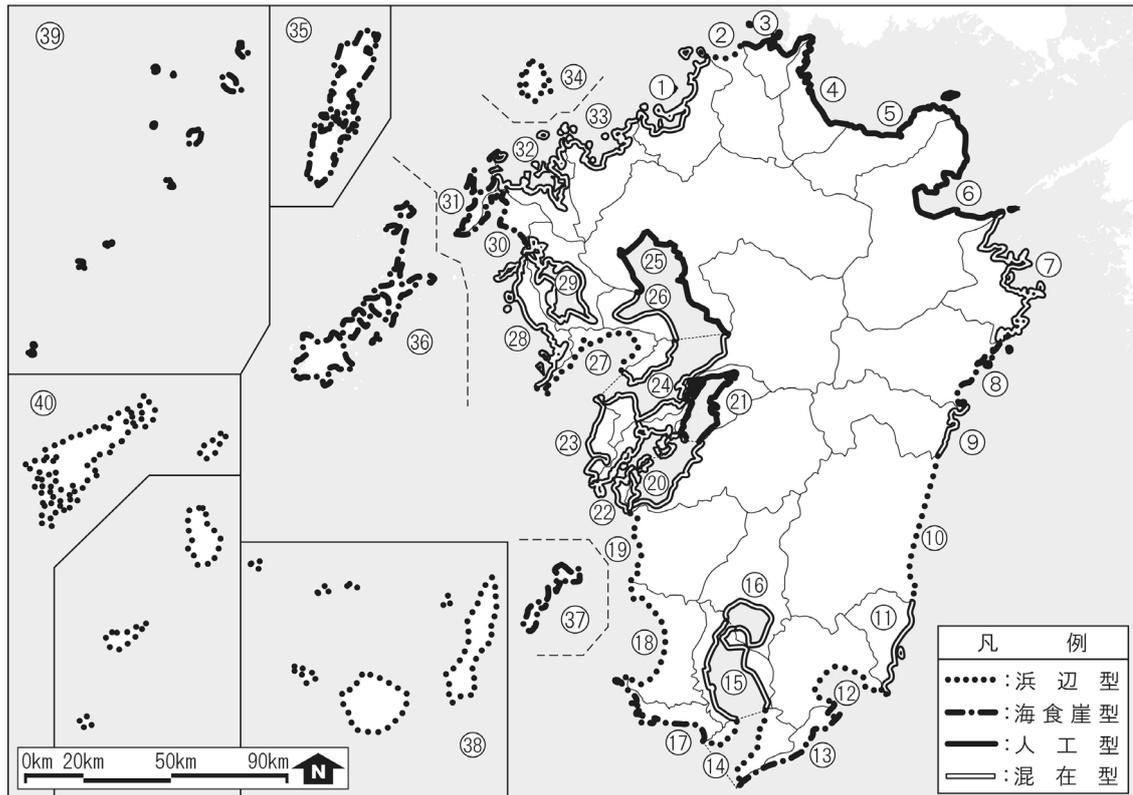


図 3-4 海岸線の整備状況からみた海辺の種類

### 3-4-2 海域の計画範囲からみた海辺の種類

本節では、各エリアの海辺からみた海域の状況を、干潟は「第 5 回干潟・藻場・サンゴ礁調査<sup>90)</sup>」の、漁港区域及び港湾区域は「国土数値情報<sup>91)</sup>」の GIS データを用いて以下に示した。

海域における空間的特徴として、表 3-5 に示す如く、各エリアにおける干潟面積率を算出すると共に、海辺の空間的特徴として取り上げられる船舶航行の可能性を捉えるべく、漁港区域及び港湾区域の面積率を合わせて測定した。また、船舶規模別に海域を分けるため、大型船の航行が多くみられる重要港湾区域と、地方港湾・漁港区域の 2 種類に分類した。海域の区分は、海辺における海岸陸域の設定に合わせ、海域 100m まで（以下近距離景とする）と、聴覚、視覚が寄与する 100m~1km まで（以下中距離景とする）を対象とした。視覚のみが寄与する 1~10km までの範囲（以下遠距離景とする）については、干潟、港湾・漁港区域いずれも小さい面積のため省略した<sup>16)</sup>。なおクラスター類型によってその面積率の特徴から、干潟・小型船型（干潟及び地方港湾・漁港区域の面積が特に広いエリア）、大型船型（重要港湾区域が特に広いエリア）、小型船型（地方港湾・漁港区域が特に広いエリア）、船舶型（地方港湾・漁港、重要港湾区域が特に広いエリア）の 4 つに区分した。

「干潟・小型船型」は、エリア 26 やエリア 5 となり、それぞれ干潟、地方港湾・漁港区域の

面積率が近距離景、中距離景共に高くみられた。「大型船型」は、エリア3のみとなり、港湾区域の面積率が近距離景・中距離景共に高くみられた。また、重要港湾と地方・漁港区域が混在する「船舶型」は、エリア6、エリア1などとなり、近距離景・中距離景共に高くみられた。

表3-5 海域の状況

I17 番号	海岸線から100m海域（近距離景）					海岸線から100m～1km海域（中距離景）				
	面積 (10ha)	干潟 (%)	重要 港湾 (%)	地方港湾 ・漁港	類型	面積 (10ha)	干潟 (%)	重要 港湾 (%)	地方港湾 ・漁港	類型
26	84.9	<b>76.6</b>	0.0	<b>50.4</b>	干潟・小型船型	576.7	20.7	0.0	26.5	干潟・船舶型
5	104.7	48.6	6.9	<b>55.6</b>	干潟・小型船型	825.5	28.5	7.0	28.7	干潟・船舶型
25	144.2	<b>64.3</b>	8.0	42.8	干潟・小型船型	1033.0	<b>62.5</b>	7.1	26.4	干潟型
3	148.3	0.0	<b>81.1</b>	21.5	大型船型	916.2	0.0	<b>47.0</b>	14.3	大型船型
24	390.2	18.1	4.0	<b>33.1</b>	小型船型	1708.4	10.5	5.0	19.8	干潟・船舶型
28	341.1	5.1	15.1	40.6	小型船型	2079.6	0.1	9.7	11.4	船舶型
19	84.2	1.9	11.3	38.7	小型船型	461.8	0.1	11.8	16.5	船舶型
33	175.5	8.1	9.6	37.1	小型船型	1264.4	0.5	6.9	12.2	船舶型
12	103.8	0.2	17.3	35.4	小型船型	679.7	0.2	12.5	20.1	船舶型
10	87.5	4.2	15.0	29.7	小型船型	590.9	4.1	10.6	21.9	船舶型
2	30.5	0.0	0.0	<b>51.0</b>	小型船型	219.9	0.0	0.0	<b>35.8</b>	—
8	151.8	0.7	0.0	<b>55.7</b>	小型船型	745.2	0.2	0.0	26.5	—
20	223.8	2.9	0.0	40.7	小型船型	1433.6	1.6	0.0	12.5	—
27	126.6	21.0	0.0	40.3	小型船型	854.0	0.6	0.0	20.2	—
18	90.6	4.5	0.0	39.2	小型船型	675.2	0.2	0.0	20.2	—
23	144.9	0.3	0.0	34.3	小型船型	652.8	0.8	0.0	12.3	—
22	384.4	1.0	0.0	33.2	小型船型	2036.7	0.0	0.0	11.9	—
11	128.3	0.0	8.4	32.6	小型船型	712.7	0.4	0.7	14.7	—
13	110.9	0.0	0.0	31.8	小型船型	760.7	0.0	0.0	19.7	—
31	162.3	3.6	0.0	31.6	小型船型	1092.2	0.2	0.0	11.2	—
35	688.6	0.4	0.7	31.4	小型船型	2487.9	0.0	0.3	12.0	—
34	201.1	4.6	5.4	30.5	小型船型	1032.9	0.1	3.5	7.5	—
36	1166.9	0.9	0.3	30.4	小型船型	6743.7	0.0	0.2	9.6	—
32	374.4	4.8	10.7	26.3	小型船型	1965.2	0.8	5.1	9.5	—
21	220.4	30.7	18.2	24.1	船舶型	1246.9	18.8	9.5	14.4	干潟・船舶型
4	79.3	38.5	<b>53.1</b>	25.0	船舶型	612.8	16.0	<b>51.3</b>	17.2	大型船型
1	215.8	4.0	35.1	26.7	船舶型	1571.3	0.9	25.7	16.5	船舶型
30	339.9	3.2	25.2	31.3	船舶型	1372.1	0.2	12.2	11.3	船舶型
6	146.9	19.3	<b>35.0</b>	35.0	船舶型	1067.9	2.4	29.3	15.4	船舶型
15	156.8	0.0	26.4	27.9	船舶型	1156.7	0.0	18.2	17.5	船舶型
9	99.2	0.3	26.9	18.6	船舶型	379.2	0.1	16.6	15.8	船舶型
29	380.4	5.9	17.7	19.2	船舶型	1532.0	0.2	16.0	11.5	船舶型
7	467.4	0.3	6.2	8.2	—	2386.6	0.1	3.3	16.5	—
39	159.1	0.0	0.0	2.4	—	1577.9	0.0	0.0	0.2	—
14	90.1	0.0	0.0	26.1	—	689.2	0.0	0.0	15.7	—
17	154.8	0.0	0.0	23.9	—	853.8	0.0	0.0	8.6	—
40	942.1	0.9	1.1	23.1	—	6084.0	0.1	0.5	10.2	—
37	210.0	0.0	0.0	21.4	—	1352.0	0.0	0.0	6.3	—
38	500.1	0.4	1.7	18.7	—	3402.8	0.0	0.5	4.2	—
16	78.5	11.2	0.0	19.5	—	651.8	1.6	0.0	4.2	—

※ **太字** : 70.0%以上    **太字** : 69.9~50.0%    **細字** : 49.9~30.0%

※近距離景：自然環境保全基礎調査を参考にした海岸領域    中距離景：聴覚・視覚が寄与する領域

### 3-4-3 陸域の計画範囲からみた海辺の類型

本節では、各エリアの海辺からみた陸域の状況を、標高は「国土地理院数値地図<sup>92)</sup>」から、陸域の土地利用状況は「第2-5回植生調査<sup>93)</sup>」から、それぞれのGISデータを用いて以下に示した。

#### 1. 陸域の標高差からみた海辺の類型

海辺からみる陸域の空間構成は、海辺との標高差によって様相が異なる。海辺と陸域の標高差が少ないと、陸域へ向かって伸びやかな景観が構成され、標高差が大きいと、大きな山々によって切り立った景観が構成されると考えられる。そこで本節では、表3-6及び図3-5、3-6に示す如く、陸域側の近距離景、中距離景、遠距離景に該当する各々の範囲において、50mメッシュによる標高の平均値を算出し、各エリア別にそれぞれの平均標高差を算出した。

エリア13は、近-中距離景の平均標高差が132.4m、近-遠距離景の平均標高差が375.0mとなり、陸域側は大きな山々で切り立った空間であることが窺える。エリア2は、近-中距離景の平均標高差が14.9m、近-遠距離景の平均標高差が33.8mとなり、陸域側が開けた空間であるが、陸域景観そのものは海辺からほとんど影響しないことが窺える。エリア15は、近-中距離景の平均標高差が44.5m、近-遠距離景の平均標高差が202.2mとなり、海辺において陸域は、中距離景までは開けており、遠距離景において大きな山々が存在することが窺える。

表 3-6 陸域の標高差からみた海辺の類型

I17 番号	①海岸線100m (近距離景)		②海岸線100m~1km (中距離景)		③海岸線1~10km (遠距離景)		①-② 平均 標高差		①-③ 平均 標高差	
	平均標高		平均標高		平均標高					
	面積(ha)	(m)	面積(10ha)	(m)	面積(100ha)	(m)				
13	1003	24.5	668.6	156.9	419.8	399.5	132.4	a	375.0	A
39	1284.3	31.5	627.3	170.6	25.4	405.5	139.1	a	374.0	A
37	1623	29.6	743.5	130.8	28.0	259.3	101.2	a	229.7	B
38	3784.3	16.3	2363.1	81.9	737.9	456.0	65.6	b	439.7	A
16	761.2	12.9	573.7	86.2	708.6	241.5	73.3	b	228.6	B
14	831.4	18.9	590.4	88.1	456.4	195.1	69.2	b	176.2	C
40	8112.4	17.2	4658.3	87.1	691.0	190.9	69.9	b	173.7	C
7	3652.6	22.0	1420.4	90.6	633.5	191.1	68.6	b	169.1	C
27	1161.5	17.9	750.4	77.1	593.0	185.1	59.2	b	167.2	C
20	2009.3	14.2	1062.1	71.9	784.7	159.7	57.7	b	145.5	D
23	1078.4	19.2	621.6	79.1	342.4	164.1	59.9	b	144.9	D
28	2644.6	13.4	1062.3	64.4	526.4	148.9	51.0	b	135.5	D
11	865.3	19.0	470.7	73.7	408.0	147.7	54.7	b	128.7	D
17	1175.3	17.6	657.4	76.7	462.6	141.5	59.1	b	123.9	D
36	9588.3	20.1	3433.5	83.1	249.3	137.2	63.0	b	117.1	D
22	3039.7	15.2	1284.0	68.5	589.7	129.6	53.3	b	114.4	D
31	1399.3	20.6	713.7	73.4	153.5	100.7	52.8	b	80.1	E
15	1501.9	7.4	1001.2	51.9	957.1	209.6	44.5	c	202.2	B
33	1514.8	13.3	786.5	42.3	518.2	177.4	29.0	c	164.1	C
29	3633.9	10.1	1760.2	47.6	1074.6	174.0	37.5	c	163.9	C
32	3165.9	12.9	1437.3	53.8	635.5	148.7	40.9	c	135.8	D
35	6689.4	19.1	2412.0	66.3	399.5	152.8	47.2	c	133.7	D
8	1025.5	19.0	466.4	65.2	451.7	147.4	46.2	c	128.4	D
12	742	11.1	544.7	58.4	590.6	137.0	47.3	c	125.9	D
24	2315.6	8.2	1396.9	38.3	1003.3	159.7	30.1	c	151.5	C
9	741.1	12.3	313.6	41.5	313.7	123.6	29.2	c	111.3	D
18	808.9	10.7	587.5	37.7	613.3	114.0	27.0	c	103.3	D
30	2606.7	14.8	983.6	61.6	475.5	115.9	46.8	c	101.1	D
21	1857.9	8.7	1061.9	36.8	723.0	108.7	28.1	c	100.0	D
34	1520.2	12.2	568.4	44.7	66.3	60.7	32.5	c	48.5	F
26	780.1	3.5	563.1	17.2	557.1	229.4	13.7	d	225.9	B
6	1404.9	6.0	1023.7	29.2	891.7	172.6	23.2	d	166.6	C
19	567	9.9	341.4	28.7	394.6	123.6	18.8	d	113.7	D
10	770	4.4	536.4	19.1	673.4	118.1	14.7	d	113.7	D
5	945.1	9.4	755.1	18.5	694.8	112.4	9.1	d	103.0	D
25	1450.2	4.2	1102.1	14.6	1184.5	77.8	10.4	d	73.6	E
4	688.7	3.4	509.9	12.3	442.1	101.3	8.9	d	97.9	E
3	1371.2	3.2	583.7	16.7	367.9	79.2	13.5	d	76.0	E
1	1826.2	9.0	933.4	22.7	576.9	71.8	13.7	d	62.8	E
2	269.9	6.4	203.9	21.3	264.3	40.2	14.9	d	33.8	F

※ a:100~150m、b:50~100m、c:25~50m、d:0~25m

A:250m以上、B:200~250m、C:150~200m、D:100~150m、E:50~100m、F:0~50m

※近距離景：自然環境保全基礎調査を参考にした海岸領域

中距離景：聴覚・視覚が寄与する領域 遠距離景：視覚のみが寄与する領域

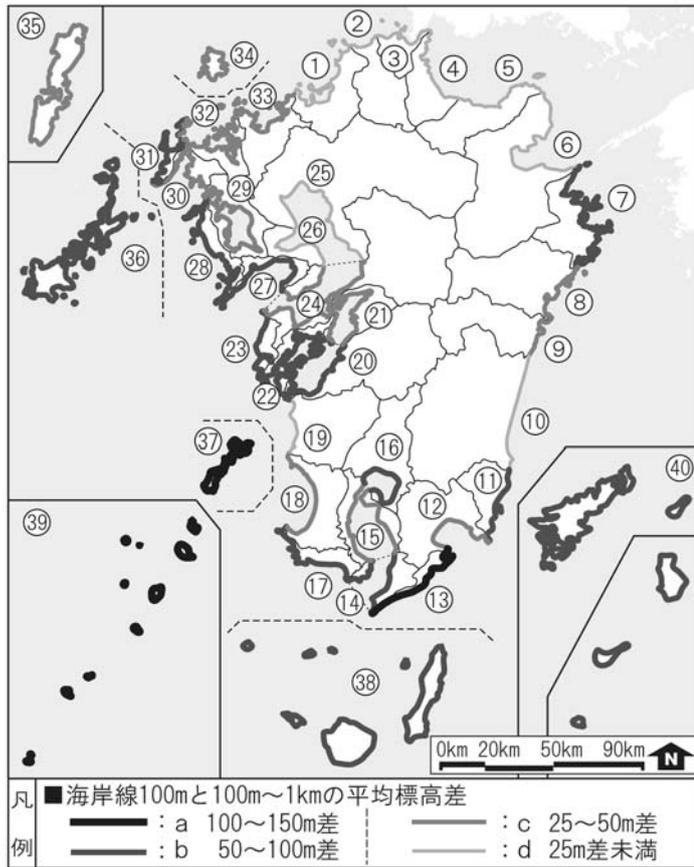


図3-5 海岸線から陸域100mと100m~1kmの平均標高差

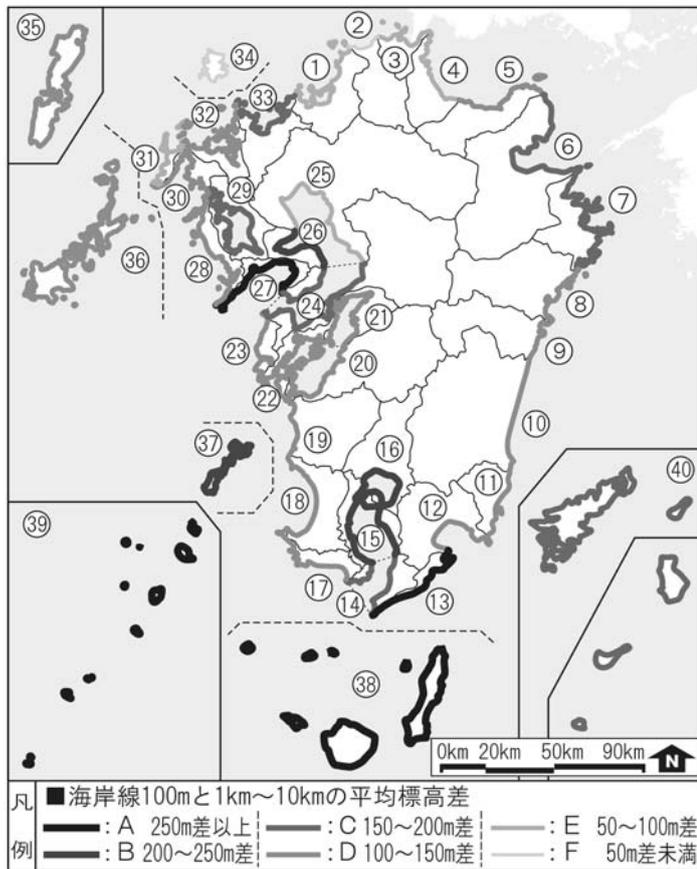


図3-6 海岸線から陸域100mと1km~10kmの平均標高差

## 2. 陸域の土地利用状況からみた海辺の類型

植生調査のGISデータを用い、陸域の土地利用状況を表3-7に示した。なお、植生調査の植生自然度区分により、土地区分を以下の通りとした。

- ・市街地等…植生自然度1、2の「緑の多い住宅地」
- ・農耕地…植生自然度2（「緑の多い住宅地」除く）、3
- ・山林…植生自然度6、7、8、9
- ・草原…植生自然度4、5、10（「自然裸地除く」）
- ・自然裸地…自然裸地をそのまま活用
- ・開放水域及び不明区分…面積率が低いため省略

またクラスター類型を行い、その面積割合の特徴から、「市街地型」、「山林型」などを設定し、近距離景を基準に並び替えた上で、表3-7、図3-7、8、9に示した。

エリア3は、近距離景から中距離景までは「市街地型」で構成され、遠距離景では「混在型」となる。エリア13は、近距離景から遠距離景まで、すべて「山林型」で構成されるエリアとなる。またエリア38は、近距離景が「混在型」で、様々な空間の特徴が示されているが、中・遠距離景が「山林型」となる。

表3-7 陸域の土地利用状況

1/7 番号	海岸線から100m陸域（近距離景）						海岸線から100m～1km陸域（中距離景）						海岸線から1～10km陸域（遠距離景）															
	面積 (ha)	市街地等				農耕地	山林	草原	自然裸地	面積 (10ha)	市街地等				農耕地	山林	草原	自然裸地	面積 (100ha)	市街地等				農耕地	山林	草原	自然裸地	類型
		市街地等	農耕地	山林	草原						市街地等	農耕地	山林	草原						市街地等	農耕地	山林	草原					
3	1371.2	80.0	1.0	7.3	0.6	0.2	0.0	0.0	583.7	81.5	6.3	10.8	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	367.9	40.5	18.2	38.7	2.4	0.2	0.0	0.0	混在型	
4	688.7	59.9	13.3	10.3	4.5	4.0	0.0	0.0	509.9	44.2	31.5	15.8	2.2	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	442.1	24.5	30.1	40.5	4.8	0.1	0.0	0.0	混在型	
15	1501.9	54.6	9.6	21.3	9.6	2.2	0.0	0.0	1001.2	31.3	34.5	25.6	6.8	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	957.1	11.1	26.8	54.9	4.3	1.2	0.0	0.0	農耕地・山林型	
6	1404.9	45.0	19.0	21.3	13.5	1.2	0.0	0.0	1023.7	32.1	43.1	17.9	2.5	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	891.7	11.0	31.2	51.1	5.1	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
13	1003.0	3.0	1.5	91.3	1.9	0.0	0.0	0.0	668.6	2.3	11.2	80.3	6.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	419.8	1.3	9.4	84.2	5.1	0.0	0.0	0.0	山林型	
35	689.4	7.5	2.8	87.1	1.9	0.0	0.0	0.0	2412.0	4.4	5.9	87.9	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	399.5	0.9	2.5	95.2	1.3	0.0	0.0	0.0	山林型	
37	1823.0	5.2	3.2	79.8	11.6	0.0	0.0	0.0	743.5	3.1	12.5	72.7	10.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.0	1.7	4.6	92.1	1.5	0.0	0.0	0.0	山林型	
36	9588.3	9.3	9.1	72.0	8.4	0.9	0.0	0.0	3433.5	5.9	20.5	67.2	6.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	249.3	2.7	24.1	71.2	1.7	0.0	0.0	0.0	山林型	
23	1078.4	10.9	22.9	65.3	0.0	0.9	0.0	0.0	621.6	3.5	36.0	58.6	6.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	342.4	2.2	21.8	74.5	1.3	0.0	0.0	0.0	山林型	
14	1025.5	10.2	3.4	59.7	10.2	4.7	0.0	0.0	466.4	12.8	14.8	56.8	12.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	457.7	6.8	11.3	69.4	10.1	0.2	0.0	0.0	山林型	
8	831.4	17.9	8.1	66.1	2.3	5.5	0.0	0.0	590.4	12.0	33.0	51.9	2.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	456.4	5.3	32.4	55.7	3.6	0.1	0.0	0.0	農耕地・山林型	
17	1175.3	12.4	5.7	66.0	4.1	11.8	0.0	0.0	657.4	14.3	29.6	52.2	3.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	462.6	7.3	37.9	49.5	2.4	0.1	0.0	0.0	農耕地・山林型	
30	2606.7	12.7	13.1	64.1	7.1	0.5	0.0	0.0	983.6	12.2	28.4	51.7	3.8	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	475.5	10.6	32.1	52.5	3.9	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
31	1399.3	7.7	18.7	59.3	13.2	2.1	0.0	0.0	713.7	6.0	33.9	52.3	7.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	153.5	4.1	32.9	57.5	5.1	0.1	0.0	0.0	農耕地・山林型	
22	3039.7	11.4	26.7	58.0	2.4	0.1	0.0	0.0	1284.0	6.0	37.0	55.0	1.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	589.7	4.6	28.2	65.0	1.9	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
5	945.1	22.9	38.0	29.4	2.4	3.3	0.0	0.0	755.1	17.0	63.4	15.4	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	694.8	6.8	41.5	48.5	1.6	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
25	1480.2	34.2	41.5	13.8	1.2	1.6	0.0	0.0	1102.1	17.1	59.9	13.4	0.5	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	1184.5	15.6	57.3	23.7	0.7	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
26	780.1	37.5	45.4	7.9	1.7	0.0	0.0	0.0	563.1	24.4	59.1	13.6	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	557.1	7.0	26.8	61.6	1.1	3.1	0.0	0.0	農耕地・山林型	
21	1857.9	24.5	34.7	31.7	0.9	0.2	0.0	0.0	1061.9	11.3	52.7	29.4	0.8	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	723.0	9.1	41.4	46.4	1.1	0.1	0.0	0.0	農耕地・山林型	
29	3633.9	25.2	43.5	30.1	0.3	0.0	0.0	0.0	1760.2	19.1	46.9	30.9	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1074.6	10.0	31.5	55.7	1.9	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
7	3652.6	22.8	13.3	55.7	1.9	5.6	0.0	0.0	1420.4	11.7	24.4	62.3	0.8	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	633.5	4.9	12.4	78.7	3.0	0.1	0.0	0.0	山林型	
40	8112.4	8.4	7.9	54.2	29.5	0.0	0.0	0.0	4658.3	6.7	26.0	58.9	8.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	691.0	2.3	17.4	72.0	8.0	0.0	0.0	0.0	山林型	
12	742.0	17.7	5.7	35.5	18.6	16.4	0.0	0.0	544.7	13.3	24.9	52.8	5.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	590.6	7.0	36.0	53.2	3.0	0.2	0.0	0.0	農耕地・山林型	
24	2315.6	33.7	16.8	39.5	1.5	0.8	0.0	0.0	1396.9	13.3	35.7	48.5	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1003.3	8.1	31.1	57.1	1.1	1.6	0.0	0.0	農耕地・山林型	
1	1826.2	36.5	5.3	29.9	5.7	16.6	0.0	0.0	933.4	40.7	27.3	24.6	1.9	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	576.9	32.5	32.2	32.3	1.1	0.1	0.0	0.0	混在型	
32	3165.9	18.2	20.0	52.4	4.3	1.8	0.0	0.0	1437.3	11.6	42.2	42.3	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	635.5	4.9	31.4	60.1	2.4	0.1	0.0	0.0	農耕地・山林型	
20	2009.3	18.9	23.7	49.5	3.7	0.1	0.0	0.0	1062.1	10.3	38.4	46.2	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	784.7	6.5	27.5	63.8	1.8	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
27	1161.5	19.9	29.4	46.4	4.2	0.0	0.0	0.0	750.4	11.5	48.3	37.7	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	593.0	12.6	34.7	50.4	2.1	0.2	0.0	0.0	農耕地・山林型	
28	2644.6	36.1	12.4	46.1	3.5	0.2	0.0	0.0	1062.3	24.5	32.3	40.6	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	526.4	12.6	27.3	58.1	2.0	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
33	1514.8	27.4	8.7	45.6	9.8	3.7	0.0	0.0	786.5	17.2	44.3	35.2	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	518.2	8.2	38.7	50.8	0.7	0.1	0.0	0.0	農耕地・山林型	
9	1520.2	10.2	30.3	44.7	9.3	0.0	0.0	0.0	568.4	6.3	55.6	36.4	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	66.3	3.2	52.5	45.4	0.3	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
34	741.1	27.9	4.0	42.7	7.2	11.0	0.0	0.0	313.6	21.5	29.7	32.9	13.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	313.7	7.5	23.1	59.1	8.7	0.3	0.0	0.0	農耕地・山林型	
16	761.2	22.6	22.7	37.8	8.2	6.8	0.0	0.0	573.7	14.4	32.6	42.0	7.0	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	708.6	9.5	25.5	57.3	5.8	1.5	0.0	0.0	農耕地・山林型	
19	567.0	19.0	16.0	37.2	12.5	0.0	0.0	0.0	341.4	20.9	40.9	29.8	5.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	394.6	7.2	26.4	62.5	2.7	0.0	0.0	0.0	農耕地・山林型	
18	808.9	15.1	7.1	35.8	33.8	1.7	0.0	0.0	587.5	16.9	30.7	43.6	6.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	613.3	8.9	27.2	60.5	1.9	0.2	0.0	0.0	農耕地・山林型	
39	1284.3	0.8	1.0	34.4	28.3	35.4	0.0	0.0	627.3	0.8	5.1	58.9	33.8	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	25.4	0.0	5.4	32.6	58.6	3.4	0.0	0.0	0.0	草原・山林型
11	865.3	11.5	2.1	34.8	15.6	36.0	0.0	0.0	470.7	9.9	14.7	65.0	8.1	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	408.0	3.3	16.4	74.2	5.3	0.1	0.0	0.0	山林型	
38	3784.3	5.2	4.8	37.2	25.7	27.1	0.0	0.0	2363.1	6.1	29.0	49.3	14.8	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	737.9	1.4	17.2	74.4	6.8	0.1	0.0	0.0	山林型	
2	269.9	16.9	4.7	34.3	0.4	37.6	0.0	0.0	203.9	16.4	32.9	43.2	1.2	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	264.3	27.3	30.5	34.8	2.9	0.2	0.0	0.0	混在型	
10	770.0	12.5	3.2	18.7	34.9	30.7	0.0	0.0	536.4	15.9	35.8	30.8	9.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	673.4	12.4	35.2	44.9	6.0	0.1	0.0	0.0	農耕地・山林型	

※ 太字 : 70.0%以上 太字 : 69.9~50.0% 細字 : 49.9~30.0%

※ 近距離景 : 自然環境保全基礎調査を参考にした海岸領域、中距離景 : 聴覚・視覚が寄与する領域、

遠距離景 : 視覚のみが寄与する領域

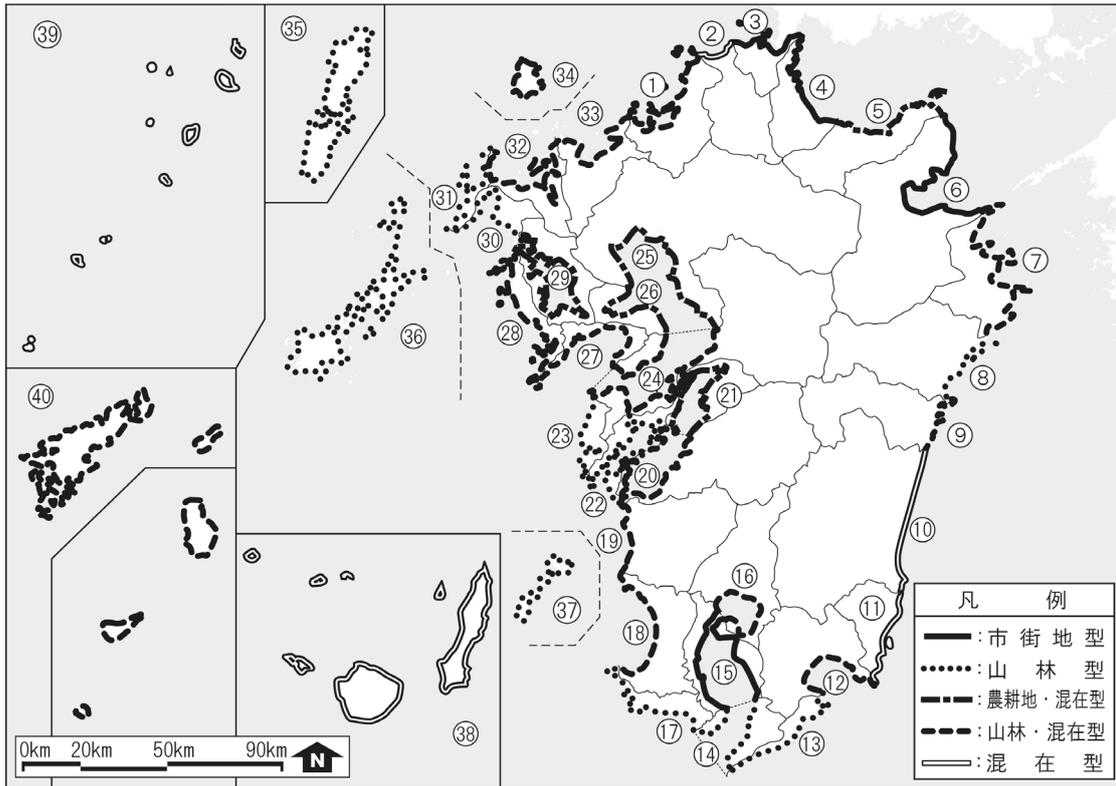


図 3-7 陸域の土地利用状況 (近距離景)

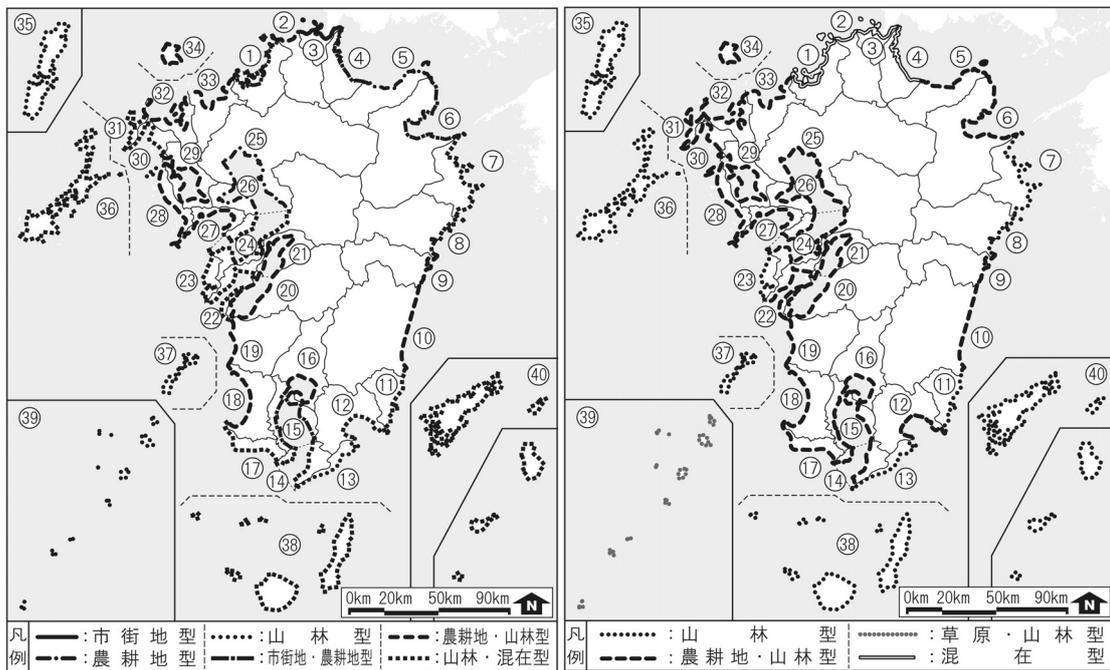


図 3-8 陸域の土地利用状況 (中距離景)

図 3-9 陸域の土地利用状況 (遠距離景)

### 3-5 広域地方計画区域からみた海辺景観に資する基礎的空間構成の把握・類型化

以上の分析を基に、各指標の類型結果を表3-8にまとめた。海岸線及び海域・陸域の構成を海辺の景観構成とし、合わせて接近性、土地利用基本計画区分（以下、計画区分）を整理した。なお、中心となる海岸線構成及び陸域100m域を基準に並び替えした。

エリア3、エリア4、エリア6は、海岸線構成が「人工型」、陸域100mが「市街地型」となり、都市的空間を要する海辺となる。また、陸域の標高差は低く、のびやかな市街地・農地が広がり、海域は、船舶の航行を楽しむことのできる空間であることが窺える。更には、計画区分は「都市型」となることから、都市空間に配慮した景観の保全を検討しやすい空間となり、接近性が●（134.7～77.5m/ha）や■（77.4～63.2m/ha）と高いことから、都市的活動の場として活用しやすい海辺であることが窺える。

エリア8は、海岸線構成が「海食崖型」、陸域100mが「山林型」となり、自然を多く有する海辺となる。また、陸域は標高差が高く、丘陵な山林が広がり、海域は、小型船の航行を楽しむことのできる空間となる。計画区分は「自然型」となり、接近性は「+」となることから、自然景観に考慮して、現状を保全すべきエリアであることが窺える。

一方で、エリア1は、海岸線構成が「混在型」、陸域100mが「山林・混在型」となり、自然物と人工物が混在するエリアとなる。計画区分は「都市型」となるが、自然物・人工物が混在した空間構成となることから、都市景観としての景観の保全を検討するためには、スケールが広すぎると考えられる。

上記と同様、広域スケールでは、エリアが広すぎるため、海岸線構成や陸域100m構成が「混在型」になるエリアも多く、また、計画区分では、「自然区域」、「森林区域」、「農業区域」などで、対象範囲が重複することもあることから、エリア30の「混在型」や、エリア29の「都市・農業・自然型」のように、タイプ類型が不明瞭になるエリアもみられる。このような海辺では、特定の計画区分に着目し、更に詳細なスケールで海辺の活用及び保全を検討する必要があると考えられる。

表3-8 九州圏における海辺の状況

エリア 番号	1ha当 り道路 長	土地利用基本計画区分 (海岸線から 100m陸域)	海岸線 構成	海辺の空間構成						
				陸域構成			海域構成			
				100m域 (近距離景)	100m~1km域 (中距離景)	1~10km域 (遠距離景)	100m~1km 域	100m域 (近距離景)		
3	■	都市型	人工型	市街地型	d	市街地型	E	混在型	大型船舶	大型船舶
4	■	都市型	人工型	市街地型	d	市街地・農耕地型	E	混在型	大型船舶	船舶型
6	●	都市型	人工型	市街地型	d	市街地・農耕地型	C	農耕地・山林型	船舶型	船舶型
15	●	都市型	混在型	市街地型	c	市街地・農耕地型	B	農耕地・山林型	船舶型	船舶型
14	▲	混在型	浜辺型	山林型	b	山林・混在型	C	農耕地・山林型	—	—
8	+	自然型	海食崖型	山林型	c	山林・混在型	D	山林型	—	小型船舶
36	+	森林型	海食崖型	山林型	b	山林・混在型	D	山林型	—	小型船舶
13	+	森林・自然型	海食崖型	山林型	a	山林型	A	山林型	—	小型船舶
37	+	森林・自然型	海食崖型	山林型	a	山林型	B	山林型	—	—
35	+	農業・森林・自然型	海食崖型	山林型	c	山林型	D	山林型	—	小型船舶
31	+	農業・森林・自然型	海食崖型	山林型	b	山林・混在型	E	農耕地・山林型	—	小型船舶
30	+	混在型	海食崖型	山林型	c	山林・混在型	D	農耕地・山林型	船舶型	船舶型
17	▲	混在型	海食崖型	山林型	b	山林・混在型	D	農耕地・山林型	—	—
22	■	農業・森林・自然型	混在型	山林型	b	山林・混在型	D	農耕地・山林型	—	小型船舶
23	■	農業・森林・自然型	混在型	山林型	b	山林・混在型	D	山林型	—	小型船舶
21	●	農業型	人工型	農耕地・混在型	c	農耕地・山林型	D	農耕地・山林型	干潟・船舶型	船舶型
25	●	都市・農業型	人工型	農耕地・混在型	d	農耕地型	E	農耕地・山林型	干潟型	干潟・小型船舶
5	■	都市・農業型	人工型	農耕地・混在型	d	農耕地型	D	農耕地・山林型	干潟・船舶型	干潟・小型船舶
26	●	都市・農業型	混在型	農耕地・混在型	d	農耕地型	B	農耕地・山林型	干潟・船舶型	干潟・小型船舶
29	■	都市・農業・森林型	混在型	農耕地・混在型	c	農耕地・山林型	C	農耕地・山林型	船舶型	船舶型
18	▲	都市・自然型	浜辺型	山林・混在型	c	農耕地・山林型	D	農耕地・山林型	—	小型船舶
40	▲	農業・森林型	浜辺型	山林・混在型	b	山林・混在型	C	山林型	—	—
19	▲	都市・農業・自然型	浜辺型	山林・混在型	d	農耕地・山林型	D	農耕地・山林型	船舶型	小型船舶
34	▲	農業・森林・自然型	浜辺型	山林・混在型	c	農耕地・山林型	F	農耕地・山林型	—	小型船舶
12	+	混在型	浜辺型	山林・混在型	c	山林・混在型	D	農耕地・山林型	船舶型	小型船舶
27	■	混在型	浜辺型	山林・混在型	b	農耕地・山林型	C	農耕地・山林型	—	小型船舶
1	●	都市型	混在型	山林・混在型	d	市街地・農耕地型	E	混在型	船舶型	船舶型
20	■	農業型	混在型	山林・混在型	b	農耕地・山林型	D	農耕地・山林型	—	小型船舶
32	▲	農業型	混在型	山林・混在型	c	農耕地・山林型	D	農耕地・山林型	—	小型船舶
9	▲	都市・自然型	混在型	山林・混在型	c	農耕地・山林型	D	農耕地・山林型	船舶型	船舶型
24	●	農業・自然型	混在型	山林・混在型	c	山林・混在型	C	農耕地・山林型	干潟・船舶型	小型船舶
16	●	都市・農業型	混在型	山林・混在型	b	農耕地・山林型	B	農耕地・山林型	—	—
33	●	都市・農業・自然型	混在型	山林・混在型	c	農耕地・山林型	C	農耕地・山林型	船舶型	小型船舶
28	■	都市・農業・森林型	混在型	山林・混在型	b	農耕地・山林型	D	農耕地・山林型	船舶型	小型船舶
7	■	農業・森林・自然型	混在型	山林・混在型	b	山林・混在型	C	山林型	—	—
10	▲	都市型	浜辺型	混在型	d	農耕地・山林型	D	農耕地・山林型	船舶型	小型船舶
2	●	都市型	浜辺型	混在型	d	農耕地・山林型	F	混在型	—	小型船舶
38	+	農業・森林型	浜辺型	混在型	b	山林・混在型	A	山林型	—	—
39	+	自然型	海食崖型	混在型	a	山林型	A	草原・山林型	—	—
11	▲	自然型	混在型	混在型	b	山林・混在型	D	山林型	—	小型船舶

※●:134.7~77.5m/ha、■:77.4~63.2m/ha、▲:63.1~43.2m/ha、+:43.1~8.7m/ha

a:100~150m、b:50~100m、c:25~50m、d:0~25m

A:250m以上、B:200~250m、C:150~200m、D:100~150m、E:50~100m、F:0~50m

※近距離景:自然環境保全基礎調査を参考にした海岸領域 中距離景:聴覚・視覚が寄与する領域

遠距離景:視覚のみが寄与する領域

※陸域構成の中距離景・遠距離景は、標高差に合わせてハッチ、文字の太さを調整した

### 3-6 考察結果

本章では、「広域地方計画区域において、海辺景観に資する基礎的な空間構成を把握し、顕在化の条件を明らかにすること」のため、一次流域単位（海岸線平均約 200km）ごとに、海辺における計画区分の現状を把握・整理した。また海辺（陸側 100m）の道路長率を分析し、さらに、海岸線及び海岸線を中心とした陸域・海域の両方向の遠距離景、中距離景、近距離景の地理的特徴（標高や土地利用状況）を把握・整理することで、計画区分に応じた海辺景観資する空間構成の潜在量を把握・類型化し、接近性の視点から、海辺景観の活用や保全の可能性（顕在化）に関する一定の示唆を得た。

しかし一方で、海岸線のタイプ分類が「混在型」となり、広域スケールでは、海辺景観を構成する資源の具体的な潜在量を把握することが困難で、特定の計画区分に着目した、詳細なスケールでの更なる分析が必要であることを示した。

そこで本研究では、広域スケールにおける海辺空間の特徴が主に「混在型」となり、九州圏において最も人口が多く、海辺景観の活用可能性が高いと考えられるエリア 1 と、その周辺部のエリア 2、エリア 32、エリア 33 内に着目し、該当エリアにおいて、海辺の特徴的な計画区分となる「玄海国定公園（自然公園区域）」と、「博多港（港湾計画範囲）」の 2 つのスケールにおいて、海辺景観資源の潜在量の把握し、顕在化のための計画条件を探求する。

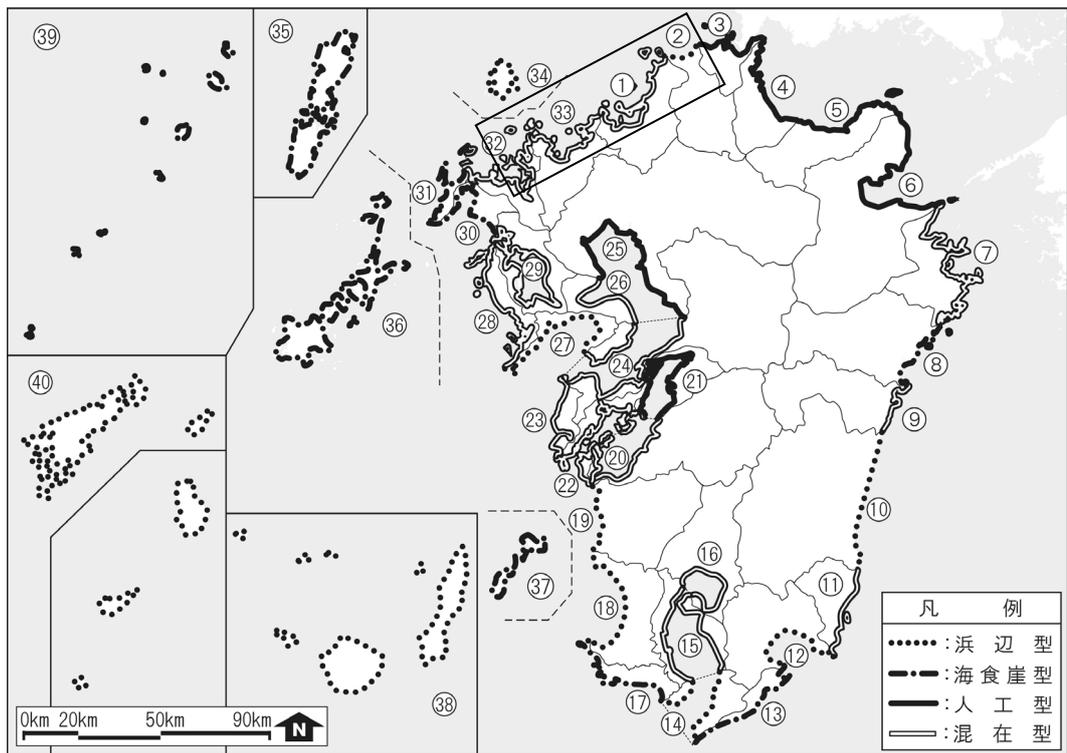


図3-10 海岸線の状況 (再掲)

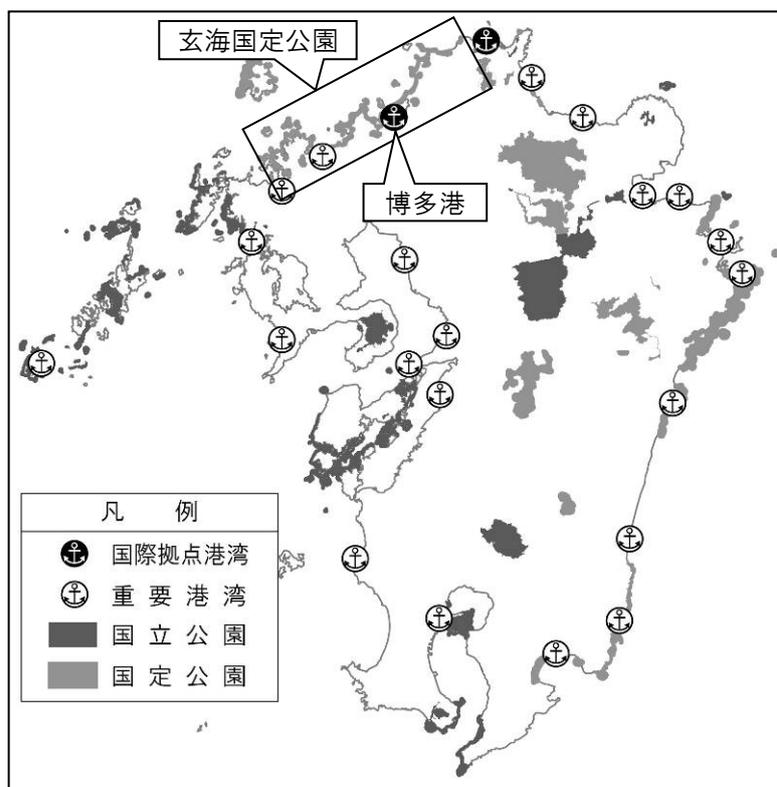
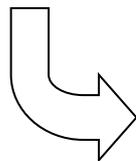


図3-11 自然公園図と港湾

## 第4章 詩歌作品からみた海辺の景観要素の抽出

## 第4章 詩歌作品からみた海辺の景観要素の抽出

本章では、1章で示した主要な研究の目的②「国内の詩歌作品から、自然物・人工物に関する印象深い海辺景観要素を継時的に明らかにすること」に対応するため、特徴的な海辺となる自然公園、港に関連した景観要素を把握すべく、人の景観認識の考え方にに基づき、国内の詩歌作品から、自然物・人工物に関する印象深い海辺景観要素を抽出し、継時的に把握・整理した。

### 4-1 海辺景観要素の整理における継時的区分の設定

本節では、第2章で示す如く、国内の詩歌作品から海辺の景観要素を抽出するに当たって、抽出した要素を継時的に整理すべく、第1章で示した海辺における国内の我が国の出来事から、特に海辺の様相を変えたと考えられる主な出来事として、

- ① 1100年代：平清盛によって日本で初めて築港開始
- ② 1600年代：鎖国の開始・砂防林目的のため、海辺で本格的な植林開始
- ③ 1800年代：幕末の開港及び技術革新に伴う埋立・干拓の活性化

の3つを取り上げると共に、集計を行う際の海辺における時代区分として、図4-1に示す如く、①以前を時代Ⅰ、①から②までを時代Ⅱ、②から③までを時代Ⅲ、④以降を時代Ⅳとして整理した。

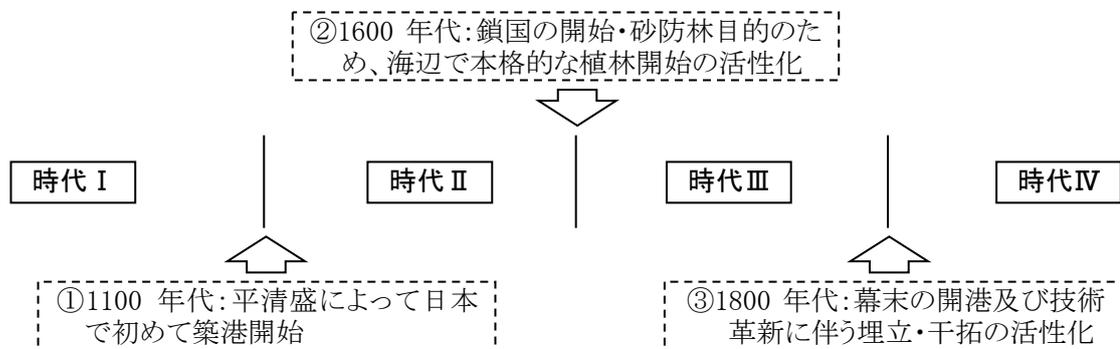


図4-1 海辺における主な出来事と時代区分

## 4-2 詩歌作品からみた海辺の自然景観要素の抽出

本節では、自然公園の海辺における印象的な景観要素を把握するため、2章で示した如く、国内の詩歌作品から海辺の景観要素を抽出・整理した。

自然公園の海辺景観要素の抽出に当たっては、表4-1に示す如く、高等学校教科書<sup>94)</sup>に掲載されている代表的な詩歌作品(11作品)を判読し、海辺に関して詠った句を取り上げ、その中から海辺の自然景観に関する要素を抽出した。

表4-1 引用詩歌作品一覧<sup>95)</sup>

タイトル/人物	年代	概要
万葉集	?~759	歌集。20巻。奈良時代末期の成立とされ、大伴家持が編集に携わったことが推定される。仁徳朝の伝承歌から淳仁朝までの和歌約4500首を収める。作者は皇族・貴族から遊女・乞食まで広い階層にわたる。額田王(ぬかたのおおきみ)・柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良(おくら)・大伴旅人・大伴家持などは著名。歌体は、短歌のほか長歌・旋頭歌(せどうか)などを含む。
古今和歌集	905~	最初の勅撰和歌集。20巻。905年、醍醐天皇の下命により、紀友則・紀貫之・凡河内館恒(おおしこうちのみつね)・壬生忠岑(みぶのただみね)撰。913年頃成立。歌数約1110首。仮名序・真名序がつけられている。理知的・技巧的で、情趣的な「もののあわれ」を基調とする歌が多い。三代集・八代集の一。古今集。古今。
新古今和歌集	1205~	第8番目の勅撰和歌集。20巻。後鳥羽上皇の命で、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経撰。1205年成立。約1980首。歌風は新古今調。八代集の一。新古今集。新古今。
金槐和歌集	1213~	歌集。1巻。源実朝の家集。1213年頃成立、のち増補。歌数約700首。万葉調の歌に佳作が多い。鎌倉右大臣家集。
菟玖波集	1356~	国内初の連歌集。二条良基により成立。後の連歌の規制書の「応安新式」の制定を確立。
新撰菟玖波集	1495~	連歌集。宗祇の正風連歌による勅撰集。宗祇の弟子と「水無瀬三吟百韻」により編集。
松尾芭蕉集	1644~ 1694	江戸前期の俳人。名を宗房。別号、桃青・坐興庵・栩々(くく)斎・泊船堂・風蘿坊など。仮名書き署名は「はせを」。伊賀上野の人。京都で北村季吟に師事。のち江戸に下り、俳壇内に地盤を形成。深川の芭蕉庵に移った。各地への旅を通じて、俳腕を文芸的に高めたが、晩年には「軽み」の俳風を志向した。句は「俳腕七部集」(芭蕉七部集)などに収められ、主な紀行・日記に「野ざらし紀行」「笈(おい)の小文」「更科紀行」「奥の細道」「幻住庵記」「嵯峨日記」などがある。
与謝蕪村集	1716~ 1783	(1716-1783)江戸中期の俳人・画家。摂津の人。別号、夜半亭など。画号、謝寅など。画家としては日本人画を大成、代表作に「十便十宜図」(池大雅との合作)・「新緑社宇図」などがある。俳腕は早野巴人(はじん)に学び、「景気(叙景)」「不用意(即興)」「高齋洒落(離俗)」を三本柱に、写實的・古典趣味的・浪漫的な俳風を形成。晩年、中興俳壇にあきたらず、「俳力(俳腕性)」の回復を唱え、「癡落(自在性)」の境地を志向した。編著「新花摘」「夜半楽」「此ほとり」「蕪村句集」「蕪村遺稿」など。
島崎藤村集	1872~ 1943	詩人・小説家。本名、春樹。長野県生まれ。明治学院卒。北村透谷らと「文学界」を創刊。「若菜集」で浪漫主義詩人として名声を博したが、のち小説に転じ自然主義の代表的作家となる。小説「破戒」「春」「家」「新生」「夜明け前」など
与謝野晶子集	1878~ 1942	歌人。大阪府生まれ。堺高女卒。旧姓、鳳(ほう)。明星派の代表的歌人。処女歌集「みだれ髪」によって大胆に女性の官能と情熱をうたい、明治30年代の浪漫主義運動の中心となった。
石川啄木集	1886~ 1912	歌人・詩人。岩手県生まれ。本名、一(はじめ)。貧困と孤独にさいなまれながら明治末の「時代閉塞」に鋭く感応し、社会主義的傾向へ進むが、肺結核で夭折(ようせつ)。歌集「一握の砂」「悲しき玩具」、詩集「呼子と口笛」、評論「時代閉塞の現状」など。

海辺の自然景観要素の抽出に活用した句数は、以下に示す通りとなる。

- ・万葉集全 4, 516 句中 334 句<sup>96)</sup>
- ・古今和歌集全 1, 211 句中 27 句<sup>97)</sup>
- ・新古今和歌集全 1979 句中 109 句<sup>98)</sup>
- ・金槐和歌集全 757 句中 68 句<sup>99)</sup>
- ・菟玖波集 28 句<sup>100)</sup>
- ・新撰菟玖波集 33 句<sup>101)</sup>
- ・松尾芭蕉集全 980 句中 28 句<sup>102)</sup>
- ・与謝蕪村集全 868 句中 6 句<sup>103)</sup>
- ・島崎藤村集 21 集<sup>104)</sup>
- ・与謝野晶子集 10 集<sup>105)</sup>
- ・石川啄木集 18 集<sup>106)</sup>

なお、図 4-2 に示す如く、「句」の単位は、データの信憑性に配慮し、統計的に同一条件下のデータとするため、詩歌成立の原点である和歌の一般形式「5・7・5・7・7」の 31 音節を基本とし、俳句形式の「5・7・5」との差 14 音節から、31 音節±14 音節を一句とした。これによって、長歌などは分割、あるいは削除などの処理を行った。

短歌形式 (万葉集957番)

957 いざ子ども 香椎の湯に 白栲の 袖さへ濡れて 朝菜摘みてむ =36音

5音      7音      5音      7音      7音

俳句形式 (与謝蕪村集709番)

709 磯ちどり 足をぬらして 遊びけり =22音 (-14音差)

5音      7音      5音

図 4-2 句単位の設定方法

また、抽出した景観要素は、引用した詩歌作品の発行年次別に、以下の通り整理した。

表 4-2 海辺に係わる引用詩歌作品と時代区分

時代区分	時代 I		時代 II				時代 III		時代 IV		
年代	?~759	905~	1205~	1213~	1356~	1495~	1644~ 1694	1716~ 1783	1872~ 1943	1878~ 1942	1886~ 1912
作品名	万葉集	古今和歌集	新古今和歌集	金槐和歌集	菟玖波集	新撰菟玖波集	松尾芭蕉集	与謝蕪村集	島崎藤村集	与謝野晶子集	石川啄木集
引用句数	320句	27句	102句	67句	27句	32句	25句	6句	68句	28句	41句
合計	347句		228句				31句		136句		

上記の方法に基づき、詩歌作品から抽出した海辺の印象的な自然景観要素は、以下に示す通りとなった。

図4-3は、前述で捉えた詩歌で詠われている海辺の景観要素のなかで、骨格要素を示したものであり、図4-4は個別要素を示したものである。

図4-3の骨格要素では、「寄せる波」が時代Iで最も多くみられ、次いで時代IIで多くみられた。このほか、「潮の満ち干」、「干潟」などがみられたほか、時代によっては、「砂」や「岩」などが多くみられた。

図4-4の個別要素では、「鳥類」が多くみられ、特に時代IVで多くみられた。このほか、「樹木」、「草花類」、「海藻類」などが、それぞれの時代別に多くみられた。

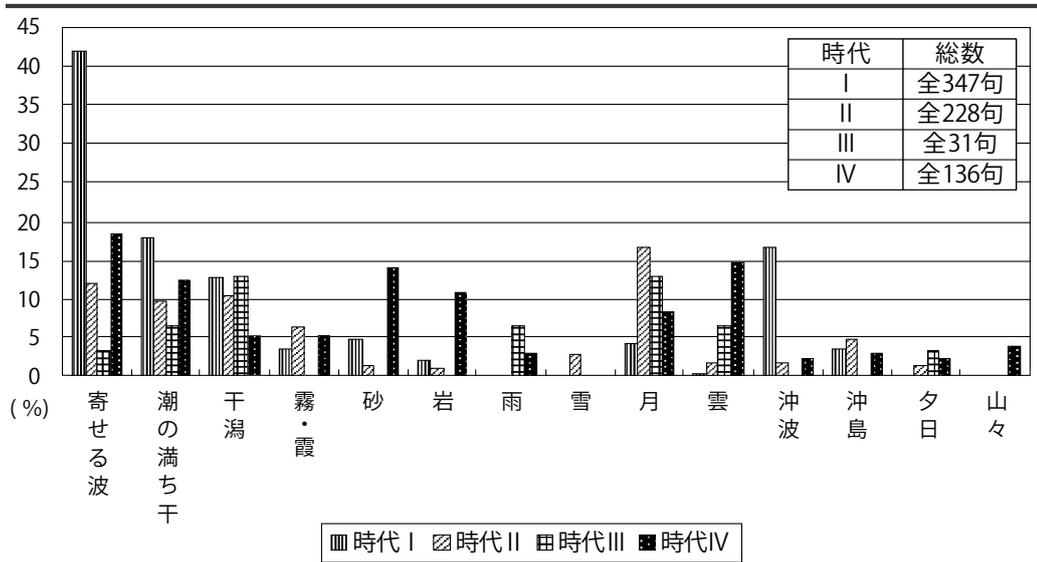


図4-3 詩歌で詠われていた海辺の主な骨格要素

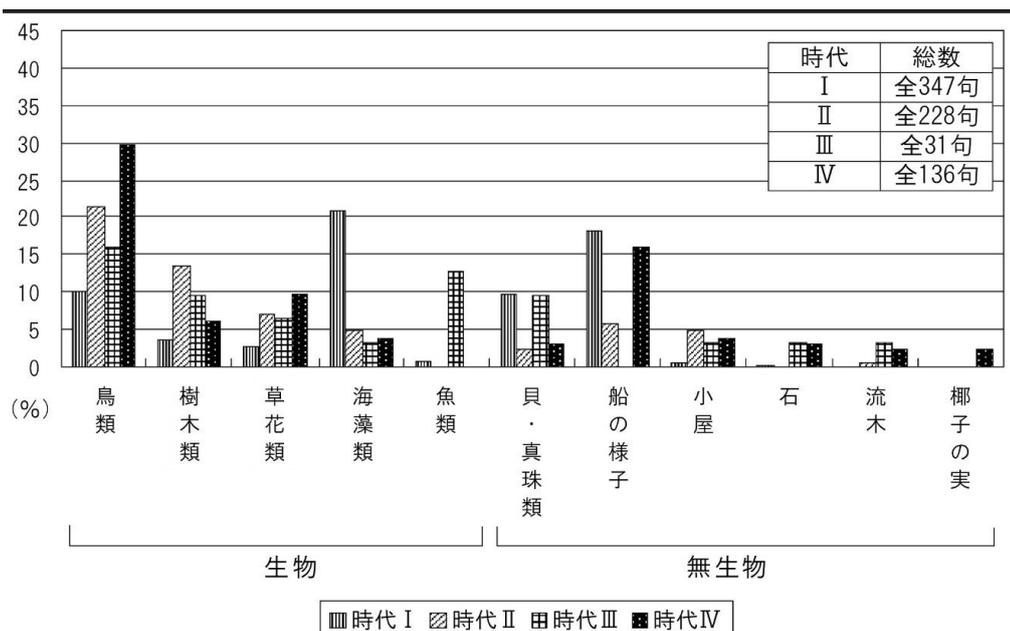


図4-4 詩歌で詠われていた海辺の主な個別要素

### 4-3 詩歌作品からみた港の景観要素の抽出

本節では、港における印象的な景観要素を把握するため、2章で示した如く、国内の詩歌作品から海辺の景観要素を抽出すると共に、それらを用いて、博多港における海辺の景観要素を抽出・整理した。

本研究における港の海辺景観は、第2章で示した如く、詩歌作品用いてその要素を抽出した。抽出に当たっては、博多港の景観要素の分析においては、古くから船着き場として表現されている「みなと」のキーワードに着目し、国内の約45万首の詩歌を収録した「新編国歌大観CD-ROM」<sup>107)</sup>を用いて、「港」、「湊」、「水門」、「みなと」と表記ある877句を収集した。また上記資料で不足した近世、近代、さらに現代の詩歌については、「古典俳文学大系CD-ROM」、「現代俳句データベース」など<sup>108)、110)、112)</sup>参照から収集し、表4-3に示した計1219句を用いて、港の景観要素を抽出した。

表4-3 時代区分及び引用詩歌句数

時代区分	I	II	III	IV
年代	～1100	1100～1600	1600～1800	1800～現代
句数	全79句	全645句	全238句	全257句

これらの詩歌を基に抽出した主な景観要素を図4-5に示した。全体的には、時代Ⅲまでは、各種景観要素の記述が見られるものの、時代Ⅳになると多くの景観要素の出現率が著しく低いことがわかった。

時代ごとにみると、時代Ⅰでは、「植物」の出現率が41.8%と最も高く、次いで「船」が29.1%となった。しかし、時代Ⅱ以降は、これらの出現率が逆転し、時代Ⅲでは「船」の出現率が48.7%と最も高くなり、「植物」の出現率は26.1%に留まっていることがわかった。その他、寄せる波や潮の満ち干を表現した「海の様子」の出現率は、時代Ⅱで36.0%であり、「鳥」が時代Ⅰで19.1%、「干潟」が時代Ⅰで6.3%の出現率であった。

また、これらの景観要素の中で、特に出現率が高く、個別の表現が多くみられた「植物」、「海の様子」、「鳥」について、各々の出現率を以下に把握・検討した。

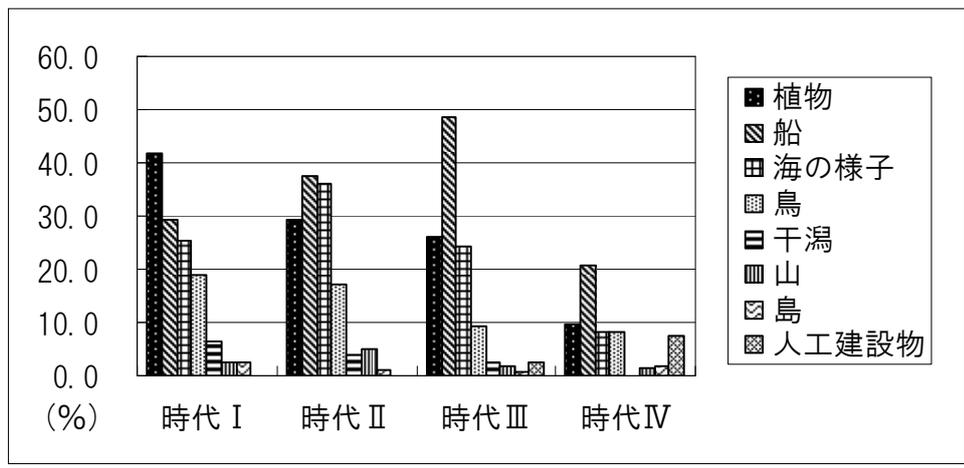


図 4-5 詩歌から抽出した港の主な景観要素

### 1. 「植物」

「植物」についての記述の詳細を図 4-6 に示した。最も高い出現率は、時代 I における「葦」で、23.4%であった。しかし、時代が下るほど出現率は低下し、時代 IV では全く現れない結果となった。

一方、「花」についての記述の出現率は、時代が下るに従ってわずかではあるが高くなる様子がみられ、時代 IV でその出現率が 6.6%であった。また、「松」についての記述は、時代 II、III でそれぞれ 4.7%、4.6%の出現率であった。

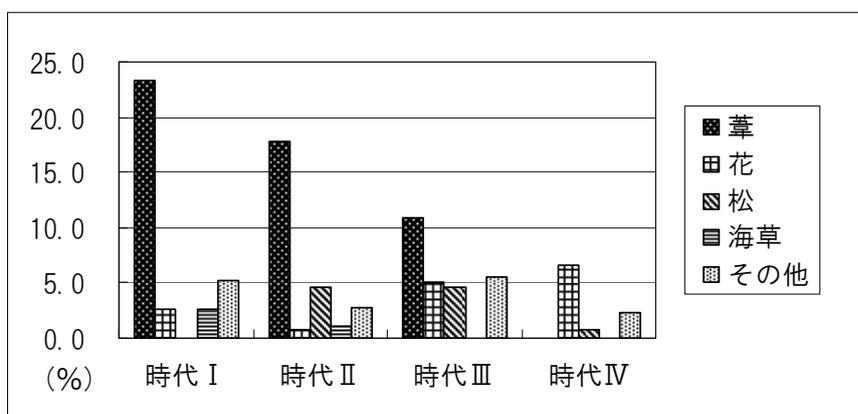


図 4-6 景観要素「植物」の詳細

## 2. 「海の様子」

「海の様子」についての詳細を図4-7に示した。最も高い出現率は、「波の表現」となり、時代Ⅲで22.3%となった。次いで潮の満ち干などを表した「潮の表現」が時代Ⅱで13.5%となった。これらの「海の様子」の記述は時代Ⅱ以降、出現率が下がり、時代Ⅳでは著しく低いことがわかった。

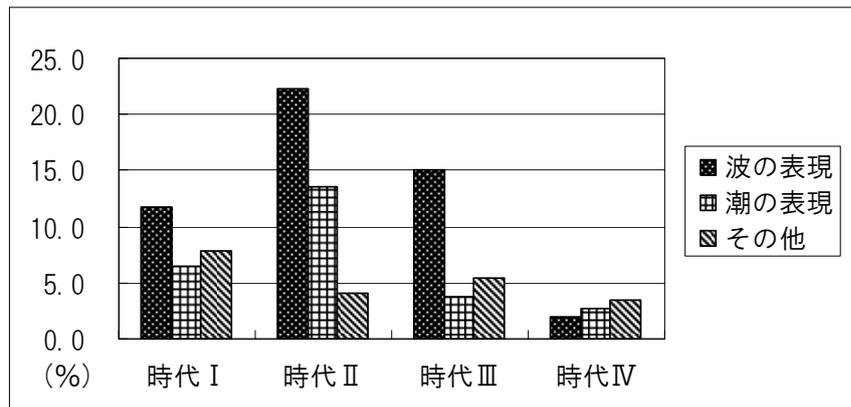


図4-7 景観要素「海の様子」の詳細

## 3. 「鳥」

「鳥」についての記述の詳細を図4-8に示した。最も高い出現率は、時代Ⅱにおける「千鳥」であり、9.8%であった。次いで時代Ⅰにおける「鶴」が9.1%であった。これらは時代が下るほど出現率が下がり、時代Ⅳでは全くみられない。また、時代Ⅳにおいては、「かもめ」の出現率が1.9%ほどみられる程度で、「その他」の出現率が5.8%と高く、特定の種名を示さない表現が多い結果となった。そのほか、「すどり」が時代Ⅰで2.6%、「雁」が時代Ⅲで2.1%、「サギ」が時代Ⅰで1.3%であった。

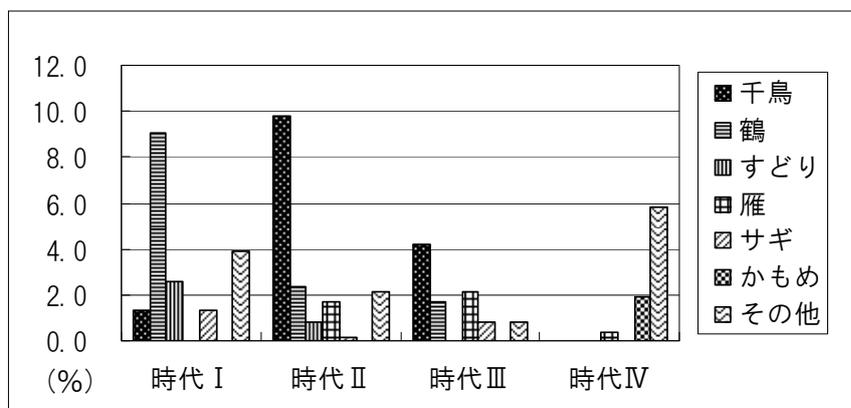


図4-8 景観要素「鳥」の詳細

#### 4-4 考察結果

本章では、自然物が多くみられる海辺の景観要素と、人工物が多くみられる港の景観要素を把握・抽出すべく、国内の詩歌作品からそれぞれの印象深い海辺景観要素を抽出し、時代別に整理した。

この結果、各時代で、人々に深い印象を与えてきたと考えられる景観要素を、自然物が多い海辺では、「寄せる波」、「干潟」、「砂」、「岩」など、人工物が多い港では、「葦草」、「船」、「鳥」など、それぞれ特徴的な要素を把握・整理することができた。今後、海辺において、印象深い海辺景観を創出するためには、これらの景観要素の存在に留意しながら、検討を進める必要があると考えられる。

以上の景観要素を踏まえ、第5章、第6章では、現在の法的管理区分化において自然物が多くみられる「玄海国定公園の海辺」と人工物が多くみられる「博多港港湾計画範囲」を対象に、海辺景観資源の潜在量把握について検討する。

## 第5章 自然公園における接近性からみた

### 海辺景観資源の顕在化の計画条件

## 第5章 自然公園における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件

本章では、1章で示した主要な研究の目的③「自然公園における海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにすること」に対応するため、自然物が多くみられる自然公園区域の海辺を対象に、海辺への接近場所を明らかにすると共に、「自然の海辺景観」について、詩歌作品から得られた印象深い海辺景観要素に資する対象物の存在を把握することで、接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにした。

### 5-1 調査単位の設定

調査単位は、第2章で示した如く、景観の基礎範囲となる「二次流域」を基礎単位とし、その区分けを以下に示した。

玄海国定公園の調査単位は、図5-1に示す如く、流域河口部と離島を調査エリアの1単位とし、国土地理院20万分の1地勢図を基に二次流域界を判読し、42エリアに区分して分析した。なお、各指標の測定は、国土地理院5万分の1地図を基に、キルビメーター及びAutoCADを用いて測定した。

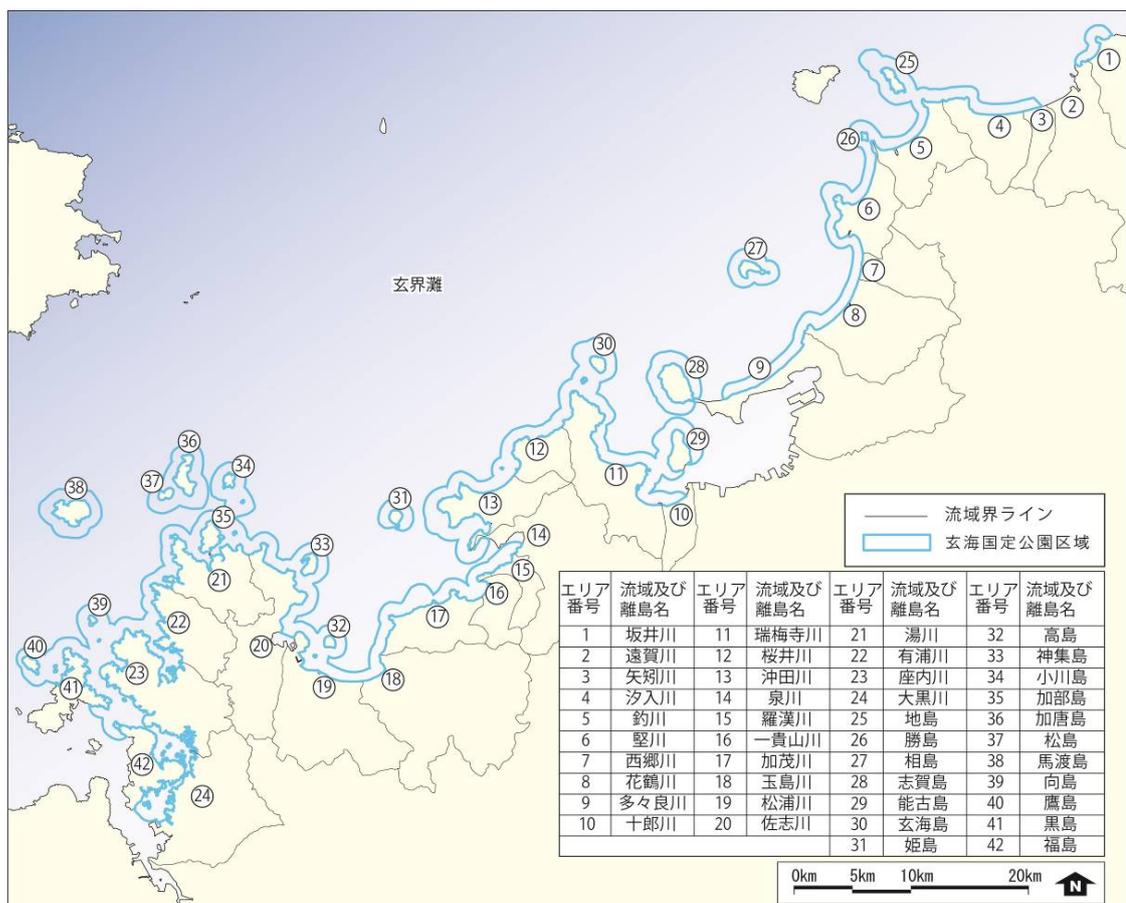


図5-1 玄海国定公園区域及び主な流域図

## 5-2 玄海国定公園の海辺の現状

本節では、第2章における調査方法を踏まえ、玄海国定公園の海辺の自然状況をエリア（二次流域単位）ごとに示すとともに、海岸線における道路の整備状況から、海辺における接近性を把握した。

### 5-2-1 海岸線の整備状況からみた海辺の類型化

海岸線の整備状況を基に、表5-1に、エリアごとに「自然海岸」、「半自然海岸」、「人工海岸」の海辺に対する延長距離を計測し、海岸長に対する占有率を以下に示した。

自然海岸は、エリア3「矢矧川」、エリア26「勝島」で100%の高い値を示した。半自然海岸では、エリア17「加茂川」、エリア18「玉島川」の占有率が、それぞれ67.0、61.0%の高い値を示した。人工海岸では、エリア32「高島」と、エリア42「福島」がそれぞれ51.7%と、50.2%と、高い値を示した。

また図5-2の三角グラフに示す如く、50%を境に、それぞれ「自然型」、「半自然型」、「人工型」、「混在型」の4つに類型した。

この図から、自然型が29箇所、半自然型が3箇所、人工型が2箇所、混在型が8箇所となり、全体を通じて自然型は高い割合を示した。このことから、当然の如く、玄海国定公園では海辺の自然海岸の多い状況が窺えた。

表5-1 海岸線の整備状況からみた海辺の類型化

エリア 番号	流域及び 離島名	海岸長 (km)	海辺の自然状況						三角グラフ による類型
			延長(km)			占有率(%)			
			自然 海岸	半自然 海岸	人工 海岸	自然 海岸	半自然 海岸	人工 海岸	
1	坂井川	4.9	3.8	0.5	0.6	77.3	10.3	12.4	自然型
2	遠賀川	1.4	1.1	0.3	0.0	78.6	21.4	0.0	自然型
3	矢矧川	2.5	2.5	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	自然型
4	汐入川	7.6	3.1	3.4	1.2	40.4	44.4	15.2	混在型
5	釣川	10.3	3.1	4.4	2.8	30.2	42.9	26.8	混在型
6	堅川	18.2	13.7	2.7	1.9	75.2	14.6	10.2	自然型
7	西郷川	2.7	1.2	1.3	0.2	44.4	48.1	7.4	混在型
8	花鶴川	7.7	4.5	3.0	0.3	58.2	38.6	3.3	自然型
9	多々良川	10.2	8.1	1.9	0.3	78.9	18.6	2.5	自然型
10	十郎川	2.5	1.1	0.7	0.8	42.0	28.0	30.0	混在型
11	瑞梅寺川	22.3	11.4	7.6	3.4	51.1	33.9	15.0	自然型
12	桜井川	8.0	4.7	2.7	0.7	58.1	33.1	8.8	自然型
13	沖田川	19.7	9.2	9.5	1.0	46.7	48.2	5.1	自然型
14	泉川	4.2	2.0	0.2	2.1	46.4	4.8	48.8	混在型
15	羅漢川	4.1	3.2	0.8	0.2	76.8	19.5	3.7	自然型
16	一貴山川	2.6	1.0	1.1	0.5	37.3	43.1	19.6	混在型
17	加茂川	13.1	3.1	8.8	1.2	23.8	67.0	9.2	半自然型
18	玉島川	4.1	1.0	2.5	0.7	23.2	61.0	15.9	半自然型
19	松浦川	10.9	4.8	1.5	4.7	43.6	13.8	42.7	混在型
20	佐志川	14.5	10.2	2.2	2.1	70.6	15.2	14.2	自然型
21	湯川	25.5	11.4	0.3	3.4	44.7	1.2	13.1	自然型
22	有浦川	19.0	15.4	0.0	3.6	81.1	0.0	18.9	自然型
23	座内川	49.3	30.1	1.9	17.4	61.1	3.8	35.2	自然型
24	大黒川	17.4	11.1	0.4	6.0	63.7	2.0	34.3	自然型
25	地島	8.0	7.1	0.2	0.7	89.3	1.9	8.8	自然型
26	勝島	2.4	2.4	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	自然型
27	相島	6.1	4.5	0.0	1.6	73.6	0.0	26.4	自然型
28	志賀島	11.0	2.2	6.2	2.6	19.6	56.6	23.7	半自然型
29	能古島	8.2	6.0	2.2	0.0	73.2	26.8	0.0	自然型
30	玄海島	4.1	1.0	1.9	1.2	24.4	46.3	29.3	混在型
31	姫島	3.6	1.9	1.0	0.8	52.8	26.4	20.8	自然型
32	高島	2.9	1.4	0.0	1.5	48.3	0.0	51.7	人工型
33	神集島	6.4	3.9	1.0	1.5	60.9	15.6	23.4	自然型
34	小川島	4.3	3.4	0.2	0.7	80.0	3.5	16.5	自然型
35	加部島	8.8	6.0	0.2	2.7	67.6	2.3	30.1	自然型
36	加唐島	10.7	9.9	0.0	0.8	92.5	0.0	7.5	自然型
37	松島	3.5	3.3	0.0	0.3	92.9	0.0	7.1	自然型
38	馬渡島	10.3	9.1	0.0	1.2	88.8	0.0	11.2	自然型
39	向島	2.7	2.3	0.0	0.4	86.8	0.0	13.2	自然型
40	鷹島	19.9	16.9	0.0	3.0	85.1	0.0	14.9	自然型
41	黒島	4.6	3.9	0.0	0.7	85.7	0.0	14.3	自然型
42	福島	24.1	11.5	0.5	12.1	47.7	2.1	50.2	人工型

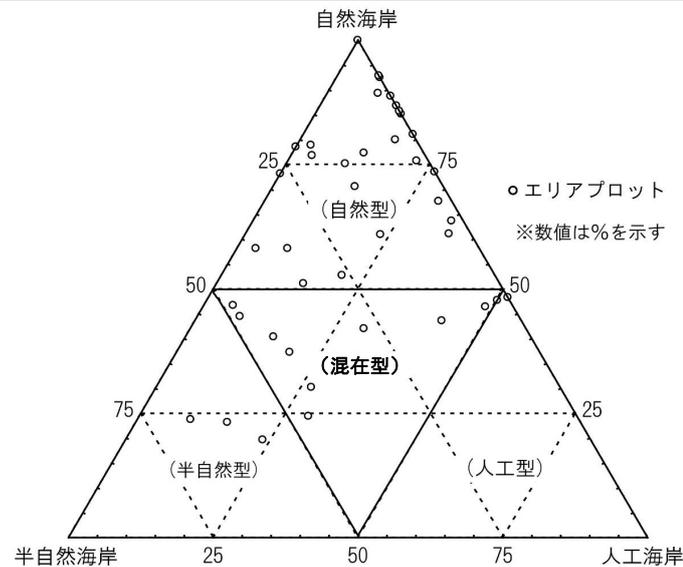


図5-2 自然状況の三角グラフ

図5-3は、図5-2の三角グラフの類型に基づき、各エリアの自然状況の分布を示したものである。そのほとんどが自然型であることがわかる。

自然型でないエリアは、エリア14「泉川」、エリア16「貴山川」、エリア17「加茂川」、エリア18「玉島川」、エリア19「松浦川」、エリア32「高島」などの、唐津湾を中心とした場所にみられた。

また、宗像市付近のエリア4「汐入川」、エリア5「釣川」や、福岡市付近のエリア28「志賀島」、エリア30「玄海島」、伊万里市付近のエリア42「福島」など、市街地に近い場所で局所的に自然型でないエリアがみられた。



図5-3 海辺の自然状況

### 5-2-2 特別地域の割合

自然公園法における特別地域の設定状況から、各エリアにおける指定率を以下に把握した。

表 5-2 は、各エリアにおける自然公園法に基づく国定公園の特別地域の指定割合を示したものである。

これによると第一種指定地域は、エリア 3「矢矧川」で 80.0%や、エリア 38「馬渡島」で 87.8%、エリア 39「向島」で 81.1%など、離島部で高い割合を示した。

第二種特別地域については、エリア 15「羅漢川」と、エリア 26「勝島」で 100.0%、エリア 27「相島」で 80.2%の値を示した。

第三種特別地域については、エリア 33「神集島」で 71.9%、エリア 34「小川島」で 100.0%の高い値を示した。

また、エリア 3「遠賀川」の、特別地域の割合が 0%になる、いわゆる普通地域のみエリアや、そのほか、エリア 10「十郎川」の 28.0%、エリア 22「有浦川」の 27.4%のようなエリアもみられた。

表5-2 玄海国定公園保護計画特別地域の延長とその指定率

エリア 番号	流域及び 離島名	海岸線 延長 (km)	延長(km)				指定率(%)			
			第1種 特別地 域	第2種 特別地 域	第3種 特別地 域	合計	第1種 特別地 域	第2種 特別地 域	第3種 特別地 域	合計
1	坂井川	4.9	0.0	3.3	0.0	3.3	0.0	68.0	0.0	68.0
2	遠賀川	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
3	矢矧川	2.5	2.0	0.0	0.0	2.0	80.0	0.0	0.0	80.0
4	汐入川	7.6	5.5	0.0	0.0	5.5	72.8	0.0	0.0	72.8
5	釣川	10.3	5.8	0.7	0.7	7.2	56.6	6.8	6.3	69.8
6	堅川	18.2	9.1	3.7	0.7	13.4	49.9	20.1	3.6	73.6
7	西郷川	2.7	2.1	0.0	0.0	2.1	75.9	0.0	0.0	75.9
8	花鶴川	7.7	5.0	0.0	1.2	6.2	65.4	0.0	15.0	80.4
9	多々良川	10.2	6.8	0.0	0.9	7.6	66.2	0.0	8.3	74.5
10	十郎川	2.5	0.7	0.0	0.0	0.7	28.0	0.0	0.0	28.0
11	瑞梅寺川	22.3	1.3	6.6	7.1	15.0	5.6	29.6	31.8	67.0
12	桜井川	8.0	0.0	2.9	4.0	6.8	0.0	35.6	49.4	85.0
13	沖田川	19.7	0.6	2.3	5.0	7.9	3.0	11.7	25.4	40.1
14	泉川	4.2	0.0	1.3	0.0	1.3	0.0	14.6	0.0	29.8
15	羅漢川	4.1	0.0	4.1	0.0	4.1	0.0	100.0	0.0	100.0
16	一貴山川	2.6	0.0	1.3	0.0	1.3	0.0	51.0	0.0	51.0
17	加茂川	13.1	4.2	4.9	1.7	10.7	31.8	37.5	12.6	82.0
18	玉島川	4.1	0.7	2.8	0.0	3.5	17.1	68.3	0.0	85.4
19	松浦川	10.9	2.5	2.0	1.8	6.3	22.5	18.3	16.5	57.3
20	佐志川	14.5	3.6	9.5	0.0	13.1	24.6	65.7	0.0	90.3
21	湯川	25.5	2.0	5.9	4.8	12.7	7.8	22.9	18.8	49.6
22	有浦川	19.0	0.0	1.4	3.9	5.2	0.0	7.1	20.3	27.4
23	座内川	49.3	3.5	6.5	22.5	32.5	7.1	13.1	45.6	65.8
24	大黒川	17.4	0.0	0.0	9.5	9.5	0.0	0.0	54.5	54.5
25	地島	8.0	0.0	2.5	4.1	6.6	0.0	30.8	51.6	82.4
26	勝島	2.4	0.0	2.4	0.0	2.4	0.0	100.0	0.0	100.0
27	相島	6.1	0.0	4.9	0.0	4.9	0.0	80.2	0.0	80.2
28	志賀島	11.0	0.0	5.1	2.7	7.8	0.0	46.6	24.2	70.8
29	能古島	8.2	0.0	3.6	2.6	6.2	0.0	43.3	31.7	75.0
30	玄海島	4.1	0.0	1.6	1.8	3.4	0.0	39.0	42.7	81.7
31	姫島	3.6	0.0	1.9	0.0	1.9	0.0	51.4	0.0	51.4
32	高島	2.9	0.0	0.3	1.6	1.8	0.0	8.6	53.4	62.1
33	神集島	6.4	1.2	0.0	4.6	5.8	18.8	0.0	71.9	90.6
34	小川島	4.3	0.0	0.0	3.8	3.8	0.0	0.0	89.4	89.4
35	加部島	8.8	0.7	1.9	3.4	6.0	8.0	21.0	38.6	67.6
36	加唐島	10.7	0.0	6.1	4.6	10.7	0.0	57.0	43.0	100.0
37	松島	3.5	0.0	0.0	3.5	3.5	0.0	0.0	100.0	100.0
38	馬渡島	10.3	9.0	0.0	0.0	9.0	87.8	0.0	0.0	87.8
39	向島	2.7	2.2	0.0	0.0	2.2	81.1	0.0	0.0	81.1
40	鷹島	19.9	2.5	0.7	7.3	10.4	12.6	3.3	36.5	52.4
41	黒島	4.6	0.0	1.5	0.0	1.5	0.0	31.9	0.0	31.9
42	福島	24.1	0.0	5.5	5.3	10.8	0.0	22.8	21.8	44.6

※第1種特別地域(特別保護地区に準ずる景観を有し、特別地域のうちでは風致を維持する必要性が最も高い地域であつて、現在の景観を極力保護することが必要な地域をいう。)

※第2種特別地域(第一種特別地域及び第三種特別地域以外の地域であつて、特に農林漁業活動についてはつとめて調整を図ることが必要な地域をいう。)

※第3種特別地域(特別地域のうちでは風致を維持する必要性が比較的低い地域であつて、特に通常の農林漁業活動については原則として風致の維持に影響を及ぼすおそれが少ない地域をいう。)

図5-4は、特別地域の区域図を示したものである。

風致維持の必要性が最も高い第一種特別地域は、エリア3「矢矧川」、エリア4「汐入川」、エリア5「釣川」、エリア6「堅川」、エリア7「西郷川」、エリア8「花鶴川」、エリア9「多々良川」であり、玄海国定公園の東側に多くみられた。離島部では、第一種特別地域はほとんどみられなかった。

第二種特別地域は、エリア14「泉川」、エリア15「羅漢川」、エリア16「一貴山川」、エリア17「加茂川」、エリア18「玉島川」、エリア20「佐志川」、エリア21「湯川」までの、唐津湾を中心とした場所にみられた。

第三種特別地域は、エリア11「瑞梅寺川」、エリア12「桜井川」、エリア13「沖田川」などの前原市近辺や、エリア21「湯川」、エリア22「有浦川」、エリア23「座内川」、エリア24「大黒川」、エリア40「鷹島」であり、玄海国定公園の西側で多くみられた。

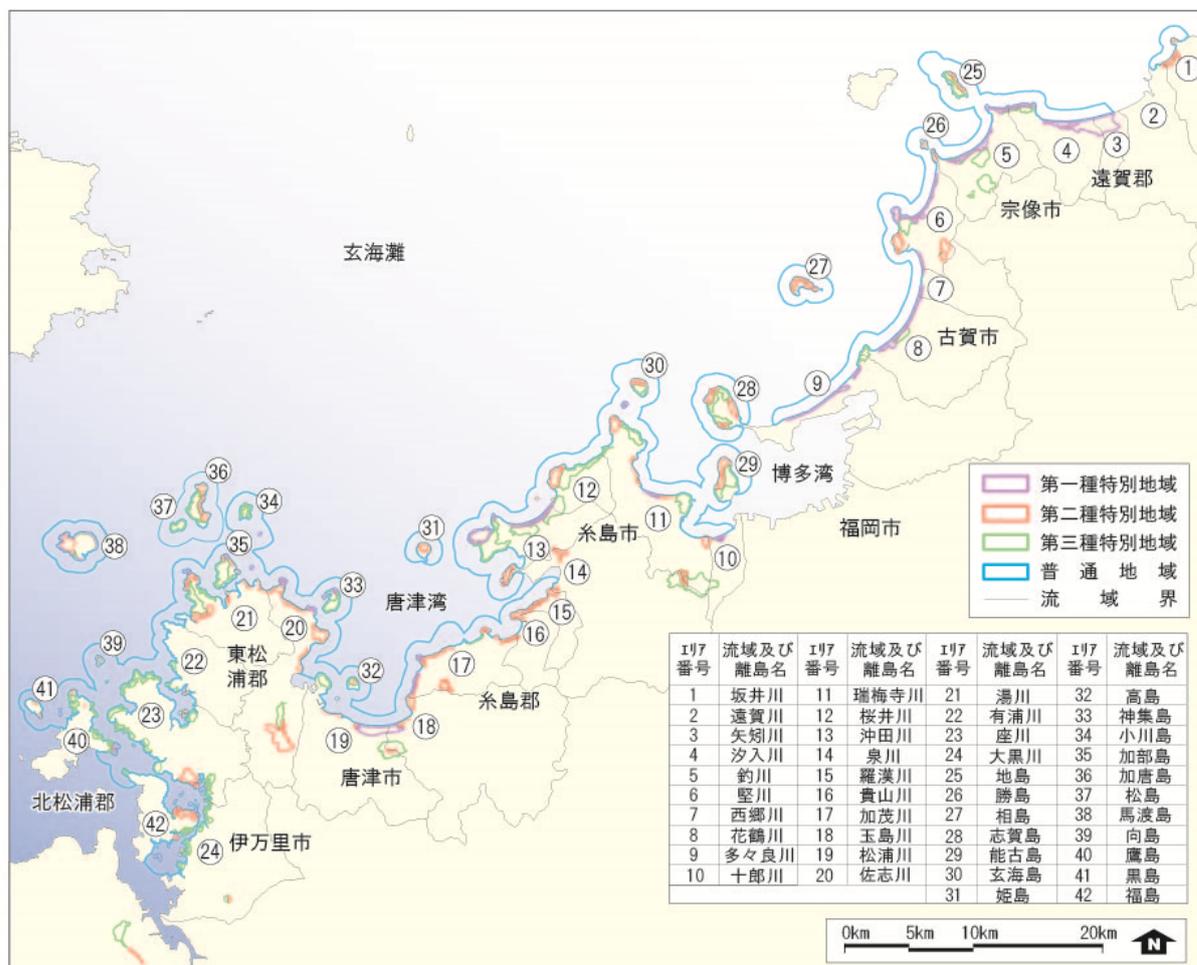


図5-4 玄海国定公園における特別地域の領域図

### 5-3 接近性からみた海辺の類型化

表5-3は、海辺の道路の延長距離をエリアごとに計測し、海岸長に対する道路長率を算出した結果である。また、道路長率を◎:100~76%、○:75~51%、△:50~26%、×:25~0%とし、小数点第1位の四捨五入から4類型した。この数から、エリア16「一貴山川」で100%の値を示した。次いで、エリア14「泉川」、エリア17「加茂川」でそれぞれ97.6%、84.7%の高い値を示した。また、◎が4箇所、○が12箇所、△が17箇所、×が9箇所となり、全体的に海辺へ接近しにくい場所がやや多いことがわかった。

表5-3 接近性からみた海辺の類型化

エリア番号	流域及び離島名	海岸線長(km)	道路長(km)	道路長率(%)	接近性※
1	坂井川	4.9	2.4	49.5	△
2	遠賀川	1.4	1.0	71.4	○
3	矢矧川	2.5	0.7	28.0	△
4	汐入川	7.6	5.5	72.2	○
5	釣川	10.3	6.0	58.0	○
6	堅川	18.2	12.3	67.8	○
7	西郷川	2.7	1.8	66.7	○
8	花鶴川	7.7	3.5	45.1	△
9	多々良川	10.2	1.3	12.7	×
10	十郎川	2.5	1.6	64.0	○
11	瑞梅寺川	22.3	12.0	53.6	○
12	桜井川	8.0	3.9	48.1	△
13	沖田川	19.7	12.2	61.7	○
14	泉川	4.2	4.1	97.6	◎
15	羅漢川	4.1	1.2	29.3	△
16	一貴山川	2.6	2.6	100.0	◎
17	加茂川	13.1	11.1	84.7	◎
18	玉島川	4.1	2.7	65.9	○
19	松浦川	10.9	7.9	72.0	○
20	佐志川	14.5	6.9	47.8	△
21	湯川	25.5	7.6	29.8	△
22	有浦川	19.0	6.0	31.6	△
23	座内川	49.3	20.5	41.6	△
24	大黒川	17.4	7.0	40.3	△
25	地島	8.0	2.7	33.3	△
26	勝島	2.4	0.0	0.0	×
27	相島	6.1	3.6	58.7	○
28	志賀島	11.0	8.6	78.1	◎
29	能古島	8.2	3.3	40.2	△
30	玄海島	4.1	2.7	64.6	○
31	姫島	3.6	1.8	48.6	△
32	高島	2.9	0.8	25.9	△
33	神集島	6.4	1.1	17.2	×
34	小川島	4.3	1.4	31.8	△
35	加部島	8.8	2.4	27.3	△
36	加唐島	10.7	1.4	13.1	×
37	松島	3.5	0.4	10.0	×
38	馬渡島	10.3	1.6	16.0	×
39	向島	2.7	0.0	0.0	×
40	鷹島	19.9	2.7	13.4	×
41	黒島	4.6	0.8	17.6	×
42	福島	24.1	8.2	34.0	△

※◎:100~76% ○:75~51% △:50~26%  
×:25~0

図5-5は、表5-3の4類型による、海辺への接近性の分布状況を示したものである。

道路長率が50%以下となる場所は、エリア20「佐志川」、エリア21「湯川」、エリア22「有浦川」、エリア23「座内川」、エリア24「大黒川」と、その周辺離島部エリア33「神集島」、エリア34「小川島」、エリア35「加部島」、エリア36「加唐島」、エリア37「松島」、エリア38「馬渡島」、エリア39「向島」、エリア40「鷹島」、エリア41「黒島」、エリア42「福島」であり、西部の東松浦郡から伊万里市を中心としたエリアにみられた。

一方、道路長率が50%を超えた場所は、エリア4「汐入川」、エリア7「西郷川」の宗像市を中心としたエリアや、エリア28「志賀島」、エリア11「瑞梅寺川」、さらにエリア13「沖田川」、エリア14「泉川」、エリア16「一貴山川」、エリア17「加茂川」、エリア18「玉島川」、エリア19「松浦川」の唐津湾を中心としたエリアとなった。このようなエリアは、海辺へ接近しやすく、景観を特に活用しやすい場所である一方で、自然公園であるため、自然の保全に留意すべきエリアであることが窺える。

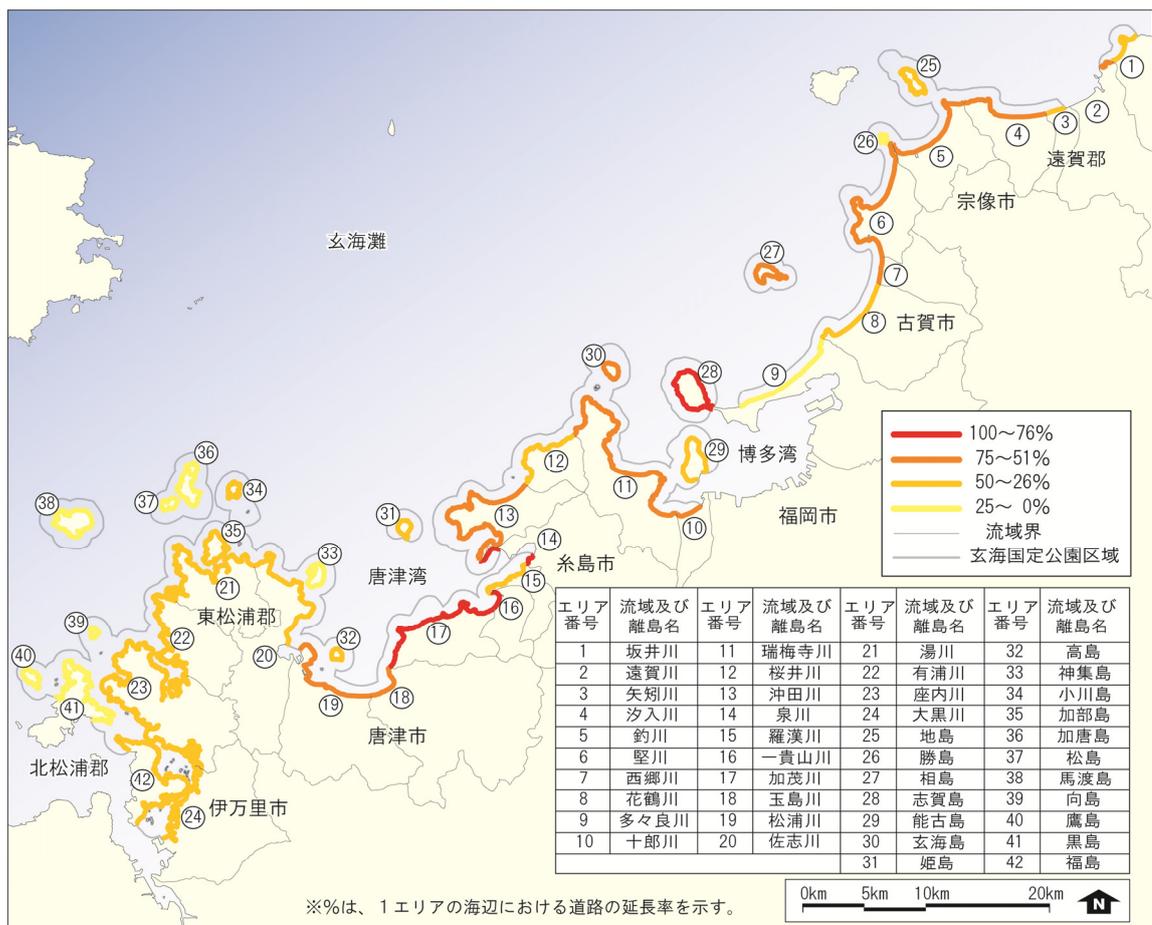


図5-5 海辺への接近性

## 5-4 自然公園における海辺景観要素の抽出・類型化

本節では、自然公園における印象的な海辺景観要素を把握するため、4章で抽出した自然物の多い海辺の景観要素を基に、玄海国定公園における海辺の景観要素を抽出・整理した。

### 5-4-1 自然が多くみられる海辺の景観要素

現在、制度上自然が多く残る「自然公園区域」の海辺において、第4章で示した詩歌作品から抽出した海辺の印象的な自然景観要素の中で、国土地理院5万分の1地形図及び環境庁作成の現存植生図から判読可能な要素として、図4-3の骨格要素である「寄せる波」、「潮の満ち干」、「干潟」、「砂」、「岩」、さらに図4-4の個別要素である「樹木類」、「草花類」を、本研究における海辺の印象的な自然景観要素として取り上げることとした。

また前述の詩歌作品以外に、現在における海辺の景観資源として、環境庁が昭和58～62年度に実施した第3回自然環境保全基礎調査の際に設定した自然景観資源<sup>113)</sup>の中で、玄海国定公園の区域内に存在するものを表5-4に示す。

報告書に記載されていた国定公園内の自然景観資源の中で、重複した資源を省くと、101箇所となった。形状は、砂浜、礫浜など、一般に「砂浜」と呼ばれるタイプの場所が71箇所と最も多く、次いで海食崖など、切り立った「崖」タイプが27箇所と多くみられた。また、佐賀県東松浦郡肥前町の「イロハ島」などのように、多島海の様子を指定した特殊な場所もみられた。

表5-4 自然景観資源一覽

住所	自然景観資源名	類型	形状タイプ	位置	最低標高(m)	最高標高(m)	延長(km)	巾(m)						
福岡県	北九州	若松区	千疊敷	海岸景観	波食台	0.0	2.0	—	—					
			夏井ヶ浜	海岸景観	磯浜(小地形)	栢原の港の北側	0.0	0.0	1.4	—				
	遠賀郡	芦屋町	芦屋海岸・新松原海岸・波津海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	波津から芦屋町まで	0.0	5.0	8.5	100				
			三里松原	海岸景観	砂丘(小地形)	航空自衛隊付近	5.0	52.0	8.2	40				
宗像市	岡垣町	(深浜)	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	鐘ノ岬から波津城まで	0.0	10.0	3.8	50					
		さつき松原	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	鐘ノ岬から釣川河口	0.0	5.0	3.9	50					
		勝島の海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	勝島	0.0	10.0	1.2	50					
		鐘島の砂州	海岸景観	陸けい砂州(小地形)	鐘ノ岬付近から黒崎鼻まで	0.0	10.0	1.6	—					
		地の島の海食崖1	海岸景観	海食崖(微地形)	地ノ島	0.0	60.0	4.8	60					
		地の島の海食崖2	海岸景観	海食崖(微地形)	地ノ島	0.0	40.0	1.5	40					
		草崎の海食崖	海岸景観	海食崖(微地形)	草崎	0.0	40.0	1.5	40					
宗像郡	津屋崎町	勝島の海食崖	海岸景観	海食崖(微地形)	勝島	0.0	30.0	1.1	30					
		恋の浦海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	津屋崎町の京泊辺り	0.0	5.0	3.9	30					
		櫛崎海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	櫛崎から曾根鼻まで	0.0	5.0	2.2	50					
		勝浦浜	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	勝浦浜から塩浜まで	0.0	10.0	5.7	100					
		津屋崎の砂州	海岸景観	陸けい砂州(小地形)	草崎付近から池尻まで	0.0	10.0	5.0	—					
		新宮砂丘	海岸景観	砂丘(小地形)	下府付近から津屋崎付近まで	2.0	9.6	12.2	19.6					
		舞能ノ浜と下馬ノ浜	海岸景観	砂浜	勝馬集落付近	0.0	0.0	1.5	50~					
糟屋郡	新宮町	新宮浜	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	鹿児島本線古賀駅の西方	0.0	5.0	3.5	100					
		相ノ島浜	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	相島	0.0	10.0	2.4	50					
		相ノ島の海食崖	海岸景観	海食崖(微地形)	相ノ島	0.0	50.0	2.5	50					
		三苫の海食崖	海岸景観	海食崖(微地形)	三苫海岸	0.0	20.0	1.9	20					
福岡市	東区	海の中道	海岸景観	砂浜	西戸崎ゴルフ場から三苫まで	0.0	10.0	10.3	100					
		奈多砂丘	海岸景観	砂丘	香椎緑海の中道付近	3.0	34.0	8.0	30					
	西区	土手崎海岸	海岸景観	磯浜	能古島	0.0	0.0	1.1	20					
		白島崎海岸	海岸景観	磯浜	能古島	0.0	0.0	1.8	40~					
		也良崎海岸	海岸景観	海食崖	能古島	0.0	60.0	3.2	60					
		能古南岸の砂嘴	海岸景観	砂嘴	能古島	0.0	0.0	0.1	—					
		生の松原	海岸景観	砂浜	十郎川河口、生の松原	0.0	4.0	1.4	50					
		毘沙門山北海岸	海岸景観	磯浜	毘沙門山周辺	0.0	0.0	2.2	20					
		長浜海岸	海岸景観	砂浜	呑山集落付近	0.0	2.0	3.7	50					
		玄海島北海岸	海岸景観	砂浜	玄海島	0.0	0.0	1.1	10					
		玄海島東海岸	海岸景観	磯浜	玄海島	0.0	0.0	1.3	10					
		玄海島西海岸	海岸景観	磯浜	玄海島	0.0	0.0	1.2	10					
		黒瀬	海岸景観	岩磯	玄海島の北500m	0.0	3.0	1.5	—					
		柱島の形状節理	特殊地学景観	節理	玄海島の北西700m	0.0	66.0	—	—					
糸島郡	志摩町	桜井海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	志摩シーサイドゴルフ場	0.0	4.0	1.0	80					
		桜井北海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	桜井川の松井集落付近	0.0	0.0	1.0	20					
		磐の松原海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	新川川の西小金丸集落付近	0.0	3.6	3.4	100					
		立石崎海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	立石崎付近	0.0	0.0	1.4	15					
		御床松原海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	沖田川河口付近	0.0	0.0	1.8	100					
		黒岩海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	芥屋大門付近	0.0	3.0	1.5	50					
		蟹の宮海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	蟹の宮	0.0	0.0	1.2	20					
		野辺海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	野辺集落付近	0.0	0.0	2.1	10					
		配崎海岸	海岸景観	磯浜	福井川大入集落付近	0.0	0.0	1.1	25					
		福井浜	海岸景観	砂浜	福井川河口付近	0.0	0.0	1.6	80					
		福の浦海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	福浦川の福の浦集落付近	0.0	0.0	1.6	20					
		立石崎海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	立石崎付近	0.0	0.0	1.4	15					
		立石崎の砂嘴	海岸景観	砂嘴(小地形)	立石崎	0.0	0.0	4.5	410					
		姫島西海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	姫島	0.0	0.0	1.9	20					
		姫島南端の砂嘴	海岸景観	砂嘴(小地形)	姫島港付近	0.0	0.0	0.1	100					
		久家集落の陸けい砂	海岸景観	陸けい砂州(小地形)	久家集落	0.0	0.0	0.4	—					
		芥屋の砂丘	海岸景観	砂丘(小地形)	西小金丸集落付近	0.0	100.0	2.5	15					
		三瀬の海食崖	海岸景観	海食崖(微地形)	彦山の西海岸	0.0	20.0	2.7	—					
		仏崎の海食崖	海岸景観	海食崖(微地形)	仏崎付近	0.0	60.0	2.5	—					
		桜井二見ヶ浦	海岸景観	岩磯(微地形)	桜井の海岸	0.0	11.0	—	—					
		ノウ瀬	海岸景観	岩磯(微地形)	福の浦沖合約1km	0.0	—	—	—					
		芥屋の大門	海岸景観	海食洞(極微地形)	大字芥屋大門	0.0	8.0	2~10	—					
		芥屋の大門の柱状節理	特殊地学景観	節理	芥屋の大門付近	-10.0	65.0	—	—					
		二丈町	松末海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	ノウ瀬付近	0.0	0.0	—	—				
			大崎海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	大崎付近	0.0	0.0	2.4	15				
			深江海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	加茂川河口佐波集落付近	0.0	3.0	2.9	15				
			配崎海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	福井川大入集落付近	0.0	0.0	—	—				
			福井浜	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	福井川河口付近	0.0	0.0	—	—				
			羽島海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	吉井浜沖80m	0.0	0.0	1.0	5				
			吉井海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	福吉川河口吉井浜集落付近	0.0	0.0	3.6	15				
			串崎海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	鹿家集落付近	0.0	0.0	1.2	15				
			包石海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	包石付近	0.0	0.0	3.7	—				
			包石海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	包石付近	0.0	0.0	1.1	—				
			虹ノ松原	海岸景観	砂丘(小地形)	国道202号東唐津~浜崎間	0.0	7.0	4.3	—				
			佐賀県	東松浦郡	浜玉町	唐津市	神集島東岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	神集島荒崎から黒瀬まで	—	—	4.2	50
							高島海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	高島北岸	—	—	1.6	10
		西ノ浜					海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	舞鶴城の西	—	—	1.5	50	
大島海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)					大島北岸	—	—	2.0	30			
横野海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)					眼鏡岩から大友まで	—	—	1.0	50			
相賀崎	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)					東岸	—	—	1.6	10			
屋形石海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)					立神から七ツ釜まで	—	—	3.0	20			
神集島・宮崎浜	海岸景観	陸けい砂州(小地形)					神集島~宮崎	—	—	0.5	—			
相賀の浜	海岸景観	陸けい砂州(小地形)					相賀	—	—	1.0	—			
幸多里ヶ浜	海岸景観	陸けい砂州(小地形)					旭川~黒崎	—	—	0.4	—			
土器(かわらけ)崎	海岸景観	海食崖(微地形)					七ツ釜~眼鏡岩	0.0	35.0	1.0	—			
屋形石の七ツ釜	海岸景観	海食洞(極微地形)					土器崎付近	0.0	35.0	—	—			
眼鏡岩	海岸景観	岩門					土器崎付近	0.0	7.0	—	—			
立神岩	特殊地学景観	岩脈(極微地形)					湊町浜の北	0.0	30.0	0.1	—			
東松浦郡	呼子町	加部島海岸					海岸景観	海食崖(微地形)	加部島北岸	0.0	35.0	2.5	—	
		小川島海岸					海岸景観	波食台(微地形)	小川島北岸	—	—	—	—	
		名護屋浦					海岸景観	瀬れ谷(中地形)	名護屋大橋付近	—	—	7.0	—	
		波戸岬・池崎海岸	海岸景観	瀬れ谷(中地形)	外津浦	—	—	—	—					
		先節海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	畑ヶ中から北へ	—	—	1.1	10					
		波戸岬	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	波戸岬周囲	—	—	1.6	10					
		米納戸海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	米納戸西岸	—	—	1.0	10					
		串崎海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	外津浦	—	—	1.6	10					
		加唐島海岸	海岸景観	海食崖(微地形)	加唐島のほぼ全周囲	0.0	55.0	9.0	—					
		松島海岸	海岸景観	海食崖(微地形)	松島全周囲	0.0	50.0	3.5	—					
肥前町	馬渡島海岸	馬渡島海岸	海岸景観	海食崖(微地形)	馬渡島のほぼ全周囲	0.0	180.0	8.0	—					
		天狗岳北海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	仮屋湾入口付近	—	—	2.4	10					
		京泊海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	京泊の南	—	—	1.1	20					
		駄竹海岸	海岸景観	砂浜・磯浜(小地形)	駄竹の北	—	—	1.8	20					
		満越海岸	海岸景観	瀬れ谷(中地形)	島山島付近	—	—	10.0	—					
		イロハ島	海岸景観	多島海(中地形)	島山島付近	—	—	—	—					
		伊万里市	煤屋海岸	海岸景観	瀬れ谷(中地形)	黒川町	—	—	7.1	—				

## 5-4-2 印象的な自然景観からみた海辺の類型化

各エリアの海辺に存在する印象的な自然景観要素を、表5-5に示した。

前述の詩歌での出現率から、「浜」、「砂れき地」、「岩」、「干潟」、「樹木類」、「草花類」、さらに環境庁指定の「自然景観資源」の7要素を表5-5に示す如く取り上げた。「浜」とは、海岸線が崖や護岸で切り立っておらず、人が海水に触れることのできる場所を示しており、これは、先の詩歌で挙げた、「寄せる波」と「潮の満ち干」を認知できる場所とした。また、「砂れき地」は、詩歌における「砂」を示すものとし、海岸線に対する延長をキルビメーターによって測定した。

表5-5では、「浜」がエリア3「矢矧川」で100%となった。また、「砂れき地」はエリア7「西郷川」で87.0%、「岩」はエリア2「遠賀川」で100%、「干潟」はエリア3「矢矧川」で92.0%、「樹木類」はエリア37「松島」で100%、「草花類」は、エリア30「玄海島」で、それぞれ高い値を示した。

表5-5 各エリアの自然景観資源長及び延長率

エリア 番号	流域 及び 離島名	海岸長 (km)	自然景観要素(km)						自然景観要素(%)					
			浜	砂れき 地	岩	干潟	樹木類	草花類	浜	砂れき 地	岩	干潟	樹木類	草花類
1	坂井川	4.9	3.1	1.6	2.0	0.0	2.8	0.2	63.9	33.0	40.2	0.0	56.7	4.1
2	遠賀川	1.4	0.4	0.0	1.4	0.0	1.3	0.0	25.0	0.0	100.0	0.0	92.9	0.0
3	矢矧川	2.5	2.5	2.1	0.0	2.3	1.5	0.0	100.0	82.0	0.0	92.0	60.0	0.0
4	汐入川	7.6	6.3	3.9	0.0	4.3	3.1	2.5	83.4	51.0	0.0	57.0	40.4	32.5
5	釣川	10.3	6.8	4.6	1.6	1.3	7.6	0.7	66.3	44.9	15.6	12.2	73.7	6.3
6	堅川	18.2	12.6	7.9	1.6	1.9	7.7	5.2	69.1	43.3	8.8	10.5	42.1	28.7
7	西郷川	2.7	2.5	2.4	0.0	0.0	1.8	0.0	92.6	87.0	0.0	0.0	66.7	0.0
8	花鶴川	7.7	7.4	6.1	1.0	4.6	5.8	1.4	96.7	79.1	13.1	60.1	75.8	18.3
9	多々良川	10.2	9.9	7.5	1.2	7.7	9.4	0.6	97.1	73.0	11.8	75.0	91.7	5.4
10	十郎川	2.5	1.8	1.3	0.1	0.0	2.3	0.0	70.0	50.0	4.0	0.0	90.0	0.0
11	瑞梅寺川	22.3	19.0	11.4	4.1	7.0	8.2	6.2	85.0	50.9	18.4	31.4	36.5	27.8
12	桜井川	8.0	3.5	2.5	1.2	2.6	5.9	4.0	43.1	31.3	14.4	31.9	73.8	50.0
13	沖田川	19.7	17.5	8.7	5.7	7.9	9.2	12.1	88.8	44.2	28.9	40.1	46.7	61.2
14	泉川	4.2	2.2	0.0	1.6	0.0	0.6	0.0	51.2	0.0	38.1	0.0	13.1	0.0
15	羅漢川	4.1	3.5	0.5	2.9	0.0	3.2	3.0	85.4	12.2	70.7	0.0	78.0	73.2
16	貴山川	2.6	2.1	1.5	0.5	1.5	1.0	1.6	80.4	56.9	17.6	56.9	39.2	62.7
17	加茂川	13.1	11.6	4.1	3.3	4.8	6.4	8.4	88.5	31.4	25.3	36.4	49.0	64.0
18	玉島川	4.1	3.5	2.3	0.4	2.7	1.3	2.2	84.1	54.9	8.5	65.9	31.7	53.7
19	松浦川	10.9	6.2	4.5	2.2	3.6	4.9	4.7	56.9	40.8	19.7	33.0	45.0	43.1
20	佐志川	14.5	10.8	2.0	7.2	3.9	10.7	2.9	74.7	13.8	49.5	27.0	74.0	19.7
21	湯川	25.5	15.3	2.5	7.2	2.3	14.3	1.5	59.8	9.8	28.0	8.8	56.1	5.9
22	有浦川	19.0	13.6	1.3	9.3	0.0	6.7	0.0	71.6	6.6	48.7	0.0	35.3	0.0
23	座川	49.3	28.9	3.5	20.7	3.7	30.2	2.2	58.5	7.0	42.0	7.4	61.3	4.4
24	大黒川	17.4	11.4	2.7	5.7	3.8	10.6	0.0	65.7	15.3	32.9	21.9	61.1	0.0
25	地島	8.0	3.2	1.2	1.9	0.0	1.6	5.3	40.3	15.1	23.9	0.0	19.5	66.0
26	勝島	2.4	1.1	0.9	0.0	0.8	0.0	1.6	45.8	35.4	0.0	31.3	0.0	66.7
27	相島	6.1	2.1	2.0	0.0	0.0	1.2	2.8	34.7	32.2	0.0	0.0	19.8	45.5
28	志賀島	11.0	8.0	3.4	3.0	2.8	2.7	3.4	73.1	31.1	26.9	25.6	24.2	31.1
29	能古島	8.2	5.5	2.8	0.0	4.8	1.3	5.5	67.1	33.5	0.0	58.5	15.9	66.5
30	玄海島	4.1	2.9	0.7	1.3	0.0	1.9	3.1	70.7	15.9	31.7	0.0	45.1	75.6
31	姫島	3.6	2.5	2.0	0.5	0.0	2.0	2.4	69.4	55.6	13.9	0.0	54.2	66.7
32	高島	2.9	1.4	2.0	0.0	0.0	1.4	0.4	48.3	67.2	0.0	0.0	48.3	13.8
33	神集島	6.4	4.3	0.6	2.8	3.0	4.3	0.5	67.2	8.6	43.0	46.1	67.2	7.0
34	小川島	4.3	2.6	0.9	1.9	0.0	2.9	0.9	61.2	20.0	44.7	0.0	67.1	21.2
35	加部島	8.8	4.4	0.8	2.6	0.0	5.0	1.8	49.4	9.1	29.0	0.0	56.3	20.5
36	加唐島	10.7	1.3	0.0	1.6	0.0	9.5	3.7	12.1	0.0	14.5	0.0	88.8	34.6
37	松島	3.5	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
38	馬渡島	10.3	0.7	0.0	0.7	0.0	5.2	2.7	6.3	0.0	6.3	0.0	50.7	26.3
39	向島	2.7	1.3	0.5	0.7	0.0	2.1	0.0	47.2	17.0	24.5	0.0	79.2	0.0
40	鷹島	19.9	14.4	1.6	12.0	0.4	18.0	0.0	72.3	8.1	60.5	1.8	90.4	0.0
41	黒島	4.6	2.3	0.0	2.6	0.0	4.2	0.2	50.5	0.0	56.0	0.0	92.3	3.3
42	福島	24.1	7.8	0.6	5.2	0.5	15.5	0.7	32.2	2.3	21.6	2.1	64.3	2.9

さらに、表5-6に示す如く、これらの7要素は、海岸長に対する延長率及び自然景観資源の延長率を、◎:100~76%、○:75~51%、△:50~26%、×:25~0%に4類型すると共に、◎:3点、○:2点、△:1点、×:0点として、得点化し、エリア別の得点合計値で並び替えた。また、これらの合計得点を基に、A:13~14点、B:11~12点、C:9~10点、D:7~8点、E:5~6点、F:3~4点で類型化した。

この表から、エリア3「矢矧川」やエリア9「多々良川」では、○以上が多く、得点も高いことから、多様な自然景観資源がある場所であることが窺える。

表5-6 印象的な自然景観からみた海辺の類型化

177 番号	流域及び 離島名	海辺1km当りの延長※							得点	類型
		自然景観資源								
		浜	砂れき地	岩	干潟	樹木類	草花類	自然景観資源		
3	矢矧川	◎	◎	×	◎	○	×	◎	14	A
8	花鶴川	◎	◎	×	○	◎	×	◎	14	
9	多々良川	◎	○	×	○	◎	×	◎	13	
16	一貴山川	◎	○	×	○	△	○	◎	13	
18	玉島川	◎	○	×	○	△	○	◎	13	
4	汐入川	◎	○	×	○	△	△	◎	12	B
15	羅漢川	◎	×	○	×	○	○	◎	12	
7	西郷川	◎	◎	×	×	○	×	◎	11	
17	加茂川	◎	△	×	△	△	○	◎	11	
31	姫島	○	○	×	×	○	○	◎	11	
11	瑞梅寺川	◎	○	×	△	△	△	○	10	C
13	沖田川	◎	△	△	△	△	○	△	10	
30	玄海島	○	×	△	×	△	◎	◎	10	
2	遠賀川	×	×	◎	×	◎	×	◎	9	
12	桜井川	△	△	×	△	○	○	○	9	
29	能古島	△	△	×	○	×	○	◎	9	
6	堅川	○	△	×	×	△	△	◎	8	D
10	十郎川	○	△	×	×	◎	×	○	8	
19	松浦川	○	△	×	△	△	△	○	8	
20	佐志川	○	×	△	△	○	×	○	8	
26	勝島	△	△	×	△	×	○	◎	8	
33	神集島	○	×	△	△	○	×	○	8	
5	釣川	○	△	×	×	○	×	○	7	
34	小川島	○	×	△	×	○	×	○	7	
36	加唐島	×	×	×	×	◎	△	◎	7	
38	馬渡島	×	×	×	×	◎	△	◎	7	
40	鷹島	○	×	○	×	◎	×	×	7	
41	黒島	○	×	○	×	◎	×	×	7	
1	坂井川	○	△	△	×	○	×	×	6	E
23	座内川	○	×	△	×	○	×	△	6	
25	地島	△	×	×	×	×	○	◎	6	
27	相島	△	△	×	×	×	△	◎	6	
28	志賀島	○	△	△	△	×	△	×	6	
37	松島	×	×	×	×	◎	×	◎	6	
21	湯川	○	×	△	×	○	×	×	5	
24	大黒川	○	×	△	×	○	×	×	5	
32	高島	△	○	×	×	×	×	○	5	
35	加部島	△	×	△	×	○	×	△	5	
22	有浦川	○	×	△	×	△	×	×	4	F
39	向島	△	×	×	×	◎	×	×	4	
14	泉川	○	×	△	×	×	×	×	3	
42	福島	△	×	×	×	○	×	×	3	

※◎:75.0%以上、3点 ○:74.9~50.0%、2点 △:49.9~25.0%、1点 ×:24.9~0.0%  
A:14~13点 B:12~11点 C:10~9点 D:8~7点 E:6~5点 F:4~3点

また、得られた景観資源を、タイプ別に図5-6に整理した。エリア8、エリア9、エリア16、エリア18などがAタイプとなり、多くの自然景観資源を楽しむことのできるエリアであることが窺える。

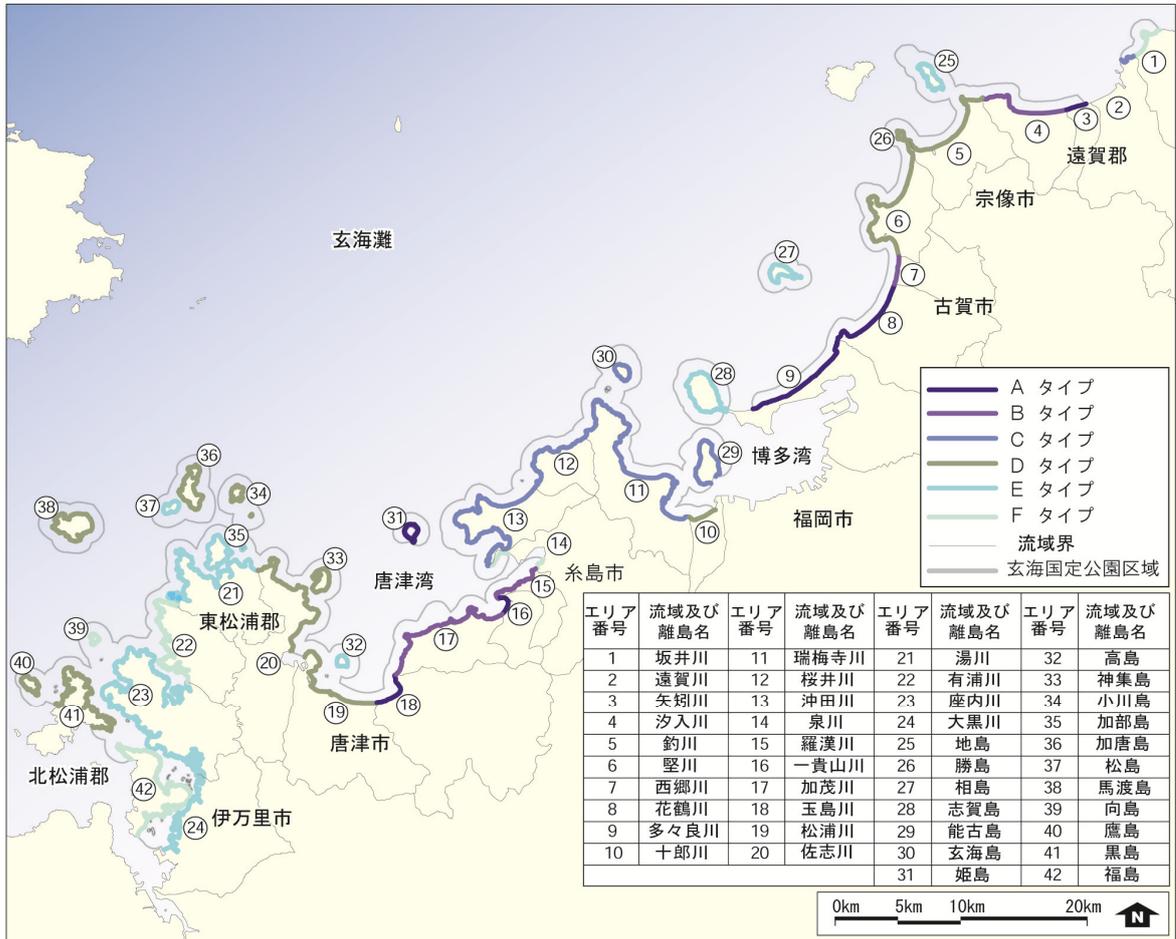


図5-6 印象的な自然景観からみた海辺の類型化

## 5-5 自然公園における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件

表 5-7 は、自然公園計画に従った海辺への接近性と、海辺景観を構成する資源を把握・類型化するため、これまで設定した自然状況と道路長、海辺の印象的な自然景観の特性として把握した自然景観タイプ、さらに特別地域の指定割合を示したものである。

なお、海辺景観を享受するには、まず海辺に接近することが重要であることから、海辺への接近性について、接近性の高いエリアを上位に並び替えした。

表 5-7 から、「海辺への接近性」が◎のエリアでは、「自然状況」の半自然型、混在型が集中してみられた。このことから、これらのエリアでは、印象的な自然景観が多様にみられる自然景観タイプ A の景観の活用と共に、自然の保全に留意すべきエリアであると考えられる。

「海辺への接近性」が○のエリアでは、12 エリア中 5 エリアで「自然型」がみられた。これらのエリアでは、それぞれの自然景観タイプの景観を活用と共に、自然の保全に留意すべきエリアであると考えられる。

「海辺への接近性」が△・×のエリアでは、そのほとんどが「自然型」の海辺であったことから自然景観タイプ A を活用できる場所は少ないことが窺える。

表5-7 自然公園における海辺景観の活用可能性に資する要素の類型化

エリア 番号	流域及び 離島名	海辺への 接近性	海辺の 自然状況	自然景観 資源資源	保護計画特別地域(%)※		
					第1種特 別地域	第2種特 別地域	第3種特 別地域
17	加茂川	◎	半自然型	B	31.8	37.5	12.6
28	志賀島	◎	半自然型	E	0.0	46.6	24.2
16	一貴山川	◎	混在型	A	0.0	51.0	0.0
14	泉川	◎	混在型	F	0.0	14.6	0.0
2	遠賀川	○	自然型	C	0.0	0.0	0.0
11	瑞梅寺川	○	自然型	C	5.6	29.6	31.8
13	沖田川	○	自然型	C	3.0	11.7	25.4
6	堅川	○	自然型	D	49.9	20.1	3.6
27	相島	○	自然型	E	0.0	80.2	0.0
18	玉島川	○	半自然型	A	17.1	68.3	0.0
4	汐入川	○	混在型	B	72.8	0.0	0.0
7	西郷川	○	混在型	B	75.9	0.0	0.0
30	玄海島	○	混在型	C	0.0	39.0	42.7
5	釣川	○	混在型	D	56.6	6.8	6.3
10	十郎川	○	混在型	D	28.0	0.0	0.0
19	松浦川	○	混在型	D	22.5	18.3	16.5
3	矢矧川	△	自然型	A	80.0	0.0	0.0
8	花鶴川	△	自然型	A	65.4	0.0	15.0
15	羅漢川	△	自然型	B	0.0	100.0	0.0
31	姫島	△	自然型	B	0.0	51.4	0.0
12	桜井川	△	自然型	C	0.0	35.6	49.4
29	能古島	△	自然型	C	0.0	43.3	31.7
20	佐志川	△	自然型	D	24.6	65.7	0.0
34	小川島	△	自然型	D	0.0	0.0	89.4
24	大黒川	△	自然型	E	0.0	0.0	54.5
35	加部島	△	自然型	E	8.0	21.0	38.6
21	湯川	△	自然型	E	7.8	22.9	18.8
23	座内川	△	自然型	E	7.1	13.1	45.6
1	坂井川	△	自然型	E	0.0	68.0	0.0
25	地島	△	自然型	E	0.0	30.8	51.6
22	有浦川	△	自然型	F	0.0	7.1	20.3
32	高島	△	人工型	E	0.0	8.6	53.4
42	福島	△	人工型	F	0.0	22.8	21.8
9	多々良川	×	自然型	A	66.2	0.0	8.3
40	鷹島	×	自然型	D	12.6	3.3	36.5
33	神集島	×	自然型	D	18.8	0.0	71.9
26	勝島	×	自然型	D	0.0	100.0	0.0
36	加唐島	×	自然型	D	0.0	57.0	43.0
38	馬渡島	×	自然型	D	87.8	0.0	0.0
41	黒島	×	自然型	D	0.0	31.9	0.0
37	松島	×	自然型	E	0.0	0.0	100.0
39	向島	×	自然型	F	81.1	0.0	0.0

## 5-6 考察結果

本章では、約 420km の玄海国定公園の海辺において、人が容易に立ち入れることができる海辺を把握するため、二次流域単位（海岸線平均約 10km）ごとに、海辺（陸側 100m）の道路長率を分析し、海辺への接近性からみた顕在化に資する要素として把握・類型化した。また自然公園では「自然景観」の保全を目的としていることから、第 4 章で得られた海辺の自然景観要素に着目し、現公園におけるこれらの存在率から、海辺景観の保全を重点的に検討すべき潜在量として把握・類型化した。

以上のことから、第 3 章の広域スケールでは、その特徴を把握することができなかったエリア 1・エリア 2・エリア 32・エリア 33 内（1 次流域内）について、自然公園区域（地域スケール）の視点から、海辺景観資源を潜在量として把握し、海辺への接近性から顕在化する（保全・活用する）ための計画条件を示すことができたと考える。その結果、例えば、現公園内において、限られた予算の中で、海辺の自然景観の保全と活用を検討する場合の優先性を判断するための指標として示すことができたと考える。

## 第6章 港湾における接近性からみた

### 海辺景観資源の顕在化の計画条件

## 第6章 港湾における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件

本章では、1章で示した主要な研究の目的④「港湾における海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにすること」に対応するため、人工物が多くみられる港湾計画範囲を対象に、様々な規制がみられる範囲の中から、不特定多数の人が滞留可能なエリアを明らかにするとともに、詩歌作品から得られた印象深い港の景観要素に該当する対象物の存在を明らかにすることで、接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにした。

### 6-1 調査単位の設定

調査単位は、第2章で示した如く、景観の基礎範囲となる「三次流域」を基礎単位とし、その分けを図6-1に示した。分けに当たっては、博多港港湾計画範囲の陸域を対象に、河川河口部と福岡市公共下水道計画図<sup>114)</sup>から集水域を判読し、調査単位として15エリアを設定した。東区和白沖の人工島（アイランドシティ）は現在埋立整備中のため、下水道計画が未定である範囲をすべてエリア①に設定した。海の中道海浜公園に接した西戸崎地区は、港湾計画における土地利用が設定されていないため対象外とした。なお、各エリアの土地面積（表6-1）や各延長は、港湾計画図をベクトルデータに変換し、AutoCADを用いて測定した。

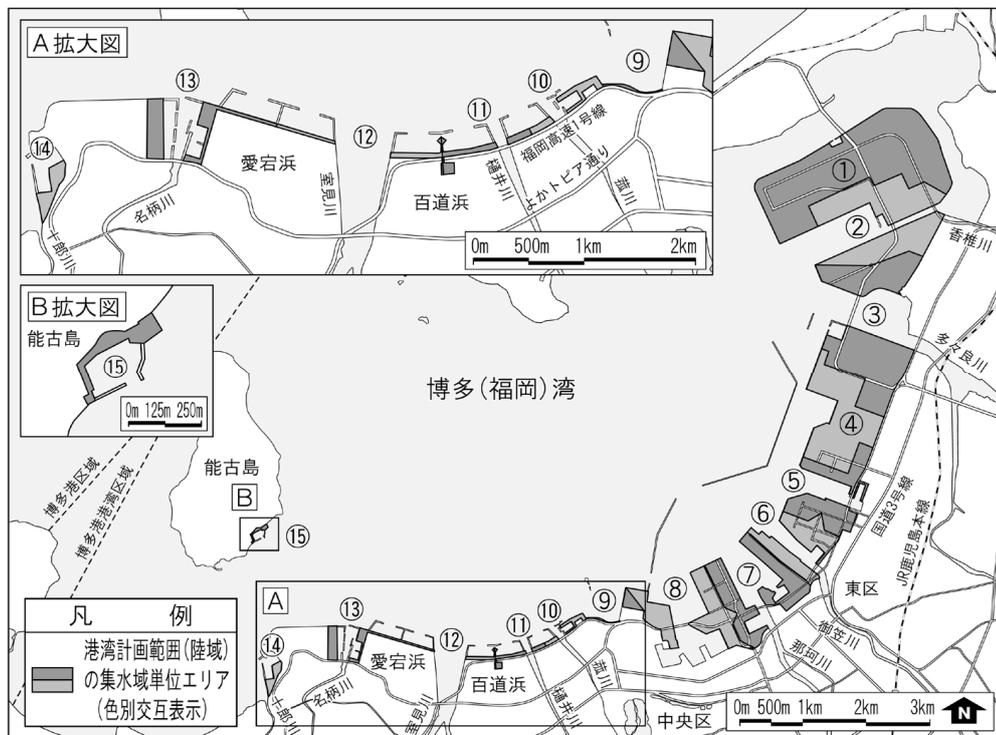


図6-1 博多港港湾計画範囲及びエリア単位

表 6-1 各エリアの面積

エリア番号	①*	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
面積 (ha)	315.4	155.4	177.7	119.9	75.9	62.0	81.8	66.9
エリア番号	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	合計
面積 (ha)	5.5	5.1	4.5	3.1	14.7	5.3	1.3	1094.5

※エリア①は現在埋立中で公共下水道計画が未定のため、そのすべての未定範囲をもってエリア単位とした。よって以降エリア①における各値は、すべて参考値とする。

## 6-2 空間利用ゾーニングの状況

本研究の調査対象地における博多港の空間利用のゾーニングを図 6-2<sup>115)</sup> に示した。該当するゾーニング区分は、干潟などの環境保全を主体とする「1. エコパークゾーン」、香椎パークポートなどの高規格な国際物流ネットワークの拠点として整備されている「2. 先進コンテナ物流ゾーン」、新産業の企業誘致や居住地の開発地として整備される「3. 研究開発・都市生活ゾーン」、様々な港湾関連施設を配置した博多港最大の埠頭となる「4. 物流高度化ゾーン」、国際ターミナルや大型展示場などの賑わい施設などが立地する「5. ポートコミュニティゾーン」、人工海浜や福岡タワーなどの福岡の象徴的なウォーターフロントとなっている「6. マリーナ・リクリエーションゾーン」の 6 エリアとなっている。

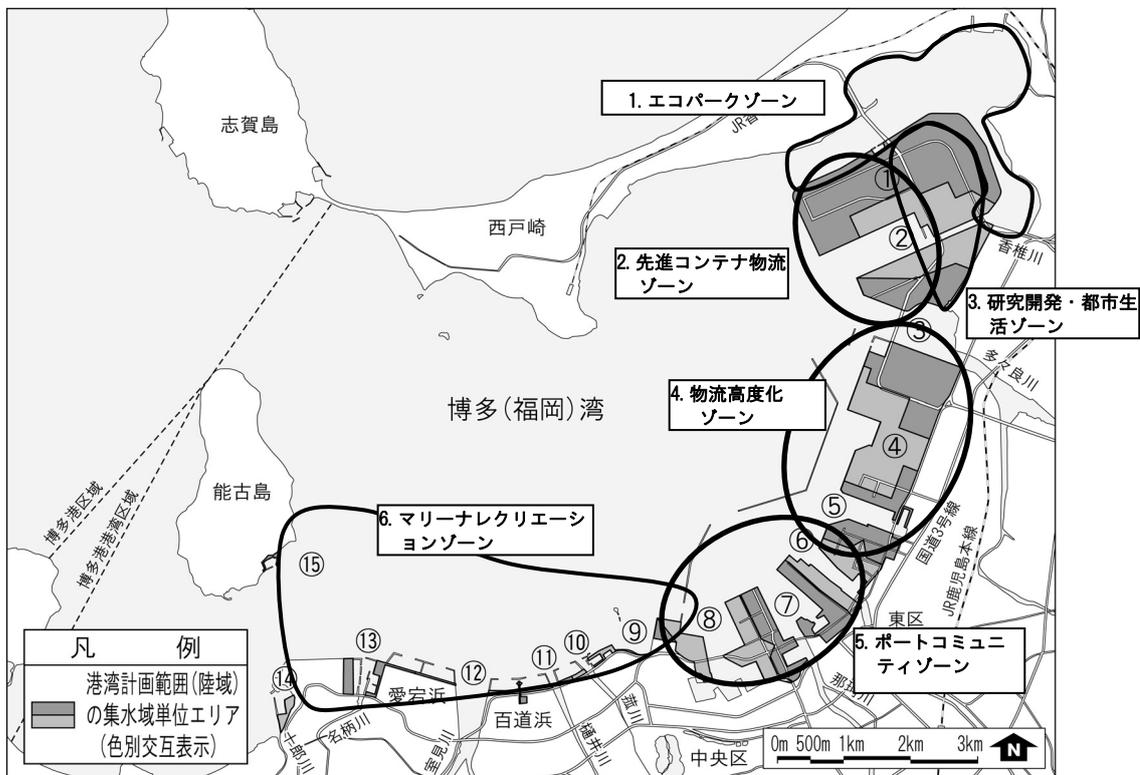


図 6-2 対象エリアにおけるゾーニング区分

### 6-3 接近性からみた海辺の類型化

本節では、現状の港湾計画における港景観の活用可能性を把握・整理すべく、不特定多数の人々が訪れ、滞留できる用地（以下、滞留用地）の存在について以下に示した。

滞留用地は、港湾計画図上の「レクリエーション用地」、「交流拠点用地」、「緑地」、「その他緑地」、に加え、「埠頭用地・港湾関連用地における旅客施設用地」を、港で不特定多数の人々が訪れ滞留できる場所として把握し、表6-2および図6-3に示した。なお、集計方法は、以下に示す如く、

- 「1. 交流厚生用地＝レクリエーション用地＋交流拠点用地」
- 「2. 緑地＝緑地＋その他緑地」
- 「3. 旅客施設用地＝埠頭用地・港湾関連用地の旅客施設用地」

として算出した。また、滞留用地面積率の高い数値順に並び替え、20.0%ごとに5類型した。滞留用地が最も広い割合を示したエリアは、エリア⑭、エリア⑪、エリア⑫であり、それぞれ100.0%であった。そのほか、エリア⑬で81.6%、エリア⑩で76.5%であった。一方、滞留用地の割合が極めて少ないエリアは、エリア④（0.4%）、エリア⑤（0.1%）となり、滞留用地が全く存在しないエリアは、エリア⑧（0.0%）となった。

表6-2 滞留用地面積と類型化

エリア 番号	エリア 面積 (ha)	1. 交流 厚生 用地 (ha)	2. 緑地 (ha)	3. 旅客 施設 用地 (ha)	滞留用地		
					(1+2+3) (ha)	面積率 (%)	類型 ※
⑭	5.3	5.0	0.3	0.0	5.3	100.0	◎
⑪	4.5	0.0	4.5	0.0	4.5	100.0	◎
⑫	3.1	0.0	3.1	0.0	3.1	100.0	◎
⑬	14.7	7.4	2.1	2.5	12.0	81.6	◎
⑩	5.1	0.0	3.9	0.0	3.9	76.5	○
⑦	81.8	14.4	2.9	15.5	32.8	40.1	□
⑮	1.3	0.0	0.3	0.2	0.5	38.5	△
②	155.4	0.0	35.4	0.0	35.4	22.8	△
③	177.7	0.0	25.4	0.0	25.4	14.3	+
①	315.4	0.0	41.8	0.0	41.8	13.3	+
⑨	5.5	0.0	0.5	0.0	0.5	9.1	+
⑥	62.0	0.0	1.2	2.6	3.8	6.1	+
④	119.9	0.0	0.5	0.0	0.5	0.4	+
⑤	75.9	0.0	0.1	0.0	0.1	0.1	+
⑧	66.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-
全体	1089.2	21.8	121.7	20.8	164.3	15.1	+

※◎:100.0~80.0%、○:79.9~60.0%、□:59.9~40.0%、△:39.9~20.0%、+:19.9~0.1%

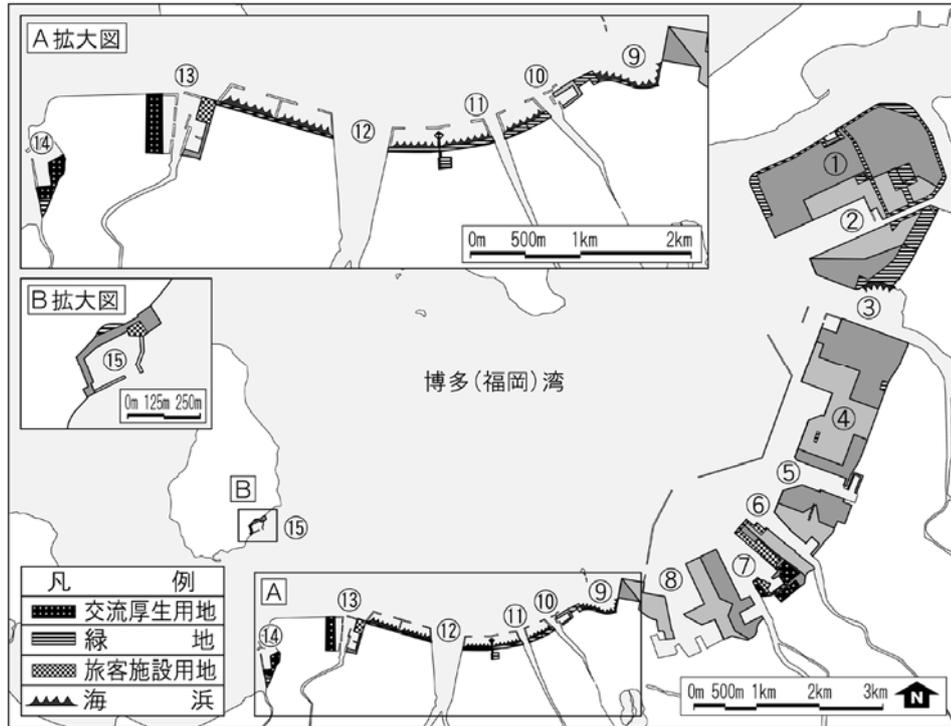


図 6-3 滞留用地の位置

また、滞留用地に接する水際線延長について表 6-3 に示す如く把握した。なお、1ha 当りの水際線延長を基準に、高い数値順に並び替え、四分位数に基づき 4 類型した。さらに参考として、各エリア水際線延長に対する延長率を示した。1ha 当りの滞留用地に接する水際線延長が最も長いエリアは、エリア⑫の 416.8m であった。その他、エリア⑪、エリア⑭で 220.5m、152.9m となった。一方、表 6-1 で滞留用地が存在するが、水際線延長のないエリアは、エリア④、エリア⑤となった。エリア⑧は表 6-1 と合わせて滞留用地・水際線が全くないエリアとなった。

このように、滞留用地の面積率が高いエリア、また滞留用地の水際線が長いエリアは、前章の景観要素に関し、他のエリアと比較して、これらを実際に活用する可能性が高いエリアであると考えられる。

表6-3 滞留用地における水際線

エリア 番号	エリア 面積 (ha)	滞留用地の水際線			エリア水際線に対する延長	
		延長(m)	1ha当り		エリア水際線 延長(m)	延長率 (%)
			延長(m)	類型※		
⑫	3.1	1292.2	416.8	A	1292.2	100.0
⑪	4.5	992.4	220.5	A	992.4	100.0
⑭	5.3	810.5	152.9	A	810.5	100.0
⑩	5.1	613.1	120.2	B	1366.9	44.9
⑨	5.5	628.2	114.2	B	887.1	70.8
⑬	14.7	1581.1	107.6	B	2160.3	73.2
⑮	1.3	80.0	61.5	C	553.7	14.4
⑦	81.8	1949.5	23.8	C	5099.7	38.2
①	315.4	5168.8	16.4	C	6423.6	80.5
②	155.4	1880.0	12.1	D	4895.9	38.4
⑥	62.0	559.1	9.0	D	3298.9	16.9
③	177.7	694.4	3.9	D	3511.4	19.8
④	119.9	0.0	0.0	-	2415.3	0.0
⑤	75.9	0.0	0.0	-	2337.4	0.0
⑧	66.9	0.0	0.0	-	4109.7	0.0
全体	1094.5	16249.3	中央値:23.8		40155.0	40.5

※水際線延長には、海浜延長も含む

A:416.8~128.4m、B:128.3~84.5m、C:84.4~15.3m、D:15.2m~0.1m

#### 6-4 港における景観要素の抽出・類型化

本節では、港における印象的な景観要素を把握するため、第4章で示した如く、国内の詩歌作品から抽出した海辺の景観要素に対し、博多港における海辺の景観要素を抽出・整理した。

現在制度上「港」とされる「港湾計画範囲」において、第4章で示した、図4-5 詩歌から得られた港の印象深い景観要素の中で、各々の時代で特に出現のみられた「植物」、「海の様子」、「船」、「干潟」、「鳥」について、景観保全（再生）に基づく空間形成の可能性の視点から、以下に検討した。

- ・「植物」は、港湾計画の「緑地」で、その景観再生の可能性が考えられる。「緑地」が設置されることで、第4章で示した図4-6「植物」の詳細についても、ビオトープなどの整備<sup>116)</sup>によって、葦草など用地内での植栽の可能性が高いと考えられる。そこで、表6-4に示す如く、詩歌の景観要素「植物」は、景観保全（再生）の可能性のある港湾計画の「緑地」を対象に、その存在率によってエリアごとに抽出・類型化する。
- ・「海の様子」は、まず海を窺える水際線の存在が前提となる。さらに、港湾計画における「海浜」が存在すると、第4章で示した図4-7における「海の様子」の詳細を保全（再生）でできる可能性が考えられる。そこで、表6-4に示す如く、詩歌の景観要素の「海の様子」は、

景観保全（再生）の可能性のある「水際線」及び港湾計画の「海浜」を対象に、その存在率によってエリアごとに抽出・類型化する。

- ・「船」は、詩歌において、船種、大きさなどの特定の表現がほとんどみられなかったことから、現在港湾において航行する船舶を対象とする。さらに、これら航行する船舶を人々がみる可能性が高い場所は、発着地である係留施設及びその近辺であると考えられる。そこで、表6-4に示す如く、詩歌の景観要素の「船」については、船舶が接岸する「係留施設」を対象に、その存在率によってエリアごとに相対評価し、さらに係留施設の「対象船舶船型」及び「船種」の整理から係留船舶の概観を抽出・類型化する。
- ・「干潟」は、現存する港湾計画範囲の周辺の干潟を対象として、その位置及び面積を把握し、近接エリアによって抽出・類型化する。
- ・「鳥」は、第4章で示した、詩歌から得られた「鳥」の詳細を示す図4-8を基準に、現在の博多港における鳥類調査結果から生息状況を把握し、その観察位置を景観保全（再生）の可能性として抽出・類型化する。

表6-4 詩歌からみた港の景観要素と現在の港の景観対象

詩歌からみた港の景観要素	現在の港における景観対象（単位）	分析方法
植物	緑地（ha）	エリアごとに分析
海の様子	水際線（m）、海浜（m）	
船	係留施設（m、基）	
干潟	干潟（ha）	現状を把握
鳥	鳥類調査結果（羽）	

## 1. 緑地の計画面積

「植物」の景観保全（再生）の可能性を探るため、各エリアにおける緑地（その他緑地含む）の計画面積を表6-5に、その位置を図6-8に示した。また表6-5は、緑地面積率の高い数値順に並び替え、20.0%ごとに5類型した。緑地面積率が最も高いエリアは、エリア⑪、エリア⑫であり100.0%であった。一方緑地面積率が著しく少ないエリアは、エリア⑤の0.1%、エリア⑧の0.0%であった。緑地面積率が高いエリアは、港湾において、人々に印象深い景観要素であった図6-4及び図6-5の「植物」の景観要素の景観保全（再生）の可能性が高いエリアであると考えられる。

## 2. 水際線の延長

図6-4及び図6-6「海の様子」の景観保全（再生）の可能性を探るべく、各エリアの水際線延長を表6-6に示した。なお1ha当りの水際延長を基準に高い数値順に並び替え、四分位数に基づき4類型した。1ha当りの水際線延長が最も長いエリアは、エリア⑮の425.9mであ

り、次いでエリア⑫の 416.8m であった。一方、1ha 当りの水際線延長が最も短いエリアは、エリア③の 19.8m であった。1ha 当りの水際線延長の長いエリアは、他のエリアと比較して、港湾において、人々に印象深い景観を創出した図 6-4 及び図 6-6「海の様子」の景観要素の保全（再生）の可能性が高いエリアであると考えられる。

### 3. 海浜の計画延長

第 4 章で示した図 4-5 及び図 4-7「海の様子」の景観保全（再生）の可能性を探るため、海浜計画にみる海浜の計画延長を表 6-7 に示し、その位置を図 6-4 に示した。なお表 6-6 の 1ha 当りの海浜延長を基準に高い数値順に並び替え、四分位法に基づき 4 類型した。海浜整備計画がないエリアは省略した。また参考として、表 6-6 のエリア水際線延長に対する海浜延長率を示した。1ha 当りの海浜延長が最も長いエリアは、エリア⑫の 326.0m であった。また、エリア⑪、エリア⑨で 1ha 当りの海浜延長が 154.3m、114.2m と高い値を示した。これらのエリアは、他のエリアと比較して、港湾において、人々に印象深い景観を創出した図 6-4 及び図 6-6「海の様子」の景観要素の保全（再生）の可能性が高いエリアであると考えられる。

表 6-5 緑地の計画面積

エリア番号	エリア面積 (ha)	緑地面積 (ha)	緑地面積率 (%)	類型※
⑪	4.5	4.5	100.0	◎
⑫	3.1	3.1	100.0	◎
⑩	5.1	3.9	76.5	○
⑮	1.3	0.3	23.1	△
②	155.4	35.4	22.8	△
③	177.7	25.4	14.3	+
⑬	14.7	2.1	14.3	+
①	315.4	41.8	13.3	+
⑨	5.5	0.5	9.1	+
⑭	5.3	0.3	5.7	+
⑦	81.8	2.9	3.5	+
⑥	62.0	1.2	1.9	+
④	119.9	0.5	0.4	+
⑤	75.9	0.1	0.1	+
⑧	66.9	0.0	0.0	-
全体	1094.4	122.0	11.1	+

※◎:100.0~80.0%、○:79.9~60.0%、  
□:59.9~40.0%、△:39.9~20.0%、  
+:19.9%~0.1%

表 6-6 水際線延長

エリア番号	エリア面積 (ha)	水際線延長 (m)	1ha 当り	
			水際線延長 (m)	類型※
⑮	1.3	553.7	425.9	A
⑫	3.1	1292.2	416.8	A
⑩	5.1	1366.9	268.0	A
⑪	4.5	992.4	220.5	A
⑨	5.5	887.1	161.3	B
⑭	5.3	810.5	152.9	B
⑬	14.7	2160.3	147.0	B
⑦	81.8	5099.7	62.3	B
⑧	66.9	4109.7	61.4	C
⑥	62.0	3298.9	53.2	C
②	155.4	4895.9	31.5	C
⑤	75.9	2337.4	30.8	D
①	315.4	6423.6	20.4	D
④	119.9	2415.3	20.1	D
③	177.7	3511.4	19.8	D
全体	1094.4	40155.0	中央値:62.3	

※A:425.9~190.9m、B:190.8~62.3m  
C:62.2~31.1m、D:31.1~0.1m

表6-7 海浜計画にみる海浜の計画延長

エリア 番号	エリア面積 (ha)	海浜延長 (m)	1ha当り		エリア水際線に対する海浜	
			海浜延長 (m)	類型 ※	エリア水際線 延長(m)	海浜 延長率(%)
⑫	3.1	1010.7	326.0	A	1292.2	78.2
⑪	4.5	694.4	154.3	A	992.4	70.0
⑨	5.5	628.2	114.2	B	887.1	70.8
⑩	5.1	296.7	58.2	C	1366.9	21.7
⑬	14.7	570.0	38.8	D	2160.3	26.4
③	177.7	500.0	2.8	D	3511.4	14.2
全体	1094.5	3700.0	中央値:86.2		40155.0	9.2

※A:326.0~144.3m、B:144.2~86.2m、C:86.1~43.6m、D:43.5m~0.1m

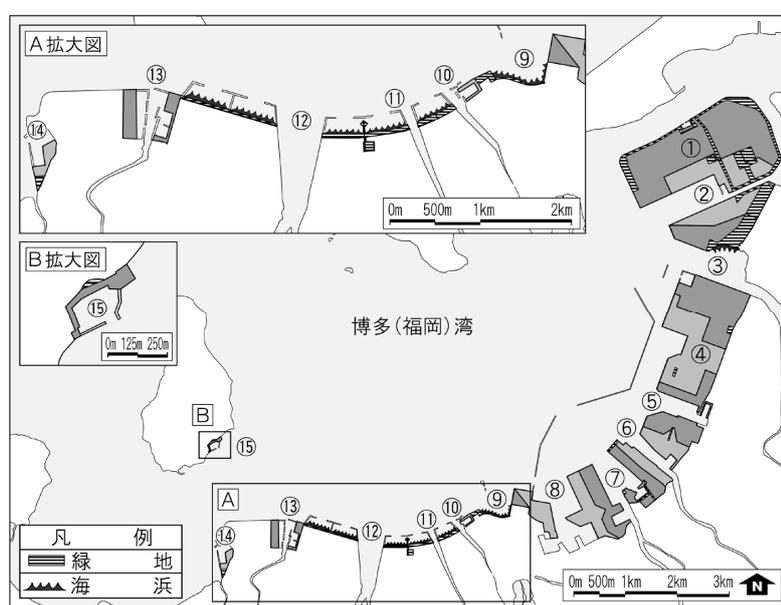


図6-4 緑地・海浜の位置

#### 4. 係留施設の整備計画

本節では、第4章で示した図4-5「船」の景観保全（再生）の可能性を探るため、各エリアにおける係留施設の整備計画について、バース（本研究では、延長単位で表記される岸壁・物揚場・船揚場とする）を表6-8、栈橋（本研究では、基数単位で表記されるドルフィン、小型さん橋とする）を表6-10、その位置を図6-5に示した。なお、表6-8、表6-9は、1ha当りの延長及び基数を基準に高い数値順に並び替え、四分位数に基づき4類型した。また、係留施設の整備計画がないエリアは省略した。

##### (1) バース整備計画

表6-8のバース整備計画では、エリア⑬が1ha当り225.4mと最も長く、他のエリアと比較すると、港湾において、人々に印象深い景観を創出した図6-4「船」の景観要素の保全（再

生)の可能性が高いエリアと考えられる。しかし対象船舶船型が500G/T未満で、船種も小型船1種のみであり、船の大きさ・種類が限定されるエリアである。

一方、係留可能な船の大きさ、種類の視点からみると、エリア⑦は、1ha当りのバース長が32.2mとなり、全体平均34.0mに対しやや劣るものの、対象船舶船型が70000GTクラスの大型船をはじめとして、計7タイプの大きさの船の接岸が可能であり、また船種も3種の接岸がみられるなど、さまざまな「船」の景観要素の保全(再生)の可能性のあるエリアと考えられる。

表6-8 各エリアのバース整備計画

エリア番号 (エリア面積)	バース 長(m)	水深 (m)	対象船舶 船型※i	船種	1ha当り	
					バース 長(m)	類型 ※ii
⑮(1.3ha)	293.0	-4未満	500G/T未満	小型船	225.4	A
合計	293.0	-	1タイプ	1種	225.4	
⑩(5.1ha)	460.0	-4未満	500G/T未満	小型船	90.2	A
合計	460.0	-	1タイプ	1種	90.2	
⑬(14.7ha)	510.0	-4未満	500G/T未満	小型船	34.7	A
合計	510.0	-	1タイプ	1種	34.7	
⑥(62.0ha)	638.0	-4未満	500G/T未満	小型船	10.3	A
	525.2	-7.5	5000D/W	貨物船	8.5	
	440.0	-5.5	2000D/W	貨物船	7.1	
	380.0	-7.5	5000G/T	客船	6.1	
	200.0	-4.5	700D/W	貨物船	3.2	
	161.0	-6.5	3500D/W	貨物船	2.6	
合計	2344.2	-	6タイプ	3種	37.8	
⑦(81.8ha)	883.0	-4未満	500G/T未満	小型船	10.8	B
	480.0	-12	3000D/W	貨物船	5.9	
	387.0	-7.5	5000D/W	客船・貨物船	4.7	
	340.0	-10	7000G/T	客船	4.2	
	250.0	-10	16000G/T	客船	3.1	
	185.0	-10	15000D/W	貨物船	2.3	
	105.0	-5.5	2000D/W	客船・貨物船	1.3	
合計	2630.0	-	7タイプ	3種	32.2	
⑤(75.9ha)	1042.3	-7.5	5000D/W	貨物船	13.7	B
	739.0	-4未満	500G/T未満	小型船	9.7	
	240.0	-12	3000D/W	貨物船	3.2	
	185.0	-10	15000D/W	貨物船	2.4	
合計	2206.3	-	4タイプ	2種	29.1	
⑧(66.9ha)	1040.0	-5.5	2000D/W	貨物船	15.5	C
	357.0	-4未満	500G/T未満	小型船	5.3	
	260.0	-7.5	5000D/W	貨物船	3.9	
合計	1657.0	-	3タイプ	2種	24.8	
②(155.4ha)	910.0	-7.5	5000D/W	貨物船	5.9	C
	600.0	-13	4000D/W	コンテナ船	3.9	
	380.0	-11	15000D/W	貨物船	2.4	
	360.0	-4未満	500G/T未満	小型船	2.3	
	330.0	-14	5000D/W	コンテナ船	2.1	
合計	2580.0	-	5タイプ	3種	16.6	
④(119.9ha)	642.5	-7.5	5000D/W	貨物船	5.4	D
	480.0	-12	3000D/W	貨物船	4.0	
	213.5	-10	15000D/W	貨物船	1.8	
合計	1336.0	-	3タイプ	1種	11.1	
③(177.7ha)	390.0	-7.5	1000D/W	貨物船	2.2	D
	300.0	-4未満	500G/T未満	小型船	1.7	
	146.5	-10	15000D/W	貨物船	0.8	
合計	836.5	-	3タイプ	2種	4.7	
①(315.4ha)	700.0	-15	6000D/W	コンテナ船	2.2	D
	370.0	-4未満	500G/T未満	小型船	1.2	
合計	1070.0	-	2タイプ	2種	3.4	
全体	15923.0	-	14タイプ	4種	中央値:29.1	

※ i (G/T) : 総トン数 船の内部の総容積を100立方フィートを1トンとする単位をもってあらわしたもの  
(D/W) : 重量トン数 (満載時排水トン数-空船時排水トン数)で積載可能な貨物重量を単位としたもの

117)

※ ii A : 225.4~36.3m、B : 36.2~29.1m、C : 29.0~13.9m、D : 13.8m~0.1m

## (2) 棧橋整備計画

表6-9に示した棧橋整備計画では、エリア⑭が1ha当たり1.132基となり、他のエリアと比較すると、港湾において、人々にとって印象深い景観要素である図4-5「船」の景観要素の保全（再生）の可能性が高いエリアと考えられる。しかし、対象船舶船型が500D/T未満の小型船のみであり、船の大きさ・種類が限定されるエリアである。一方、係留可能な船の大きさの視点からみると、エリア⑧は、1ha当たり0.135基となり、全体平均0.220基に対しやや劣るものの、5タイプの大きさの対象船舶船型がみられるなど、さまざまな大きさの「船」の景観要素の保全（再生）の可能性のあるエリアと考えられる。

表6-9 各エリアの棧橋整備計画

エリア番号 (エリア面積)	基数	水深 (m)	対象船舶 船型	船種	1ha当り	
					基数	類型※
⑭(5.3ha)	6	-4未満	500G/T未満	小型船	1.132	A
合計	6	-	1タイプ	1種	1.132	
⑬(14.7ha)	15	-4未満	500G/T未満	小型船	1.020	A
合計	15	-	1タイプ	1種	1.020	
⑮(1.3ha)	1	-4未満	500G/T未満	小型船	0.769	B
合計	1	-	1タイプ	1種	0.769	
⑨(5.5ha)	1	-5.5	600D/W	油送船	0.182	B
合計	1	-	1タイプ	1種	0.182	
⑧(66.9ha)	3	-6,-6.5	2000D/W	油送船	0.045	C
	2	-5.5	1000G/T	油送船	0.030	
	2	-5.5	500G/T未満	油送船	0.030	
	1	-5.5	2500D/W	油送船	0.015	
	1	-5.5	1000D/W	油送船	0.015	
合計	9	-	5タイプ	1種	0.135	
⑤(75.9ha)	2	-6.5	3000D/W	油送船	0.026	C
	1	-7.5	5000D/W	油送船	0.013	
合計	3	-	2タイプ	1種	0.040	
⑦(81.8ha)	1	-4未満	500G/T未満	小型船	0.012	D
合計	1	-	1タイプ	1種	0.012	
③(177.7ha)	2	-10	15000D/W	貨物船	0.011	D
	合計	2	-	1タイプ	1種	
全体	38	-	9タイプ	2種	中央値:0.159	

※A:1.132~0.832基、B:0.831~0.159基、C:0.158~0.033基、D:0.032~0.001基

## 5. 干潟の状況

第4章で示した図4-5「干潟」の景観保全（再生）の可能性を探るため、港湾計画範囲及び周囲における干潟の状況を表6-10に示し、その位置を図6-5に示した。雁ノ巣（11ha）、和白（62ha）、香椎（16ha）など、港湾計画範囲の陸域に近接する干潟全体（118ha）の約75%（89ha）はエリア①に近接して存在する。これらの干潟は、港湾計画の中でエコパークゾーンとして位置づけられ、自然環境保全計画対象地となっている。これら干潟に近接するエリアは、他のエリアと比較して、港湾において、人々にとって印象深い景観要素である図4-5「干潟」の景観要素の保全（再生）の可能性が高いエリアと考えられる。

またその他、エリア②が香椎（16ha）に近接し、エリア③、エリア⑫の河口部にはそれぞれ25ha、4haの干潟が存在する。

表6-10 干潟の状況<sup>118)</sup>

地名	タイプ名	面積(ha)	近接エリア
a雁ノ巣	前浜	11	①
b和白	前浜・河口	62	①
c香椎	前浜	16	①、②
d多々良川	河口	25	③
e室見	河口	4	⑫

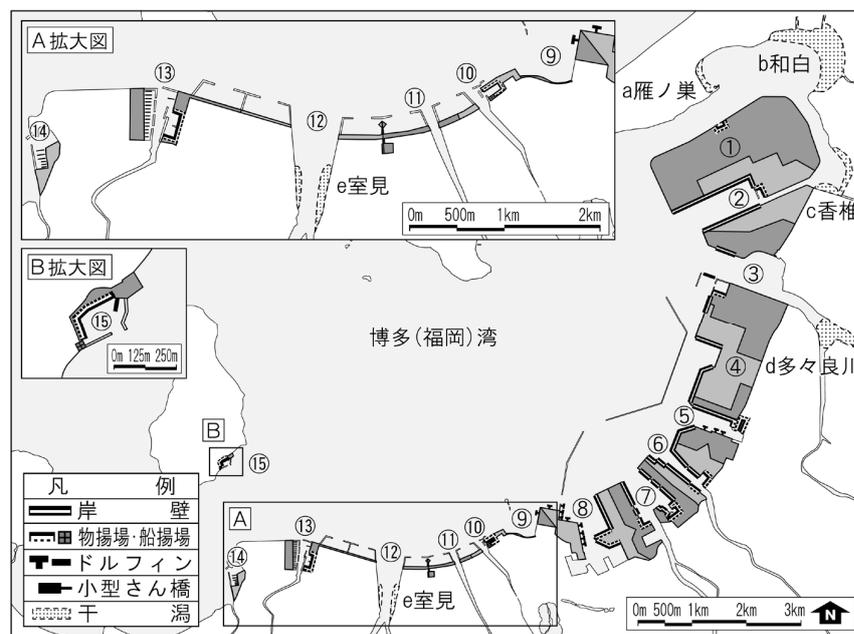


図6-5 係留施設・干潟の位置

## 6. 鳥類調査の状況

第4章で示した図4-5及び図4-8「鳥」の景観保全（再生）の可能性を探るため、博多湾周辺における鳥類調査結果<sup>119)・118)</sup>から、特に図4-8で把握した港の景観要素に対応した鳥類の種を表6-11に示した。最も多くみられたのはガンガモで、年間を通じて84,607羽、特に1月に20,111羽と多くみられる。次いでチドリが61,443羽となり、またヒレアシシギが45,970羽で、特に2月に6,039羽と多くみられる。その他、コウノトリ目が年間8,095羽、ツル目が127羽みられる。なおこの調査は、本研究の対象範囲では、エリア①～③、エリア⑨～⑬内及び先に示した干潟において定点観察したものとされている。よって、第4章の図4-5及び図4-8の詩歌から得られた、人々に印象深い景観を創出する「鳥」の景観要素は、これら定点観察したエリア及び干潟において、その保全（再生）の可能性が高いと考えられる。

表 6-11 博多港周辺の鳥類(羽)

目 名	コウノ トリ		ガン ガモ	ツル		チドリ							計
	サ ギ	ト キ	ガ ン ガ モ	ツ ル	ク イ ナ	タ マ シ ギ	ミ ヤ コ ド リ	チ ド リ	シ ギ	セ イ タ カ シ ギ	ヒ レ ア シ シ ギ	ウ ミ ス ズ メ	
3月	174	26	10240	0	12	0	5	63	1045	0	3155	0	14720
4月	546	21	1295	0	9	0	5	78	1798	0	2861	0	6613
5月	366	13	147	0	8	0	0	59	2132	0	1894	0	4619
6月	509	2	93	0	0	0	1	57	54	1	1937	0	2654
7月	1010	1	188	0	5	0	1	40	9	0	1947	0	3201
8月	1621	0	39	0	3	0	0	45	575	2	4118	0	6403
9月	1393	2	86	0	2	0	0	36	350	2	5023	0	6894
10月	1136	3	5650	0	11	1	8	62	579	0	5310	0	12760
11月	456	28	12036	1	14	0	9	422	1731	0	5012	0	19709
12月	280	36	15206	1	25	0	8	445	1703	0	3615	0	21319
1月	198	37	20111	1	17	0	8	256	1738	0	5059	0	27425
2月	200	37	19516	1	17	0	8	147	1982	0	6039	8	27955
計	7889	206	84607	4	123	1	53	1710	13696	5	45970	8	154272
総計	8095		84607	127		61443							

※調査時期：平成10年3月～平成11年2月  
 調査方法：定位置観察及びロードサイドカウント  
 ※ヒレアシシギはカモメを示す

### 6-5 港湾における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件

本節では、港湾計画に従った海辺への接近性と、海辺景観を構成する資源を把握・類型化するため、これまで設定した指標を表6-12に整理し、それらの位置を図6-6に示した。また、なお、表6-12は、海辺景観を享受するには、まず海辺に接近することが重要であることから、滞留用地の面積率が高い順に並び替えした。また、緑地、水際線、海浜、係留施設、近接する干潟及び鳥類の定点観察実施エリア（干潟含む）を「景観保全（再生）対象」とした。また、表6-12には、博多港港湾計画における空間利用ゾーニングを、番号でエリアごとに示した。

表6-12から、エリア⑪、エリア⑫は、他のエリアと比較して、緑地や海浜の割合が高く、また滞留用地も多いことから、多くの人々が景観を保全（再生）できる可能性が高いと考えられるが、船舶がほとんどみられない特徴を有するエリアであることがわかった。

エリア⑧は、1ha当りのバース長や対象船舶船型のタイプ数から、他のエリアと比較して、多様な大きさの船を活かした景観を保全（再生）できる可能性が高いが、滞留用地が全く存在しない特徴を有することがわかった。

エリア⑦、エリア②は、1ha当りバース長や対象船舶船型のタイプ数、緑地の存在、滞留用地の割合から、他のエリアと比較して、博多港の中で多様な港の景観を保全（再生）できる可能性を有しているが、海浜が全くない特徴を有するエリアであることがわかった。

また、エリア④、エリア⑤は、港湾計画における空間利用ゾーニングで「4. 物流高度化ゾーン」に位置づけられ、緑地と、滞留用地がそれぞれ+(20~0.1%)であることから、他のエリアと比較して、港の景観保全（再生）を図る可能性は低いエリアである。

表6-12 博多港の景観保全（再生）に資する空間構成

エリア 番号	エリア 面積 (ha)	滞留用地※i ii		景観対象 ※i ii							近接干潟 (ha)	鳥類定点 観察	空間利用※iii ゾーニング 区域番号
		面積	水際 線	緑地	水際 線	海浜	係留施設						
							(ハース)一(棧)	対象船舶船型	最大トン数	船種			
⑭	5.3	◎	A	+	B	-	--A	1タイプ	500G/T未満	1種	-	-	7
⑪	4.5	◎	A	◎	A	A	----	-	-	-	-	実施	7
⑫	3.1	◎	A	◎	A	A	----	-	-	-	4	実施	7
⑬	14.7	◎	B	+	B	D	A-A	1タイプ	500G/T未満	1種	-	実施	7
⑩	5.1	○	B	○	A	C	A--	1タイプ	500G/T未満	1種	-	実施	7
⑦	81.8	□	C	+	B	-	B-D	7タイプ	70000G/T	3種	-	-	6
⑮	1.3	△	C	△	A	-	A-B	1タイプ	500G/T未満	1種	-	-	7
②	155.4	△	D	△	D	-	C--	5タイプ	50000D/W	3種	16	実施	1、2、3、4
③	177.7	+	D	+	D	D	D-D	3タイプ	15000D/W	2種	25	実施	1、3、5
①	315.4	+	C	+	D	-	D--	2タイプ	60000D/W	2種	89	実施	1、2、3、4
⑨	5.5	+	B	+	B	B	--B	1タイプ	600D/W	1種	-	実施	6、7
⑥	62.0	+	D	+	C	-	A--	6タイプ	5000G/T	3種	-	-	5、6
④	119.9	+	-	+	D	-	D--	3タイプ	30000D/W	1種	-	-	5
⑤	75.9	+	-	+	C	-	B-C	5タイプ	30000D/W	3種	-	-	5
⑧	66.9	-	-	-	C	-	C-C	8タイプ	5000D/W	3種	-	-	6、7
全体	1089.2	+	-	+	-	-	-	19タイプ	-	4種	-	-	7区域

※ i 面積率：◎:100.0~80.0%、○:79.9~60.0%、□:59.9~40.0%、△:39.9~20.0%、+:19.9~0.1%

※ ii 四分位数で区分 A:75.0%以上、B:74.9~50%、C:49.9~25.0%、D:24.9~0.0%

※ iii 1:エコパークゾーン、2:先進コンテナ物流ゾーン、3:研究開発・都市生活ゾーン、4:物流高度化ゾーン、5:ポートコミュニティゾーン、6:マリーナ・レクリエーションゾーン

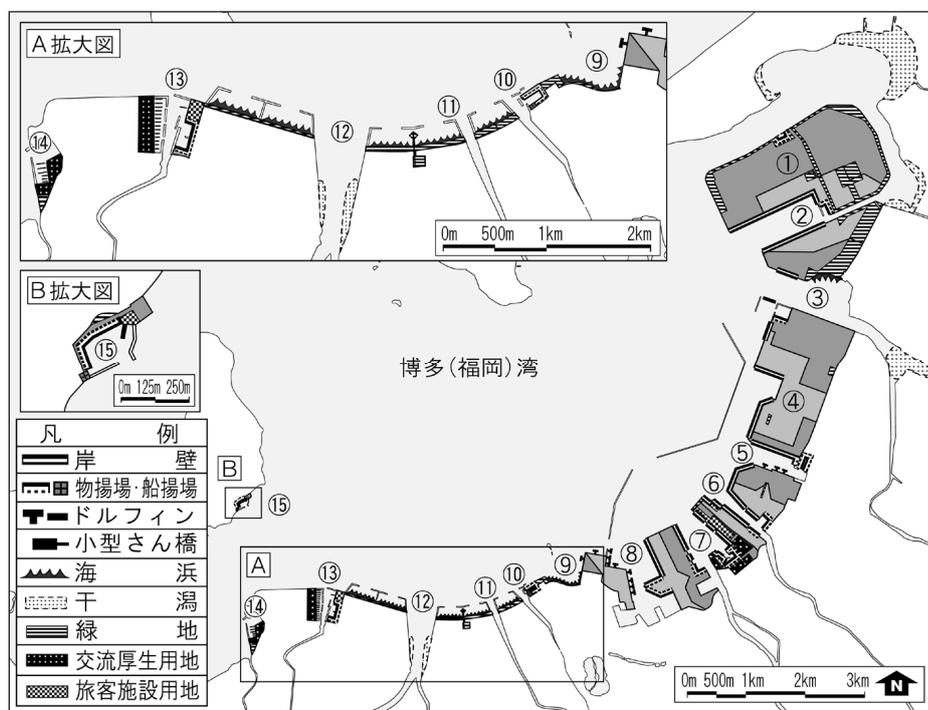


図6-6 博多港の景観保全（再生）に資する空間構成

## 6-6 考察結果

本章では、約 1,100ha となる博多港港湾計画範囲において、不特定多数の人が滞留可能な場所を把握するため、三次流域単位（海岸線平均約 3km）ごとに、交流厚生用地などの滞留用地の面積率把握し、海辺への接近性に資する要素として類型化した。また、第 4 章で得られた海辺の港の景観要素に着目し、現港湾におけるこれらの存在の可能性が高い場所から、海辺景観の保全（再生）を重点的に検討すべき潜在量として把握・類型化した。

以上のことから、第 3 章の広域スケールでは、その特徴を把握することができなかったエリア 1・エリア 2・エリア 32・エリア 33 内（1 次流域内）について、博多港港湾計画範囲（地区スケール）の視点から、海辺景観資源を潜在量として把握し、海辺への接近性から顕在化する（再生・活用する）ための計画条件を示すことができたと考える。その結果、例えば、現港湾内において、限られた予算の中で、港景観の活用や保全（再生）を検討する場合の、優先性を判断するための指標として示すことができたと考える。

## 第7章 海辺景観資源の潜在量把握と

### 顕在化の計画条件と計画論的意義

## 第7章 海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件と計画論的意義

本章では、1章で示した目的⑤「広域地方計画区域における自然公園と港湾の潜在量把握と顕在化のための計画条件を明らかにし、スケール別の計画論的意義を探究すること」に対応するため、広域地方計画区域を対象に、海辺に対する中心市からの時間距離を明らかにするとともに、広域スケール下における海辺における自然公園と港の存在率を把握・整理することで、海辺景観を構成する資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を探究した。

### 7-1 中心市・高次都市からの時間距離からみた海辺への接近性

本節では、第2章で示した、時間距離の調査・分析方法の考え方にに基づき、海辺から中心市・高次都市までの時間距離を以下に示した。具体的には、総合交通分析システム(NITAS)<sup>120)</sup>を用い、各エリアにおける海辺3~5箇所程度の地点から、最短時間距離に該当する高次都市・中心市の市役所までの時間距離を測定し、エリア別の平均時間距離を算出した。また測定した時間は、第1章で示した「新しい国のかたち「二層の広域圏」を支える総合的な交通体系最終報告(平成17年5月)」における全国アンケート調査結果に基づき、日常生活が主たる範囲となる「日常圏(40分未満)」、身近な観光地として機能する「日帰圏(40分以上160分未満)」、1日以上滞在が必要となる「宿泊圏(160分以上)」の3つに類型した<sup>121)</sup>。

#### ■NITASによる時間距離算出方法

①道路は平均旅行速度を採用した。

※平均旅行速度

：道路時刻表(全国の高速道路、一般道路を対象に、朝夕の混雑時を除いた10~16時までの時間帯で、乗用車又はライトバンを実際に走行させて区間の所要時間を計測した値)<sup>122)</sup>の旅行速度に近似するよう設定された値。

②離島部は、フェリー・飛行機のいずれか早い航路を選択した。

③時間距離を測定する海辺の地点は、各エリアにおける道路と流域界の接点2箇所と、その中央1箇所の合計3箇所を選出した。離島については、前周囲を等間隔においた5、6箇所を基本とし(複数の離島群の場合は島数分の地点を選定)、その平均値を以って時間距離とした。

上記の分析手法に基づき、中心市から海辺までの時間距離を表7-1及び図7-1、7-2に示した。中心市からの時間距離で特に近いのは、エリア26の15.3分、エリア5の17.3分となり、いずれも日常圏となった。一方、特に遠いのはエリア39の326.0分やエリア35の232.7分となり、離島部で多くみられた。これら中心市に近い海辺は、中心市に居住する多くの人にとって日常的にアクセスしやすい場所であることから、有効活用を重点的に検討すべきエリアであることが窺える。

また、高次都市からの時間距離で特に近いのはエリア29の35.3分、エリア3の35.7分となり、いずれも日常圏となった。一方、特に遠いのはエリア39の564.7分やエリア40の463.0

分となり、離島部で多くみられた。これら交通結節点のある高次都市に近い海辺は、高次都市の居住者のほか、遠方からきた観光宿泊者も含め、多くの人に利用される可能性が高く、中心市から近い海辺以上に、景観の有効活用を重点的に検討すべきエリアであることが窺える。

表 7-1 中心市と海辺の平均時間距離

エリア 番号	中心市 時間距離		高次都市 時間距離	
	(分)			
25	33.2	◎	49.2	○
24	27.6	◎	83.1	○
16	31.0	◎	43.7	○
26	26.0	◎	69.3	○
15	26.3	◎	78.8	○
6	33.7	◎	64.3	○
2	37.7	◎	48.7	○
1	35.0	◎	42.7	○
33	25.0	◎	68.5	○
21	46.8	○	107.5	○
29	32.7	◎	35.3	◎
3	34.0	◎	35.7	◎
4	22.0	◎	46.7	○
5	17.3	◎	81.3	○
28	46.7	○	46.7	○
27	40.7	○	53.3	○
7	46.3	○	86.3	○
23	45.0	○	133.3	○
20	53.3	○	143.3	○
22	51.6	○	161.2	△
10	28.0	◎	44.7	○
32	26.7	◎	51.7	○
11	31.3	◎	72.0	○
18	25.7	◎	79.0	○
17	25.3	◎	87.0	○
9	18.7	◎	94.3	○
19	26.7	◎	107.0	○
14	31.2	◎	127.0	○
34	143.3	○	191.7	△
40	172.2	△	463.0	△
8	30.0	◎	124.3	○
12	34.0	◎	116.3	○
30	55.6	○	55.6	○
31	72.3	○	72.3	○
36	154.7	○	154.7	○
13	58.0	○	165.3	△
38	155.3	○	176.5	△
37	162.7	△	198.7	△
35	232.7	△	232.7	△
39	326.0	△	564.7	△

◎：40分未満(日常圏)  
○：40分以上160分未満(日帰圏)  
△：160分以上(宿泊圏)

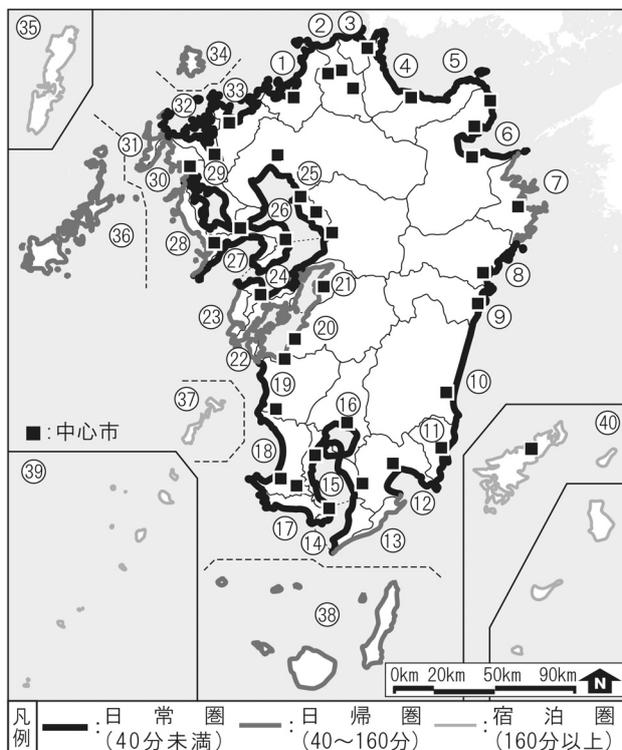


図 7-1 中心市と海辺の平均時間距離

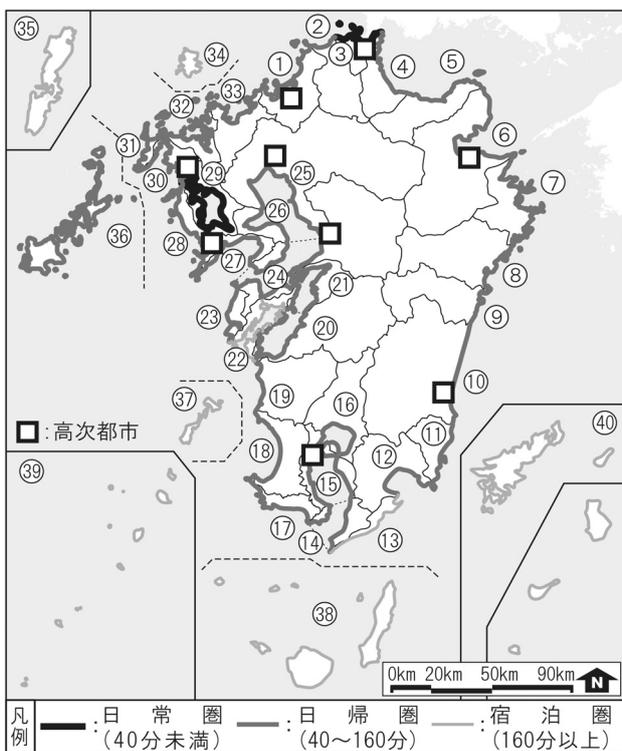


図 7-2 高次都市と海辺の平均時間距離

## 7-2 自然公園・港の存在率からみた海辺の類型

本節では、4章、5章で分析した、海辺の特徴的な空間であり、多くの印象深い景観がみられる自然公園の海辺と港に着目し、再度、広域スケール下におけるその存在率から、海辺の活用や保全に資する潜在量を把握した。<sup>123)</sup>

### 7-2-1 自然公園の面積率からみた海辺の類型

広域スケール下における自然公園の面積率を把握すべく、1次流域エリア別に、その面積率を表7-2に示し、25%ごとに4類型した。また4類型をベースに各エリアの特徴を図7-3に示した。

海辺の自然公園地域の面積率が最も多いのが、エリア11の85.9%となり、次いで、エリア7の75.5%となった。また、国立公園及び国定公園に着目すると、国立公園では、エリア14が73.1%と最も多く、次いでエリア23が63.9%となり、国定公園では、エリア11が85.9%、エリア8が68.1%となった。これらのエリアは、第4章で取りまとめた玄海国定公園と同様の自然公園区域であり、自然における海辺景観を有効に活用できる可能性が高く、重点的に自然景観の保全に努めるエリアであると考えられる。

### 7-2-2 港の箇所数（千ha当たり）からみた海辺の類型

広域スケール下における港（博多港と同様に、港湾計画を策定する国際拠点港湾、重要港湾を対象とした）の箇所数（千ha当たり）を把握すべく、1次流域エリア別に算出した上、表7-2に示し、四分位法に基づき4類型した。また各港湾の位置を図7-3に示した。

箇所数（千ha当たり）が最も多いのは、エリア19の1.76箇所/千haとなり、次いで、エリア1.45箇所/千haとなった。また、博多港と同様の国際重要港湾となる港は、北九州港となり、該当エリア3で、0.73/千haとなった。これらのエリアは、第5章で取りまとめた博多港と同様の臨港地区を有するエリアとなり、港における海辺景観を有効に活用できる可能性が高く、重点的に景観の保全（再生）に努めるエリアであると考えられる。

表7-2 自然公園・港の存在率からみた海辺の類型

エリア 番号	海岸線 から100m 陸域 (ha)	自然公園地域 <sup>※1</sup>					港湾 <sup>※2</sup>		
		(ha)	国立	国定	都道府 県立	全体	箇所	箇所/千ha	備考
			(%)	(%)	(%)	(%)			
11	865.3	743.7	—	85.9	—	85.9	1	1.16	重要港湾
7	3,652.6	2,758.6	1.4	43.1	31.0	75.5	2	0.55	重要港湾
9	741.1	386.3	—	52.1	—	52.1	1	1.35	重要港湾
33	1,514.8	884.3	—	58.4	—	58.4	1	0.66	重要港湾
30	2,606.7	1,420.2	53.8	—	0.6	54.5	1	0.38	重要港湾
35	6,689.4	3,760.4	—	56.2	—	56.2	1	0.15	重要港湾
14	831.4	607.4	73.1	—	—	73.1	—	—	—
8	1,025.5	698.4	0.0	68.1	—	68.1	—	—	—
13	1,003.0	639.9	10.3	—	53.5	63.8	—	—	—
17	1,175.3	701.8	3.4	—	56.3	59.7	—	—	—
22	3,039.7	1,596.5	52.5	—	—	52.5	—	—	—
18	808.9	410.0	—	—	50.7	50.7	—	—	—
23	1,078.4	689.1	63.9	—	—	63.9	—	—	—
19	567.0	265.8	—	—	46.9	46.9	1	1.76	重要港湾
12	742.0	329.7	—	44.4	—	44.4	1	1.35	重要港湾
5	945.1	246.9	9.2	—	16.9	26.1	1	1.06	重要港湾
24	2,315.6	613.3	13.1	—	18.6	26.5	2	0.86	重要港湾
34	1,520.2	490.6	—	32.3	—	32.3	1	0.66	重要港湾
1	1,826.2	660.8	—	36.2	—	36.2	1	0.55	国際拠点港湾
21	1,857.9	542.4	11.4	—	17.8	29.2	1	0.54	重要港湾
32	3,165.9	967.3	0.5	23.1	7.0	30.6	1	0.32	重要港湾
40	8,112.4	2,327.4	—	28.7	—	28.7	1	0.12	重要港湾
36	9,588.3	3,591.5	37.5	—	—	37.5	1	0.10	重要港湾
39	1,284.3	579.5	—	—	45.1	45.1	—	—	—
37	1,623.0	718.1	—	—	44.2	44.2	—	—	—
31	1,399.3	613.2	37.6	—	6.2	43.8	—	—	—
2	269.9	112.0	—	41.5	—	41.5	—	—	—
27	1,161.5	478.9	—	—	41.2	41.2	—	—	—
20	2,009.3	729.4	11.8	—	24.5	36.3	—	—	—
16	761.2	209.3	27.5	—	—	27.5	—	—	—
4	688.7	51.4	—	—	7.5	7.5	1	1.45	重要港湾
6	1,404.9	205.3	0.8	1.1	12.7	14.6	2	1.42	重要港湾
10	770.0	89.7	0.0	11.7	—	11.7	1	1.30	重要港湾
3	1,371.2	9.3	0.7	—	—	0.7	1	0.73	国際拠点港湾
15	1,501.9	340.1	22.6	—	—	22.6	1	0.67	重要港湾
28	2,644.6	624.4	—	—	23.6	23.6	1	0.38	重要港湾
38	3,784.3	243.0	6.4	—	0.0	6.4	1	0.26	重要港湾
29	3,633.9	747.6	—	—	20.6	20.6	—	—	—
25	1,450.2	146.7	—	—	1.2	10.1	—	—	—
26	780.1	7.9	—	—	1.0	1.0	—	—	—

※1 太字 : 100.0~75.0%    太字 : 74.5~50.0%    太字 : 49.9~25.0%    細字 : 24.9~0.0%

※2 太字 : 1.76~0.73 箇所/ha    太字 : 0.67~0.26 箇所/ha    太字 : 0.15~0.10 箇所/ha

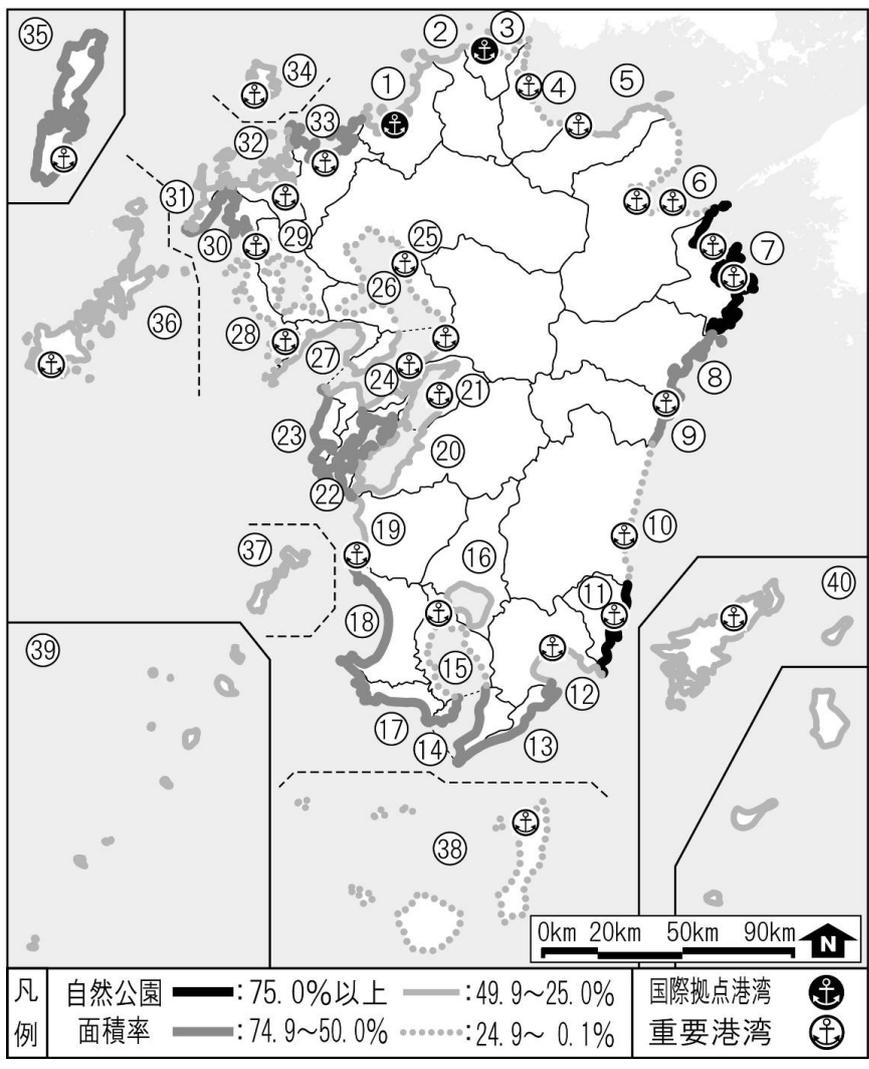


図7-3 自然公園の面積割合と港湾の位置からみた海辺の特徴

### 7-3 海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件と計画論的意義

前節までに把握・整理した、広域スケール下における海辺と中心市・高次都市からの時間距離と、自然公園・港の存在率を用いて、図7-4に散布図を示した。なお、時間距離は、海辺から中心市・高次都市の平均時間とし、港湾数/haは、四分位法に基づく4区分で色分けした。

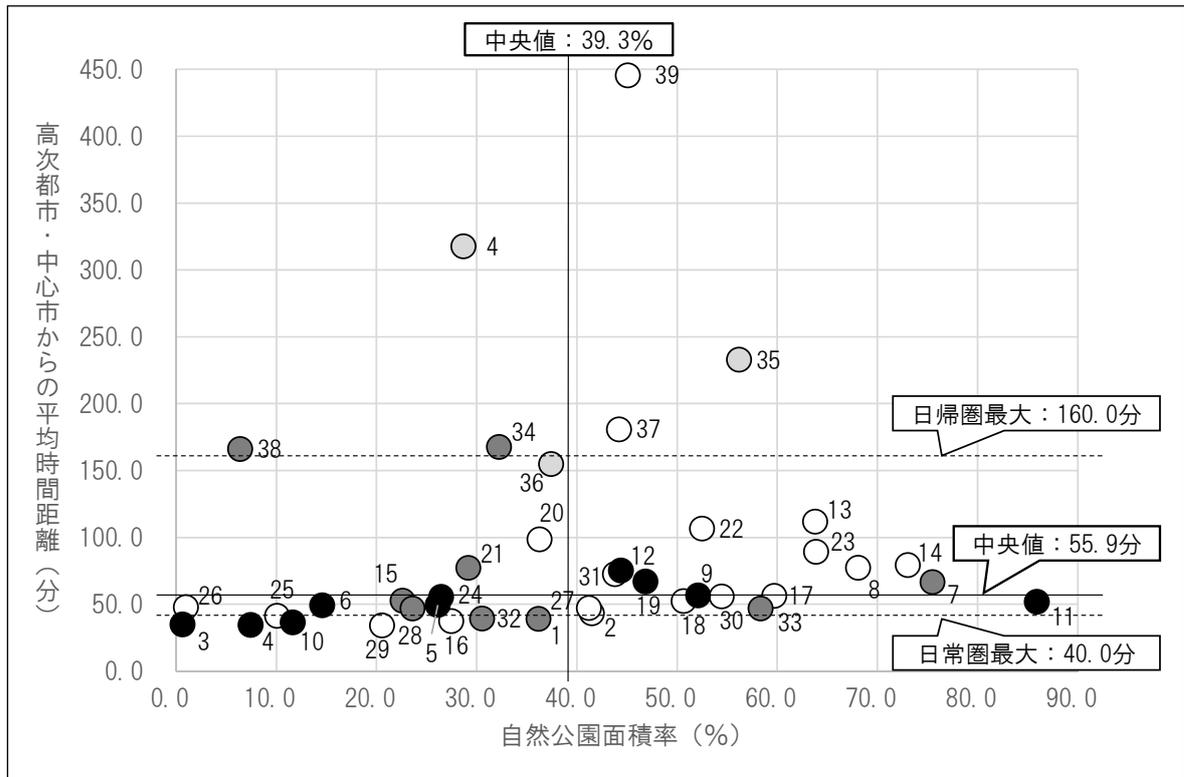
エリア3やエリア4は、中心市・高次都市からの時間距離が短く、港湾数が多いが、自然公園の面積率が低いことが窺える。このようなエリアは、都市部からの近さを踏まえた港湾景観の周遊策の展開と共に、印象深い港湾景観の保全・整備を進めることで、地域の魅力創出や活性化につなげる可能性が高いエリアであることが窺える。

エリア11やエリア7は、中心市・高次都市から時間距離が短く、港湾数ほか、自然公園率も高いエリアである。このようなエリアは、人工海岸や自然海岸などを基礎とした多様な海辺景観を容易に享受できる可能性が高く、また印象深い自然公園・港湾の景観を保全することで、地域の魅力創出や活性化につなげる可能性が高いエリアであることが窺える。

エリア38は、中心市・高次都市から日帰圏外と時間距離が長く、港湾数が多いが、自然公園面積率が低いエリアである。このようなエリアは、港湾に着目し、特定の海辺へのアクセス場所を集約すると共に、当該場所を重点的に、港湾景観の保全（再生）・整備を進めることで、効率的な地域の魅力創出・活性化につなげることが考えられるエリアである。

エリア39は、中心市・高次都市から時間距離が特に長く、港湾はないが、自然公園の海辺がみられるエリアである。このようなエリアは、都市部から離れているため、宿泊観光も組み合わせた海辺へのアクセスを検討すると共に、自然公園の保全を進めることで、地域の魅力創出・活性化につなげることが考えられるエリアである。

これらの結果は、広域スケール下において、特徴的な海辺を形成する自然公園と港湾に着目し、接近性からみた海辺景観を構成する資源としてその潜在量を示すと共に、そのタイプ別に地域の活性化や魅力創出などにつなげるための顕在化の計画条件として、捉えることができたと考える。これらのことは、広域的に海辺景観の活用や保全を検討する際に、優先的に対応すべきエリアを判断する際の指標として用いることなどが考えられる。



※港湾数

● : 1.76~0.73 箇所/ha   ● : 0.67~0.26 箇所/ha   ○ : 0.15~0.10 箇所/ha   ○ : 0.00 箇所/ha

図7-4 時間距離と自然公園率・港湾数に基づく散布図

最後に、本研究の計画フレームを図7-5に示した。

海辺景観の活用・保全の検討では、現在の移動圏の拡大に応じて、広範囲に捉える必要があるため、Step1に基づき、広域スケール下において、海辺の道路長に基づく海辺への接近性と、地形からみた海辺の特徴を把握・整理した。また、現行の海辺の特徴及び土地利用の法的区分に応じて、より具体的な計画範囲で海辺景観の活用・保全に資する潜在量を検討すべく、自然公園及び港湾を対象とした検討をStep3~4で行った。また自然公園と港湾の特徴に応じて、海辺の景観要素を明らかにするため、Step2に基づき、国内の詩歌作品から、自然区域及び港における海辺景観要素を抽出・整理した。

この結果、Step3では、港を対象に、不特定多数の人が港に自由にアクセスできる滞留用地の割合から、「港への接近性」を把握すると共に、詩歌から得られた景観要素に関連する対象物を、「港景観」の保全に資する「潜在量」として把握・整理し、「接近性」と「潜在量」を比

較することで、地区スケールにおける、港景観の顕在化に資する計画条件を示すことができた。

Step4 では、自然公園の海辺を対象に、海辺における道路長から、「海辺への接近性」を把握すると共に、詩歌から得られた自然景観要素に関連する対象物を、「自然公園の海辺景観」の保全に資する「潜在量」として把握・整理し、「接近性」と「潜在量」と比較することで、地域スケールにおける、港景観の顕在化に資する計画条件を示すことができた。

上記分析を踏まえ、Step5 では、再度、広域的スケールの視点で、海辺と中心市からの時間距離を把握し、時間的視点を踏まえた「海辺への接近性」として把握・整理すると共に、港湾・自然公園の存在率を Step3、Step4 で得られた事項を包括する「潜在量」として把握・整理し、「接近性」と「潜在量」を散布図上に比較することで、広域スケールにおいて、タイプ別に地域の活性化や、魅力創出につなげるための顕在化に関する計画条件を把握することができた。

以上のことから、現行の移動圏の拡大や、海辺に関連する土地構成の特徴などを鑑み、広域スケールから、個別具体の計画範囲となる地域スケール、地区スケールまで段階的に、海辺景観を構成する資源の潜在量を把握し、接近性からみた顕在化のための計画条件を示すことで、スケール別に海辺景観資源の潜在量把握と顕在化に資する計画論的意義を示すことができたと考える。

ただし、本研究では、地域スケールの自然公園及び地区スケールの港湾に着目して、海辺景観の活用と保全に関する示唆を示したが、第3章に示した如く、海辺には、自然公園地域や港を含む都市地域以外にも、農業地域、森林地域、自然保全地域などの他地域もあり、これらのエリアは重複することから、その他の利用目的に応じた検討が別途必要である。また、本研究は、詩歌作品から海辺景観要素を抽出し、その保全の可能性を、地区スケールを最小単位として把握したが、港湾緑地など、さらに詳細なスケールを対象とした実際の景観整備事業などでは、本研究で得られた計画条件を基礎としつつ、対象地及び周辺の土地利用実態や環境・文化、あるいは対象地の利用者の意見も踏まえながら、より詳細な検討が必要である。

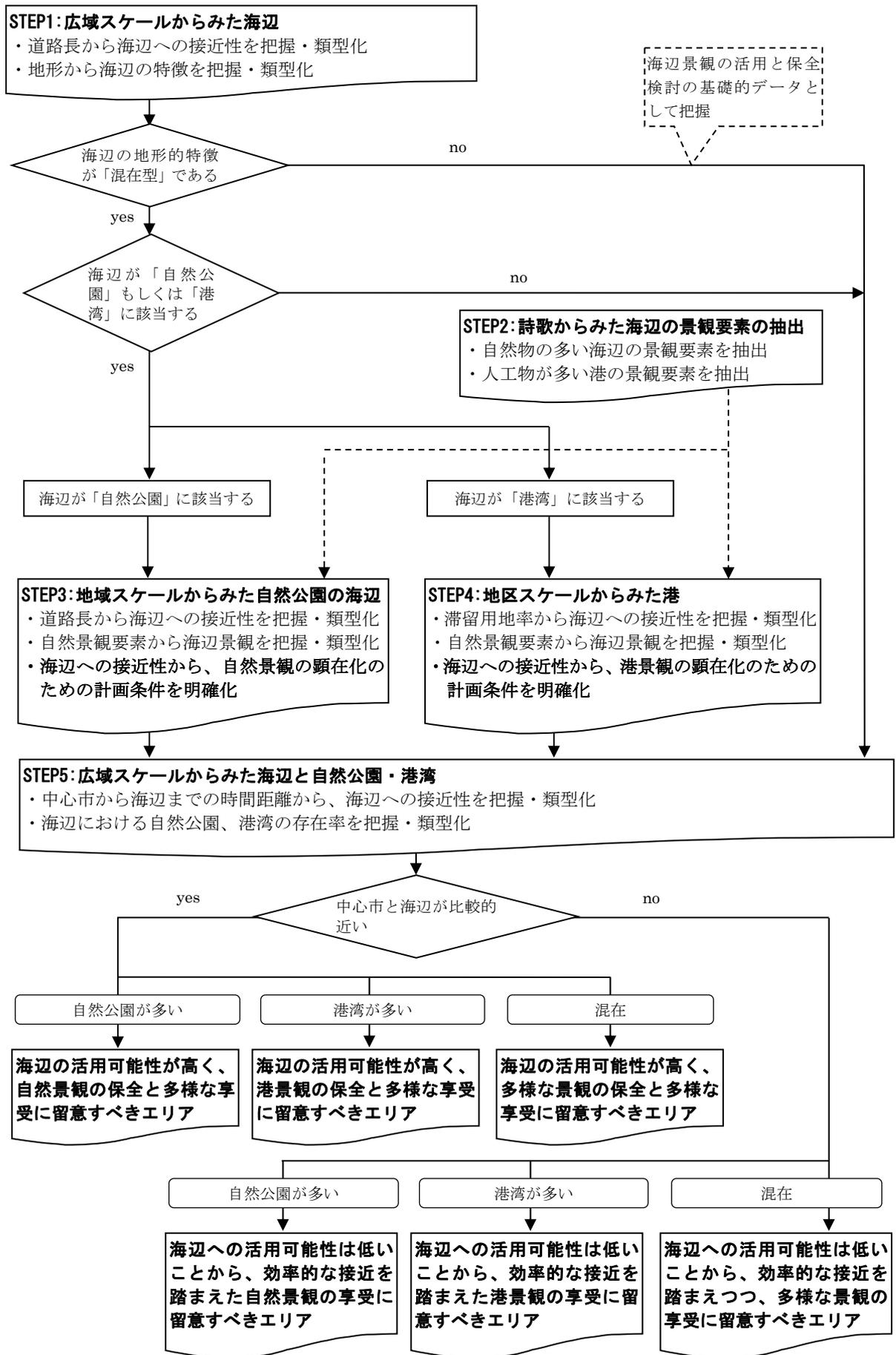


図7-5 海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件のスケール別検討手順

## 参考文献

- 1) 内閣府 HP 及び国土交通省 HP :  
([http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/minutes/2001/0418/item5s\\_1.pdf](http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/minutes/2001/0418/item5s_1.pdf),  
2014, 8, 17 参照)
- 2) 国土交通省：土地総合情報ライブラリー，国土交通省HP  
(<http://tochi.mlit.go.jp/seido-shisaku/tochi-riyou>, 2013, 11, 13 参照)
- 3) 新村出 (2008)：広辞苑第六版，岩波書店
- 4) 環境省(1985)：第 3 回自然環境保全基礎調査，生物多様性情報システム，  
<http://www.biodic.go.jp/J-IBIS.htm>
- 5) 藤野慎吾 (1981)：新体系土木工学 81 港湾計画，社会法人土木学会，pp2
- 6) 5) に同じ
- 7) 海岸管理の歴史の変遷 - 国土技術政策総合研究所
- 8) 土地総合情報ライブラリー，国土交通省国土計画局 HP
- 9) 藤野慎吾 (1981)：新体系土木工学 81 港湾計画，社団法人土木学会，1-3、
- 10) 国土交通省港湾局 (2005)：港湾行政のクリーン化，独立行政法人国立印刷局，
- 11) 国土交通省国土計画局 HP
- 12) 村井宏他 (1992)：日本の海岸林—多面的な環境機能とその活用，株式会社ソフトサイエンス社
- 13) 木村三郎 (1991)：白砂青松考—その造園史的意義について，造園雑誌 54, 37-41
- 14) 松原雄平，森川数美，市村康，小泉知義，常保雅章 (2008)：CVM および TCM による海岸整備事業の評価，海洋開発論文集 Vol. 24, 1165-1170、
- 15) 宇多高明，菊池昭男，三波俊郎，芹沢真澄，古池鋼，柴崎誠 (2005)：リーフ海岸での侵食対策とその問題点，海洋開発論文集 Vol. 21, 469-474
- 16) 岡田智秀 (2011)：海岸空間とその背後空間を一体的に捉えた新たな海岸まちづくりに向けて，都市計画論文集 46
- 17) 河野茂樹，小野田祐二 (2007)：景観対策としての巨石被覆工について，海洋開発論文集 23, 901-906
- 18) 岡田智秀，横内憲久，桜井慎一 (1997)：港湾施設を市民に認知させる景観のあり方に関する考察，土木学会論文集 No. 555, 61-70
- 19) 盛岡通，藤田壮，大竹一生 (1997)：沿岸域複合的地域開発で失われる自然海浜のミティゲーションの費用便益に関する評価，環境システム研究, 105-110
- 20) 柴山知也，森近裕一郎 (2012)：海岸原風景の回復を目指したエネルギー逸散型岸沖構造物の検討，海岸工学論文集 Vol. 49, 1386-1390
- 21) 上島顕司，斎藤潮，善見政和 (1999)：都市と水辺の一体性を確保した水際空間の構成原理とデザイン，港湾技研資料，pp32
- 22) 西林大介，岡田昌彰 (2005)：ウォーターフロント夜景の特長とその評価に関する

- る研究, 海洋開発論文集, 199-203
- 23) 安藤泰也, 横内憲久, 桜井慎一 (1999): ウォーターフロントの夜間景観に関する研究 対岸景の評価と光の量との関連性について, 日本建築学会計画系論文集 No. 516, 295-301
  - 24) 山田 麻子, 大野 啓一 (2000): 三浦半島における群植物社会学的手法による植生景観の区分と評価, 植生学会誌 17, 1-17
  - 25) 浅見佳世, 赤松弘治, 辻秀之, 田村和也, 松村俊和, 服部保 (2003): 松原の植生景観の保全に与える管理の影響, ランドスケープ研究 Vol. 66, 555-558
  - 26) 南里美緒, 横張真, 落合基継 (2009): 近江八幡の水郷景観におけるヨシ原の変遷とその文化的景観としての保全策, ランドスケープ研究 Vol. 72, 731-734
  - 27) 志摩邦雄, 小柳武和, 山形耕一, 永田文規 (1994): 日立海岸における野鳥を視対象とした海岸景観に関する研究, 海岸工学論文集 Vol. 41, 1141-1145
  - 28) 沢本正樹 (1992): 色からみた海岸工学 海岸光学のすすめ, 海岸 Vol. 32, 5-11
  - 29) 日本造園学会 (1978): 造園ハンドブック, 技報堂出版, pp114
  - 30) 2) と同じ
  - 31) 青木繁ほか (1993): 建築大辞典第2版: 彰国社、5) 土木学会 (1999): 土木用語大辞典, 技報堂出版
  - 32) 進士五十八 (1999): 風景デザイン, 学芸出版社
  - 33) 久保貞、杉本正美、安倍大就、中瀬勲、平岡順一 (1980): 都市景観へのビヘビアルアプローチ, 建築と社会)
  - 34) 杉本正美 (1989): 都市と空間—景観デザインへの接近—, 都市科学 Vol. 2
  - 35) 採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究会編 (2010): 採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究 (報告): 文化庁文化財部記念物課)
  - 36) 松原雄平, 大ひつ剛, 安達誠, 南本浩一 (2002): 海岸保全施設の設計への感性工学手法の適用に関する研究, 海岸工学論文集 Vol. 49, 956-960、
  - 37) 熊谷健蔵, 松原雄平 (2001): 感性工学的手法による海岸景観評価に関する研究, 海岸工学論文集 Vol. 48, 1326-1330、
  - 38) 松島肇, 浅川昭一郎, 愛甲哲也 (1998): 北海道胆振海岸を事例とした住民による海岸評価に関する研究, 環境情報科学, 197-202
  - 39) 松島肇, 及川昌樹, 上田裕文 (2012): 大学生の海岸に対する心象風景の形象について, ランドスケープ研究 Vol. 75, 537-540
  - 40) 除本理史, 尾崎寛直 (2006): 個人史からみた川崎における水辺環境の歴史的変容過程, 沿岸域学会誌 Vol. 17, 55-66
  - 41) 押田佳子, 上甫木昭春, 山田昌枝 (2005): 自然環境教育を通じた児童が抱く

- 理想の浜辺風景の変化に関する研究, ランドスケープ研究 Vor68, 457-462
- 42) 辻本剛三, 柿木哲哉, 角野昇八 (2004): 人々の海岸の原風景を海岸整備に活用するための手法について, 海洋開発論文集 Vol. 20, 281-286
- 43) 三溝裕之, 横内憲久, 桜井慎一, 岡田智秀 (1998): 海浜空間の景観デザインに関する研究 古来より讃えられた海浜と大学生の心象風景を対象として, 土木計画学研究論文集, 393-401
- 44) 井上雅夫, 橋中秀典, 近藤雅彦, 橋詰雅子 (2002): 秋冬季における砂浜海岸の利用実態調査, 海岸工学論文集 Vol. 49, 1396-1400
- 45) 松島肇, 浅川昭一郎, 愛甲哲也 (2000): 北海道石狩浜における海岸利用者の景観に対する評価について, ランドスケープ研究 63
- 46) 竹沢三雄, 前野賀彦, 土川孝雄, 滝沢幸一郎 (1993): 漁港形状の美観の定量的評価法に関する研究, 海岸工学論文集 Vol. 40, 1141-1145
- 47) 内田唯史, 浮田正夫, 中園真人, 中西弘 (1995): 都市沿岸域における海岸アメニティ価値の評価に関する研究, 土木学会論文集 No. 509, 211-220
- 48) 東島義郎, 竹下正俊 (1993): 船舶の観賞方向の適性に関する研究, 港湾技研資料 No. 762, pp23
- 49) 上島顕司, 加藤寛, 斎藤潮 (1990): 港の景観構成に関する研究, 港湾技術研究所報告 Vol. 29, 95-97, 99-118
- 50) 東島義郎, 小林亨, 竹下正俊 (1995): 海岸景観の記述表現からみた海岸の景観現象と人の認識構造との関係, 港湾技研資料 No. 809, pp26
- 51) 岡田昌彰 (2004): 旧沿岸域要塞における景観・空間の価値評価に関する研究, 海洋開発論文集 Vol. 20, 251-256
- 52) 星野裕司, 小林一郎, 萩原健志 (2001): 九州内の明治期に建設された砲台から得られる眺望景観に関する研究, 土木計画学研究・論文集 Vol. 18, 339-348
- 53) 田村浩大, 横内憲久, 岡田智秀, 三溝裕之 (2004): 海浜空間におけるエゴロジカルスケープに関する研究 松林を対象として, 日本建築学会計画系論文集 No586, 201-208
- 54) 坂井猛, 出口敦, 萩島哲, 菅原辰幸 (1994): 広重の浮世絵風景画にみる景観分類に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 No. 461, 165-174
- 55) 飯田晶子, 石川幹子 (2008): 幕末・明治期の横浜旧居留地・外国人遊歩道における文化的景観に関する研究-「横浜写真」・「横浜絵葉書」を用いた景観分析を通して-, 都市計画論文集 No. 43-2/43-3
- 56) 岡田智秀, 横内憲久, 島妃沙子 (2002): わが国における「海景観賞の型」とその空間構成に関する研究 江戸名所図会にみる視覚構造を通じて, 土木計画学研究・論文集 Vol. 19, 321-330

- 57) 上島顕司, 吉村晶子 (2003) : 臨海部における空間整備の規範及び評価軸の体系化に関する研究-里浜づくりの理念及び計画手法の確立をめざして-, 国土技術政策総合研究所資料 No. 97, pp25
- 58) 西田正憲 (2001) : 瀬戸内海における海岸景の変遷, ランドスケープ研究 Vol. 64, 479-484
- 59) 吉田恵介, 松島肇, 浅川昭一郎 (2004) : 北海道沿岸部景観の変遷と評価-江戸期廻浦日誌の図会と現代の観光パンフレットの分析を通して-, 環境情報科学, 119-124
- 60) 北原理雄 (1990) : 校歌にうたわれた都市の景観構造に関する研究 伊勢平野の3都市を事例に, 都市計画論文集 No. 25, 673-678
- 61) 国土交通省 (2005) : 「二層の広域圏に資する総合的な交通体系に関する検討委員会」最終報告資料
- 62) 総務省: 広域行政・市町村合併<<http://www.soumu.go.jp/kouiki/kouiki.html>>, 2012. 12. 31 更新, 2013. 1. 5 参照
- 63) 総務省: 定住自立圏構想: 総務省ホームページ<<http://www.soumu.go.jp>>, 2009. 3. 31 更新, 2009. 8. 10 参照
- 64) 宇多高明, 武中信之 (1991) : 海洋性レクリエーション利用から見た全国沿岸域の類型化, 土木研究所報告 No. 183, 1-3, 5-22
- 65) 敷田麻実 (1994) : エコツーリズムと日本の沿岸域におけるその可能性, 日本沿岸域会議論文集 No. 6, 1-15
- 66) 浅田拓海 (2009) : 「シーニックバイウェイ北海道」指定ルートのシークエンス景観の評価に関する研究, 土木学会論文集D Vol. 65 No. 1, 77-87
- 67) 中岡裕章 (2012) : 江の島における日帰り観光の実態, 地理誌叢 Vol. 53, 20-30
- 68) 山上徹 (2003) : 港湾都市の活性化と港湾観光, 都市政策 No. 111, 14-24
- 69) 国土交通省 (2009) : 九州圏広域地方計画
- 70) 生物多様性情報システム HP : 環境省
- 71) 白砂青松 100 選 : 農林水産省林野庁 HP
- 72) 文化財保護法等で定められる芸術上または観賞上価値が高い土地 (文化庁 HP)
- 73) 博多港港湾計画 (2001) : 福岡市港湾局
- 74) 中瀬勲 : 「流域を基礎にした緑地計画に関する研究」, Reprinted from Bulletin of the University of Osaka Prefecture Series B Vol. 33, pp72, 1998
- 75) 高山茂美 (1974) : 河川地形, 共立出版, 4-5
- 76) 環境庁自然保護局 (1985) : 第 3 回自然環境保全基礎調査要綱
- 77) 2001 年 9 月の米国同時多発テロ事件を契機として 2004 年 7 月に策定された「国際航海船舶及び国際港湾施設の保安の確保等に関する法律 (略称 : 国際船舶・港

湾保安法)」。国際航海船舶や国際港湾施設に対し、入国審査時の厳重なチェック体制が図られており、国際コンテナターミナルなどでは、一般来訪者の立ち入りが制限されている。

国土交通省HP <http://www.pa.hrr.mlit.go.jp/images/hoan/solas.pdf>

- 78) 石川 貴士, 中園 眞人, 内田 唯史, 岩本 慎二, 浮田 正夫(1993): 小学校校歌にみる福岡の環境イメージ, 環境システム研究 Vol. 21, 257-263
- 79) 積田 洋, 竹内 政裕, 鈴木 弘樹 (2011): 俳句から連想する心象風景の構成と心理的評価の研究、日本建築学会計画系論文集 Vol. 76 No. 669, 2093-2099
- 80) 金 在浩, 中村 良夫(1988): 景観体験における「詩吟行為」の役割に関する考察, 造園雑誌 Vol. 52 No. 5, 205-210
- 81) 中村良夫 (1994): 風景学入門, 中公新書, 60
- 82) 井本農一:「作歌・作句 その創作へのアプローチ」, 日本放送出版協会, 1986
- 83) 日本造園学会 (1978): 造園ハンドブック, 技法堂出版, pp135
- 84) 戸沼幸市 (1978): 人間尺度論, 章国社, 147-153
- 85) 九州森林管理局 (2006): 九州森林管理局管内図
- 86) 国土地理院 (2001-2003): 数値地図 25000: 財団法人日本地図センター
- 87) 国土交通省 (2006): 国土数値情報ダウンロードサービス
- 88) 国土地理院 (2001-2003): 数値地図 25000: 財団法人日本地図センター
- 89) 環境庁 (1989-2001): 自然環境保全基礎調査: 生物多様性情報システム < <http://www.biodic.go.jp/J-IBIS.html> >, 2009. 5. 15 更新, 2009. 8. 10 参照
- 90) 環境庁 (1989-2001): 自然環境保全基礎調査: 生物多様性情報システム < <http://www.biodic.go.jp/J-IBIS.html> >, 2009. 5. 15 更新, 2009. 8. 10 参照
- 91) 国土交通省 (2006): 国土数値情報ダウンロードサービス < <http://nlftp.mlit.go.jp/ksj> >, 2009. 7. 29 更新, 2009. 8. 10 参照
- 92) 国土地理院 (2001-2003): 数値地図 25000: 財団法人日本地図センター
- 93) 環境庁 (1989-2001): 自然環境保全基礎調査: 生物多様性情報システム < <http://www.biodic.go.jp/J-IBIS.html> >, 2009. 5. 15 更新, 2009. 8. 10 参照
- 94) 石井進ほか (2002): 詳説日本史, 山川出版社
- 95) 新村出:「広辞苑」, 岩波出版, 1998
- 96) 青木生子他校注:「新潮日本古典集成 萬葉集 1~5」, 新潮社, 1988
- 97) 窪田空穂校注:「古今和歌集評釈上~下巻」, 東京堂出版, 1985
- 98) 久保田淳校注:「新潮日本古典集成 新古今和歌集上・下」, 新潮社, 1984
- 99) 樋口芳麻呂校注:「新潮日本古典集成 金槐和歌集」, 新潮社, 1981
- 100) 伊地知鐵男校注:「日本古典文学大系 39 連歌集」, 岩波書店, 1960
- 101) 伊地知鐵男校注:「日本古典文学大系 39 連歌集」, 岩波書店, 1960

- 102) 今栄蔵校注：「新潮日本古典集成 松尾芭蕉集」，新潮社，1982
- 103) 清水孝之校注：「新潮日本古典集成 與謝蕪村集」，新潮社，1982
- 104) 島崎藤村：「島崎藤村 日本の詩歌第1巻」：中央公論社，1968
- 105) 与謝野晶子：「与謝野晶子 日本の詩歌第4巻」：中央公論社，1968
- 106) 石川啄木：「石川啄木 日本の詩歌第4巻」：中央公論社，1968
- 107) 新編国歌大観編集委員会(2003)：新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver. 2：角川書店
- 108) 古典俳文学大系 CD-ROM 版編集委員会(2004)：古典俳文学大系 CD-ROM 版：集英社
- 109) 現代俳句協会：現代俳句データベース<<http://www.haiku-data.jp/>>、2005. 9. 5 更新、2006. 5. 5 参照
- 110) 大野雑草子(1989)：俳句用語用例小事典⑤海の俳句を詠むために：博友社
- 111) 俳句囊編集委員会(2002)：俳句囊 CD-ROM：日外アソシエーツ、112) 俳句情報 検索：<http://www.jfast.net/~takasawa/>、2000. 5. 15 更新、2006. 5. 5
- 113) 環境庁：「日本の自然景観九州 I」，大蔵省印刷局，1989
- 114) 福岡市下水道局(2005)：福岡市公共下水道計画図
- 115) 福岡市港湾局(2008)：博多港長期構想みなとまち専門委員会資料
- 116) 港湾緑地のビオトープ整備事例として，東京港野鳥公園などがある：  
<<http://www.wbsj.org/sanctuary/tokyoko/>>，2007. 9. 16 更新，2007. 9. 16 参照
- 117) 白石直文(1986)：港湾工学：鹿島出版会，2pp
- 118) 福岡市港湾局(2001)：博多港港湾計画改訂その2
- 119) 118) と同じ
- 120) 政策統括官付参事官室(2004)：総合交通分析システム(NITAS)Ver1.7：国土交通省<<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/>>，2009. 7. 29 更新，2009. 8. 10 参照
- 121) 二層の広域圏の形成に資する総合的な交通体系に関する検討委員会(2005)：新しい国のかたち「二層の広域圏」を支える総合的な交通体系最終報告書：国土交通省
- 122) 道路時刻表研究会(1999)：道路時刻表，道路整備促進期成同盟会全国協議会
- 123) 国土交通省(2006)：国土数値情報ダウンロードサービス

## 図表リスト

図表番号	図表名	ページ
表 1-1	これまでの全国総合開発計画と国土形成計画の概要	3
表 1-2	5地域の概要	4
表 1-3	国内の海辺に関わる主な出来事	6
図 1-1	国内における主な植林活動の背景	7
図 2-1	研究の構成	16
図 2-2	九州圏と玄海国定公園	17
図 2-3	玄海国定公園と博多港（特定重要港湾）	18
図 2-4	博多港港湾計画範囲	19
図 2-5	「海辺への接近性」の判断基準イメージ	21
図 2-6	景観距離域の設定イメージ	24
表 2-1	中心市・高次都市要件	25
図 2-7	中心市と海岸線の時間距離設定方法イメージ	25
図 3-1	九州圏と一次流域界に基づく調査単位	26
表 3-1	土地利用基本計画に基づく利用区分	28
図 3-2	土地利用基本計画に基づく利用区分	29
表 3-2	海辺における道路長	30
図 3-3	海辺の道路長率	30
表 3-4	海岸線の整備状況からみた海辺の類型	32
図 3-4	海岸線の整備状況からみた海辺の類型	33
表 3-5	海域の状況	34
表 3-6	陸域の標高差からみた海辺の類型	36
図 3-5	海岸線から陸域 100m と 100m～1km の平均標高差	37
図 3-6	海岸線から陸域 100m と 1km～10km の平均標高差	37
表 3-7	陸域の土地利用状	38
図 3-7	陸域の土地利用状況（近距離景）	39
図 3-8	陸域の土地利用状況（中距離景）	39
図 3-9	陸域の土地利用状況（遠距離景）	39
表 3-8	九州圏における海辺の状況	41
図 3-10	海岸線の状況（再掲）	43
図 3-11	自然公園図と港湾	43
図 4-1	海辺における主な出来事と時代区分	44
表 4-1	引用詩歌作品一覧	45
図 4-2	句単位の設定方法	46
表 4-2	海辺に係わる引用詩歌作品と時代区分	46
図 4-3	詩歌で詠われていた海辺の主な骨格要素	47

図4-4	詩歌で詠われていた海辺の主な個別要素	47
表4-3	時代区分及び引用詩歌句数	48
図4-5	詩歌から抽出した港の主な景観要素	49
図4-6	景観要素「植物」の詳細	49
図4-7	景観要素「海の様子」の詳細	50
図4-8	景観要素「鳥」の詳細	50
図5-1	玄海国定公園の領域及び主な流域図	52
表5-1	海岸線の整備状況からみた海辺の類型化	54
図5-2	自然状況の三角グラフ	54
図5-3	海辺の自然状況	55
表5-2	玄海国定公園保護計画特別地域の延長とその指定率	57
図5-4	玄海国定公園における特別地域の領域図	58
表5-3	接近性からみた海辺の類型化	59
図5-5	海辺への接近性	60
表5-4	自然景観資源一覧	62
表5-5	各エリアの自然景観資源長及び延長率	63
表5-6	印象的な自然景観からみた海辺の類型化	64
図5-6	印象的な自然景観からみた海辺の類型化	65
表5-7	自然公園における海辺景観の活用可能性に資する要素の類型化	67
図6-1	博多港港湾計画範囲及びエリア単位	69
表6-1	各エリアの面積	70
図6-2	対象エリアにおけるゾーニング区分	70
表6-2	滞留用地面積と類型化	71
図6-3	滞留用地の位置	72
表6-3	滞留用地における水際線	72
表6-4	詩歌からみた港の景観要素と現在の港の景観対象	74
表6-5	緑地の計画面積	75
表6-6	水際線延長	75
表6-7	海浜計画にみる海浜の計画延長	76
図6-4	緑地・海浜の位置	76
表6-8	各エリアのバース整備計画	78
表6-9	各エリアの棧橋整備計画	79
表6-10	干潟の状況	80
図6-5	係留施設・干潟の位置	80
表6-11	博多港周辺の鳥類(羽)	81
表6-12	博多港の景観再生に資する空間構成	82

図 6-6	博多港の景観再生に資する空間構成	82
表 7-1	中心市と海辺の平均時間距離	85
図 7-1	中心市と海辺の平均時間距離	85
図 7-2	高次都市と海辺の平均時間距離	85
表 7-2	自然公園・港の存在率からみた海辺の類型	87
図 7-3	自然公園の面積割合と港湾の位置からみた海辺の特徴	88
表 7-3	自然公園・港の活用と再生・保全の必要性に関する潜在量	90
図 7-4	スケール別にみた海辺景観の活用・保全・再生すべき 潜在量の把握手順	92

## 参考資料

## 参考資料 1 広域スケールにおける中心市・高次都市から海辺までの時間距離の諸元データ

対象 177	中心市・ 高次都市 (役割)	所要 時間 (分)	平均 時間 (分)	海辺の即地点	経路1 (手段)	経路1 (時間)	経路1 (到着地)	経路2 (手段)	経路2 (時間)	経路2 (到着地)	経路3 (手段)	経路3 (時間)	経路3 (到着地)	経路4 (手段)	経路4 (時間)	経路4 (到着地)	経路5 (手段)	経路5 (時間)	経路5 (到着地)	経路6 (手段)	経路6 (時間)	経路6 (到着地)	経路7 (手段)	経路7 (時間)	経路7 (到着地)	経路8 (手段)	経路8 (時間)	経路8 (到着地)	経路9 (手段)	経路9 (時間)	経路9 (到着地)	経路10 (手段)	経路10 (時間)	経路10 (到着地)					
1	唐津市	38	35.0	北緯33度33分51秒 東経130度3分16秒	一般道	15	二丈浜玉 有料道路	二丈浜玉 有料道路	8	二丈浜玉 有料道路	一般道	16																											
1	福岡市	29		北緯33度40分52秒 東経130度23分38秒	一般道	3	天神北	二丈浜玉 有料道路	8	香椎	一般道	18																											
1	宮若市	38		北緯33度51分4秒 東経130度2分2秒	一般道	38																																	
2	宮若市	38	37.7	北緯33度51分4秒 東経130度2分2秒	一般道	38																																	
2	直方市	33		北緯33度39分45秒 東経130度39分28秒	一般道	34																																	
2	直方市	42		北緯33度56分4秒 東経130度41分8秒	一般道	43																																	
3	直方市	42	34.0	北緯33度56分4秒 東経130度41分8秒	一般道	43																																	
3	北九州市	36		北緯33度56分21秒 東経130度50分36秒	一般道	2	勝山	北九州市 高速道路	4	戸畑	接続又は 一般道	1	小倉	若戸大橋	5	若戸大橋 p-列-	一般道	24																					
3	北九州市	24		北緯33度56分34秒 東経131度0分54秒	一般道	7	足立	北九州市 高速道路	9	春日	一般道	8																											
4	北九州市	24	22.0	北緯33度56分34秒 東経131度0分54秒	一般道	7	足立	北九州市 高速道路	9	春日	一般道	8																											
4	田川市	38		北緯33度43分4秒 東経131度1分2秒	一般道	39																																	
4	中津市	4		北緯33度38分40秒 東経131度12分17秒	一般道	5																																	
5	中津市	4	17.3	北緯33度38分40秒 東経131度12分17秒	一般道	5																																	
5	中津市	32		北緯33度34分48秒 東経131度24分3秒	一般道	32																																	
5	国東市	16		北緯33度39分25秒 東経131度40分3秒	一般道	17																																	
6	国東市	16	33.7	北緯33度39分25秒 東経131度40分3秒	一般道	17																																	
6	杵築市	18		北緯33度20分46秒 東経131度29分46秒	一般道	3	杵築	大分空港 道路	5	藤原 JCT	一般道	11																											
6	大分市	67		北緯33度15分53秒 東経131度53分55秒	一般道	67																																	
7	大分市	67	46.3	北緯33度15分53秒 東経131度53分55秒	一般道	67																																	
7	佐伯市	31		北緯32度46分29秒 東経131度51分51秒	一般道	31																																	
7	佐伯市	41		北緯32度46分29秒 東経131度51分51秒	一般道	42																																	
8	佐伯市	41	30.0	北緯32度46分29秒 東経131度51分51秒	一般道	42																																	
8	延岡市	24		北緯32度38分53秒 東経131度45分50秒	一般道	24																																	
8	日向市	25		北緯32度29分41秒 東経131度42分25秒	一般道	26																																	
9	日向市	25	18.7	北緯32度29分41秒 東経131度42分25秒	一般道	26																																	
9	日向市	6		北緯32度23分35秒 東経131度38分42秒	一般道	6																																	
9	日向市	25		北緯32度18分32秒 東経131度35分26秒	一般道	26																																	
10	日向市	25	28.0	北緯32度18分32秒 東経131度35分26秒	一般道	26																																	
10	高崎市	28		北緯32度1分32秒 東経131度29分36秒	一般道	12		一ツ葉有料 道路(北緯)	7	一ツ葉有料 道路(北緯)	一般道	9																											
10	日南市	31		北緯31度44分8秒 東経131度27分53秒	一般道	32																																	
11	日南市	31	31.3	北緯31度44分8秒 東経131度27分53秒	一般道	32																																	
11	日南市	9		北緯31度33分58秒 東経131度23分46秒	一般道	9																																	
11	志布志市	54		北緯31度22分5秒 東経131度20分35秒	一般道	55																																	
12	志布志市	54	34.0	北緯31度22分5秒 東経131度20分35秒	一般道	55																																	
12	志布志市	12		北緯31度28分23秒 東経131度0分17秒	一般道	12																																	
12	鹿屋市	36		北緯31度19分18秒 東経131度6分22秒	一般道	37																																	
13	鹿屋市	36	58.0	北緯31度19分18秒 東経131度6分22秒	一般道	37																																	
13	鹿屋市	54		北緯31度0分35秒 東経130度59分9秒	一般道	55																																	
13	鹿屋市	84		北緯31度0分35秒 東経130度59分9秒	一般道	85																																	
14	鹿屋市	84	31.2	北緯31度0分35秒 東経130度59分9秒	一般道	85																																	
14	指宿市	14		北緯31度12分12秒 東経130度45分12秒	一般道	14																																	
14	鹿屋市	34		北緯31度12分8秒 東経130度38分39秒	一般道	35																																	
14	鹿屋市	14		北緯31度20分49秒 東経130度47分38秒	一般道	15																																	
14	鹿屋市	18		北緯31度18分17秒 東経130度47分29秒	一般道	18																																	
14	指宿市	23		北緯31度9分51秒 東経130度31分45秒	一般道	24																																	



対象	中心市・ 高次都市 (仮称)	所要 時間 (分)	平均 時間 (分)	海辺の即地点	経路1 (手段)	経路1 (時間)	経路1 (到着地)	経路2 (手段)	経路2 (時間)	経路2 (到着地)	経路3 (手段)	経路3 (時間)	経路3 (到着地)	経路4 (手段)	経路4 (時間)	経路4 (到着地)	経路5 (手段)	経路5 (時間)	経路5 (到着地)	経路6 (手段)	経路6 (時間)	経路6 (到着地)	経路7 (手段)	経路7 (時間)	経路7 (到着地)	経路8 (手段)	経路8 (時間)	経路8 (到着地)	経路9 (手段)	経路9 (時間)	経路9 (到着地)	経路10 (手段)	経路10 (時間)	経路10 (到着地)				
27	鎌倉市	50	40.7	北緯32度38分29秒 東経130度8分36秒	一般道	51																																
27	鎌倉市	14		北緯32度45分51秒 東経130度2分49秒	一般道	14																																
27	長崎市	58		北緯32度34分44秒 東経129度44分30秒	一般道	58																																
28	長崎市	58	46.7	北緯32度34分44秒 東経129度44分30秒	一般道	58																																
28	長崎市	42		北緯32度49分50秒 東経129度43分10秒	一般道	13	川平道路	川平道路	4	川平道路	一般道	26																										
28	佐世保市	40		北緯33度25分52秒 東経129度40分43秒	一般道	7	佐世保 みえと	西九州 自動車道	3	佐世保大塔	一般道	31																										
29	佐世保市	40	32.7	北緯33度5分52秒 東経129度40分49秒	一般道	7	佐世保 みえと	西九州 自動車道	3	佐世保大塔	一般道	31																										
29	鎌倉市	31		北緯32度55分43秒 東経129度40分43秒	一般道	14	鎌早	長崎 自動車道	9	大村	一般道	8																										
29	佐世保市	27		北緯33度6分8秒 東経129度40分2秒	一般道	27																																
30	佐世保市	27	55.6	北緯33度6分8秒 東経129度40分2秒	一般道	27																																
30	佐世保市	41		北緯33度12分8秒 東経129度33分13秒	一般道	41																																
30	佐世保市	45		北緯33度21分27秒 東経129度34分10秒	一般道	44	平戸大橋	平戸大橋	1	平戸大橋	一般道	1																										
30	佐世保市	71		北緯33度16分9秒 東経129度30分10秒	一般道	44	平戸大橋	平戸大橋	1	平戸大橋	一般道	27																										
30	佐世保市	94		北緯33度11分39秒 東経129度26分19秒	一般道	44	平戸大橋	平戸大橋	1	平戸大橋	一般道	50																										
31	佐世保市	94	72.3	北緯33度11分39秒 東経129度26分19秒	一般道	44	平戸大橋	平戸大橋	1	平戸大橋	一般道	50																										
31	佐世保市	78		北緯33度17分30秒 東経129度25分29秒	一般道	44	平戸大橋	平戸大橋	1	平戸大橋	一般道	34																										
31	佐世保市	45		北緯33度21分27秒 東経129度34分10秒	一般道	44	平戸大橋	平戸大橋	1	平戸大橋	一般道	1																										
32	佐世保市	45	26.7	北緯33度21分27秒 東経129度34分10秒	一般道	44	平戸大橋	平戸大橋	1	平戸大橋	一般道	1																										
32	伊万里市	24		北緯33度18分34秒 東経129度48分29秒	一般道	24																																
32	唐津市	11		北緯33度25分58秒 東経130度0分56秒	一般道	12																																
33	唐津市	11	25.0	北緯33度25分58秒 東経130度0分56秒	一般道	12																																
33	唐津市	32		北緯33度33分19秒 東経129度51分10秒	一般道	33																																
33	唐津市	19		北緯33度31分35秒 東経129度57分24秒	一般道	20																																
33	唐津市	38		北緯33度33分19秒 東経130度3分18秒	一般道	15	二丈浜玉 有料道路	二丈浜玉 有料道路	8	二丈浜玉 有料道路	一般道	16																										
34	唐津市	158	143.3	北緯33度51分32秒 東経129度42分52秒	一般道	27	呼子	航路	100	印通寺	一般道	31																										
34	唐津市	132		北緯33度45分28秒 東経129度47分40秒	一般道	27	呼子	航路	100	印通寺	一般道	5																										
34	唐津市	140		北緯33度42分27秒 東経129度42分52秒	一般道	27	呼子	航路	100	印通寺	一般道	13																										
35	福岡市	283	232.7	北緯34度1分47秒 東経129度27分17秒	一般道	3	天神北	福岡都市 高速道路	2	東浜	接続又は 一般道	6	博多	航路 (ハズ港)	30	博多	接続又は 一般道	0	博多	航路	70	郷ノ浦	接続又は 一般道	0	郷ノ浦	航路	60	殿原	一般道	111								
35	福岡市	206		北緯34度19分43秒 東経129度27分22秒	一般道	3	天神北	福岡都市 高速道路	2	東浜	接続又は 一般道	6	博多	航路 (ハズ港)	30	博多	接続又は 一般道	0	博多	航路	70	郷ノ浦	接続又は 一般道	0	郷ノ浦	航路	60	殿原	一般道	35								
35	福岡市	209		北緯34度20分28秒 東経129度12分58秒	一般道	3	天神北	福岡都市 高速道路	2	東浜	接続又は 一般道	6	博多	航路 (ハズ港)	30	博多	接続又は 一般道	0	博多	航路	70	郷ノ浦	接続又は 一般道	0	郷ノ浦	航路	60	殿原	一般道	37								
36	佐世保市	120	154.7	北緯33度18分8秒 東経129度8分2秒	一般道	5	佐世保	航路 (ハズ港)	30	佐世保	接続又は 一般道	0	佐世保	航路	80	平	一般道	6																				
36	長崎市	147		北緯32度45分28秒 東経129度56分40秒	一般道	4	長崎 (長崎)	航路	30	長崎 (長崎)	接続又は 一般道	0	長崎 (長崎)	航路	85	福江	接続又は 一般道	0	福江	航路	27	浦	一般道	1														
36	長崎市	197		北緯32度35分53秒 東経128度38分15秒	一般道	4	長崎 (長崎)	航路 (ハズ港)	30	長崎 (長崎)	接続又は 一般道	0	長崎 (長崎)	航路	85	福江	接続又は 一般道	0	福江	航路 (ハズ港)	0	福江	一般道	78														
37	座間 川内市	120	162.7	北緯31度52分2秒 東経129度55分17秒	一般道	27	串木野	航路	85	里	一般道	8																										
37	座間 川内市	159		北緯31度44分28秒 東経129度46分37秒	一般道	27	串木野	航路	85	里	接続又は 一般道	0	里	航路	25	中瓶	接続又は 一般道	0	中瓶	航路	20	鹿島(鹿児島)	一般道	2														
37	座間 川内市	209		北緯31度37分32秒 東経129度41分18秒	一般道	27	串木野	航路	180	手打	一般道	3																										
38	指宿市	128	155.3	北緯30度27分15秒 東経130度28分28秒	一般道	6	指宿	航路	105	富之浦 (鹿児島)	一般道	17																										
38	鹿児島市	152		北緯30度54分12秒 東経131度34分27秒	一般道	9	鹿児島	航路 (ハズ港)	30	鹿児島	接続又は 一般道	0	鹿児島	航路	91	西之表	一般道	22																				
38	指宿市	125		北緯30度22分36秒 東経130度28分58秒	一般道	6	指宿	航路	105	富之浦 (鹿児島)	一般道	15																										
38	鹿児島市	156		北緯30度29分59秒 東経130度57分17秒	一般道	9	鹿児島	航路 (ハズ港)	30	鹿児島	接続又は 一般道	0	鹿児島	航路	91	西之表	一般道	27																				
38	指宿市	169		北緯30度14分15秒 東経130度27分2秒	一般道	6	指宿	航路	105	富之浦 (鹿児島)	一般道	58																										
38	鹿児島市	202		北緯30度29分59秒 東経130度52分19秒	一般道	9	鹿児島	航路 (ハズ港)	30	鹿児島	接続又は 一般道	0	鹿児島	航路	91	西之表	一般道	73																				
39	鹿児島市	397	326.0	北緯29度59分35秒 東経129度54分59秒	一般道	5	鹿児島	航路 (ハズ港)	30	鹿児島	接続又は 一般道	0	鹿児島	航路	361	口之島	一般道	1																				
39	奄美市	373		北緯23度37分16秒 東経129度41分53秒	一般道	34	名瀬	航路	175	宝島	接続又は 一般道	0	宝島	航路	35	小宝島	接続又は 一般道	0	小宝島	航路	75	悪石島	接続又は 一般道	0	悪石島	航路	55	諏訪之 瀬島	一般道	0								
39	奄美市																																					

## 参考資料2 自然公園の海辺で景観要素抽出に活用した詩歌

自然公園の海辺で景観要素抽出に活用した詩歌一覧を以下に整理した。

### 1. 万葉集引用句一覧

8 熟田津(ニキタツ)に船のりせむと月待てば  
潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

【訳】熟田津で、船出をしようと月の出るのを待っていると、月も出、潮の具合もよくなった。さあ、今こそは漕ぎ出そう。

【釈】当時朝鮮半島では、百済が唐・新羅に侵略されていた。その百済救援にいくため、斉明天皇の一行が、伊予の新田津から船出するとき、船団の出発を宣言した歌。

○新田津 松山市和気・堀江付近。○月待てば月の光を頼りに船を漕ぐのでこういった。

15 海神(ワタツミ)の豊旗雲に入日さし今夜の月夜さやけくありこそ

【訳】おお、海神のたなびかす豊旗雲に今しも入日がさしている、今宵の月夜はまさしくさわやかであるぞ。

【釈】出航の安全のために月夜のさわやかさを予祝した歌。海神のたなびかす霊的な雲にさす夕日は、その兆しであった。

○豊旗雲 旗のように横になびく雲

23 打ち麻を麻統の玉海女なれや伊良虜の島の玉藻刈ります

【訳】麻統の王は海女なのか、いや海女でもないのに伊良虜の藻を刈っていらっしゃる。おいたわしいことだ。

【釈】麻統王が伊勢の国の伊良虜の島に流されるときに人の悲しさを歌った歌。

○伊良虜 愛知県渥美半島西端部の伊良虜岬であろう。

24 うつせみの命を惜しみ波に濡れ伊良虜の島の玉藻刈り食む

【訳】ほんとに私は命惜しさに、波にぬれつつ伊良虜の島の藻を食べている。あさましいことだ。

○うつせみ 「命」の枕詞

40 嗚呼見(アミ)の浦に舟乗りすらむをとめらが、玉裳の裾に潮満つらむか

【訳】嗚呼見の浦で舟遊びをしているおとめたちの美しい裳に、今頃は潮が満ち寄せていることだろうか。

【釈】男性がおとめの裳裾のぬれるさまを詠んだ歌。

当時の男性の心引かれる情景だったのであろう。この歌には、それを見られない焦慮がこもっている。

○嗚呼見の浦 鳥羽湾の西に突出する小浜地区の入海。今も「アミの浜」と呼ぶ ○玉裳 「裳」は腰からつける衣服

41 釧着く答志(たふし)の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ

【訳】今日あたりも、答志の崎で大宮人たちが美しい藻を刈って遊んでいることであろうか

【釈】女官の遊ぶさま

○答志の岬 アミの浜の東北海上の答志島の崎。

61 ますらをのさつ矢手挟み立ち向ひ射る円方(マトカタ)は見るにさやけし

【訳】ますらおが矢を挟み持ち、立ち向って射る的、その名の円方浜は見るからに清々しいことだ。

【釈】従駕の官人たちの盛況を讃える気持ち

○円方 三重県松坂市東部

63 いざ子ども早く日本(やまと)へ大伴(おおとも)の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

【訳】 さあ者どもよ。早く日本の国、日本へ帰ろう。大伴の御津の浜辺の松も、我らの帰りを待ち焦がれているであろう。

【釈】 統率者に代わって詠んだ宴歌であろう。  
○大伴の御津 難波の津。遣唐使の発着した港。

66 大伴の高石の浜の松が根を枕き寝れど家し  
偲はゆ

【訳】 美しい大伴の高石の松の根を枕に寝ても、やはり家の妻が慕わしく思われる。

○高石の浜 堺市・高石市付近の海岸

68 大伴の御津の浜にある忘れ貝家ある妹を忘  
れて思へや

【訳】 大伴の御津の浜にある忘れ貝の名ように、家の妻のことをどうして忘れてしまうのか。

○忘れ貝 二枚貝の片方だけになったもの

73 我妹子(わぎもこ)を早見浜風大和なる我れ  
松椿吹かずあるなゆめ

【訳】 わが妻を早く見たいと思うが、そんな名を持つ早見浜風よ。大和で私を待っている松や椿を吹き忘れてくれるな。けっして。

【釈】 浜風が妻のところまで吹いて行くことは、作者が妻を見ることにつながる。

121 夕ならば潮満ち来なむ住吉(すみのえ)の  
浅香の浦に玉藻刈りてな

【訳】 夕方になったら潮が満ちて来よう。住吉の浅香の浦で、今のうちに玉藻を刈り取りたいものだ。

【釈】 潮を人のうわさに、玉藻を女にたとえ、一時も早く恋を成立させることを願った歌。

○浅香の浦 大阪南部・堺市にかけて浅香の名が残る

122 大船の泊(は)つる泊りのたゆたひに物思  
ひ瘦せぬ人の故に

【訳】 大船が停泊する港の、たゆたひさながら

に、揺れて定まらぬ物思いに悩んで痩せこけてしまった。あの子は他人のものなのに。

206 楽浪(さきなみ)の志賀さざれ波しくしく  
に常にと君が思ほせりける

【訳】 楽浪の志賀の浜辺にさざ波が絶え間なく打ち寄せるように、わが皇子は、しきりに「いつまでも永らえたい」と思いつづけておられたのだが……。

222 沖つ波来寄(きよ)する荒磯(ありそ)を敷  
栲の枕とまきて寝せる君かも

【訳】 沖の波のしきりに寄せ来る荒磯なのに、まあこの人は磯を枕に横たわっておられることよ。

【釈】 純粹に死人に心を注いで結んでいる。

226 荒波に寄り来る玉を枕に置き我れここに  
ありと誰か告げらむ

【訳】 荒波に寄せられて来る玉を枕にして私がこの浜辺にいと、誰か告げてくれたのであろうか。

【釈】 石川が鴨山の山間をわってただちに海に注ぐその浜辺で人麻呂が死んだ時の歌。

○寄り来る玉=実際には海辺に打ち寄せられた石や貝のこと

229 難波瀉潮干なありそね沈みにし妹が姿を  
見まく苦しも

【訳】 難波瀉よ、引き潮などあってくれるな。ここに沈んだ娘子(おとめ)の姿を見るのはつらいことだから。

【釈】 娘子の屍を美しく幻想にした前歌に対して、これはその幻想が破れることを忌避した歌である。

○難波瀉=干満の差が激しく干瀉が多いことで有名

238 大宮の内まで聞こゆ網引すと網子ととの

ふる海女の呼び声

【訳】御殿の中まで聞こえてきます。網を引こうと網子を集め、音頭を取る漁師の掛け声が。

【釈】大阪は、当時海岸線が宮殿のある内陸部まで入り込んでいた。

○網子＝地引網を引く下っ端の漁師たち ○とのふる＝大勢の人々の行動を一つに統御する。

251 淡路の野島の崎の浜風に妹が結びし紐吹き返す

【訳】淡路の野島の崎の浜風に、故郷を出るとき妻が結んでくれた着物の紐を吹き返らせている。

252 荒栲の藤江の浦に鱸釣る海女とか見らむ旅行く我れを

【訳】藤江の浦で鱸を釣る卑しい漁師と見るであろうか。官命によって船旅をしている私なのだが。

○鱸＝瀬戸内海沿岸部に多い浅瀬魚。晩春から初秋にかけてよく釣れる。○

256 筥飯の海の庭によくあらし刈薦の乱れて出づみゆ海女の釣船

【訳】筥飯の海の魚場は、今朝は風もなく潮の具合もいいらしい。ここから見ると、漁師の釣船もたくさん漕ぎ出している。

○筥飯の海＝淡路島西岸一帯の海を示す ○庭＝仕事場。ここは漁をする海面

278 志賀の海女は藻刈り塩焼き暇なき櫛笥の御櫛取りもみなくに

【訳】志賀島の海女の海藻を刈ったり塩を焼いたり

【釈】志賀の海女の荒れくれた物珍しい姿に興味をよせて詠んだ歌。

○志賀＝福岡市東区大字志賀島 櫛笥＝化粧道具

293 潮干の御津の海女のくぐつを持ち玉藻刈るらむいざ行きて見む

【訳】今ごろは、潮の引いた難波の御津の海女たちが、くぐつを持って玉藻を刈っている最中であろう。さあ、行ってそれを見ようではないか。

○くぐつ＝海辺に生えている莎草で編んだ手さげ袋

294 風をいたみ沖つ白波高からし海女の釣舟浜に帰りぬ

【訳】風が激しくて沖の白波が高く立っているらしい。海女の釣船はみな浜に帰ってしまった。

【釈】難波あたりの実景を詠んだものか

296 廬原(いほはら)清見の崎の三保の浦のゆたけき見つもの思ひもなし

【訳】廬原の清見の崎の三保の浦、その広々とゆったりした海原を眺めていると、胸の中が洗い清められて晴れ晴れとした気持ちだ。

【釈】広大な海の景色に、遠い地方への赴任に纏わる種々の愁いやわだかまりがすっかり取れたことを詠んだ歌

○廬原＝静岡県庵原郡・清水市 ○三保の浦＝三保の松原をのぞむ海面

306 伊勢の海の沖つ白波花にもが包みて妹が家づとにせむ

【訳】伊勢の海の沖の白波が花であったらよいのに。包んで持ち帰っていとしい子への土産にしようものを。

【釈】海に接することのない大和の人の、海に対する新鮮な感興から発した歌。

326 見わたせば明石の浦に燈す火の穂にぞ出でぬる妹に恋ふらく

【訳】遠く見わたすと明石の浦に漁り火が光って見えるが、その漁り火がちらつくように人目につくようになってしまった。妹への恋心か。

○漁り火＝夜、魚を誘い寄せるため舟の上で焚  
(た)く火。

354 繩の浦に潮焼く煙夕されば行き過ぎかねて  
山にたなびく

【訳】繩の浦で塩を焼いている煙は、夕風の頃  
になると、流れもあえず山にまとわりついてた  
なびいている。

【釈】都から旅して来た者の目に珍しく映った  
海女の藻塩焼く煙の行方を追った叙景歌。

繩の浦＝兵庫県相生市那波の海岸

357 繩の浦ゆそがひに見ゆる沖つ島漕ぎ廻る  
舟は釣りしすらしも

【訳】繩の浦にたどりついて振り返るとはるか  
沖合いに見える島、その島あたりを漕いでいる  
船はまだ釣りの真っ最中らしい。

【釈】舟泊でのころあいになっても、舟がまだ  
沖合いで操業していることに感嘆し、旅先の景  
をたたえた歌

○繩の浦＝兵庫県相生市那波の海岸、相生湾の  
最奥部 ○沖つ島＝未詳。相生湾口に浮かぶ蔓  
島(カツシマ)か。

359 阿倍の島鶴の住む磯に寄る波間もなくこ  
のころ大和し思ほゆ

【訳】阿倍の島の鶴の住む荒磯に絶え間なく波  
が寄せてくる、その波のようにこの頃はしきり  
に大和のことが思われる。

409 一日(ひとひ)には千重波しきに思へども  
なぞの玉の手に巻きかたき

【訳】一日のうちにも幾重にも打ち寄せる波  
のように繰り返し繰り返し手に入れたいと思っ  
ているのに、なぜあの玉を手を巻くことができ  
ないのであろうか。

【釈】意中の女をなかなか手中にしがたいこと  
を寓した歌。

433 勝鹿の真間の入江にうち靡く玉藻刈りけ  
む手児名し思ほゆ

【訳】昔、この葛飾の真間の入江で、波揺れる  
玉藻を刈ったという手児名のことが、遥かに偲  
ばれる。

○真間の入江＝真間は今は内陸にあるが、昔は  
もっと海近いところであった。

434 風早の美保の浦みの白つつじ見れども寂  
しなき人思えば

【訳】風早の美保の海辺に咲き匂う白つつじ、  
それを見ても心がなごまない。亡き人が思われ  
て。

【釈】白つつじには、おとめが死んで白つつじ  
に化したという言い伝えがあった。

447 鞆の浦の磯のむろの木見むごとに相見し  
妹は忘れえぬやも

【訳】鞆の浦の海辺に生えているむろの木、こ  
の木をこれから先も見ることがあればそのたび  
ごとに、行く時ともに見た妻のことが思い出さ  
れて、どうしても忘れられないことだろうよ。

【釈】いつまでも忘れられない哀感の深さ。

448 磯の上に寝延ふむろの木見し人をいづら  
と問はば語り告げむか

【訳】海辺の岩の上に根を張っているむろの木  
よ、行く時お前をみた我妻は今どこでどうして  
いるのかと尋ねたら、語り聞かせてくれるので  
あろうか。

【釈】霊木むろの木は、霊界のことを知ってい  
ると思い、亡き妻を求めるせつなる気持ちから  
呼びかけた。

500 神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすら  
む荒き浜辺に

【訳】伊勢の沖の荻を折り伏せてあの人は旅寝  
をしておられることであろうか。あの波風荒い  
浜辺

【釈】旅の宿では、浜辺にある荻を屋根や壁や敷物として応急的に用いた。そのことが一層旅心をかきたてた。

509 臣の女の櫛笥に乗れる鏡なす御津の浜辺にさ丹(に)たつらふ紐解き放けず我妹子に恋ひつつ居れば明け暮れの朝霧隠り鳴く鶴の音のみし泣かゆ・・・

【訳】女官の櫛箱に載っている鏡を見つというのではないが、御津の浜辺で着物の紐も解かずに妻恋しく思っていると、明け方の霧に包まれた薄暗がりの中で鳴く鶴のように、暗い気持ち泣けてくるばかりだ。・・・

533 難波潟潮干のなごり飽くまでに人の見む子を我れ羨(とも)しも

【訳】難波の海の干潟に残る潮だまりのさまは、見飽きることのないくらい心惹かれるが、難波にいる人なら心ゆくまで眺められるあの子なのに、私はその機会がなくて羨ましい。

【釈】今その地にいる恋人を思う気持ちを述べた歌。

536 意宇(おう)の海の潮干の潟の片思に思ひや行かむ道の長手を

【訳】意宇の海の潮干の干潟ではないが、かた思いにあの子のことを思いつづけながらたどることになるのか。長い長い道のりを。

【釈】今その地にいる恋人を思う気持ちを述べた歌。

566 草枕旅行く君を愛しみたぐひてぞ来し志賀の浜辺を

【訳】都に向けて旅立って行く君たちが慕わしく離れがたいので、つい連れ立ってきてしまった。志賀の浜辺の道を。

【釈】別れの辛さを述べて送別の意を表わした。  
※海の中道付近を表した歌

596 八百日(やほか)行く浜の真砂も我が恋にあにまさらじか沖つ島守

【訳】通り過ぎるのに八百日もかかるほど広い浜の砂でさえも、この私の恋の重荷に比べたら、とてもかなうまいね。沖の島守りよ。

【釈】突拍子もない分量を引き出して、恋心の激しさを誇張した歌。

600 伊勢の海の磯もとどろに寄する波畏き人に恋ひわたるかも

【訳】伊勢の海の磯をとどろかして打ち寄せる波、その波のように恐れ多いお方に私は恋つづけているのです。

【釈】抑えても抑えきれない恋心を歌った。

606 我れも思ふ人もな忘れ多奈和丹浦吹く風のやむ時なかれ

【訳】私もこれほど思っている。あの人も私を忘れてはだめ。多奈和丹海岸に吹き付ける風のように、やむことなく思いつづけてくれないとだめ。

617 葦原より満ち来る潮のいや増しに思へか君が忘れかねつる

【訳】葦原のあたりを満ちてくる潮のように、君を思う気持ちがひたひたと募るせいか、どうしてもあの方を忘れることができない。

619 ……波の共(むた)靡く玉藻のかにかくに心は持たず・・・

【訳】波のまにまにゆらめき靡く玉藻のように頼りなくためらう心は持たず、・・・

【釈】怨恨を主題とする歌

917 やすみし我ご大君の常宮と仕え奉れる雑貨野ゆそがひに見ゆる沖つ島清き渚に風吹けば白波騒ぎ潮干れば玉藻刈りつつ神代よりしかぞ貴(たふと)き玉津島山

【訳】安らかに天下を支配されるわが天皇の、

とこしえに変わぬ離宮として仕え申し上げている雑貨野に向き合っている沖の島、その島の清らかな渚に、風が吹く度に爽快な白波が立ち騒ぎ、潮が引くたびにそこで美しい藻を刈りつけてきた。神代以来、そんなにも貴いところだ。沖の玉津島は。

【訳】神代以来不変の貴い状況を述べて玉津島を讃えた歌。

918 沖つ島荒磯の玉藻潮干満ちい隠りゆかば思ほえむかも

【訳】沖の島の荒磯に生えている玉藻、この玉藻は潮が満ちてきてだんだん隠れていったら、さぞかし恋しく思われることであろう。

【訳】潮干の今、満潮時の玉藻への思いを予想することによって、玉藻を讃えた歌。

919 若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る

【訳】若の浦に潮が満ちて来ると干潟がなくなるので、葦の生えている岸边をさして鶴が鳴き渡っている。

【訳】満潮時の若の浦の情景を、鶴に焦点を当てて湛えた歌。

931 鯨魚取り浜辺を清みうち靡き生ふる玉藻に朝なぎに千重波寄せ夕なぎに五百重波寄す辺つ波のいやくしくくに月に異に日に日に見とも今のみに飽き足らめやも白波のいさき廻れる住吉の浜

【訳】浜辺が清らかなので、しなやかに生い茂っている玉藻に、朝風にも千重に重なる波が寄せ、夕風にも五百重に重なる波が打ち寄せる。この岸の波がしきりに打ち寄せるように、月ごと日ごとに見ても飽きるものか。まして今だけ見飽きることなどありはしない。白波の花が岸边をめぐるここ住吉（すみのえ）の浜辺は。

【訳】住吉の浜の風向を讃えた歌。

937 行き廻り見とも飽かめや名寸隅の舟瀬の浜の舟瀬の浜にしきる白波

【訳】こうして岸边を行きめぐって、いくら見ても見飽きることがあるか。名寸隅の舟着場の浜に次々と打ち寄せるこの美しい白浜は。

【訳】浜を讃えた歌。

938 やすみしし我が大君の神ながら高知らせる印南野の邑美の原の荒栲の藤井の浦に鮪(しび)釣ると海女舟騒き塩焼くと人ぞさはにある浦をよみうべも釣りはす浜をよみうべも釣りはす浜をよみうべも塩焼くあり通ひ見さくもしるし清き白浜

【訳】あまねく天下を支配される我が天皇が、神として高々と宮殿をお造りになっている印南野の邑美の原の藤井の浦に、鮪を釣ろうとして海人の舟が入り乱れ、塩を焼こうとして人が大勢浜に出ている。浦がよいので釣りをするのももっともだ。わが天皇がこうしてたびたびお通いになって御覧になるのもなるほどとおもわれる。ああ、なんと清らかな白浜であろう。

939 沖つ波辺波静けみ漁りすと藤江の浦に舟ぞ騒げる

【訳】沖の波も、岸边の波も静かなので、漁をするると、藤江の浦に舟が盛んに入り乱れている。

946 御食向ふ淡路の島に直向ふ敏馬の浦の沖辺には深海松採り浦みにはなのりそ刈る深海松の見まく欲しけどなのりそのおのが名惜しみ間使も遣らずて我れは生けりともなし

【訳】淡路島にまともに向き合っている敏馬の浦の、沖の方では深海松を採り、浦のあたりではなのりそを刈っている。その深海松の名のように、都に残したあの人を見たいとは思うけれど、なのりその名のように、わが名の立つのが惜しいので、使いの者もやらずにいて、私はまったく生きた心地さえしない。

○御食向ふ＝「淡路」の枕詞。献上歌に用いた。  
○なのりそ＝海藻のほんだわら。

947 須磨の海女の塩焼き衣のならなばか一日も君を忘れて思はむ

【訳】須磨の海女が塩を焼く時に着る衣がなれているように、私も旅に慣れたなら、せめて一日だけなりとあの方のことが忘れていられるであろうか。

○須磨＝神戸市須磨区一帯

954 朝は海辺にあさりシタされば大和へ越ゆる雁し羨しも

【訳】朝は海辺で餌を漁り、夕方になると大和の方へ山を越えていく雁が、なんとも羨ましくてならない。

【釈】雁に寄せて望郷の心を述べた歌。

957 いざ子ども香椎の瀉に白栲の袖さへ濡れて朝菜摘みてむ

【訳】さあみんな、この香椎の干瀉で、袖の濡れるのなかまわずに、楽しく朝食の海藻を摘もう。

【釈】大宰帥大伴旅人が、香椎の廟参拝を終った解放観をこめて部下を誘った歌。

○袖さへ濡れて＝解放感のよく表われた句 ○朝菜＝朝食の海藻。

958 時つ風吹くべりなく香椎瀉潮干の浦に玉藻刈りてな

【訳】潮時の風が吹き出しそうな気配になってきた。香椎瀉の潮の引いている入江で、今のうちに早く玉藻を刈ってしまおうよ。

【釈】満潮の気配を感じて、早く玉藻を刈ってしまおうと、旅人の勧めに応じた歌。

○時つ風＝満潮時など、きまった時間に吹く風。

959 行き帰り常に我が見し香椎瀉明日ゆ後には見むよしもなし

【訳】行きつ戻りつしながら、いつも見慣れた

香椎瀉だが、その香椎瀉も明日からはもう見られなくなってしまふのだ。

【釈】遷任のため、香椎瀉が見られなくなるのを嘆いた歌。

960 隼人の瀬戸の巖も鮎走る吉野の滝になほしかずけり

【訳】隼人の瀬戸の、白波のくだける大岩の豪快な光景も、鮎の走り泳ぐ吉野の激流のさわやかさにやっぱり及びはしないのだ。

【釈】旅先の景と故郷の景との対比を通じて、望郷の心を述べた歌。

○隼人の瀬戸＝北九州市門司区と、下関市壇之浦の間の早鞆の瀬戸をいうか。

964 我が背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋忘れ貝

【訳】あの方に心引かれるのは苦しい。旅の暇があったら浜で拾ってゆこう、恋のつらさを忘れさせてくれるという忘れ貝を。

【釈】旅先の景と故郷の景との対比を通じて、望郷の心を述べた歌。

○背子＝普通、女性から親しい男性を呼ぶ言葉。

○忘れ貝＝二枚貝の片方だけになったもの。

976 難波瀉潮干のなごりよく見てむ家にある妹が待ち間はむため

【訳】難波の海の干瀉に残る潮だまりのさまをよく見ておこうよ。家にいる妻が帰りを待ちうけて尋ねたときに話してやるために。

【釈】草香山を越えるに先立って、難波瀉で、一行に潮干の名残をよく見ておこうと誘いかけた歌。それは、当時の大宮人にとって珍しく、見飽きぬ光景であった。

○潮干のなごり＝潮の引いた後の砂地に残る海水の水たまり。

997 住吉の粉浜のしじみ開けもせず隠りてのみや恋ひわたりなむ

【訳】住吉の粉浜の蜆がふたを開けずに隠っているように、私は胸の思いを打ち明けてもみないで、じっと心にこめたまま恋つづけることになるのか。

【釈】粉浜の蜆に寄せて恋の心を詩じた宴歌か。  
○粉浜＝大阪市住吉公園の北、帝塚山の西。当時は海岸であった。

1001 ますらを御狩に立たし娘子らは赤裳裾引く清き浜びを

【訳】ますらおたちは御狩の場に踏み立たれ、娘子たちは赤裳の裾を引きながら往き来している。この清らかな浜辺を。  
○ますらを＝立派な男子。○赤裳＝「裳」は腰から下につける衣服。赤裳の裾が水に濡れるさまには官能的な魅力を感じたらしい。

1003 海女娘子玉求むらし沖つ波畏き海に舟出せりみゆ

【訳】海女たちが真珠を採っているらしい。あの荒波の立つ恐ろしい沖合に舟を出している。

1062 やすみしし我が大君のあり通ふ難波の宮は鯨魚取り海片付きて玉拾ふ浜辺を近み朝羽振る波の音騒ぎ夕なぎに楫の音聞こゆ暁の寝覚めに聞けば海石の潮干の共浦すには千鳥妻よび葦辺には鶴が音響む見る人の語りにすれば聞く人の見まく欲りする御食向ふ味経の宮は見れど飽かぬかも

【訳】安らかに天下を支配される我が天皇のいつもお出ましになる難波の宮は、海に面していて、玉を拾う浜辺が近いので、朝に揺れ立つ波の音がざわめき、夕風には舟を漕ぐ櫓の音が聞える。暁の寝覚めに耳を澄ませると、潮が引いて暗礁が表れるにつれて、浜の州では千鳥が妻を呼び求めて鳴き、葦辺には鶴の音が響きわたる。見た人が語りぐさにすると、それを聞いた人もぜひ見たいと思うこの味経(あじふ)の宮は、いくら見ても見飽きることはない。

○鯨魚とり＝「海」の枕詞 ○海片付きて＝一方が海に面していて ○朝羽振る＝「羽振る」は波の寄せるさまを羽の振るさまとして比喩的にとらえた表現 ○海石＝海中の岩礁 ○潮干の共＝潮が引くとともに、の意

1063 あり通ふ難波の宮は海近み海女の娘子らが乗れる舟見ゆ

【訳】わが天皇のいつもお出ましになる難波の宮は海が近いので、海女の娘たちが乗っている舟が見える。

1064 潮干れば葦辺に騒ぐ白鶴の妻呼ぶ声は宮もとどろに

【訳】潮がひくと、葦辺で鳴き騒ぐまっ白な鶴の妻を呼ぶ声は、大宮をもとどろかすばかりだ。  
○大崎＝和歌山県海草郡下津町大崎。○神の小浜＝神のいます小浜

1067 浜清み浦うるはしみ神代より千舟の泊つる大和太の浜

【訳】浜は清らかだし浦も立派なので、神代の昔からぞくぞくと舟が寄って来て泊った大和田の浜だ、ここは。

【釈】景の美しさに見出して、この浜を讃えた歌

○大和太の浜＝神戸市兵庫区の和田岬から東北方へかけての湾入した浜。敏馬の浦もその一部。

1075 海原の道遠みかも月読の光少き夜は更けにつつ

【訳】海を渡ってやって来る月の道が遠いせいで、月の光がぼんやりとしているのであろうか。夜はもう更けてしまったというのに。

【釈】海辺で催された宴会の歌か。  
○海原の歌＝月は海上を渡って来るものと見た表現 ○月読＝月の異名

1050 住吉に岸に家もが沖に辺に寄す白波見つ

つしのはむ

【訳】住吉の岸に我が家があったらよいのになあ。沖に、岸边に、寄せては砕ける白波をいつも眺めながら賞美したいものだ。

【釈】旅先の勝景の中に我が家があればと想像することによって、望郷の念を国讃めの気持ちに融合させ、一連の住吉の歌を結んでいる。

1151 大伴の御津の浜辺をうちさらし寄せ来る波のゆくへ知らずも

【訳】大伴の御津の浜辺をえぐるように打ち寄せてくる波、この波はいったいどこへ帰ってゆくのだろう。

○大伴の御津=大伴氏の所領であった難波の港

1153 住吉の名児の浜辺に馬立てて玉拾ひしく常忘らえず

【訳】住吉の名児の浜辺に馬を駐めて、玉を拾ったその楽しさはいつまでも忘れることができない。

○名児の浜辺=所在未詳 ○馬を繋いでおいて

○玉=鯉玉や円い美しい小石

1155 名児の海の朝明のなごり今日もかも磯の浦みに乱れてあるらむ

【訳】名児の海の夜明けの潮だまりは、今日も磯の浦の波打際にあちこち残っていることであろうか。

【釈】名児の風景を思い出して歌った歌。

1158 住吉の沖つ白波風吹けば来寄する浜を見れば清しも

【訳】住吉の沖の白波、風が吹き出すその波のうち寄せてくる浜は、いつ見ても清らかだ。

1159 住吉の岸の松が根うちさらし寄せ来る波の音のさやけさ

【訳】住吉の岸に茂る松の根を洗い出してうち寄せる波の、何と清らかに澄んで聞こえることか。

【釈】松の根と波の音によって、視覚と聴覚の両面から清らかさを讃えている。

1162 円方(マドカ)の港の洲鳥波立てや妻呼びたてて辺に近づくも

【訳】円方の港の砂洲に群れている鳥が、沖の方の波が高くなってきたからか、盛んに妻を呼び立てながら、岸边に近づいている。

○円方=三重県松阪市東黒部町 ○港=川口

○洲鳥=砂洲の鳥

1163 年魚市潟(アチガタ)潮干にけらし知多の浦に朝漕ぐ舟も沖に寄るみゆ

【訳】年魚市潟は潮が引いたらしい。知多の浦に朝方から漕いでいた舟も沖の方で寄って行くようだ。

○年魚市潟=名古屋市熱田区、南にあった入海の海岸 ○知多の浦=知多半島北西部にあった海の湾入部

1164 潮干(フ)ればともに潟に出で鳴く鶴の声遠ざかる磯廻(イミ)すらしも

【訳】潮が引くといっせいに干潟にやってきて鳴き交わす鶴だが、その声が遠ざかっていく。沖の磯に出かけて餌を漁っているらしい。

○磯廻す=磯のあたりをめぐる漁をする。

1165 夕なぎにあさりする鶴潮満てば沖波高み己妻呼ばふ

【訳】夕風の頃、餌をあさっている鶴は、潮が満ちて来ると急に沖の波が高くなることに感じて、自分の妻を近くに呼び寄せている。

1167 ありさすと磯に我が見しなりのそをいづれの島の海女か刈りけむ

【訳】漁をしようとして磯で私が見つけたなりのそをどこの島の海女が刈り取って行ったのだろうか。

【釈】女をなりのそに譬えた比喻歌。旅の宴席で披露されたものか。

○なのりそ＝海藻のほんだわら。ここは「勿告(ナ)りそ」の意をかけて、思いを寄せる女性を譬えた。

1168 今日もかも沖つ玉藻は白波の八重をるが上に乱れてあるらむ

【訳】今日あたりもまた、沖の玉藻は、白波が幾重にも折れ撓むように立っては砕け、立っては砕けしているあたりで、乱れ靡いていることであろう。

1171 大御船泊ててさもらふ高島の三尾の勝野の渚し思ほゆ

【訳】大君のお召しの船が泊って風待ちしている高島の三尾の渚が、遥かに思いやられる。

○大御船＝「大御」は最高の敬意を表す接頭語

○さもらふ＝ここは、風波の様子を窺うこと。

○高島の三尾の勝野＝滋賀県高島郡高島町勝野、安曇川三尾里を含む高島郡南部の地を指す。○渚＝波打ち際。波が刻んだ縞模様の意。

1176 夏麻(ナツ)引く海上瀉の沖つ洲に鳥はずだけど君は音もせず

【訳】海上瀉の沖の砂洲に鳥は群がって騒いでいるけれど、あなたは訪れても下さらない。

【釈】旅の宴の席で披露されたもの。

○夏麻引く「海上瀉」の枕詞。夏の麻を引く畝の意で類音「海(ウカ)」にかかる。○海上瀉＝千葉県銚子市・海上郡地方の海岸の干瀉を指すか。○すだく＝集まり騒ぐ。

1177 若狭にある三方の海の浜清み行き帰らひ見れど飽かぬかも

【訳】若狭の国の三方の海は浜が清らかなので、行きつ戻りつしながらいくら眺めても飽きることがない。

○若狭にある三方の海＝福井県三方郡の三方湖

1187 網引きする海女とか見らむ飽の浦の清き

荒磯を見に來し我れを

【訳】網の引く卑しい海女と見るであろうか。飽くの浦の清らかな荒磯を見に來た私なのだが。

○飽の浦＝岡山県飽浦か。○荒磯＝人気のない海辺の岩礁

1188 山越えて遠津の浜の岩つつじ我が來るまでにふふみてあり待て

【訳】山のあなたの遠津の浜に咲く岩つつじよ、私が來るまでに蕾のまま置いておくれ。

○岩つつじ＝岩間に咲くつつじ。土地の娘に譬えた。○ふふみて＝うら若い娘が嫁がないままいることを、蕾の膨らんだ状態に譬えた。

1190 舟泊ててかし振り立てて廬りせむ名児江の浜邊過ぎかてぬかも

【訳】舟を泊めて艫綱を繋げるかしを勢いよく突き立てて、旅宿りをしようと思う。この美しい名児江の浜邊は、とても素通りする気にはなれない。

○名児江＝未詳

1216 潮満たばいかにせむとか海神の神が手渡る海女娘子ども

【訳】潮が満ちてきたらいったいどうするつもりなのだろうか。海神の支配する恐ろしい神の手を渡っている海女の娘たちは。

○神が手＝干潮時のみに現れる浅瀬の砂嘴として知られ、人がよく遭難するので畏怖の気持ちをこめて付けられた名か。

1218 黒牛の海紅にほふももしきの大宮人しあさりすらしも

【訳】黒牛の海に紅がよく映えている。お供の女官たちが海岸で漁(サドリ)をしているらしい。

○黒牛の海＝和歌山県海南市黒江・船尾あたりの昔海だった場所 ○紅にほふ＝「紅」は女官の着けた赤裳の紅色 ○ももしきの「大宮人」の枕詞 ○大宮人＝宮廷に仕える人、ここは女

官をさす。

1219 若の浦に白波立ちて沖つ風寒き夕は大和し思ほゆ

【訳】和歌の浦に白波が立って、沖のほうから吹いてくる風が肌に寒くしみとおる夕暮れ時には、そぞろ家郷大和が偲ばれる。

○若の浦＝和歌山市和歌山浦海岸 ○寒き夕は・・・

1220 妹がため玉を拾ふと紀伊の国の由良の岬にこの日暮らしつ

【訳】家で待つ妻のために真珠を拾おうとして、紀伊の国の由良の岬で今日一日を過ごしてしまった。

○由良の岬＝和歌山県日高郡由良港の北側の下山鼻、神谷崎のあたり。「岬」は「御崎」の意。

1194 紀伊の国の雑賀の浦に出で見れば海女の燈火彼の間ゆ見ゆ

【訳】紀伊の国の雑賀の浦に出で見ると、海女のともす漁り火が波間からちらちらと見える。

○雑賀の浦＝和歌山県雑賀崎の海岸

1196 つともがと乞はば取らせむ貝拾ふ我を濡らすな沖つ白波

【訳】お土産を、とねだられたら手渡そうと思う、その貝を拾っている私をぬらさないでおくれ。沖から寄せてくる白波よ。

1197 手に取るが、からに忘ると海女の言ひし恋忘れ貝言にしありけり

【訳】手にとればすぐにさっぱり忘れてしまう、と海女の言った恋忘れ貝は、何の効き目も現さない、ただ言葉のあやにしか過ぎなかった。

1198 あさりすと磯に住む鶴明けされば浜風寒み己妻呼ぶも

【訳】餌をあさろうと磯に居ついている鶴は、

明け方になると浜を吹きわたる風がひとときわ冷たいので、いっせいに自分の妻を呼び求めて鳴いている。

【釈】名児の風景を思い出して歌った歌。

1199 藻刈り舟沖漕ぎ来らし妹が島形見の浦に翔るみゆ

【訳】海藻を刈り取る海女の舟が、沖合を漕いでやって来たらしい。見ると、妹が島の形見の浦に鶴が飛び交っている。

○鶴翔る＝沖を行く舟を追って鶴の群れが飛び交うさまを言った。

1201 大海の水底響み立つ波の寄せると思へる磯のさやけさ

【訳】大海原の底までとどろかして立つ波の打ち寄せようとしている磯は、なんと清々しいことか。

1202 荒磯ゆもまして思へや玉の浦離れ小島の夢にし見ゆる

【訳】荒磯の景色よりも、もっと心に焼き付いてすばらしいと思っているからか、玉の浦の離れ小島の景色が夢の中に現れてくる。

○玉の浦＝未詳。和歌山市の玉津島神社付近か。

1203 磯の上に爪木折り焚き汝がためと我が潜き来し沖つ白玉

【訳】磯の上で柴を折って燃やし暖をとっては、お前のために海に潜って採ってきた沖の真珠だよ、これは。

○磯＝ここは岩礁の意 ○爪木＝爪先で折り取った小枝 ○潜く＝ここは潜水して採る意 ○白玉＝鮫玉

1204 浜清み磯に我が居れば見む人は海女とか見らむ釣りもせなくに

【訳】浜が清らかなのでじっと眺めて磯に佇んでいると、人は私を卑しい海女と見るのである

うか。釣りをしているわけでもないのに。

1206 沖つ波辺つ藻巻き持ち寄せ来とも君にま  
される玉寄せめやもく沖つ波辺波しくしく寄せ  
来とも>

【訳】沖の波が岸边の藻を巻き込んでうち寄せ  
られてこよとも、あなたに優る真珠運んでく  
るなどということは考えられません。(沖の波や  
岸边の波がしきりにうち寄せて来よとも)

【釈】旅中の宴歌か。作者は海辺の遊行女婦(ウ  
イ)か。

○君にまされる玉=相手の男を玉に見立てた。

○しくしく=しきりに、の意。

1207 粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波  
いまだ騒けり

【訳】粟島に舟を漕いで渡ろうと思うけれども、  
明石の瀬戸の波はそれを阻むかのように、今も  
なお立ち騒いでいる。

○粟島=淡路島付近にあった島だと思われるが、  
未詳。○明石の門波=明石海峡に立つ波。「門」  
は狭い通路の意。明石海峡は潮流の速い場所だ  
としてしられた。

1227 磯に立ち沖辺を見れば藻刈り舟海女漕ぎ  
出らし鴨翔るみゆ

【訳】磯に立って沖の方を見ると、海藻を刈る  
舟を海女が漕ぎ出したらしい。沖辺を鴨の群が  
飛び交っている。

○磯=岩の多い海岸

1236 夢のみに継ぎて見えつつ高島の磯越す波  
のしくしく思ほゆ

【訳】夢の中では毎晩毎晩逢いつづけているの  
に、高島の磯を越す波がひっきりなしにうち寄  
せているように、しきりに恋しく思われる。

【釈】名児の風景を思い出して歌った歌。

1239 大海の磯もと揺すり立つ波の寄せむと思

へる浜の清けく

【訳】大海原の岩礁の根元を揺るがして立つ波  
が、うち寄せようとしている浜の何と清らかな  
ことか。

【釈】名児の風景を思い出して歌った歌。

1245 志賀の海女の釣舟の綱堪へなくも心に思  
ひて出でて来にけり

【訳】志賀の海女の釣舟の綱が荒波にあらがい  
かねるように、別れの辛さが我慢しきれないと  
思いながらも、家を出てきてしまった。

1246 志賀の海女の塩焼く煙風をいたみ立ちは  
上らず山にたなびく

【訳】志賀の海女の藻塩焼く煙は、まっすぐに  
立ち上らないで、浜から吹き上げる風が強い  
ので、山の方に流れたなびいている。

1248 我妹子と見つつしのはむ沖つ藻の花咲き  
たらば我れに告げこそ

【訳】妻と一緒に見に来て賞美したい。沖の藻  
の花が咲いたら、是非私に知らせて欲しい。

【釈】名児の風景を思い出して歌った歌。

1267 ももしきの大宮人の踏みし跡ところ沖つ  
波来寄らずありせば失せずあらましを

【訳】ここはかつて大宮人たちが訪れて足跡を  
残したところだ。沖の波が打ち寄せて来さえし  
なかつたら、足跡はなくならなかつたろうに。

○跡ところ=遺跡

1274 住吉の出見の浜の柴な刈りそね娘子らが  
赤裳の裾の濡れて行かむ見む

【訳】住吉の出見の浜の柴を刈り取らないで  
おくれ。若い女の子たちが濡れた赤い裳裾を引  
きずって行くのを覗き見したいから。

【釈】垣間見を主題とした謡い物の一つ。柴を  
刈る男に呼びかける形でよんだ。

○出見の浜=大阪市住吉区住吉神社西方の、昔

海岸であったあたり ○柴＝雑木の小枝 ○裳の裾を濡らした状態のままで、の意。赤裳の裾の濡れた姿に官能美を感じている。

1290 海の底沖つ玉藻のなりその花妹と我れと  
ここにしありとなのりその花

【訳】沖に靡く美しい藻のなりその花よ。あの娘と私と、一緒にここにいると「な告りそ」の花よ。

【釈】海藻の「なおりそ」の名を、公言するなの意に言いかけた謡い物  
○海の底＝「沖」の枕詞

1299 あち群のとをよる海に舟浮けて白玉採ると人に知らゆな

【訳】あじ鴨の群が波のまにまに揺れ騒いでいる海に、舟を浮べて真珠を採ろうとして、人に気づかれるなよ。

【釈】口さがない人々に囲まれた女に恋する男を戒めた歌。  
○あち群のとをよる海＝噂好きの人のうようよしている世間を譬えた。 ○白玉採る＝美女を我が物にすることを譬えた。「白玉」は鮫貝に生じる真珠。

1300 をちこちの磯の中なる白玉を人に知らえず見むよしもがも

【訳】あちらこちらの磯に交る真珠を世間の人に気づかないで見つけ出す方法はないものかなあ。

【釈】女遊びに憧れる年頃の男の歌。  
○見む＝「見る」は女に逢うことを譬えた。 ○よしもがも＝「もがも」は願望

1301 海神の手に巻き持てる玉故に磯の浦みに潜きすかも

【訳】海の神が手に巻きつけて持っている真珠だとわかっていながら、それを採ろうと私は岩の多い浜辺で水に潜っている。

【釈】深窓の女性に恋する男の歌。

○海神の手に巻き持てる玉、親の秘蔵する娘を譬えた。 ○潜きする＝女を手に入れようと苦勞することの譬え。

1302 海神の持てる白玉見まく欲り千たびぞ告りし潜きする海女は

【訳】海神の持っている真珠を一目手にとって見たいと思って、何度も何度も唱え言を口にしていた、水に潜る海女は。

【釈】前歌の男を海女とみなし、深窓の女性に言い寄る男の有様を述べた歌。

○千たびぞ告りし＝「千たび」は回数が多いこと。「告る」は重大な言葉を口にする意。海女は潜水の前に、豊魚を海神に祈願する呪文を唱える。

1303 潜きする海女は告れども海神の心し得ねば見ゆといはなくに

【訳】水に潜って真珠を採ろうとする海女は、何度も呪文を唱えているが、海神の許しが得られないので、真珠はまだ見つからないということだ。

【釈】親の同意が得られず、女に逢えないことを譬えた歌。

○見ゆ＝女に逢うことを譬えた。

1308 大海をさもらふ港事しあらばいづへゆ君は我を率しのがむ

【訳】大海原の風向きを窺っている港で、もし何かが起こったら、あなたはどちらへ私を連れて難を避けてくださいますか。

【釈】女が、恋をしている男の決意のほどを問いただした歌。

○大海＝世間を譬えた。 ○港＝二人の逢引の場所、女の家を譬えた。 ○事＝男女間の隔て妨げる事件を譬えた。

1309 風吹きて海は荒るとも明日はと言えは久しくあるべし君がまにまに

【訳】このように風が吹いて海が荒れていても、船出を明日まで延ばしてといったならば、きつともどかしく思うことでしょう。あなたのご意志にお任せします。

【釈】ためらいながらも今夜の契りを男の判断にゆだねた女の歌。

1322 伊勢の海の海女の島津が鰯玉採りて後もか恋の繁けむ

【訳】伊勢の海の海女の島津の持っているという立派な真珠は、手に入れてから後でもなお、恋心が募ってくることだろうか。

【釈】鄙にはまれな美女に憧れる男の歌  
○特に由緒のある立派な真珠として知られていた。美女に譬えた。

1327 秋風は継ぎてな吹きそ海の底沖なる玉を手に巻くまでに

【訳】秋風よ、続けて吹くでないぞ。深い海の真珠をとって私の手に巻きつけるまでは。

○秋風=恋路を妨げるものを譬えた。○海の底=「沖」の枕詞 ○沖なる玉=深窓の女性を譬えた。○手に巻く=我が妻にすることを譬えた。

1388 石(い)そそき岸の浦みに寄する波辺に来寄らばか言の繁けむ

【訳】岩に当たってしぶきをあげ、断崖の続く入江に寄せる波がもっとこの岸近くによってきたなら、おそらく人の噂が絶えないことだろう。

【釈】親しみが増すにつれて噂の立つのを恐れた女の歌

○寄する波=男を譬えた。○辺=女を譬えた。

1389 磯の浦に来寄る白波返りつつ過ぎかてなくは誰にたゆたへ

【訳】岩礁の多い海岸に打ち寄せる白波が、寄

せては返し寄せては返しして沖へ帰れないでいるのは、他の誰のためでもない、お前のためなのだよ。

【釈】女を口説く男の歌。

○来寄る白波=自分自身を譬えた。○「誰にたゆたへ」は揺れ動くこと。

1391 朝なぎに来寄る白波見まく欲り我はすれども風こそ寄せね

【訳】朝風のときに、打ち寄せてくる波を私は見たいと思うのだが、風が白波を立ててくれないのでは仕方がない。

【釈】女に逢う機会の乏しいことを嘆いた男の歌。

○朝風=風がやむ時間帯。周囲の良い情勢の時に譬えた。○来寄る波=女を譬えた。

1394 潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少く恋ふらくの多き

【訳】潮が満ちたら海中に没する岩礁に生えた藻であるからか、実際に目に見ることは少なく、見たい見たいと恋しく思うことの方が多い。

【釈】逢う機会に恵まれない嘆きをうたった。  
○草=海藻

1395 沖つ波寄する荒磯のなりそのは心のうちに障みとなれり

【訳】沖の波がうち寄せてくる荒磯のな告りそは、私の心の中でしこりとなっています。

【釈】親の反対で男に逢うことに踏み切れない女の気持ちを詠んでいる。

1396 紫の名高の浦のなりのりその磯に靡かむ時待つ我を

【訳】名高の浦のな告りそが磯に靡く時を、私は待っているのだよ。

【釈】女が口説きに応じる時を待つ男の歌  
○紫の=「名高の浦」の枕詞 ○磯に靡かむ=女が名を告って自分に従うこと。

1397 荒磯越す波は畏ししさがに海の玉藻の  
憎くはあらずて

【訳】荒磯を越えてうち寄せる波は恐ろしい。  
しかしながら波に打ち寄せられる海の美しい藻  
はかわいいもので。

【釈】人目が多くてなかなか逢えない女性に憧  
れる男の歌。

○荒磯越す＝周囲の事情が厳しいさまを譬えた。  
○海の玉藻＝美しい女を譬えた。

1454 波の上ゆ見ゆる小島の雲隠りあな息づか  
し相別れなば

【訳】波の上から見える小島が雲に隠れるよう  
に、あなたの船がはるかに見えなくなって、あ  
あ、溜息が出ることでしょう。お別れしてしま  
ったなら。

【釈】船出を見送る際の気持ちになって歌って  
いる。

○息づかし＝溜息がでるほど切ない。

1615 大の浦のその長浜に寄する波ゆたけく君  
を思ふこのころ

【訳】大の浦のその長い浜に打ち寄せる波のよ  
うに、ゆったりとおおらかな気持ちで、あなた  
を思っている近頃です。

○大の浦＝静岡県磐田市あたりにかつてあった  
入江

1665 妹がため我れ玉拾ふ沖辺なる玉寄せ持ち  
来沖つ白波

【訳】家で待つ妻への土産に私は玉を拾うのだ。  
沖深く潜んでいる白玉を岸にうち寄せて来てく  
れ、沖の白波よ。

【釈】旅での望郷の歌。「玉」は海岸の佳景を代  
表するものとして、ほめる意を含む。

1667 妹がため我れ玉求む沖辺なる白玉寄せ来  
沖つ白波

【訳】家の妻への土産に私は玉が欲しいのだ。  
沖の真珠を岸に寄せて来てくれ、沖の白波よ。

1669 南部の浦潮な満ちそね鹿島なる釣りする  
海女を見て来む

【訳】南部の海岸に、潮よそんなに満ちないで  
くれ。向いの鹿島で釣りする海女を見て来たも  
のだ。

○南部＝和歌山県日高郡南部町。湾を隔てて牟  
婁温泉のある白浜に対する。○鹿島＝南部の  
約一キロ沖にある島。海峡はかなり深く、徒歩  
は不可能。

1672 黒牛瀉潮干の浦を紅の玉藻裾引き行くは  
誰が妻

【訳】黒牛瀉の潮の引いた海岸を、あでやかな  
紅の裳の裾を引いて行く人、あれは誰の妻なの  
か。

○黒牛瀉＝和歌山県海南市黒江海岸。波静かな  
浜であつたらしい。○玉藻＝「裳」を美しく  
言った語。裳をはく女官の美しい姿がおわさ  
れている。

1673 風莫の浜の白波いたづらにここに寄せ来  
る見る人なしに

【訳】風莫の浜に静かに打ち寄せる波、この波  
はただ空しく寄せて来るばかりだ。見て賞で  
る人の姿もないままに。

【釈】波静かな海浜の佳景を共に楽しむ妻が側  
にいないことを嘆く歌。

○風莫の浜＝未詳。あるいは波静かな浜の名称

1716 白波の浜松の木の手向けくさ幾代まで  
に年は経ぬらむ

【訳】白波の寄せる浜松の松の木に懸けた手向  
のものが年を経ているように、私が家を出て行  
ってからいったい幾年たってしまったのだろう。

【釈】旅に出してから経た時間を大げさに表現す  
る意とし、望郷の気持ちに和したものか。

1726 難波瀉潮干に出でて玉藻刈る海女の娘子ども汝が名告らさね

【訳】難波の干瀉で玉藻を刈っている海女の娘さんよ。あんたの名前を私に教えてくれよ。

【釈】戯れに海女娘子に求婚する形で歌った歌。  
○難波瀉=難波宮に程近い海岸 ○汝が名告らさね=女性に名を問うのは求婚の意思表示

1727 あさりする人を見ませ草枕旅行く人に我が名は告らじ

【訳】浜で獲物を漁る名もない人間とでも見ておいてください。あなたのような行きずりの旅のお方に輕輕しく名を明かすわけにはまいりません。

【釈】前歌に答え、戯れて求婚をはねつける歌。

1799 玉津島磯の浦みの真砂にもほひて行かな妹にも触れけむ

【訳】玉津島の磯をなす入海の白砂を身にふり付けて、その白い色に染まって行きたい。亡くなった妻もきっとこの砂に触れたことだろう。

【釈】前歌に答え、戯れて求婚をはねつける歌。

1920 春草の繁き我が恋大海の辺に行く波の千重に積もりぬ

【訳】春草の茂るようにしきりに募る私の恋の思ひは、大海原の岸边にうち寄せる波のように、幾重にも積もってしまった。

○春草の=「繁き」の枕詞

2434 荒磯越し外行く波の外心我は思はじ恋ひて死ぬとも

【訳】荒磯を越えてあらぬ方に行く波のような他し心を私は待つまい。たとえ恋死はしようとも。

○荒磯越し=「外心」 ○外心=浮気心

2435 近江の沖つ白波知らずとも妹がりとい

はば七日越え来む

【訳】近江の海の沖の白波ではないが、たとえお所は知らなくても、あなたのもととあらば、何日かかっても海山を越えてやって来よう。

2437 沖つ藻を隠さふ波の五百重波(体ね)千重しくしくに恋ひわたるかも

【訳】沖の藻をしきりに隠す波、その五百重の波のように、幾重にも幾重にも恋つづけている。

【釈】前歌に答え、戯れて求婚をはねつける歌。

2459 我が背子が浜行く風のいや早に言を早みかいや逢はずあらむ

【訳】あなたの浜辺を吹き抜ける風のように、いよいよめまぐるしく、世間の噂が駆け廻るせいで、ますますお逢いすることができないでしょうか。

【釈】風に寄せる恋

○我が背子が浜=我が背子の住む近くの浜、の意

2486 茅渟(チヌ)の海の浜辺の小松根深めて我れ恋ひわたる人の子ゆゑに

【訳】茅渟の海の浜辺の生い立つ松の根ではないが、根っからに私は恋いつづけている。手も出せないあの女ゆゑに。

○茅渟の海=大阪市東南部から堺市、岸和田市にかけての海。 ○根深めて=心の奥底に深く染み込ませて ○人の子=人妻、または親の監視のきびしい娘をいう。

或本 茅渟の海の潮干の小松ねもころに恋ひやわたらむ人の子ゆゑに

【訳】茅渟の海の潮干の瀉に生い立つ松の根ではないが、ねんごろに恋つづけなければならないのか。手も出せないあの女ゆゑに。

2488 磯の上に立てるむろの木ねもころに何しか深め思ひそめけむ

【訳】磯の上に根を張って生い立っているむろの木、その根のねんごろに、何でもまあ、心の底深く思い初めたのであろうか。

○磯の上に＝「磯」は石の多い水辺 ○むろの木＝社松(ネギ)か。柏槇(イブキ)ともいう。

2622 志賀の海女の塩焼き衣なれぬれど恋といふものは忘れかねつも

【訳】志賀の海女の塩焼きの仕事場がなれよごれているように、馴れ親しんだ仲ではあるが、やはり苦しみというものは忘れようにも忘れられない。

○志賀の海女の＝「志賀」は福岡市東区の志賀島

2646 住吉の津守網引の泛子(ウキ)の緒の浮かれか行かむ恋ひつつあらずは

【訳】住吉の津守の漁師が引く網の泛子(ウキ)が浮かび漂うように、いっそのこと、どこへなりと浮れさ迷って行こうか。こんなに恋い焦がれてなんかいないで。

【釈】泛子に寄せる恋

○津守＝大阪の住吉あたりの小地名か。○泛子の緒の＝網の周囲に泛子を通した太い縄。

2724 秋風の千江の浦みの木(コ)つみなす心は寄りぬ後は知らねど

【訳】秋風の吹く千江の浦辺にて寄せられてくる木っ端のように、私の心はあの人にすっかり寄り添ってしまった。あとあとどうなるかはわからないけど。

【釈】木つみに寄せる恋

○千江の浦＝所在未詳。「浦み」は海岸の湾曲部

2725 白真砂御津の埴生(ハニ)の色に出でて言はなくのみぞ我が恋ふらくは

【訳】白砂の続く御津の岸の埴土の鮮やかな色のように、顔色にまで出してはっきり告げないだけなのだ。私の恋しいこの気持ちは。

【釈】旅に出て土地の女に訴えた歌か。埴生に寄せる恋

○白真砂＝「御津」を修飾する枕詞的用法。○御津の埴生の＝白と対比することで埴の赤色を際立たせている。○「御津」＝難波の御津

2727 酢蛾島の夏身の浦に寄する波間も置きて我が思はなくに

【訳】酢蛾島の夏身の浦に後から後から寄せる波が、絶える間もないのと同じに、間を置かずに、私は終始思いつづけているのに。

○酢蛾島の夏身の浦＝所在未詳。三重県鳥羽市菅島の海岸とかも言う。

2729 霰降り遠つ大浦に寄する波よしも寄すとも憎くあらなくに

【訳】あの遠くの大浦にうち寄せる波ではないが、よしたとえ二人の仲を人が言い寄せたとしてもかまわない。私もあの人がいやなわけではないのだから。

【釈】噂されることを内心で喜んでいる歌。

2730 紀伊の海の名高の浦に寄する波音高きかも逢はぬ子ゆゑに

【訳】紀伊の海の名高の浦に寄せる波の音が高いように、なんと噂が高いことだろう。逢ったこともないあの娘なのに。

○名高の浦＝和歌山県海南市名高町の海岸 ○寄する波

2731 牛窓の波の潮騒(シホイ)島響(トヨ)み寄そりし君は逢はずかもあらむ

【訳】牛窓の波のざわめきが島中に鳴りわたるように、世間に知れわたるほど私との仲を言い寄せられたあの方なのに、逢っても下さらないのであろうか。

○牛窓＝岡山県邑久郡牛窓町の港

2732 沖つ波辺波の来寄る左太の浦のこのさだ

過ぎて後恋ひむかも

【訳】沖の波も岸の波もうち寄せる左太の浦の名のように、このさだ—あなたと逢っている楽しいこの一時が過ぎてしまえば、後で恋しくなることだろう。

○左太の浦=所在不明

2733 白波の来寄する島の荒磯にもあらましものを恋ひつつあらずは

【訳】せめて、白波のうち寄せて来てくれる島の荒磯でもあった方がまだ。こんなに恋いつづけてばかりいないで。

○荒磯=岩の多い荒涼とした海辺。思う心を持たぬものとして言っているが、それでも寄って来てくれるものはある、の意をこめたものか。

2734 潮満てば、水沫(ミナ)に浮かぶ真砂にも我はなりてしか恋ひは死なずして

【訳】潮が満ちるにつれて、あのはかないあぶくに混じって浮かぶ細やかな砂、いっそそんな砂にでも私はなりたい。恋しさに死ぬような思いはしないで。

【訳】恋に苦しむ者の絶望感を述べた歌。

○水沫(ミナ)に浮かぶ真砂=はかない状態ではあるが、それ自身無心な物として引き合いに出した。

2735 住吉の岸の浦みにしく波のしくしく妹を見むよしもがも

【訳】住吉の岸の浦辺にしきりに寄せる波のように、しばしばあの娘に逢える手だてあればよいのに

○住吉の岸=大阪市住吉区一帯の海岸

2736 風をいたみいたぶる波の間なく我が思ふ君は相思ふらむか

【訳】風が強くて激しく立ちさわぐ波の絶え間がないように、絶えず私が思いを寄せておるあのお方は、同じように私を思っていて下さるの

だろうか。

○いたぶる波の=「いたぶる」は激しく揺れるの意

2737 大伴の御津の白波間なく我が恋ふらくを人の知らなく

【訳】大伴の御津に寄せては返る波の絶え間がないように、絶える間とてなく私は恋焦がれているのに、あのひとつたらまるで知らないのだ。

【訳】片思いを嘆いている。

○大伴の御津=難波の津。

2739 みさご居る沖つ荒磯に寄する波ゆくへも知らず我が恋ふらくは

【訳】みさごに棲んでいる遠い荒磯、そんな磯に寄せる波の行方もわからぬように、行先どうなるのかさっぱりわからない。私のこの苦しい恋は。

【訳】女の浮気を気にしている歌。

○みさご=鳶ほどの大きさの鳥で、海岸や断崖などに棲み、魚を捕って食う。○寄する波=「ゆくへも知らず」を起す。「沖つ荒磯」の光景に、心細さを暗示しているか。○ゆくへ=ここは恋が成就するかどうかの成行きを言う。

2742 志賀の海女の煙焼き立てて焼く塩の辛き恋をも我れはするかも

【訳】志賀島の海女が景気よく煙をたてて、焼く塩が辛いように、何とも辛く、つらい恋を私はしている。

○志賀の海女=「志賀」は福岡市東区の志賀島。滋賀の海女は特に関心をもたれ、これを歌ったものが多い。

2743 或本 なかなか君に恋ひずは留牛馬の浦の海女ならましを玉藻刈る刈る

【訳】なまじっかあの人に恋焦がれたりしないで、いっそ留牛馬の浦の海女でもあったほうがいい。毎日玉藻を刈りながら。

○なかなか=中途半端な気持ちを示す副詞

○留牛馬の浦＝兵庫県相生市那波の海岸か。

2744 鱸取る海女の燈火(トモヒ)外(ヨリ)にだに見ぬ人ゆゑに恋ふるこのころ

【訳】 鱸を釣る海女の漁火を沖合いはるかに見るように、遠くからさえ見たこともない人なのに、しきりに恋しく思うこのごろだ。

2746 庭清み沖へ漕ぎ出づる海女舟の楫取る間なき恋もするかも

【訳】 魚場が今こそ綺麗な風だと、沖へ急ぐ海女たちが休む間もなく櫓を漕ぎ出すように、ひっきりなしに恋心が湧いてくる。

○庭＝仕事場。ここは漁をする海面。○清み＝波静かなことをいう。○楫とる間なき＝絶え間ない、の意。

2779 海原の沖つ繩海苔うち靡き心もしのに思ほゆるかも

【訳】 青海原の水底に生えている繩海苔(ナハリ)が揺れ靡くように、心ひそかに慕い寄って、うちしおれるばかりに思いつづけている。

繩海苔＝細長い繩状の海藻であろう。

2780 紫の名高の浦の靡き藻の心は妹に寄りにしものを

【訳】 名高の浦の、波のまにまに靡き寄る藻、その藻のように、心は、すっかり靡いてあの娘あたりに寄りついてしまっているのだがなあ。

【釈】 相手は一向に自分の心に応えてくれないという嘆き。

2781 海の底奥を深めて生ふる藻のとも今そこ恋はすべなき

【訳】 海の底で深く深く根を下ろして生えている藻、その名のようにもとのもとから、手の施しようもないほど、今や私の恋心は燃えたぎっている。

○海の底＝心の奥深くに思う気持ちの意を含む。

2782 さ寝がには誰れとも寝めど沖つ藻の靡きし君が言待つ

【訳】 ただ寝るぶんなら誰と寝てもいいわけですが、沖の藻の靡くように、すっかり私の心を靡かせたあなたのお言葉だけをお待ちしている私ですのに。

○さ寝がには＝共寝するくらいのことなら。

2795 紀伊の国の飽等の浜の忘れ貝我れは忘れじ年は経ぬとも

【訳】 紀伊の国の飽等の浜の忘れ貝、その名のように私は決してあなたを忘れてたりすまい。たとえ年は過ぎ去ってゆこうとも。

○飽等の浜＝和歌山市加太町の田賀浜ともいうが未詳

2796 水くくる玉に交れる磯貝の片恋のみに年は経につつ

【訳】 水中にひそむ玉に混って、しっかりと岩にとりついている磯貝のように、片思いのせつなさに明け暮れているうちに、年はどんどん過ぎてしまつて。

○水くくる＝水中に潜る意。○玉＝水中の美しい小石や貝などをいう。恋の対象になる人を暗示するか。○磯貝＝磯辺の岩に付着している貝で、鰯(アジ)のような一枚貝を示す。

2797 住吉の浜に寄るといふうつせ貝実なき言もち我れ恋ひめやも

【訳】 住吉の浜に寄ってくるといううつせ貝、その貝の中身がないように、実のないいい加減な言葉を口にして、私は恋しがっているのではありません。

【釈】 女の浮気を気にしている歌。

○浜に寄る＝「寄る」は相手に寄り添う意をこめたか。○うつせ貝＝中身のうつろな貝。貝殻○実なき＝実意がない、の意

2798 伊勢の海女の朝な夕なに潜くといふ鰻の  
貝の片思いにして。

【訳】伊勢の海女が朝といわず夕といわずせせせと潜って採るという、あの鰻ではないが、私の恋もその片思いのままで・・・。

【釈】女の浮気を気にしている歌。

○みさご＝鳶ほどの大きさの鳥で、海岸や断崖などに棲み、魚を捕って食う。○寄する波＝「ゆくへも知らず」を起す。「沖つ荒磯」の光景に、心細さを暗示しているか。○ゆくへ＝ここは恋が成就するかどうかの成行きを言う。

2801 大海の荒磯の洲鳥朝な朝な見まく欲しき  
を見えぬ君かも

【訳】大海の荒磯の洲に餌をあさる鳥、その鳥を来る朝も来る朝も見るように、朝ごとお顔を見たいと思っているのに、あなたは一向にお見えてない。

○朝な朝な・・・＝闇のなかで共寝をし、相手の顔を朝はじめて見ることに焦点をあてて言った。

2805 伊勢の海ゆ鳴き来る鶴の音どろも君が聞  
こさば我れ恋ひめやも

【訳】伊勢の海から泣きながら飛んでくる鶴の声のように、あなたが声だけでもかけて下さるなら、私はこんなにも思い悩んだりしましようか。

【釈】女の浮気を気にしている歌。

2806 我妹子に恋ふれにかあらむ沖に住む鴨の  
浮寝の安けくもなき

【訳】あの娘に恋焦がれているからであろうか。沖の波の上をねぐらとする鴨の浮寝さながらに、私の気持ちは揺れ動いてちっとも落ちつかない。

【釈】鴨が水に浮いている姿に託して、不安な気持ちを表す。

2822 栲領巾の白浜波寄りもあへず荒ぶる妹に

恋ひつぞ居る

【訳】白波の浜に波打ち寄せるようには、そばに寄りつかしてもらえないまま、そのつつけんどうなあなたにあこがれつつけています。

【釈】よそよそしい女を大げさに恨んで見せた歌。白浜波に寄せる問答。

○栲領巾の＝「白浜波」の枕詞。「栲領巾」は櫛の繊維で作った白い領巾。「領巾」は女の装身具。

○荒ぶる＝ここは自分を疎んじてなつかない意

2823 かへらまに君こそ我れに栲領巾の白浜波  
の寄る時もなき

【訳】あべこべにあなたこそ、私には、白波に波の打ち寄せるように、近寄ってくるときなど、ちっともないじゃありませんか。

○かへらまに＝逆に、反対に、の意

2971 大君の塩焼く海女の藤衣なれはすれども  
いやめづらしも

【訳】大君の塩を焼く海女の着る粗末な藤衣がなれ汚れているように、馴れ親しんではいても、あの娘はいつも新鮮でかわいい。

○藤衣＝藤衣の繊維で製した仕事着

3029 左太の浦に寄する白波間なく思ふを何か  
妹に逢いかたき

【訳】左太の浦に打ち寄せる白波が間を置かないように、これほど絶え間なく思い焦がれる野に、どうしてあの娘に逢えないのだろう。

○左太の浦＝所在未詳

3072 大崎の荒磯の渡り延ふ葛(クズ)のゆくへ  
もなくや恋ひわたりなむ

【訳】大崎の渡し場の荒磯にまといつく葛が、どこまで伸びるかわからないように、いつ収まるのか、そのめど無しに恋続けることになるのか。

○大崎＝和歌山県海草郡下津町の大崎。四国へ渡る海であった。

3076 住吉の敷津の浦のなのりその名は告りて  
しを逢わなくも怪し

【訳】住吉の敷津の浦のなのりそではないが、  
名は名告ってくれたのにいっこうに逢おうとし  
ないのは、どうも変だ。

【釈】海藻に寄せる恋  
○敷津の浦＝大阪の住吉神社西方あたりの海岸。  
○なのりそ＝海藻のほんだわら

3077 みさご居る荒磯に生ふるなのりそのよし  
名は告らじ親は知るとも

【訳】みさごの棲む荒磯に生えるなのりそでは  
ないが、口が裂けてもあなたの名を明かすもの  
ですか。私たちの仲を親が知ったとしても。  
○みさご＝水辺の崖に棲み魚を捕食する、鳶ぐ  
らいの鳥。

3078 波の共(み)靡く玉藻の片思(かたし)に我が  
思ふ人の言の繁けく

【訳】波のまにまに一方に傾き靡く玉藻のよう  
に、片思いに私が心を砕いているあの人の噂が、  
しょっちゅう聞こえてくる。  
○波の共＝片寄り靡くの意。 ○言＝相手につ  
いての好ましくない噂。

3079 わたつみの沖つ玉藻の靡き寝む早来ませ  
君待たば苦しも

【訳】大海原の沖で、玉藻が波のまにまにくね  
るように、あなたに寄り添って今すぐ寝たい。  
早く来て、あなた。これ以上お待ちするのは切  
ない。

3080 わたつみの沖に生ひたる繩海苔の名はか  
つて告らじ恋ひは死ぬとも

【訳】大海原の沖に生えている繩海苔の名のよ  
うに、あなたの名は決して口から洩らしたりは  
しません。たとえ恋しさに死ぬようなことがあ  
っても。

【釈】繩海苔＝未詳。長細い繩状の海藻

3084 海女娘子潜き採るといふ忘れ貝よにも忘  
れじ妹が姿は

【訳】海女の娘子が海に潜って採るという忘れ  
貝の名ではないが、命あるかぎりこの私が忘れ  
ることはあるまい。かわいいあなたの姿は。

3158 旅にありて物をぞ思ふ白波の辺にも沖に  
も寄るとはなしに

【訳】旅路にあつて物思いは尽きない。白波は  
岸にも沖にも寄せるが、私はかわいい娘に言い  
寄ることもできないでいて。

3159 港みに満ち来る潮のいや増しに恋はあま  
れど忘れぬかも

【訳】川口あたりに満ち上ってくる潮がひたひ  
たと増すように、募りに募る恋心は溢れて出し  
てしまうが、それでもやはりあの娘が忘れられ  
ない。  
○「港み」＝舟の泊る川口のあたり。○恋はあ  
まれど＝恋心が表情にでたり、溜息となって漏  
れたりする意。

3160 沖つ辺波の来寄る左太の浦のこのさだ過  
ぎて後に恋ひむかも

【訳】沖の波も岸の波も打ち寄せる左太の浦の  
名のように、このさだ一あなたと逢っている楽  
しいこの一時が過ぎてしまえば、後で恋しくなる  
ことだろう。

【釈】よそよそしい女を大げさに恨んで見せた  
歌。白浜波に寄せる問答。

3163 我妹子に触るとはなしに荒磯みに我が衣  
手は濡れにけるかも

【訳】かわいい妻の柔肌に触れることもないま  
ま、荒々しい磯から磯へのこの旅で、私の着物  
の袖はすっかり濡れてしまった。

【釈】波ではなく、妻恋しさの涙に濡れたとい

うことであろう。

3164 室の浦の瀬戸の崎なる鳴島の磯越す波に濡れにけるかも

【訳】室の浦の瀬戸の崎の向かいにある鳴島、その島の泣く涙か、磯を越す波に濡れてしまった。

○室の浦＝兵庫県揖保郡御津町の室津。○瀬戸の崎＝室津の金ヶ崎。○鳴島＝金ヶ崎の前にある島らしい。

3165 ほととぎす飛幡の浦のしく波のしくしく君を見むよしもがも

【訳】飛幡の浦にしきりに寄せては返す波のように、繰り返し繰り返しあの方にお逢いできる手だてがあればよいのに。

○ほととぎす＝「飛幡」の枕詞。ほととぎすが飛ぶ意でかかる。○飛幡の浦＝北九州市戸畑区の海岸

3168 衣手の真若の浦の真砂地間もなく時なし、我が恋ふらくは

【訳】真若の浦の美しい真砂の浜のようなかわいあひの娘、のべつまくなしなのだ、私があひの娘に恋焦がれるのは。

3169 能登の海に釣りする海女の漁り火光にいませ月待ちがてり

【訳】能登の海で夜釣りをしている海女の漁り火の光をたよりにおいでなさいませ。潮時を告げる月の出をお待ちになるつれづれに。

【訳】旅立つ男を見送る土地の女の歌であろう。○能登の海＝石川県能登半島の海。○漁り火＝夜釣りの舟に燭す漁火

3170 志賀の海女の釣りし燭せる漁り火のほのかに妹を見むよしもがも

【訳】志賀の海女が夜釣りにともしている漁り火のちらちらする光のように、ほんのちらっと

でよいから、妻の姿を見る手がかりがないものか。

【訳】よそよそしい女を大げさに恨んで見せた歌。白浜波に寄せる問答。

○志賀の海女＝福岡市志賀島の漁師たち

3172 浦に漕ぐ熊野舟つきめづらしく懸けて思はぬ月も日もなし

【訳】浦近くを漕ぐ熊野舟の姿かたちは珍しいが、いつみても愛ずらしい妻のことを、心に懸けて思わぬ月とて日とてない。

○熊野舟つき＝「熊野船」は良材を産する紀伊の熊野地方の舟で、特異な形状であったらしい。「つき」は形状の意で、目つき・顔つきの「つき」と同じものか。

3174 漁りする海女の楫音ゆくらかに妹は心に乗りけるかも

【訳】漁をする海女舟の櫓のきしみがゆっくりと聞こえるように、じわりじわりとあの娘は私の心に乗りかかって離れない。

○ゆくらかに＝単調な調子でことが進行するさまを表す。○妹＝旅先での一夜妻であろう。

3175 若の浦に袖さへ濡れて忘れ貝拾へど妹は忘らえなくに

【訳】若の浦で袖まで濡らして忘れ貝を拾うのだが、いくら拾ってもいっこうに妻が忘れられない。

【訳】貝に寄せる恋。水辺と植物のつなぎになっている。

○若の浦＝和歌山市の和歌の浦。○忘れかねつも＝忘れることができない。

3177 志賀の海女の磯に刈り干すなのりその名は告りてしを何か逢いかたき

【訳】志賀の海女が磯で刈り干しているなのりそ、その名のように私は名告ったのに、どうし

てなかなか逢えないのだろう。

3197 住吉の岸に向へる淡路島あはれと君を言  
はぬ日はなし

【訳】住吉の岸と向きあっている淡路島の名の  
ように、あわれ—ああ恋しいと、あなたのこと  
を口にせぬ日はありません。

○住吉の岸＝大阪市住吉区の海岸

3200 筥飯の浦に寄する白波しくしくに妹が姿  
は思ほゆるかも

【訳】筥飯の浦に寄せては返す白波のように、  
しきりに妻の姿がちらついて、思い出されてな  
らない。

【釈】瀬戸内の寄港地で妻を思う夫の歌。

3201 時つ風吹飯の浜に出て居つつ贖(アカ)ふ命  
は妹がためこそ

【訳】時つ風の吹く吹飯の浜辺にて、うやうや  
しく海神に幣帛(ヌ)を捧げて舟路の無事を祈る  
のは、誰のためでもない、いとしい妻のためな  
のだ。

○時つ風＝引潮の前後、時を定めて一時的に吹  
く強風。○吹飯の浜＝大阪府南端、岬町深日の  
海岸。淡路に渡るのに近い場所。○贖ふ＝金品  
と交換に物を手に入れる意。ここは神に幣帛を  
捧げて加護を祈ることを言う。

3202 熟田津に船乗りせむと聞きしなへ何ぞも  
君が見え来ずあるらむ

【訳】熟田津からの帰りの船にお乗りになるだ  
ろうと聞いていたのに、どうしてあの方はちっ  
とも帰って来てくださらないのだろう。

【釈】廻りまわって帰途に着いた夫を待ち焦が  
れる妻の歌。

○熟田津＝松山市の和気・堀江付近。瀬戸内の  
港

3203 みさご居る洲に居る舟の漕ぎ出なばうら

恋しけむ後は逢ひぬとも

【訳】みさごのいる洲に舫(フナ)っている船あ漕  
ぎ出して、あなたが行ってしまったら、切なく  
て仕方のないことだろう。後にはまたお逢いで  
きるにしても。

【釈】港の遊行女婦の歌か。舟に寄せる恋

3205 後れ居て恋ひつつあらずは田子の浦の海  
女ならましを玉藻刈る刈る

【訳】後に残って恋焦がれていないで、いっそ  
田子の浦の海女でもいた方がいい。玉藻でも  
刈りながら。

【釈】田子の浦あたりの遊行女婦の歌か。○田  
子の浦＝静岡県庵原郡由比町、蒲原町あたりの  
海岸 ○海女ならましを＝「海女」が、恋心の  
陰影などわからぬ非情の人としてとらえられて  
いる。

3206 筑紫道(チクシ)の荒磯の玉藻刈るとか君  
が久しく待てど来まさぬ

【訳】筑紫通いの道で荒磯の玉藻でも刈って  
おいでなのだろうか。あの方は長の年月待って  
も帰って来られない。

【釈】前歌に対して旅する男の方を海女に見立  
てている。

○筑紫道＝九州に通じている道。瀬戸内海沿岸

3217 荒津の海我幣奉り斎(イ)ひてむ早帰りま  
せ面変りせず

【訳】荒津の浜辺で、私は海の神に幣帛を捧げ、  
身を清めて祈っていきましょう。早くお帰りにな  
ってください。旅やつれなどせずに。

【釈】船出に際して無事を祈る女の送別歌。○  
斎いてむ＝「斎ふ」は潔斎して神に祈る意。○  
面変り＝旅やつれで顔つきが変わること。

反歌

3244 阿胡の湖の荒磯の上のさざれ波我が恋ふ  
らくはやむ時もなし

【訳】阿胡の海の荒磯に絶え間なく寄せるさざ波のように、私の恋心はとだえる時とともない。

3253 葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国しかれども言挙げぞ我がする言幸(コトサキ)くま幸くませと障みなく幸くいませば荒磯波ありても見ると百重(ヒトヘ)波千重波しきに言挙げず我れは言挙げず我れは

【訳】この葦原の瑞穂の国は、天つ神の御心のままに、人は言挙げなどしない国です。こと言のとおりにご無事でいらっしやい、障ることなくご無事でお帰りのときに、この荒磯に寄せつづける波のように、変わらぬ姿で、またお目にかかりましょと、百重に寄せる波、千重に寄せる波、その波のように繰り返し言挙げをします、私は。言挙げをします、私は。

【釈】拜命の遣唐使に送った、人麻呂自身の作らしい。

○葦原の瑞穂の国=天神(アマツカミ)の統治によって五穀が豊かに実る日本の国土 ○「百重波」「千重波」=ともに船旅を示す。

3301 神風の伊勢の海の朝なぎに来寄る深海松夕なぎに来寄る俣海松深海松の深めし我れを俣海松のまた行き帰り妻と言はじとかも思ほせる君

【訳】神風の吹く伊勢の海の、朝風に岸に寄って来る深海松、夕風に岸によってくる俣海松、その深海松の名のように、深く深くお慕いしていたこの私、その私を、俣海松の名のように、また帰って来て、妻とはお呼びにならないおつもりですか。あなたは。

○深海松=海中深く生えている海松(ミル) ○俣海松=海松は股に分れた枝をもつのでこう言った。

3302 紀伊の国の牟婁の江の辺に千年に障(サ)ることなく万代(ヨツヨ)にかくしもあらむも大船の思ひ頼みて出立の清き渚に朝なぎに来寄る

深海松夕なぎに来寄る繩海苔深海松の深めし子らを繩海苔の引けば絶ゆとや里人の行き集ひに泣く子なす行き取り探り梓弓弓腹降り起ししのぎ羽を二つ手挟み放ちけむ人し悔しも恋ふらく思へば

【訳】紀伊の国の牟婁の入江の里で、千年の後までもさし障りなく、万年の後までもこのままかわらざいようと、大船ののったように頼みきって、出立の清らかな渚に、朝風に寄ってくる深海松、夕風に寄って来る繩海苔、その深海松の名のように深く深く思っていたあの娘なのに、その繩海苔のその引けばちぎれるように引っ張ったら絶えるくらいの仲とでもいうのか、行き交う里人の人ごみにまぎれて、泣く子が乳を探りでもするように、あの娘を探り当て、梓弓の弓腹を振り立て、しのぎ矢を二つはさんでその矢を引き離れたあいつを思うと悔しくてならない。こんな恋しさをかみしめることにつけても。

【釈】恋人を横取りされた男の繰り返言。本来は紀伊地方の謡い物か。

○牟婁の江=和歌山県の田辺湾 ○出立=田辺市の海岸 ○繩海苔=うみぞうめんともいうが未詳 ○弓腹振り起し=弓を勢いよく振り立てる意。 ○しのぎ羽=鳥の風切羽の矢羽をつけたよく飛ぶ矢か。 ○二つ手挟み=矢継ぎ早に射るために、甲矢と乙矢の二本を手挟む意。

3333 大君の命畏み蜻蛉島大和を過ぎて大伴の御津の浜辺ゆ大船に真楫しじ貫き朝なぎに水手(カ)の声しつ夕なぎに楫の音しつ行きし君いつ来まさむと占置きて斎ひわたるにたはことか人の言ひつる我が心筑紫の山の黄葉(モジバ)の散りて過ぎぬと君が直香(タガカ)を

【訳】大君の仰せを恐れ承って、大和を後にして、大伴の御津の浜辺から、大船に櫂をびっしりと貫き並べ、朝風に水夫(カ)の掛け声も高く、夕風に櫂音もにぎやかに船出して行かれた君、その君はいつ帰って来れるのかと、心こめて占いをし身を浄め続けていたのに、気違いぎたを

人が言ったのであろうか、わが心をつくすという筑紫の山の黄葉が散るように、散ってしまったという、まがいもないあの方の現身が。

○占置きて＝占いのために幣を奉る意。○たはこと＝狂って口走る言葉。

3336 鳥が音の神島の海に高山を隔てになして沖つ藻を枕になし蛾羽(ムシハネ)の衣だに着ずに鯨魚取り海の浜辺にうらもなく臥したる人は母父(オモツチ)に愛子(マコ)にかあらむ若草の妻かありけむ思ほしき言伝てむやと家問へば家をも告らず名を問へど名だにも告らず泣く子なす言だにとはず思へども悲しきものは世間にぞある世間にぞある。

【訳】波のざわめく神島(カシマ)の海に、高い山を壁代りにし、沖の藻を枕にして、薄い着物もまとわずにこの浜辺に何も気かけず臥せている人、この人は、母や父にとって愛しい子なのであろう。かわいい妻もいたであろう。何かして欲しいことがあったら伝えてあげようかと、家はと尋ねても家も告げず、名はと問うても名さえ明かさず、まるで聞きわけのないだだっ子のように返事もしない。ああ、思えば思うほど、悲しくてならぬものは、人の世である。人の世である。

○鳥が音の＝「神島」の枕詞。鳥の声の「かしまし」と地名「神島」とを懸け、荒涼たる海を匂わせている。○神島＝「かみしま」の訛りで、前歌の「神の渡り」と同じと解したものらしい。○蛾羽＝羽蛾やかげろうのような薄い羽。○うらもなく＝四圍に対する感情を持たないさま。

3339 玉梓の道に出で立ちあしひきの野行き山行きにはたづみ川行き渡り鯨魚取り道海に出でて吹く風もおほには吹かず立つ波ものどには立たぬ畏きや神の渡りのしき波の寄する浜辺に高山を隔てに置きて浦ぶちを枕にまきてうらもなく臥したる君は母父が愛子にもあらむ若草の妻もあるらむ家問へど家道も言はず名を問へど名

だにも告らず誰が言をいたはしとかもとみ波の畏き海を直渡りけむ。

【訳】旅路に出て、野を越え山を越え、川を渡り海路に乗り出して、吹く風も並には吹かず、立つ波ものどかには立たない、恐ろしい神の支配する難所の、立ちしきる波の打ち寄せる浜辺に、高い山を壁代りにし、入江の岸を枕にして、何も気かけずに臥せている君、この君は、母や父の愛しい子なのであろう。かわいい妻もいるのであろう。なのに家を尋ねても家路も言わないし、名を問うても名さえ明かさない。いったい、どなたとの約束を気にして、うねり波の恐ろしい海なのに、そんな所をまっすぐに渡ってきたのであろうか。

○神の渡り＝神島と本土との間の海（福山市の西部、芦田川西岸の小山。奈良時代、福山市は海で、神島の浜辺は舟の避難所であつたらしい。○しき波＝岸辺にしきりに寄せる波。○浦ぶちを枕にまきて＝「浦ぶち」は岸からすぐ深くなっている入江。ここはその岸に臥せているさま。

3341 家人の待つらむものをつれもなき荒磯をまきて臥せる君かも

【訳】家の人が今ごろしきりに待っているであろうに、縁もゆかりもない荒磯を枕にして臥せておられる君は、まあ。

【釈】人麻呂の、行路死人を悼む。○家人＝家族の中でも妻を中心に据えて言った語。○つれもなき＝死者を悼う心から死者のいる場所を貶めていうのは、晩歌がしばしば用いる方法。

3342 浦ぶちに臥したる君を今日今日と来むと待つらむ妻し悲しも

【訳】入江の岸の枕にこうして臥っている君なのに、それとも知らず今日帰るか今日帰るか待ち焦がれているこの人の妻を思うと、無性に悲しくなる。

3343 浦波の来寄する浜につれもなく臥したる  
君が家道知らずも

【訳】浦波のしきりに押し寄せる浜辺に、無表情に臥せている君の、その家路もわからない。

【釈】作者の眼は、3340～1 では死者に、3342～3 では家人に比重がある。

○つれもなく＝ここは、あらゆるものに対して何の情念も示さない表情で臥せているさま。

3348 夏麻引く海上瀉の沖つ州に舟は留めむさ  
夜更けにけり

【訳】海上瀉の沖の砂洲に、この舟はもう泊めることにしよう。夜もとっぷり更けてきた。

【釈】雑歌。雑歌は、東歌では、東国の風俗を示す典型として都人の儀式・公宴などで長く歌い継がれたものらしい。

○夏麻引く＝「海上瀉」の枕詞。○海上瀉＝千葉県市原市付近の東京湾に面した地の干潟か

3348 葛飾の真間の浦みを漕ぐ舟の舟人騒ぐ波  
立つらしも

【訳】葛飾の真間の浦辺を漕いでゆく舟の、舟人たちがせわしく動き廻っている。波が立ってきたらしい。

【釈】東国海上の生活風景

○葛飾＝下総の郡名。千葉県・東京都・埼玉県などにまたがる江戸川下流一帯。○真間＝千葉縣市川市真間あたり。

3359 駿河の海磯辺に生ふる浜つづら汝を頼み  
母に違ひぬ

【訳】駿河の海の磯辺でどこまでも延びていく浜つづらのように、ずっとあなたを頼みにしつづけて、母さんと仲違いしてしまいました。

○駿河＝静岡県中央部○浜つづら＝浜辺の蔓草か。上三句は序。「汝を頼み」を起こす。長く絶えずに、の意。○汝＝多少の敬意をこめて相手と呼ぶ言葉。

3359 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎな  
むものを乱れやしめめや

【訳】伊豆の海に立ちしきる波のように、二人の仲はこのままずっと続くと思っているのに、どうしてあんたの心を乱したりなどしましょう。

【釈】白波に寄せる恋。女の心であろう。

○立つ白波の＝上二句は序。「ありつつも継ぐ」を起す。波が絶え間なく立つ、の意。

3372 相模道の余綾の浜の真砂なす子らは愛し  
く思はるるかも

【訳】相模道の余綾の浜の美しい真砂のような娘、あの娘はむしように愛しく思われてならぬ。

○余綾の浜＝古代の余綾郡、今の中郡大磯町・二宮町あたりの海浜。○真砂＝細かく愛らしい白砂。

3385 葛飾の真間の手児名がありしかば真間の  
おすひに波もとどろに

【訳】昔、葛飾の真間の手児名という、それは美しい女がいたからさ、この真間の磯辺に寄せる波までが、轟くばかりに大騒ぎしたものさ。

【釈】古老が語る形の歌。

3397 常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶え  
すれあどか絶えせむ。

【訳】常陸にある浪逆の海の玉藻なら引張れば絶えもしようが、二人の仲はどうしても絶えたりしよう。

【釈】海に寄せる恋。

○常陸なる＝常陸以外の人の目でとらえた表現。

○浪逆の海＝利根川の下流、北浦の南方あたり。

3429 遠江引佐細江のみをつくし我れを頼めて  
あさましものを

【訳】遠江の引佐細江のみをつくしは、すっかり私を安心させておきやがって・・・、いっそ干しあげてやればよかったものを。

【釈】一旦靡くと見せて裏切った女を恨む歌。  
○引佐細江＝静岡県引佐郡細江町にある浜名湖の入江。○みをつくし＝川や入江を行く舟の航路標識として立てた串。女の譬え。「身をつくし」の意をこめるか。○頼めて＝頼りに思わせて、の意。

3430 志太の浦を朝漕ぐ舟はよしなしに漕ぐら  
めこもよしこさるらめ

【訳】志太の浦を朝っぱらから漕ぎ出していくあの舟は、わけもなしに漕いでいったりするもんか。きつとわけがあるにちがいない。

【釈】朝帰りの男を揶揄した歌。類想歌、催馬楽「我が門を」。

○志太の浦＝静岡県志太郡の海岸。女の家を譬え

3449 白栲の衣の袖を麻久良我よ海人漕ぎ来み  
ゆ波立つなゆめ

【訳】真っ白な衣の袖を枕にするという、その麻久良我の法から、海人が舟を漕いで来る。波よ、立つな、けっして。

○白栲の＝「衣」の枕詞。○衣の袖を＝上二句は序「麻久良我」を起す。袖を枕にする意。○麻久良我＝地名

3498 海原の根柔ら小菅あまたあれば君は忘ら  
す我れ忘れや

【訳】海辺に根の柔らかな小菅がいくらでもあるので、あなたは私のことをお忘れになります。私は忘れなんかするものですか。

【釈】疎遠になった男を恨む歌。

○海原の根柔ら小菅＝海岸に生えている根元の柔らかな小菅の意。ここは「寝」と「柔」の意をにおわし、港の遊行女婦の譬え。

3505 安斉可潟潮干のゆたに思へらばうけらが  
花の色に出めやも

【訳】安斉可潟にゆったりと潮が引いていくように、ゆったりとした気分であの娘を思うのだったら、どうしておけらの花のように思いを顔に現わしたりしようか。

○安斉可潟＝地名。

3548 多由比潟潮満ちわたるいづゆかも愛しき  
背ろが我がり通はむ

【訳】多由比潟には潮が満ちわたっている。いったいどこを通過して私の愛しいお方は通って来て下さるのだろうか。

○多由比潟＝地名。○いづゆ＝何処より、の意。

3551 阿遅可麻の潟にさく波平せにも紐解くも  
のか愛しけを置きて

【訳】阿遅可麻の干潟にうち寄せては裂け散る波が広がる、その平瀬のように、平然と下紐を解いたりしましょうか。私の愛しいお方をさしおいて。

○阿遅可麻＝地名。○潟にさく波＝上二句は序。「平せに」を起す。砕けて返す波の広がりという「平瀬」の意。○平せに＝屈託のないさまを表わす副詞か。

3551 麻都が浦にさわゑうら立ちま人言思ほす  
なもろ我が思ほのすも

【訳】麻都が浦に波のざわめきがしきりに聞こえるが、あの人は、そんなざわついた世間の噂を気にしておられるようだよ。私が気にしているように。

○麻都が浦＝地名。○思ほすなもろ＝「思ほすらむよ」の意。

3563 比多潟の磯のわかめの立ち乱え我をか待  
つなも昨夜も今夜も

【訳】比多潟の磯にわかめが入り乱れて茂るように、門に出て立ち心もちちに乱れて、あの娘は私を待っているのではあるうか。ゆうべも今夜も。

○比多瀉＝地名。○立ち乱え＝「乱え」は「乱れ」の東国語。

3570 葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲はむ

【訳】水辺の葦の葉に夕霧が立ちこめ、鴨の鳴き声が寒々と聞えてくるという、その夕べには、ひとしおお前のことが偲ばれるであろう。

【釈】乗船する難波の港での心情を想像して作った歌。類想歌。

○葦の葉＝難波の葦は有名。○鴨が音の寒き夕し＝作者の心情をこめて「鴨が音」を「寒き」と言ったもの。○偲はむ＝「偲ふ」は、何かをよすがにして眼前にない対象に思いを馳せる意。

3578 武庫の浦の入江の洲鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし

【訳】武庫の浦の入江の洲に巣くう鳥が、親鳥の羽に包まれているように、大事にいたわって下さったあなたと引き離されて、もう苦しくて焦れ死してしまいそうです。

【釈】使節として出発する夫に贈る妻の歌。悲別贈答歌では、溜まる女の方から先に歌を贈るのが普通。

○武庫の浦の＝「武庫の浦」は兵庫県の武庫川河口付近で、難波津から出る夫の船のまず通過する地。○羽ぐくもる＝羽で包んで暖め育てる意の「羽ぐくむ」に対する受身動詞。

3578 君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ

【訳】あなたがおいでになる、その海辺の宿に霧がたちこめたなら、私が門に立ち出ではお慕いして嘆く息のせいだと、思ってくださいね。

【釈】夫の旅先の宿を思いやる妻の歌。

○海辺の宿＝船旅でも夜は上陸して宿るのが普通。

3596 我妹子が形見に見むを印南都麻白波高み

外にかも見む

【訳】わが妻を偲ぶよすがに見ようと思うのに、印南都麻は、白波が高すぎて、それとはっきり見ることができないのであろうか。

○印南都麻＝兵庫県加古川河口の三角州をいうか。『播磨風土記』に隠妻の伝説が見える景勝地。

「都麻」に妻を連想して形見に見たいと言った。○外にかも見む＝「外に見る」は目で見てそれを確認できない意。

3597 わたつみの沖つ白波立ち来らし海人娘子ども島隠るみゆ

【訳】海の上が起す沖の白波、その荒い白波が立ってくるらしい。海人のおとめたちも島蔭に漕ぎ隠れていく。

○海人娘子＝前歌の「我妹子」「印南都麻」の縁で持ち出したもの。

3598 ぬばまたの夜は明けぬらし玉の浦にあさりする鶴鳴き渡るなり

【訳】暗い夜やと明けぬらしい。玉の浦で餌をあさる鶴が鳴きながら飛んで行く。

○ぬばまたの＝「夜」の枕詞。○玉の浦＝岡山県倉敷市玉島辺りか。

3599 月読の光を清み神島の磯間の浦ゆ船出す我れは

【訳】お月さまの光が清らかなので、それを頼りに、神島の岩の多い入江から船出をする、私は。

【釈】前歌の碇泊の朝に対し、就航の夜を歌っている。

○月読＝月を神と見立てた名。○光を清み・・・＝月は潮の具合と密接に関係する。

3607 白栲の藤江の浦に漁りする海女とや見らむ旅行く我れを

【訳】藤江の浦で漁をする卑しい海女と人は見るだろうか。都を離れて船旅をしているこの私

なのに。

【釈】前歌の碇泊の朝に対し、就航の夜を歌っている。

○藤江の浦＝明石市西部

3609 武庫の海の庭よくあらし漁りする海人の  
釣舟波の上ゆ見ゆ

【訳】武庫の海の漁場は、穏やかで潮の具合もよいらしい。漁をしている海人の釣舟が、波の彼方に浮んで見えている。

【釈】故郷を間近にしたのどかな景を述べた歌をうたうことで、心遣りとした。

○武庫の海＝西宮市から芦屋市にかけての海。

○庭＝仕事場。ここは漁をする海面。

3609 安胡の浦に舟乗りすらむ娘子らが赤裳の  
裾に潮満つらむか

【訳】安胡の浦で舟遊びをしているおとめたちの赤い裳の裾に、今しも潮が道寄せていることだろうか。

【釈】現実の海岸の風景に、古歌の女官の遊ぶあてやかな姿を重ねて、都に憧れている。

○赤裳の裾に・・・＝裳裾の濡れた姿に女性の官能美を感じている。「裳」は腰から下に着ける女性の衣服。

3609 大船に真楫しじ貫き海原を漕ぎ出て渡る  
月人壮士

【訳】大船の舷に櫂をたくさんとりつけ、海原を漕ぎ出して渡ってゆく月の船の若者よ。

【釈】船に見立てた月が大空を渡るのを見て、そのあとに牽牛、織女の逢会が始まることを期待した七夕歌。七夕に妻と逢う約束の秋を待つ思いを寄せている。類想歌。

○大船に真楫しじ貫き＝ここは海を船で渡る自分たちの姿を古歌に重ねている。○海原＝天空を海に見立てている。○月人壮士＝月の船に若者が乗っていると見た表現。

3614 帰るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白  
玉拾ひて行かな

【訳】帰った時に愛しい妻に見せように。そうだ、海の神が水底におさめている清らかな真珠を拾って行こう。

【釈】家苞を思うことで望郷の情を鎮めた歌。

○白玉＝鮫貝に生じる真珠 ○広島県豊田郡安芸津町の風早付近の海岸

3615 我がゆゑに妹嘆くらし風早の浦の沖辺に  
霧たなびけり

【訳】私ゆえに妻が溜息をついているらしい。この風早の浦の沖辺には、いま霧が一面に立ちこめている。

○霧たなびけり＝霧を嘆きの息と見ている。

3615 沖つ風いたく吹きせば我妹子が嘆きの霧  
に飽かましものを

【訳】沖から吹く風が激しく吹きでもしてくれたら、愛しい妻の嘆きの息の、その霧に、思いきり包まれていようものを。

【釈】前歌をうけて、妻の嘆きを思いのままに受けとめられないことを嘆いている。

○沖つ風＝ここは沖の霧を作者のところへ吹き寄せる風。地名「風早」を踏まえてこういったもの。○飽かましものを＝「飽く」は十分に堪能する意。

3622 月読の光を清み夕なぎに水手の声呼び浦  
み漕ぐかも

【訳】お月さまが清らかなので、夕暮れの風いだ海を、水夫が大勢で掛け声をあげながら、浦伝いに漕いで行く。

【釈】月光を利しての夜の船出。一行は再び海上の人となる。

○水手の声呼び 水夫たちが櫂を押し船を進めるために、掛け声を発する意。

3622 山の端に月傾けば漁りする海人の燈火沖  
になづさふ

【訳】山の端に月が傾いていくと、魚を捕る海人の漁火が、沖の波間にちらちらと漂う。

【釈】前歌の「月」の動きに伴って、次第に光が乏しくなる心細さを、はかない漁火にすがって慰めている。

○海人の燈火＝夜漁をする時、魚を誘い寄せるためにたく火。月が落ちたので夜漁の舟が出たのであろう。○なづさふ＝水に浸りながら浮び漂う意。

3626 鶴が鳴き葦辺をさして飛び渡るあなたづたづしひとりさ寝れば

【訳】葦辺をさして鶴が鳴きながら飛び渡っていく、ああ、そのたずではないが、たどたどしく心細い。妻もいないまま、独りきりで寝ていると。

3628 玉の浦の沖つ白玉拾へれどまたぞ置きつる見る人をなみ

【訳】玉の浦の沖合の方の真珠を拾ったけれども、またそのまま捨て置いてしまった。見て喜ぶ人がここにはいないので。

○見る人＝故郷の妻をさす。

3629 秋さらば我が船泊てむ忘れ貝寄せ来て置けれ沖つ白波

【訳】秋になったらまた、帰りのわが船をここに停めよう。憂さを忘れさせようという忘れ貝を、寄せてきて置いてくれ、沖の白波よ。

○忘れ貝＝二枚貝の片方だけになったもの。形の類似から鰹貝をも言う。積もりに積った旅の愁いを忘れて、いっきに家をめざしたいという願望をこめて持ち出したもの。

3630 真楫貫き船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦に宿りせましを

【訳】舷に櫂を取りつけてもこの船が漕ぎ進みさえしなかったら、いくら見ても見飽きることのない、この美しい麻里布の浦に、泊ることも

できように。

3630 大船にかし振り立てて浜清き麻里布の浦に宿りかせまし

【訳】大船から岸にかしを勢いよく投げ立てて、浜の清らかな麻里布の浦に、泊ってゆくことができないものだろうか。

○かし＝船を繋ぐための棒杭。船から投げて浜に突き立てたらしい。○振り立て＝勢いよく振り上げて突き立て。

3638 これやこの名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふ海人娘子ども

【訳】これがまあ、名にし負う鳴門の渦潮、その渦潮に掉さして玉藻を刈るという、海人のおとめたちなのか。

○名に負ふ その名に背かない、の意。○玉藻刈るとふ海人娘子ども＝渦潮に小舟をあやつて藻を採るおとめを讃美している。

3641 暁の家恋しきに浦みより楫の音するは海人娘子ども

【訳】夜明け前の、家がひとしお恋しい時分に、浦のあたりから櫓の音がする、あれは海人おとめたちの漕ぎ出す舟であろうか。

【釈】櫓の音に耳をそばだて、家恋しさに海人おとめを思い浮かべている。

○暁＝独り寝の身に人恋しさがつのる時である。

3642 沖辺より潮満ち来らし可良の浦にあさりする鶴鳴きて騒きぬ

【訳】沖の方から潮が満ちて来るらしい。可良の浦で餌をあさっている鶴が盛んに泣き騒いでいる。

【釈】前歌の「浦」を「可良の浦」と具体化し、鶴の声に潮時を感じとっている。夜は明けつつある。

○可良の浦＝熊毛の浦に近い海岸であろう。

3642 沖辺より船人上る呼び寄せていざ告げ遣らむ旅の宿りを

【訳】沖の彼方を船人が漕ぎ上がってゆく。こちらへ呼び寄せて、さあ、都の妻に知らせてやろう。この旅の宿りのわびしさを。

【釈】ここで夜は明けはなれた。前歌の初句をうけ、満ち潮にはや漕ぎ進む都通いの船を目にした歌。

○沖辺より＝「より」はここは通過地を示す。

3652 志賀の海人の一日もおちず焼く塩のからき恋をも我れはするかも

【訳】志賀島の海人が一日も欠かさず焼く、その塩の辛さのように、何と辛く、せつない恋を私はしていることか。

○志賀＝福岡市東区の志賀島。志賀の海人は有名。

3652 志賀の浦に漁りする海人家人の待ち恋ふらむに明かし釣る魚

【訳】志賀の浦で漁をしている海人、あの海人たちは家の者が帰りを待ち焦がれていることだろうに、夜が明けるまで釣っているのか、魚を。

【釈】前歌とともに、志賀の海人の習俗を目の当たりにした感慨と望郷とを結びつけた歌。

○家人の待ち恋ふらむに＝海人の家族に同情を寄せながら、家にいる自分の妻をあわれむ心を重ねている。○明かし＝夜を明かして、の意

3652 可之布江に鶴鳴き渡る志賀の裏に沖つ白波立ちし来らしも

【訳】可之布江に向って鶴が鳴きながら飛んで行く。志賀の浦に、沖から白波が寄せて来るらしい。

【釈】前歌の「志賀の浦」をうけて、自分の巢へ帰る鶴を羨む気持をこめた歌。

○可之布江＝福岡市香椎の地の入江をいうか。

3660 神さぶる荒津の崎に寄する波間なくや妹

に恋ひわたりなむ

【訳】この神々しい荒津の崎に絶え間なく寄せる波、その波のように、絶え間もなく妻を恋しく思いつづけなければならぬのか。

【釈】前歌の待つ「妹」を、自分の思う「妹」に転換している。

○荒津の崎＝博多湾に臨む福岡市西公園あたり。大宰府の外港として官船が発着した。

3660 風の共寄せ来る波に漁りする海人娘子らが裳の裾濡れぬ

【訳】風のまにまに寄せてくる波しぶきに、漁をしている海人のおとめたちの裳の裾も濡れている。

【釈】前歌の「寄する波」をうけ、旅先の「海人娘子」の美しさを讃めている。

3663 わたつみの沖つ縄海苔来る時と妹が待つらむ月は経につつ

【訳】海神の統べ給う水底の縄海苔を手繰るように、もう帰って来るころだと、妻が待っているはずの、約束のこの月はずんずん経っていつてしまって・・・。

【釈】約束の時に焦点をあてながら、待つ妻を偲んでいる。

○沖つ縄海苔＝「縄海苔」は細長い縄状の海藻で、うみぞうめんか。○来る時＝秋には帰ると妻に約束した、その季節。

3664 志賀の浦に漁りする海人明け来れば浦み漕ぐらし楫の音聞こゆ

【訳】志賀の浦で漁をする海人は、夜が明けてきたので、浦伝いで漕いでいるらしい。櫂の音が近くに聞える。

3672 ひさかたの月は照りたり暇なく海人の漁りは燈し合へみゆ

【訳】大空は月に照りわたっている。海の上には、せわしげに海人の燈す漁火がちらちら行き

交うている。

○ひさかたの=ここは「月」の枕詞。普通「天」「空」にかかる。○海人の漁り=ここは漁火の意。

3673 風吹けば沖つ白波畏みと能許の亭にあまた夜ぞ寝る

【訳】風が強く吹くので、沖の白波の恐ろしさに、能許の亭にこうして幾晩も幾晩もねているのだ。

○能許の亭=能許と至近距離のから韓亭をこう言った。

3675 沖つ波高く立つ日にあへきりと都の人は聞きてけむかも

【訳】沖の荒波が高く立つあんな恐ろしい日に、出くわしたと、都にいる人は聞いてくれたであろうか。

○沖つ波高く立つ日=佐婆の海で逆風に遭い漂流した日をいう。○都の人=都に残した妻を主に言う。

3679 大船に真楫しじ貫き時待つと我れは思へど月ぞ経にける

【訳】大船の舷に櫂をたくさん取りつけ、船出の折をうかがっているのだと私は思ってみるが、もう月まで替ってしまった。

【釈】壱岐・対馬にさえ至らぬうちに、早くも八月に入った嘆き。

○月ぞ経にける=翌月になったことをいう。七月を過ぎて八月になったのであろう。

3685 足日女御船泊てけむ松浦の海妹が待つべき月は経につつ

【訳】その昔、足日女の尊の御船が泊ったという、この松浦の海、その名のように妻が待っているはずの、約束の月はどんどん経ってしまつて・・・。

○足日女=息長足姫尊で、神功皇后。○御船泊

てけむ=記紀には、神功皇后が新羅遠征の際に、松浦に遊んだとある。

3705 竹敷の玉藻靡かし漕ぎ出なむ君がみ船をいつとか待たむ

【訳】竹敷の浦の美しい藻をゆらゆら靡かせて、漕ぎ出してゆかれるあなた様の御船、その御船のお帰りをいつとってお待ちすればよいのでしょうか。

【釈】一行の船をほめながら、惜別の挨拶に転じている。

○玉藻靡かし・・・=船の進行につれて、静かな湾内に波が立ち、海藻が揺れるさまを言い、船出を祝福している。

3705 玉敷ける清き渚を潮満てば飽かず我れ行く帰るさに見む

【訳】玉を敷きつたようなこの清らかな渚なのに、潮が満ちてきたので、飽かぬ思いで私はここを船出して行く。帰りがけにまたぜひ見よう。

【釈】前歌の「玉藻」をうけて、出て行く渚に愛着を示す挨拶歌。

○潮満てば=満潮に船出をするので、その時になったことを言う。○帰るさに見む=一行の無事を祈る心をこめる。この作者阿倍継麻呂は帰路対馬で死んだ。

3705 秋山の黄葉をかざし我が居れば浦潮満ち来いまだ飽かなくに

【訳】秋山のもみじを挿頭にして楽しんでいると、浦に潮が満ちてきた。まだ思う存分興を尽くしてはいないのに。

【釈】前歌をうけて、竹敷のもみじに心を残しながら船出する気持を歌っている。

○浦潮満ち来=船出の時になったことをいう。

3709 家づとに貝を拾ふと沖辺より寄せ来る波に衣手濡れぬ

【訳】家への土産に貝を拾おうとして、沖から

寄せてくる波で、衣の袖がすっかり濡れてしまった。

3710 潮干なばまたも我れ来むいざ行かむ沖つ  
潮騒高く立ち来ぬ

【訳】潮が引いたならば、また私はここに貝を拾いにやって来よう。でも今は、さあ、行こうじゃないか。沖の潮のざわめきが高くなってきた。

○潮騒＝潮流がぶつかり合って生じる波のざわめき。

3711 我が袖は手本通りで濡れぬとも恋忘れ貝  
取らずは行かじ

【訳】私の袖は、手首から波がしみ通ってぐっしょり濡れようとも、恋を忘れさせるといふ忘れ貝を取らずには、ここを去って行くまい。

○手本＝袖口あたり。

3866 沖つ鳥鴨といふ船の帰り来ば也良の崎守  
早く告げこそ

【訳】沖に棲む鴨の鳥、その鴨という名の船が帰って来たなら、也良の岬の見張りの人よ、一刻も早く知らせて下さい。

○沖つ鳥＝「鴨」の枕詞。「沖」をうけ、そこに他界を意識して用いている。○鴨＝荒雄の乗った船の名。○也良＝志賀島の向い、博多湾の入口近い残ノ島の北端の岬という。

3867 沖つ鳥鴨といふ船は也良の崎たみて漕ぎ  
来と聞こえ来ぬかも

【訳】沖に棲む鳥、鴨の名を持つあの船が、今しも也良の岬を漕ぎ廻って帰って来たという知らせが聞えてこないものか。

○たみて＝「たむ」は迂回する意。

3867 沖行くや赤ら小舟につと遣らばけだし人  
見て開き見むかも

【訳】沖辺を漕いで行く赤塗りの舟、あの舟に

包みを送り届けておいたら、もしかしてあの人が見つけて、開けてみってくれるだろうか。

【訳】せめて海の彼方の荒雄に、物を通してでもつながりたいという、はかない願望。

○沖行くや赤ら小舟に＝他界に連なる恐ろしい沖を行く舟。赤く彩色した舟は魔除けの意味を持つ。○つと＝品物を包んだ包み。○人＝ここは荒雄をさす。

3870 紫の粉濁の海に潜く鳥玉潜き出ば我が玉  
にせむ

【訳】濃い紫、その粉濁の海に潜ってあさる鳥が、底の玉を拾い出したら、それは私の玉にしよう。

【訳】「玉」を女に譬えた歌であろう。

○「粉濁」の枕詞。濃い意をかけたか。

3867 角島の瀬戸のわかめは人の共荒かりしか  
ど我れとは和海藻

【訳】角島の瀬戸で採れたわかめは、人中ではまるで荒藻だったけれど、私の前では和藻であってくれよな

○角島＝山口県西北岸の島。筑前の北方に当る。ここのわかめは貢上品として著名。○瀬戸＝海峡。○わかめ＝若い女の譬え。○荒かりしかど＝よそよそしいさまをいう。○和海藻＝柔らかい海藻で、わかめはその代表。すなおに靡くさまの譬え。

3880 鹿島嶺の机の島のしただみをい拾ひ持ち  
来て石もちつき破り早川に洗ひ濯ぎ辛塩にこ  
ごと揉み高坏に盛り机に立てて母にあへつや目  
豆児の刀自父にあへつや身女兒の刀自

【訳】鹿島の山並の先の、その名も机の島、その島のり、早い流れでざぶざぶ振り荒いしいて、辛塩でごしごし揉んで、足つき皿に盛り上げて、机に並べて、母さんにご馳走したかい、かわいいおかみさん。父さんにご馳走したかい、愛くるしいおかみさん。

【釈】料理の手順を教えるわらべ歌であろう。  
○鹿島嶺＝七尾市東方の宝達山脈か。○机の島＝和倉沖の小島か。七尾沖の雌島ともいう。○しただみ＝円錐形の高産巻貝。岩の上を這い廻る。○こごと＝固い物がぶつかりあう音。○高坏＝長い一本足のある皿。○あへつや＝「あふ」は食物をもてなす意。○目豆児＝後の「身女児」とともに幼女の愛らしさをいう語か。○刀自＝ここは幼女を一家の主婦に見立てたもの。

3888 沖つ国うしはく君の塗り屋形丹塗りの屋形神の門渡る

【訳】沖の彼方の見も知らぬ国をお治めになる大君のお召し船、その丹塗りの屋形船が、あれあの波を騒ぐ神の瀬戸を、今しも渡っていく。○沖つ国＝海の果ての他界で、死霊を赴く地。○うしはく君＝支配者。○塗り屋形＝魔除けに赤く彩色した屋形船。○神の門＝海神の支配する危険な海峡。

3890 我が背子を安我松原よ見わたせば海女娘子ども藻刈るみゆ

【訳】いとしいあの方を私が待つとい安我の松原から見わたすと、今しも海女娘子たちが玉藻を刈っている。○安我松原＝北九州もしくは瀬戸内海沿岸の地。あるいは呉市阿賀あたり。

3932 須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我れはするかも

【訳】須磨の海女が海辺にいつもいついて焼く塩の辛いように、辛くせつない恋を私はしている。

3954 馬並めていざ打ち行かな渋谿の清き磯みに寄する波見に

【訳】さあ、馬を並べて皆で出かけよう。渋谿の美しい磯べに打ち寄せる波を見に。

○渋谿＝富山県高岡市の海岸府中国府から程近い。

3956 奈呉の海女の釣する舟は今こそば舟棚打ちてあへて漕ぎ出め

【訳】奈呉の浦に住む海女の釣舟は、今、こんな時こそ、舟の棚板を威勢よくたたいて、思い切って漕ぎ出すがよい。

【釈】海の佳景に漁舟の姿を点じて興を添えたという歌。

○奈呉＝高岡市から新湊市にかけての海岸。国府の東。

3959 かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを

【訳】こんなになると前からわかっていたら、この越の国の海の、荒磯に打ち寄せる波の有様でもみせてやるのだったのに。

○越の海＝越中国府のそばの富山湾をさす。

3986 渋谿の崎の荒磯に寄する波いやしくしくにいにしへ思ほゆ

【訳】渋谿の崎の荒磯に次から次へと打ち寄せる波、その波のように次々と、しきりに昔のことが思われる。

3989 奈呉の海の沖つ白波しくしくに思ほえむかも立ち別れなば

【訳】奈呉の海の沖に、ひきもきらずに立つ白波のように、ひっきりなしにあなたが思われることでしょう。お別れして旅立って行ったならば。

【釈】残る人々の悲しみを思い、恋歌仕立てにしている。

3991 もののふの八十伴(ヤトモ)の男の思ふどち心遣らむと馬並めてうちくちぶりの白波の荒磯に寄する渋谿の崎も廻(トモ)り麻都太江の長浜過ぎて宇奈比川清き瀬ごとに鶴川立ちか行きか

く行き見つれどもそこも飽かにと布勢の海に舟  
浮け据ゑて沖辺漕ぎ辺に漕ぎ見れば渚にはあぢ  
群騒ぎ島みには木末花咲きこぼくも見のさや  
けきか玉櫛笥二上山に延ふ鳶の行きは別れずあ  
り通ひいや年のはに思ふどちかくし遊ばむ今も  
見るごと

【訳】数多くの官人たちが、親しい者同士で気  
晴らしをしようと、馬を並べて走らせ、うちく  
ちぶりの、白波が荒磯に打ち寄せる渋谿の崎を  
ぐるりと廻り、麻都太江の長浜も通り過ぎて、  
宇奈比川の澄みきった瀬ごとに鵜飼を楽しんだり、  
あちらへ行きこちらへ行きして見物して廻  
ったりしたが、それでもまだ足りない、と、布勢  
の内海に舟を浮べて、沖を漕ぎ岸辺を漕ぎ出し  
て見渡すと、波打際にはあぢ鴨が群れ遊び、島  
陰には木々の枝先いっばいに花が咲いていて、  
ここの眺めは、こんなにもまあ見る目にさわや  
かであったのか。あの二上山でからみあって延  
びる鳶が分かれて行くように、別れ別れになっ  
たりせずに、ずっと通いつけて、毎年毎年、気  
の合った仲間同士でこうして遊ぼう。今見わた  
して楽しんでいるように。

○うちくちぶり＝未詳。波荒い海岸の地形を表  
す語か。○麻都太江＝渋谿から、北方の氷見に  
かけての海岸であろう。

3992 布勢の海の沖つ白波あり通ひいや年のは  
に見つしのはむ

【訳】布勢の海の沖に立つ白波、立ち続けて止  
まぬその波のように、通いつけ続けして、いつ  
いつまでも毎年ここへ来て、この眺めを賞でよ  
う。

3994 白波の寄せ来る玉藻世の間も継ぎて見に  
来る清き浜ひを

【訳】白波が浜にうち寄せてくる美しい藻、こ  
の浜の玉藻を、世にある限りはひっきりなしに  
見て来よう。こんなにすがすがしい浜辺なのだ  
もの。

4017 東風(アユカゼ) <越の俗の語には東風を  
「あゆのかぜ」といふ>いたく吹くらし奈呉の  
海女の釣する小舟漕ぎ隠るみゆ

【訳】あゆの風<越の土地言葉で、東風を「あ  
ゆの風」という>が激しく吹くらしい。奈呉の  
海女たちの釣舟が、あれ、浦陰に漕ぎ隠れて行  
く。

○奈呉＝高岡市から新湊市にかけての海岸。

4020 越の海の信濃<浜の名なり>の浜を行く  
暮らし長き春日も忘れて思へや

【訳】越の海の信濃<浜の名である>の浜を、  
一日中歩き続けたが、こんなに長い春の一日で  
さえ、片時も妻を忘れてしまったりするものか。  
○信濃の海＝高岡市伏木あたりの海岸

4029 珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の  
浦に月照りにけり

【訳】珠洲の海に朝早く舟を出して漕いで来る  
と、長浜の浦にはもう月が照り輝いていた。  
○朝開き＝早朝の港をおし開くように船出する  
こと。

4032 奈呉の海に舟しまし貸せ沖に出でて波立  
ち来るやと見て帰り来む

【訳】誰かあの奈呉の海に乗り出す舟を、ほん  
のしばらくでよいから貸して下さいませんか。  
沖まで出て行って、もしや波が立ち寄せてくる  
かと見て来たいものです。

4033 波立てば奈呉の浦みに寄る貝の間なき恋  
にぞ年は経にける

【訳】波が立つたびに奈呉の入江にうち寄せら  
れる貝、絶え間なく寄せられるその貝のように、  
絶え間なくあなたをお慕いしているうちに、も  
う一年以上も経ってしまいました。

4034 奈呉の海に潮の早干ばあさりしに出でむ

と鶴は今ぞ鳴くなる

【訳】この奈呉の海で、潮が引いたらすぐに餌を漁りに出ようとばかりに、鶴は今やしきりに鳴いています。

○鶴=望郷をそそる鳥でもある。

4036 いかにある布勢の浦ぞもここだくに君が見せむと我れを留むる

【訳】どんなところなのでしょう、布勢の浦というところは。これほど熱心に、あなたが見せようと私をお引留めになるとは。

【釈】布勢の浦を見せようという主人の好意に答えた歌。

4037 乎布の崎漕ぎた廻(もとほ)りひねもすに見とも飽くべき浦にあらなくに

【訳】布勢の浦は、乎布の崎を漕ぎめぐって、日が一見見ても見飽きるような浦ではないのですぞ。＜なのにあなたはおたずねになるのですね＞

4038 玉櫛箭いつしか明けむ布勢の海の浦を歩きつつ玉も拾はむ

【訳】いつになったら夜が明けるのでしょうか。早くその布勢の海の入江を見て廻りながら、玉も拾いたいものです。

○玉=水中の美しい貝や石

4039 音のみに聞きて目に見ぬ布勢の浦を見ずは上らじ年は経ぬとも

【訳】噂に聞くばかりで、この目でまだみたことのない布勢の浦、その布勢の浦を見ない限りは都へ上りますまい。たとえ年は改まっても。

4040 布勢の浦を行きてし見てばももしきの大宮人に語り継ぎてむ

【訳】布勢の浦、そこへ行ってもこの目で見たなら、そのすばらしさをきくと大宮人たちに語り伝えましょう。

4043 明日の日の布勢の浦みに藤波にけだし来鳴かず散らしてむかも

【訳】明日という日、布勢の入江の藤の花に、ひょっとしたら時鳥が来て鳴かないまま、あの花を散らしてしまいはしないでしょうか。

4044 浜辺より我が打ち行かば海辺より迎へも来ぬか海女の釣舟

【訳】浜伝いにわれらが繰り出して行ったら、沖の方から迎えに来てくれないものか、海女の釣舟が。

【釈】布勢の海の舟遊びを予期して口号したものの。

○浜辺=布勢の海に行く途中の、有磯海の浜辺に当たる。

4045 沖辺より満ち来る潮のいや増しに我が思ふ君が御船かもかれ

【訳】沖辺からひたひたと満ちてくる潮のように、ますます慕わしさのつるあなたのお船でしょうか、あれは。

【釈】男の訪れを待つ古歌か。

4049 おろかにぞ我れは思ひし乎布の浦の荒磯の廻り見れど飽かずけり

【訳】今まで私はたいした所であるまいと思っておりましたのに。乎布の浦の荒磯のあたりは、いくら見ても見飽きぬことのない所なのでした。

4093 阿尾の浦に寄する波いや増しに立ちしき寄せ来る東風をいたみかも

【訳】阿尾の浦にうち寄せる白波は、いよいよ荒く、後から後から立ち寄せてくる。東の風が激しく吹くからであろうか。

○立ちしき=波がひっきりなしに立つ意

4206 洪谿をさして我が行くこの浜に月夜飽きてむ馬しまし止め

【訳】 渋谿をさしてわれらが帰って行くこの浜辺で、月夜のすばらしい景色を、心ゆくまで味わおう。馬をしばし止めよ。

○月夜＝ここは、月に照らされた海辺の情景

4220 海神の神の命のみ櫛笥に貯ひ置きて齋くとふ玉にまさりて思へりし我が子にはあれどうつせみの世の理とますらをの引きのまにまにしなざがる越道(コジ)をさして延ふ蔦の別れにより沖つ波撓む眉引き大船のゆくらくらに面影にもとな見えつつかく恋ひば老いづく我が身けだし堪へむかも

【訳】 海神の神が、大切に櫛笥にしまいこんでいるという真珠、その真珠にも増して大事に思っていた我が子であるといえ、人の世の定めとして、官人の夫の引き寄せるままに、遠い越への道をさして、遙々あなたが別れて行ってしまったその日からこの方、沖にうねる波のようにしなやかに描いた美しいあなたの眉が、大船の揺れ動くようにゆらゆらと面影にやたらちらついて……。こんな恋しきが続くものなら、年老いてゆくこの我が身は、果たしてもつのでしょうか。

4329 八十国は難波に集ひ船かざり我がせむ日ろを見も人もがも

【訳】 国々の防人はぞくぞくと難波に集まっている。ああ、われらが船出の支度をする日、せめてその日の姿を見守る人がいてくれたらな。

【釈】 筑紫への船出の心細さにこう歌った。

○船飾り＝出航を前に船の装備を整えること

4330 難波津に装ひ装いて今日の日や出でて罷(マ)らむ見る母なしに

【訳】 難波の港で出船の準備をしっかりと整えて、今日という今日、いよいよ船出して任地に下って行くことになるのか。見送ってくれる母もいないままに。

4331 大君の遠の朝廷(ミカド)としらぬひ筑紫の国は敵(アタ)まもるおさへの城ぞときこしをす四方の国には人さには満ちてはあれど鶏が鳴く東男は出で向ひかへり見せずして勇みたる猛き軍士とねぎたまひ任(マ)けのまにまにたらちねの母が目離れて若草の妻もまからずあらたまの月日数みつつ葦が散る難波の御津に大船に真楫しじ貫き朝なぎに水手ととのへ夕潮に楫引き折り率(アトモ)ひて漕ぎ行く君は波の間をい行きさぐくみま幸くも早く至りて大君の命のまにまますらをの心を持ちてあり廻り事し終らばつつまはず帰り来ませと齋瓮を床辺に据ゑて白袴の袖折り返しぬばたまの黒髪敷きて長き日を待ちかも恋ひむ愛(ハ)しき妻らは

【訳】 大君の都を遠く離れたお役所として、筑紫の国は敵を遮り防ぐ抑えの砦なのだと、お治めになっている四方の国々には人がいっぱい満ち満ちてはいるけれど、中でも東の国の男子は門出をして任地向うその日からわが身を顧みることもなく、勇み立つただけしい兵士であると、大君がほめねぎられてお差し向けになるままに、優しい母のまなざしから遠ざかり、なよやかな妻の腕を枕にすることもなく、過ぎてゆく月日を指折り数えながら、葦の花散る難波の港から、大船の左右にびっしり櫂を貫き並べ、朝風の海に漕ぎ手を呼び集め、夕潮の流れに櫂を引き撓め、声を掛け合って漕いで行く君は、波間を押し分け進んで、つつがなく早々と筑紫に到り着き、大君の仰せのままに男子としての志を持して、日々の見張りを続け、その務めが果てたなら、障りもなしに帰って来て下さいと、清めた甕を床の辺に据えて、真白な着物の袖を折り返し、夜床に黒髪を敷いて寝て、この先長い長い日目を恋焦がれて待ちつづけていることであろうか、いとしいその妻は。

○大君の遠の朝廷＝ここは大宰府をさす。○齋瓮＝神に祈願するために神酒を盛る甕。○袖折り返し＝夢で恋人に逢うための呪術行為

4338 暁薦(カタシメ)牟良自(ムラジ)が磯の離り磯の母を離れて行くが悲しさ

【訳】牟良自が磯、その岸から離れた沖の磯のように、母さんのもとを離れて、ひとり旅立つことが悲しくてならない。

【釈】母と別れて家郷をあとにしなればならない心境

○牟良自の磯=家郷の海岸の岩礁であろう。

4362 海原のゆたけき見つつ葦が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ

【訳】大海原のゆったりとした景色を眺めながら、葦の花散るこの難波で、いついつまでも年月を過ごしていきたい、そんな気持ちになってしまう。

4363 難波津に御船下ろ据ゑ八十楫貫き今は漕ぎぬと妹に告げこそ

【訳】難波の港に御船を引き下ろして浮べ、びっしりと櫂を貫き並べて、今の今、船を漕ぎ出したと、故郷の妻に伝えて下さい。

○御船=筑紫へ向う官船

4365 おしてるや難波の津ゆり船装ひ我れは漕ぎぬと妹に告げこそ

【訳】照り輝く難波の港、この港から船出の準備を整えて、俺はもう船出したと、故郷の妻に伝えて下さい。

4379 白波の寄そる浜辺に別れなばいともすべなみ八度袖振る

【訳】白波が寄せてくるこの浜辺で故郷遠く別れてしまったらあとはもうどうしようもないので、俺は今、何度も何度も袖を振っている。

4383 摂津の国の海の渚に船装ひ立し出も時に母が目もがも

【訳】摂津の国の海の渚で船支度を整えて、いよいよ船出という時に、母さんに一目逢えたら

なあ。

○摂津の国=大阪府北部から兵庫県東南部にかけての地

4396 堀江より朝潮満ちに寄る木屑貝にありせばつとにせましを

【訳】堀江を遡る満潮に乗って寄せて来るあくた、これがもし美しい貝であったなら、帰りの土産にもしように。

4398 大君の命畏み妻別れ悲しくはあれどますらをの心振り起し取り装ひ門出をすればたらちねの母搔き撫で若草の妻取り付き平けく我れは斎はむま幸くて早帰り来と真袖もち涙を拭ひむせひつつ言どひすれば群鳥の出で立ちかてにとどこほりかへり見しつつかや遠に国を来離れいや高に山を越え過ぎ葦が散る難波に来居て夕潮に船を浮へ据ゑ朝なぎに舳向け漕がむとさもらふと我が居る時に春霞島みに立ちて鶴が音の悲しく鳴けばはろはろに家を思ひ出負ひ征矢のそよと鳴るまで嘆きつるかも

【訳】大君の仰せが恐れ多いので、妻との別れは悲しくてならないのだけれど、大夫心を奮い立たせ、身支度を整えて門出をしようとする、母は私の頭を搔き撫で、妻は私の袖に取り縋り、「何の災いもないように身を清めて私どもは神にお祈りしています。無事に一日も早く帰って」と両の袖で涙を拭い、声つまらせながらかきくどくので、さっさとわが家を出で立つわけにもゆかず、足もとどまりがちに後を振り返り振り返りしながら、ぐんぐん遠くを離れて来、ずんずん高く山を越え過ぎて、とうとう難波に到り着いてたむろし、夕潮に船を浮べ、朝風に筑紫へ舳先を向けて漕ぎ出そうと、われらが潮待ちしているその折しも、春霞が島辺に立ちこめ、鶴が悲しい声で鳴くので、はるか遠く家を思い出し、背に負う征矢がかさかさ音を立てるほどに、身悶えして私は嘆いている。

○ますらをの心=男子たるものの持つべき勇猛

な心。○取り装ひ=しっかりと旅立ちの装いをする事。○さもらふ=行動を起す機会を待ちうかがう意。

4399 海原に霞たなびき鶴が音の悲しき宵は国  
辺し思ほゆ

【訳】海原が一面にたなびき、鶴の鳴き声の悲しくくぐもる夜は、ひとしお故郷が思い出されてならない。

【釈】景に情をこめる宵の思い。

4411 家づとに貝ぞ拾へる浜波はいやしうしく  
高く寄すれど

【訳】家への土産に私は貝を拾っている。浜辺の波は、あとからあとからしきりに高く寄せてくるけれど。

4457 住吉の浜松が根の下延へて我が見る小野  
の草な刈りそね

【訳】住吉の浜の松が根を地の底に延ばしているように、心の底深く思いを寄せて私が見る小野、この小野の草は刈らずにそのままにしておいておくれ。

【釈】小野を憧れの人に擬えた恋歌仕立ての歌。

## 2. 古今和歌集引用句一覧

344 わたつ海の浜のまさごを数へつつ君が千  
年(チトセ)のありかずにせむ。 p8

【釈】海の浜のまさごを数えつつけて、それを君が限りない齢の数としよう。

【評】めでたい事を言おうとして、浜のまさごを齢の譬喩としている。

409 ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行  
く船をしぞ思ふ

【釈】ほのぼのと明るくなる明石の浦に立ち込めている朝霧の中を、淡路島に隠れてゆく船をあわれに思うことよ。

【評】その船にいる旅人の不安感を思いやった心である。

427 潜(カヅ)けども浪のなかにはぐらされて風  
吹く毎に浮き沈む玉

【釈】潜くけれども、波の中には探し得られなくて、風が吹くたびに、風が伴なって、浮いて見え、沈んで隠れるところの玉であるよ。

【評】玉にあこがれて得ようとし、得られずに、あこがれがあこがれにとどまっている様子。

472 白波の跡なき方に行く船も風ぞたよりの  
しるべりなりける

【釈】白波の立っては消えて、その跡もない、取りとめのない海上に向かって漕いで行く船でも、追風が頼みとする港へ案内するものであることよ。

【評】女性を得られずにいる寂しさを、海上を  
行く舟を比喻として表現。

474 立ちかへりあはれとぞ思ふよそにても人  
に心をおきつ白波

【釈】繰り返しかわゆく思っていることよ。無関係の中でも、その女にわが心を留めている。沖の白波のように繰り返し。

【評】ひそかに思いを寄せている女に、心奪われて、繰り返しかわゆく思っている男の気持ち。

509 伊勢の海に釣する海人のうけなれや心ひ  
とつを定めかねつる

【釈】伊勢の海で釣りをしている海人の浮木であるのかなあ。我が心を落ち着かせていることだなあ。

【評】心の動揺を続けている状態を捉えて、歎いた心である。

510 伊勢の海の海人の釣縄うちはへてくるし  
とのみや思ひ渡らむ

【釈】伊勢の海の海人の釣縄の、長く延ばして

おいて繰る、そのくるにゆかりある、苦しいことよとばかり歎きつづけることであろうか。

【評】上詩と同様

532 沖にも寄らぬ玉藻の浪の上に乱れてのみや恋ひ渡りなむ

【釈】沖にも海岸よりも寄らない藻の波の上に乱れている、それにちなみある、わが心も思い乱れて恋つづけることであろうか。

【評】片思いの気持ち

559 住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通路(カヅガ)人目よくらむ

【釈】住の江の岸に寄る波の、その寄るにゆかりある夜までも、夢はその通り路で、人目を避けて、思う人の所までは行き着けないのであるうか。

【評】人目をはばからなくてはならない恋で、せめて夜の思い寝の夢にだけでも逢おうと思うのに、その夢も見られないことに嘆いた心

623 みるめなきわが身を浦と知らねばや離(カ)れなで海人の足たゆく来る

【釈】海松布(シム)のない、すなわち相遭う時のないわが身を、浦、すなわちその人につれない我と知らないのであろうか、我より離れず、海人と同じくその人は、足だるくなるまでわがもとにくるだろうよ。

【評】片恋とも心つかず、しげしげと通って来る男を、冷やかに観て、嘲りの心をもって嘆いた歌である。

626 逢う事のなぎさにし寄る波なればうらみでのみぞ立ち返りける

【釈】逢うことのないのは、渚に寄せる波で、恨みる、すなわち浦をみるばかりで、空しく立ちかえったことであるよ。

【評】逢わずして帰る恋の心を詠んだものである。女を渚に、我を波に喩えて、人事を自然に

拡がらせたところが作為ではある。

627 かねてより風に先立つ波なれや逢うことなきにまだき立つらむ

【釈】以前から、風よりもさきに起こる波であるので、逢うことのないという、その風ぎた海に、風は吹かないに、早くも立っているのであろうか。

【評】逢わずして名だけ立っている自分と同じである。この波は風に先立つという特別なものであるうかと怪しみ、自分もこうした宿命を持っているのであろうかと思った心である。

665 みつ潮(シホ)の流れるまを逢ひ難(ガタ)みみるめの浦によるをこそ待て

【釈】満潮の流れ去って干るにゆかりある、昼間は、人目があって逢いがたさに、見る目という名のある海松布(シム)が浦に寄るゆかりある、夜ばかりを待っていることであるよ。

669 大方(オホカタ)はわが名も湊漕ぎ出でなむ世をうみべたにみるめ少し

【釈】大抵は、自分の評判もまた、蟹舟(アマガネ)と同じく湊を漕ぎ出して、世間に立てよう。忍ぶ恋仲の憂さは、海辺に居る蟹舟の、刈ろうとする海松布(シム)の少ないのと同じく、見る目がない。

【評】忍ぶ恋の苦しさに耐えがたくなって、気安く逢えるためには、評判になってもかまわない、と幾分か躊躇をしている心。

671 風ふけば波打つ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり

【釈】風が吹くと、高くなる波の打つ海岸の松であるよ。その松の根が現れるのと同じく、声を立てて泣きそうである。

816 わたつみの我が身越す浪立ち返り蟹(アマ)の住むてふうらみつるかな

【釈】海上の、わが身の丈を越す波が寄せてきて、岸を打って立ちかえる、それではないが、私も心のなかで立ち返り、繰り返して、返る波につれて、蟹の住んでいるという浦を見た、それではなく、恋の相手であった人の不信を恨みたことであるよ。

【評】女の歌で、男に捨てられた後も、未練があつて諦めかね、繰り返し恨んでいたが、諦めかつごうとする際の心である。

818 ありそ海の浜の真砂と頼めしは忘るることの数にぞありける。

【釈】ありそ海の浜の真砂の歌を誓いとしとして、我を頼ませたのは、全く、忘れ果てるという意味でのものであったことよ。

【評】海辺の地に伝わっていた民謡系統の歌である。古歌を引いて、恋の誓いとして行われていて、それを反映しているものである。

=雑歌=

910 わたつみの沖つ潮合(シオビ)に浮く泡の消えぬものから寄る方(カ)もなし

【釈】大海の、沖の潮合の所に浮かんでいる泡の、動かずに消えない、それではないが、我は死なずにはいるものの、寄るところもない。

【評】孤独で身を寄せるところもない、老いの嘆きを歌ったもの。

911 わたつみのかざしに挿せる白妙(シロタ)の波もてゆえる淡路島山(アヂシヤマ)

【釈】神の海が、かざしとして挿している白い波の花をもって繞(メグ)らしているところの淡路島山よ。

【評】播磨方面から、淡路島を望んで、その愛でたさをたたえたもの。

913 難波がた潮みちくらしあま衣たみの島の鶴(ツグ)鳴き渡る

【釈】難波瀉に潮が満ちてくるであろう、そこ

にいる鶴が田蓑(タヱ)の島へ鳴き渡って来る。

【評】状況描写

914 君を思ひおきつの浜になく鶴(ツグ)のたづね来ればぞありとだに聞く

【釈】君を懐かしく思つて、おきつの浜に鳴く鶴のそれにゆかりある、たづねてくれればこそ、君がながらえているということだけでもきくことですよ。

【評】挨拶の歌である。上の句は、我が深くも人を思う心をいい、下の句は、人はそれほどにも思ってくれない恨みをいって、対照して表したものの。

915 おきつ浪たかしの浜のはま松の名にこそ君を待ち渡りつれ。

【釈】高師の浜の浜松の、その名のように、ひたすらに君を待ちつづけていたことであるよ。

962 わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ

【釈】たまたまにも、わが上をたづねる人があったならば、須磨の浦に、蟹(ア)のする業の藻塩を垂らしつつ、涙に袖を濡らし濡らしつつ、悲しく暮らしていると答えてくれよ。

【評】都のみを天地としている廷臣から言えば、さみしい海辺だったのである。

994 風吹けば沖つ白波立田山夜半にや君がひとり越ゆらむ

【釈】風が吹くと沖の白波が立つ、それにゆかりある「立田山」よ。この夜中に、君はひとりで越えているのであろうか。

【評】女が、男の、夜、さみしい山を、さみしく越すのを思いやった心である。

1002 ……別る涙 藤ごろも、織れる心も  
八千種(ヤチガサ)の 言のはごとに すべらぎの  
おほせかしこみ 巻巻の 中につくすと 伊勢

の海の 浦のしほ貝 拾ひ集め 取れりすれど  
玉の緒の みじかき心 思ひあへず・・・

【釈】・・・飽かずに別れをする涙のそれも、藤衣の経緯(好対)に入り乱れる悲しみのそれも、また雑多の心をいったものも、歌のすべてにつけて、陛下の撰み集めよとの詔をかしこんで、その部その部の巻巻の中に収め尽くそうとして、伊勢の海の浦に寄る潮貝の如くに拾い集めて、取り入れたとは思うけれども、足らわぬ心とて、思いがとどきかねて、・・・

1085 君が代はかぎりもあらし長浜のまさごの  
数はよみつくすもの

【釈】大君の御齡は限りがないものであろう。長浜の砂の数は数え尽くそうとも。

【評】御齡を祝う言葉。

1049 小(コ)よろぎの磯立ちならし磯菜るむめ  
ざし濡らすな沖に折れ波

【釈】小よろぎの海岸の岩を立ち入って、磯を濡らすな。沖のほうで折れ返れよ、波よ。

### 3. 新古今和歌集引用句一覧

26 夕月夜しほ満ち来らし難波江の蘆の若菜に  
白波が越えている

【訳】夕月の出とともに潮が満ちてくるらしい。難波江の蘆の若菜に白波が越えている。

○夕月夜=夕月 ○難波江=摂津国の歌枕。大阪湾。

35 なごの海の霞のまよりながむれば入る目を  
洗ふ沖つ白波

【訳】奈呉の海の霞の間から眺めると、今しも波間に入ろうとする夕日を沖の白波が洗っているようにみえるよ。

【釈】屏風絵風な味わいのある作。

○なごの海=摂津・越中・丹後、その他諸国に

多い地名。ここでは摂津国の歌枕としてよんだか。

57 難波潟霞まぬ波もかすみけりうつるも曇る  
おぼろ月夜に

【訳】霞むはずのない難波潟の波までも霞んでいるよ。曇って見えるおぼろ月が映るので。

259 清見潟月はつれなき天の戸を待たでもし  
らむ波の上かな

【訳】清美潟に月はそしらぬふりをして空にかかっている、その空の明けるのを待たないでほの白くなってきた波の上よ。

○天の戸=天の戸が開くと太陽が出て夜が明けると考えられていた。

363 見わたせば花ももみぢもなかりけり浦の  
とま屋の秋の夕暮

【訳】見わたすと、春の花はもとより、秋にふさわしい紅葉すら何ひとつないよ。苦葺きの海女の仮小屋が散らばるこの浦の秋の夕暮は。

【釈】すべてののはなやかな色彩を欠いた、蕭条(シヨウジヨウ)たる秋の夕暮の海岸風景を、一切の主観的表現を用いずに描いている。

396 月はなほもらぬ木の間も住吉の松をつく  
して秋風ぞ吹く

【訳】月の光がまだ木の間を洩れて射し入らないほど枝が繁く生えている、住吉の浜松の松という松に秋風が吹きわたっている。

400 忘れじな難波の秋のよはの空異浦にすむ  
月は見るとも

【訳】忘れまいよ、秋の難波の浦の夜空に澄む月を。たとえこれから先、いつの年の秋にか、よその浦に澄む月を見るときも。

【釈】今みている難波の浦の月を愛でて歌う。

401 松島や潮くむ海女の秋の袖月は物思ふな

らひのみかは

【訳】月は物思ふ人の袖にのみ宿る習いだろうか。いや、松島の潮を汲む秋の海女の袖にも宿るよ。

402 言問はむ野島が崎の海人ごろも波と月とにいかがしをる

【訳】野島が崎の海女に尋ねましょう。あなたの衣は波と月とによってどのようにしおれるのでしょうか。

403 秋の夜の月やをじまのあまのはら明け方ちかき沖の釣舟

【訳】雄島の海女達は秋の夜の月を惜しんでいるのだろうか。明け方近い空の下、沖にはたくさん釣舟が出ているよ。

【訳】明け方近く沖に漁火を見て、あえて風流に解釈した。

547 夏草のかりそめにとて来しかども難波の浦に秋ぞ暮れぬ

【訳】夏草の生い茂るころ、ほんのかりそめにしてこの難波の浦べにやって来ましたが、何ということもないうちに、はや秋も暮れようとしています。

626 冬深くなりにはけらしな難波江の青葉まじらぬ蘆のむら立ち

【訳】冬も深まったらしいな。難波江に青葉が少しもまじらない枯れた蘆がところどころかたまって立っているよ。

644 白波に羽根うちはかし浜千鳥かなしきものは夜のひと声

【訳】白波に羽を交わしながら飛んでゆく浜千鳥、ものがなしいのは、夜一声鳴くその声だなあ。

【訳】旅の途中明石の浦で体験した風景。

645 夕なぎに門渡る千鳥波間より見ゆる小島の雲に消えぬ

【訳】波間からちらりと見える小島、夕なぎ時に海の間を渡る千鳥が、その島に懸る雲の中へと消えてしまったよ。

【訳】作者には明石海峡のイメージがある。

○門＝海岸と海岸との狭まった場所

646 浦風に吹上の浜のはま千鳥波立ちくらしよはに鳴くなり

【訳】浦風が吹く吹上げの浜に、波が高く立って寄せて来ようです。夜半千鳥の鳴く声が聞こえるので。

【訳】波が寄せてきたので、それまで浜辺に下りていた千鳥が飛び立って鳴いているのだろうと推量した。

○吹上の浜＝紀ノ川の河口に近い

647 月ぞ澄むたれかはここにきの国や吹上の千鳥ひとり鳴くなり

【訳】冬の月がつめたく澄んでいる。だれ一人として来るものがあるだろうか。ここ紀ノ国吹上の浜にはただ千鳥の鳴く声がするだけで・・・。

648 き夜千鳥声こそ近くなるみ潟かたぶく月に潮や満つらむ

【訳】夜の鳴海潟で、千鳥の声が近くなってきた。西に傾く月とともに潮が満ちてくるのだろうか。

○なるみ潟＝現在の名古屋市に鳴海の地名が残る。

649 風吹けばよそになるみのかた思ひ思わぬ波に鳴く千鳥かな

【訳】鳴海潟では、風が吹くと番(ツガイ)も離れ離れとなり思いもかけなかった波間で鳴いている千鳥よ。

650 浦人の日も夕暮になるみ潟かへる袖より

千鳥鳴くなり

【訳】早くも夕暮れになった短い冬の日、鳴海潟で仕事を終えた浦人が海女衣の紐を結って帰ってくる。その翻(ヒルガエ)る袖越しに、千鳥の鳴く声が聞こえてくるよ。

651 風さゆる富島が磯のむら千鳥立ち居は波の心なりけり

【訳】風がつめたく吹く富島の磯にむらがる千鳥は、寄せくる波の思いのままに、飛び立ったり磯に下りたりしているよ。

○富島=摂津の「敏馬」と読み誤ってできた地名。

704 ゆく年ををじまの海女の濡れ衣かさねて袖に波やかくらむ

【訳】雄島の海女の潮に濡れた衣の軸に、去ってゆく年を惜しむ、涙の波が重ねてかかるだろうか。

710 君が代の年の数をば白妙の浜の真砂とたれか敷きけむ

【訳】いつまでも続くわが君の御代の数を数限りない浜の白砂として、だれが敷いたのでしょうか。

【釈】自然を創造した神が、祝われるべき人の長寿を保証する意味で、美しい白砂を敷き詰めたのだらうという気持ちをこめる。

714 住の江の浜の真砂を踏むたづはひさしき跡を留むるなりけり

【訳】住の江の浜の砂を踏んでいる鶴は久しく消えない足跡をとどめているのです。

○住の江の浜=摂津国の歌枕。住吉神社付近。

721 山嵐は吹けど吹かねど白波の寄する岩根はひさしかりけり

【訳】山嵐は吹いても吹かなくても、そのよう

なことに関わりなく、白波が絶えず打ち寄せる巖は久しく変わりません。

744 御津の浜への松は七十に満ちるまで老いたけれども、千代までの残りの年はなお遥かに続いていますよ。

【訳】御津の浜への松は七十に満ちるまで老いたけれども、千代までの残りの年はなお遥かに続いていますよ。

【釈】老松にあやかり更に齢を重ねることを予祝した歌。

○御津の浜=近江の国(現在の滋賀県)

745 八百日ゆく浜の真砂を君が代のかずにとらなむ沖つ島守

【訳】八百日もかかってゆく長い長い浜、その真砂のおびただしい数をわが君の御代の数として数えてくれ、沖の島守よ。

897 妹に恋ひ和歌の松原見わたせば潮干の潟にたづ鳴きわたる

【訳】旅にあつて都に残してきた妻が恋しくなつて和歌の松原を見わたすと、あれ、潮の干いた潟へ向つて鶴が鳴きながら飛び渡つてゆくよ。

898 いざ子どもはや日の本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

【訳】さあ、諸君よ、早く日本へ帰ろう。大伴の御津の浜辺の松がわれわれの帰国を待ち焦がれていることだろう。

○大伴の御津=摂津国。現在の大阪湾のあたり

911 神風や伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜べに

【訳】あの人は伊勢の浜荻を折り敷いて、ひとりさびしく旅寝をしていることでしょうか、荒々しい浜辺に。

916 舟ながらこよひばかりは旅寝せむ敷津の

波に夢は覚むとも

【訳】せめて今夜だけは舟の中で旅寝しよう。  
たとえ敷津の浦波の音で夢は覚めようとも。

【釈】海辺で舟遊びをしてそのまま船中に泊ったときの、ものめずらさに興じての詩か。

933 立ち返りまたも来て見む松島や雄島のと  
ま屋波に荒すな

【訳】きつとまた戻ってきて見よう。海女人よ、  
それまで松島の雄島の苦屋を波に荒さないで  
おくれ。

【釈】松島や雄島＝陸奥国の歌枕。松島湾にあ  
る。

934 言問へよ思ひおきつの浜千鳥なくなく出  
でし跡の月影

【訳】月よ、尋ねてくれ、浜千鳥が鳴くように、  
なごり惜しみながら、わたしが泣く泣く興津の  
浜を出たあとを。

【釈】老松にあやかり更に齢を重ねることを予  
祝した歌。

935 野べの露浦わの波をかこちてもゆくへも  
知らぬ袖の月影

【訳】野辺に置く露や浦に寄せる波に濡れると  
ぐちをこぼしながらも、行く先のわからない旅  
を続けているわたしの、露や波そして涙に濡れ  
た袖に、月の光が宿っているよ。

○浦わ＝弓のような海岸線

943 幾夜かは月をあはれとながめ来て波に折  
り敷く伊勢の浜荻

【訳】いったい幾夜月をしみじみと眺めながら  
やってきて、波打ち際に伊勢の浜荻を折り敷い  
て寝ることでしょうか。

○伊勢の浜荻＝浜辺に茂る蘆のこと。

945 風むさみ伊勢の浜荻分けゆけば衣かりが  
ね波に鳴くなり

【訳】伊勢の浜荻を分けて旅を続けていくと、  
風が寒いので衣を借りたいというかのように、  
雁が波路に鳴く声が聞こえるよ

946 磯馴れで心もとけぬこもまくらあらくな  
かけそ水の白波

【訳】磯辺の旅に馴れていないので、薦枕をし  
ていて寝ていても心は結ばれてくつろぐこと  
がない。白波よ、荒々しく枕元までかけないで  
おくれ。

【釈】波音の近く聞こえる岸辺に旅寝している  
感じは出ている。

○こもまくら＝薦で作った枕

948 松が根の雄島が磯のさ夜まくらいたくな  
濡れそ海女の袖かは

【訳】枕として旅寝する、松島の雄島の磯の松  
の根よ、ひどく濡れないでおくれ。海女の袖で  
はないではありませんか。

○雄島が磯＝陸奥国

969 契らねどひと夜は過ぎぬ清見瀉波に別る  
るあかつきの雲

【訳】駿河の清見瀉に宿り、低く下りていた雲  
と契りを交わしたわけではないけれど、一夜を  
過ごしたよ。暁方、海を望むと、横雲は波と別  
れて離れ離れになって空に昇ってゆく……。

972 日を経つつ都しのぶの浦さびて波よりほ  
かの音づれもなし

【訳】日を経つにつれて都をしのぶ信夫の浦は  
さびしくなって、おとずれるものはとては波ば  
かり。

○しのぶの浦＝陸奥国の枕詞

973 難波人蘆火たく屋に宿かりてすずろに袖  
のしほたるかな

【訳】難波の浦人が蘆火を焚く小屋に宿を借り  
て、袖が潮水と涙とでひどく濡れているよ。

1040 風吹けばとはに波越す磯なれやわが衣手  
のかわく時なき

【訳】風が吹くといつも波が越える磯なので、わたしの袖は乾く時がないのでしょうか。

【釈】恋の涙に濡れて乾くまもない袖を、海岸の磯になぞらえた。

1049 難波濁みじかき蘆のふしのまもあはでこ  
の世をすぐしてよとや

【訳】難波濁に生えている蘆の節と節との短い間、それと同じようにほんの短い逢瀬すらなくてこの世を過せと、あなたはおっしゃるのですか。

【釈】恋人のつれない言葉に対して抗議した、情熱的な恋歌。

1051 有度浜のうとくのみやは世をばへむ波の  
よるよる逢ひ見てしがな

【訳】有度浜ではないけれども、あの人に近づけず、今のようにうとうとしい状態のままで生きていようか、いや波が寄るように夜ごとに逢いたいなあ。

1063 わが恋はいはぬばかりぞ難波なる蘆のし  
の屋の下にこそ焚け

【訳】わたしが恋しいと口に出していわないだけです。難波にある蘆葺きの小屋で蘆火を焚いているように、ひそかに燃えこがれています。

1064 わが恋は荒磯の海の風をいたみしきりに  
寄する波のまもなし

【訳】わたしの恋は、ちょうど風が烈しいのでひっきりなしに波が寄せる荒磯のようなもの。おびたしい涙の波が打ち寄せて、休む間もありません。

【釈】大波の寄せる荒海に託したはげしい恋の心象風景。

1065 須磨の浦に海女のこりつむ藻塩木のから  
くも下に燃えわたるかな

【訳】須磨の浦で海女が伐っては積み上げる藻塩木は潮水がしみて辛いように、つらいことに私は心の中で燃え続けています。

○藻塩木＝藻塩を焼くための薪

1066 あるかひもなぎさに寄する白波のまなく  
物思ふわが身なりけり

【訳】こんな有様では生きている甲斐もないよ。貝もない渚に寄せる白波が休む間もないように、少しの隙もなく泣き濡れながら恋に思い悩むわが身だがなあ。

【釈】海岸風景を恋の心象風景に転じた。

1077 難波人いかなるえにか朽ちはてむあふこ  
となみに身をつくしつ

【訳】難波に住むこのわたしは、どのような藻で、ちょうど入江の波の下に漂標が朽ちはててしまうような、そんな一生を終えてしまうのであろうか。ついに恋人に逢うこともないまま心を悩まして。

【釈】波音の近く聞こえる岸辺に旅寝している感じは出ている。

○漂標＝水脈を指し示す浮標

1078 海女の刈るみるめを波にまがへつつ名草  
の浜を尋ねわびぬる

【訳】海女が刈る海松布を波にまぎれさせて、わたしは名草の浜を尋ねあぐんでしまった。あの女の名前もわからずにわたしは途方にくれています。

1080 みるめ刈るかたやいづくぞ竿さしてわれ  
にをしへよ海人の釣舟

【訳】海松を刈ることができる潟はどこなのか、竿でさしてわたしに教えておくれ、海人の釣舟よ。あの人にどうしたら逢えるのか、その手段

を教えてください。

1082 なびかじな海人の藻塩火たきそめて煙は  
空にゆくりわぶとも

【訳】海人の焚き始めた藻塩火が燃え上がりかね、空でくすぶってはいても、煙は靡かないだろうな。同じようにわたしがあの人を恋し初め、心で思い焦がれていても、あの人になびかないだろうな。

【釈】波音の近く聞こえる岸边に旅寝している感じは出ている。

1083 恋をのみ須磨の浦人藻塩たれほしあへぬ  
袖のはてを知らばや

【訳】須磨の浦の海人は藻塩に濡れ、袖を乾かしきることがない。同じように恋ばかりするわたしの袖は涙に塩じみ乾くまもないよ。それがどうなってしまうか知りたいものだ。

1084 みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへ  
波の下に朽ちぬる

【訳】海松は潮が入ってくる磯に生える草だからそれも当然でしょうが、あの人に逢えないで嘆くわたしの袖さえも、涙の波の下に朽ちてしまいました。

1085 君恋ふと鳴海の浦の浜ひさぎしをれての  
みも年をふるかな

【訳】あなたを恋する身となって、鳴海の浦の浜久木がしおれているように、わたしは多年ただ泣き濡れて過ごしています。かわいそうだと思うって下さい。

○鳴海の浦＝尾張国(今の愛知県西北部) ○浜ひさぎ＝浜にはえるひさぎ

1096 うちへてくるしきものは人目のみしの  
ぶの浦の海人の栲縄

【訳】長く延ばして苦しく思われるものは、人の見る目を忍ぶ信夫の浦で海人が引く栲縄。そ

れと同じように、いつまでも苦しいのは、人目を忍ぶわたしの恋の思いです。

○栲縄＝楮の皮で作った縄

1115 いつとなく塩焼く海人のとまびさし久し  
くなりぬあはぬ思ひは

【訳】絶えず塩を焼いている海人の苦葺きの小屋のひさし・・・ずいぶん久しくなったよ、あの人と逢わないままで。そのためにわたしは、ちょうど藻塩を焼くように胸を焦がしている。

1116 藻塩焼く海人の磯屋の夕煙立つ名もくる  
し思ひ絶えなで

【訳】藻塩を焼く海人の磯屋に夕べの煙が立ち昇っているように、あの人への思いの火は絶えることなくて。

【釈】焦燥感のみを起させる恋の心象風景へ転じている。

1117 須磨の海人の袖に吹きこす潮風のなると  
はすれど手にもたまらず

【訳】須磨の海人の袖に吹いてくる潮風が、馴れはするけれども手にはとどまらないように、馴れ親しむように見えて、捉えることのできないあの人的心よ。

1167 明けがたき二見の浦による波の袖のみ濡  
れて沖つ島人

【訳】夜が明けにくい二見の浦に寄る波に袖が濡れている沖の島人のように、開けてくださらない戸に寄りかかって、わたしはひたすら涙に袖にこぼすばかりで起きています。

○二見の浦＝伊勢国

1210 なれゆくはうき世なればや須磨の海人の  
塩焼き衣まどほなるらむ

【訳】馴れてゆくにつれ飽きてくるのがうき世の常ですので、お召しが間遠になるのでございましょう。ちょうど塩に濡れた須磨の浦の海人

の塩焼き衣の織り目がまばらであるように。

1331 つくづくと思ふあかしの浦千鳥波の枕になくなくぞ聞く

【訳】明石の浦に旅寝して、さびしく恋人のことを思いながら夜を明かすわたしは、自分でも泣きながら、波に鳴く浦千鳥の声を聞いているよ。

【釈】波音の近く聞こえる岸辺に旅寝している感じは出ている。

1332 尋ね見るつらき心の奥の海よしほひの湯のいふかひもなし

【訳】訪れてみても、奥の海の潮の干潟には、これという美しい貝もない。同じようにつらいあの人の心の奥よ。愛の涸れた今となつては、何を言っても甲斐のない……。

【釈】恋人の心に幻滅した者の索漠とした心

1360 浦にたく藻塩のけぶりなびかめやよもの方より風は吹くとも

【訳】浦で焚いている藻塩の煙は靡くでしょうか、そんなことはありません。たとえ四方から風は吹いても。わたしはあなた以外の人に靡きません。たとえあちこちから誘われても。

1419 住吉の恋忘れ草種絶えてなき世に逢へるわれぞかなしき

【訳】住吉の岸に生えるという恋忘れ草の種も絶えてしまっていない今の世に生れあわせたわたしは悲しい。この苦しい恋を忘れるすべがないから。

○恋忘れ草＝萱草(ユリ科ワスレグサ属植物の総称)

1432 大淀の松はつらくもあらなくにうらみてるのみもかへる波かな

【訳】大淀の松はつらいわけでもないのに、浦を見ただけで沖へと返る波よ。わたしは心変わりもせずお待ちしていますのに、あなたはわたしをお恨みになって帰っておしまいになるのですね。

【釈】自身を松に、恨む男を波に譬えてなだめた女の歌。

○大淀＝大淀の浦。伊勢国の歌枕

1433 白波は立ちさわぐともごりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ

【訳】いくら白波が立ち騒ごうが、物ともせずに須磨の浦の海松布を刈り取ろうと思うよ。たとえ人々が騒いで邪魔しても、懲りずにあの人に逢おうと思う。

【釈】どんな障害にもめげずに恋人に逢おうとする男の情熱

1495 袖の浦の波吹きかへす秋風に雲の上まですずしからなむ

【訳】袖の浦の波を吹き返す秋風、袖を吹き返すこの扇の風によって、雲の上までどうか涼しくなってください。

○袖の浦＝出羽国の歌枕

1504 和歌の浦に家の風こそなけれども波吹く色は月に見えけり

【訳】和歌の浦に風らしい風はありませんが、波を吹く風の色は、月の光に照らされて夜目にもそれとしく見えます。わたくしの家には歌詠みの伝統といったほどのものはございませんが、上皇の御恩沢によって歌壇に連なることができうれしく存じます。

○和歌の浦＝紀野国の歌枕

1552 かもめみみ藤江の浦の沖つ洲に夜舟いさよふ月のさやけさ

【訳】かもめが羽を休めている藤江の浦の沖の洲に、夜漕ぐ舟がゆたっている。月がさやかに

照らして。

○藤江の浦＝播磨国の歌枕

1553 難波瀉潮干にあさる蘆たづも月かたぶけば声の恨むる

【訳】難波瀉で潮干の合間に餌をあさっている蘆辺の鶴も、月が傾くと潮が満ちてくるので、その声は恨みがましいものとなるよ。

1554 和歌の浦に月の出で潮のさすままに夜鳴く鶴の声ぞかなしき

【訳】和歌の浦に、月の出とともに潮がさしてくるにつれて、夜鳴く鶴の声が悲しそうに聞こえる。

○和歌の浦＝紀伊国の歌枕

1555 藻塩くむ袖の月影おのづからよそに明かさぬ須磨の浦人

【訳】藻塩を汲む袖に月の光が宿り、わざわざ月を眺めようとしなくても、おのずと月をめでている須磨の浦人よ。

1556 明石瀉色なき人の袖を見よすずろに月もやどるものかは

【訳】明石瀉の、とくに目につく色もない海人の袖を見てごらんさい。藻塩を汲んで濡れているからこそ月が宿るので、むやみやたらに宿りはしません。ましてわたしは、喪服を身にまとい、悲しみの紅涙を流しているので、袖に月が宿っているのです。

1557 ながめよと思はでしもや帰らむ月待つ波の海人の釣舟

【訳】わたしにこの景色を眺めてほしいとも思わないので、さっさと帰ってゆくのだろうか、わたしが月の出を待っている波の上に浮かんでいる海人の釣舟は。

【釈】駿河の清見関で旅寝の夢に見た恋人の面影をいつまでも見続けていたいという心。

1586 白波の浜松が枝のたむけぐさ幾代までにか年の経ぬらむ

【訳】白波の寄せる浜辺の松の枝につけられている、神への手向けの幣は、いった幾代の年月を経ているのだろうか。

○たむけぐさ＝旅の安全を祈って道の神に捧げる幣帛の類

1588 蘆の屋の灘の塩焼きいとまなみつげの小楯

【訳】蘆屋の灘の里の塩を焼く海女は、ひまがないので、黄楊の楯もささずにやってきたよ。

○蘆の屋の灘＝摂津国の歌枕

1589 晴るる夜の星か川辺の螢かもわが住む方の海女の焚く火か

【訳】あの光は、晴れた夜空の星だろうか、川のほとりを飛ぶ螢だろうか。それともわたしが住んでいる方向で焚いている海女の漁火だろうか。

1590 志加の海女の塩焼くけぶり風をいたみ立ちはのぼらで山にたなびく

【訳】志加島の海人が藻塩を焼く煙は、風が烈しいので、まっすぐに立ち上らないで、山の方へたなびいているよ。

1591 難波女の衣干すとして刈りて焚く蘆火のけぶり立たぬ日ぞなき

【訳】難波に住む女が潮に濡れた衣を乾かすというので、刈って焚く蘆の火の煙が、立たない日はありません。

1593 春の日の長柄の浜に舟をとめていづれか橋と問へど答へぬ

【訳】春の日長、長柄の浜に舟をとめて、どこか橋のあった場所かと尋ねても、誰一人答える人はいないよ。

1595 沖つ風夜はに吹くらし難波渦あかつきかけて波ぞ寄すなる

【訳】沖の風が夜半吹いたらしい。難波渦では夜から明け方にかけて波の寄せる音が聞こえてくるよ。

【釈】難波の海浜に宿って、強まる風の音、高まる波の音に寝つかれず、心細くわびしい気持ちを歌う。

1596 須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ海人の釣舟

【訳】須磨の浦の朝風の日は、はるばると遠く、霞にまぎれるほどの沖合いに、海人の釣舟が出ているのが見渡されるよ。

○須磨の浦＝摂津国の歌枕

1597 秋風の関吹き越ゆるたびごとに声うちそふる須磨の浦波

【訳】秋風が吹いて関を越えるたびごとに、須磨の浦では、その風の音に波が音をそえるよ。

1598 須磨の関夢をとほさぬ波の音を思ひもよらで宿をかりける

【訳】須磨の関は波音が高く、夢も通わさないということなど思いもよらずに、わたしは海辺に宿を借りてしまったよ。

【釈】海辺に宿ったものの波音がやかましくて眠れず、なつかしい故郷の夢もみられない旅人の嘆き。

1600 海人小舟とま吹きかへす浦風にひとり明石の月こそ見れ

【訳】海人の小舟のとまを吹きかえす浦風に吹かれ、たった一人で夜を明かしながら、明石の海の上に出た明るい月を見るよ。

○明石＝播磨国の歌枕

1601 和歌の浦を松の葉ごしにながむればこそ

ゑに寄する海人の釣舟

【訳】和歌の浦の海辺の松の葉越しに眺めると、さながら海人の釣舟は松の梢に向けて漕ぎ寄せるように見えるよ。

○和歌の浦＝紀伊国(現在の和歌山県)の歌枕

1602 水の江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風

【訳】水の江のよしのの御社は神々しくもの古りて、浦の老松にさびしげな松風の音が聞えるよ。

○水の江のよしのの宮＝「よしの」は「能野」で、丹後国の古社か。○神さびて＝年が経って神々しく

1604 大淀の浦に立つ波かへらずは松の変らぬ色を見ましや

【訳】大淀の浦に立つ波が寄せては返るように、もしもこの浦に立ち帰らなかったならば、浦の松の昔と変らない緑の色を見ることができたでしょうか。

1607 うち寄する波の声にてしるきかな吹上の浜の秋の初風

【訳】うち寄せる波の音ではっきりわかるなあ。吹上の浜に秋の初風が吹いているのだ。

【釈】波音が高くなってきたので、秋が立ち秋の初風が吹き始めたと推測した。

○吹上の浜＝紀伊国の歌枕

1608 沖つ風夜寒になれや田子の浦の海人の藻塩火焚きまさるらむ

【訳】夜が更けるにつれて沖の風が寒くなったからでしょうか。田子の浦の海人ははいよいよ盛んに藻塩火を焚いているようです。

【釈】秋の夜、海辺に赤々と燃える藻塩火を遠く望んだ歌。

○田子の浦＝駿河国(今の静岡県中央部)の歌枕

1609 見わたせば霞のうちも霞みけりけぶりた  
なびく塩釜の浦

【訳】見わたすと霞の中がさらに深く霞んでい  
るよ。藻塩を焼く煙がたなびいている塩釜の浦  
では。

【釈】春霞がたなびいているところにさらに藻  
塩の煙がたなびくので、いっそう深く霞んだと、  
機知的に取り直した。

○塩釜の浦＝陸奥国の歌枕

1610 けふとてや磯菜摘むらむ伊勢島や一志の  
浦の海人のをとめ子

【訳】七草の今日は若菜を摘む日だというので、  
磯菜を摘むのであろうか、伊勢島の一志の浦の  
海女乙女たちは。

○けふ＝正月七日の七草の日 ○磯菜＝海藻。

1699 流れ木と立つ白波と焼く塩といづれかか  
らきわたつ海の底

【訳】流れ漂う木と、立つ白波と、藻塩草を焼  
いてできた塩と、いったいどれがからくつらい  
であろうか、海の底で。

1701 白波の寄するなぎさに世をつくす海人の  
子なれば宿も定めず

【訳】わたしは白波が寄せる渚で生涯を終える  
海人の子ですので、家も決めておりません。

【釈】男から家を尋ねられた女のはぐらかした  
返事。

1714 潮のまによもの浦々尋ぬれどいまはわが  
身のいかひふもなし

【訳】潮がひいている間にあたりの浦々を捜し  
求めるのですが、もはやこれといった貝も見当  
たりません。同じようにわたしも今となっては  
何を言っても甲斐のない身です。

1715 いにしへの海人やけぶりとなりぬらむ人  
目も見えぬ塩釜の浦

【訳】以前住んでいた海人が亡くなって、なき  
がらを茶毘に付したその煙が立ち昇っているの  
でしょうか。訪れる人もない塩釜の浦のさびし  
さよ。

【釈】海辺に宿ったものの波音がやかましくて  
眠れず、なつかしい故郷の夢もみられない旅人  
の嘆き。

1721 天つ風吹飯の浦にみるたづのなか雲居  
に帰らざるべき

【訳】風の吹く吹飯の浦にいる鶴は、どうして  
空に帰らないことがあるだろうか。今は昇殿を  
許されていないわが身もどうして宮中に立ち戻  
らないことがあるだろうか。

1723 大淀の浦に刈り干すみるめだに霞に絶え  
て帰る雁がね

【訳】大淀の浦に海松を刈り取って干している  
ころ、立ちこめる霞の中に、列もとぎれて見え  
なくなり、北の国へと帰ってゆく雁よ。

1724 浜千鳥ふみおくあとの積りなばかひある  
浦に逢はざらめや

【訳】浜千鳥が足跡をつけるように、書きため  
ておく歌草が積ったならば、貝のある浦(撰集に  
採られるという甲斐のある折)に逢わないこと  
があろうか。

【釈】落胆もせず、なお精進せよと慰め、かつ  
励ました歌。

1759 和歌の浦や沖つ潮合に浮かび出づるあは  
れわが身のよるべ知らせよ

【訳】和歌の浦の沖の潮合に浮び出る泡のよう  
にはかないこの身のよるべをお知らせください。

1913 住吉の浜松が枝に風吹けば波のしらゆふ  
かけぬまぞなき

【訳】住吉の浜辺の松の枝に風が吹くと、白木  
綿のような波が枝にかからない時とてないよ。

【釈】白波を住吉神社にちなむ白木綿に見立てた叙景歌。

1920 蘆そよぐ潮瀬の波のいつまでか憂き世の中に浮かびわたらむ

【訳】蘆がそよぐ、潮の流れの速い海の瀬に立つ波のように、いつまでわたしは憂いこの世の中に浮かび続けているのであろうか。

1946 おしなべて憂き身はさこそ鳴海潟満ち干る潮の変るのみかは

【訳】鳴海潟の満ちたり干いたりする潮が変わるだけであらうか。いや、すべて憂き世にある憂き身は全く同じように移り変わるならないのであろう。

○鳴海潟＝尾張国の歌枕

#### 4. 金槐和歌集引用句一覧

26 夕月夜しほ満ち来らし難波江の蘆の若菜に白波が越えている

【訳】夕月の出とともに潮が満ちてくるらしい。難波江の蘆の若菜に白波が越えている。

○夕月夜＝夕月 ○難波江＝摂津国の歌枕。大阪湾。

108 多祜の浦の岸の藤波たちかへり折らではゆかじ袖は濡るとも

【訳】多祜の浦の藤の花を、立ち戻ってぜひとも手折ってゆこう。たとえ打ち寄せる波に袖は濡れようと。

【釈】屏風の絵柄から旅人の心中を推測した歌。○多祜の浦＝富山県氷見市付近に昔あった布勢の湖の東南部。

157 うちへて秋は来にけり紀の国や由良のみ崎の海人のうけ縄

【訳】紀伊の国の由良のみ崎に漁る漁夫の長く

張ったうけ縄、その縄さながらに長く続いた暑い日々のあと、いよいよ秋がやってきた。

【釈】由良のみ崎のうけ縄が海面に遠く延びているのを見ながら、秋の到来を感じているもの。ただし机上の歌。

○うちはへて＝ずっと長く続いて。○紀＝「紀伊」に同じ。○由良のみ崎＝紀伊の国の歌枕。○うけ縄＝浮きをつけた縄。網や延縄を浮かせるために用いる。

213 たまさかに見るものにもが伊勢の海の清き渚の秋の夜の月。

【訳】たまにでもよいから見たいものだ、伊勢の海の清い浜辺を照らす秋の夜の月を。

214 伊勢の海や波にたけたる秋の夜の有明の月に松風ぞ吹く。

【訳】伊勢の海の緩慢な波の満ち引きのうちに、いつしか秋の夜も更け、有明の月の淡く照らしている浜辺に、松風が寂しく吹いている。

○たけたる＝盛りを過ぎた。

215 須磨の海人の袖ふきかへす潮風にうらみて更くる秋の夜の月

【訳】須磨の漁夫の袖を翻す潮風のために月が曇り、澄んだ光が見られぬと嘆くうちに、次第に秋の夜は更け月は傾いてゆく。

○うらみて＝「恨みて」に袖の裏、須磨の浦を見る意を掛ける。

216 塩釜の浦ふくかぜに秋たけて籬の島に月かたぶきぬ

【訳】塩釜の海岸を吹く風に秋も更けて、籬の島では月も傾いた。

○塩釜＝宮城県塩竈市。○籬の島＝塩竈港東方の島。

222 わたのはら八重の潮路に飛ぶ雁の翼の波に秋風ぞ吹く

【訳】海原のはるかな潮路の彼方へ飛びゆく雁、その翼の波形にも似た連なりに秋風が吹いている。

【釈】雁が列をなして海上を飛ぶ実景を詠む。大海原と雁との取り合せは鎌倉に住んでいればこそそのもの。

○わたのはら＝広々とした海。○八重の潮路＝遠くはるかな海路。

223 ながめやる心もたえぬわたのはら八重の潮路の秋の夕暮

【訳】秋の暮れ方、大海のはるかな潮路をのぞんでいると様々な思いが湧く。けれどそれも結局は昏れゆく海と一つに融け合い、無心になってしまう。

【釈】海上を飛び去った雁の姿が夕空に消えた後も、広大な海を眺め続ける実朝の弧影が浮んでくる。

294 夜を寒み浦の松風吹きむせび虫明の波に千鳥鳴くなり

【訳】海辺の夜寒に、松風がむせび泣くように吹き、虫明の瀬戸の波の上では千鳥の鳴く声がある。

○虫明＝岡山県邑久郡の虫明の瀬戸。「瀬戸」は狭い海峡の意。

295 夕月夜満つ潮あひの潟をなみ波にしをれて鳴く千鳥かな

【訳】夕月の下、折からの満潮で干潟がなくなり、波に濡れ弱った千鳥がつかうように鳴いている。

○潮あひ＝潮のさきひきの間。

296 月清み小夜ふけゆけば伊勢島や一志の浦に千鳥鳴くなり

【訳】夜が更けてゆくと、伊勢の一志の浦で月光の清らかさに鳴く千鳥の声が聞える。

○伊勢島＝伊勢の国（三重県）のこと。○一志

の浦＝三重県一志郡香良洲町付近の海岸。

297 衣手に浦の松風冴えわびて吹上の月に千鳥鳴くなり

【訳】耐えがたいほどに寒い海辺の松風が、私の袖に吹きつける中、吹上の浜を照らす月光のもとで鳴く千鳥の声が聞えてくる。

298 風さむみ夜の更けゆけば妹が島形見の浦に千鳥鳴くなり

【訳】風が冷たいので、夜が更けてくると、妹が島の形見の浦で千鳥の鳴く声がある。

○妹が島形見の浦＝和歌山市加太付近の島や浦と見る説があるが、未詳。

308 難波潟葦の葉しろく置く霜の冴えたる夜はに鶴ぞ鳴くなる

【訳】難波潟の葦の葉に霜が白く降りて、冷たく光っている夜更けに、鶴の鳴いている声が聞える。

○難波潟＝大阪地方の海面の古称。

315 難波潟潮干に立てる葦鶴の羽しろたへに雪は降りつつ

【訳】難波潟の潮の引いたあとに立って餌をあさる、葦鶴の羽も真白に、雪は降りしきっている。

316 降りつもる雪踏む磯の浜千鳥波にしをれて夜はに鳴くなり

【訳】降り積る雪を踏んで歩む磯の浜千鳥、その波に濡れ弱って鳴く声が、夜中に聞えてくる。

【釈】千鳥の鳴声からその様子を想像した。

317 みさごある磯辺に立てるむろの木の枝もとををに雪ぞつもれる

【訳】みさごの棲む磯辺に立つむろの木、その枝もたわむほどに雪が積った。

○みさご＝ワシタカ目の鳥。海辺や湖沼に棲息

する。○むろの木=ヒノキ科の常緑針葉樹、ネズ古称。○とををに=たわわに、しなうほどに。

318 夕されば潮風寒し波間より見ゆる小島に雪は降りつつ

【訳】夕方になると海上を吹いてくる風が冷たい。波間に見える小島には雪が降っている。

319 たちのぼる煙はなほぞつれもなき雪の朝の塩釜の浦

【訳】雪の降った朝も、塩釜の海岸にはあい変わらず塩焼く煙が立ち上り、何事もなげである。○つれもなき=外部に影響されず平然としたさま。

321 夕されば浦風寒し海人小舟とませの山にみ雪降るらし

【訳】夕方になると海辺の風が寒い。とませの山に雪が降っているらしい。

360 鶴のゐる長柄の浜のはま風に万代かけて波ぞ寄すなる

【訳】鶴の下りている長柄の浜の浜風に、永遠の未来までもと波が打ち寄せている。○長柄の浜=大阪付近の海岸。

382 難波潟水際の葦のいつまでか穂に出でずしも秋をしのばむ

【訳】難波潟の水際の葦が、秋になっても穂を出さないでいる。あなたにうとまれながら、私はいったいつまでこの秘めた慕情に耐えなければならぬのか。

○難波潟=大阪地方の海面の古称。

388 葦鴨のさわぐ入江の浮草のうきてやものを思ひわたらむ

【訳】葦辺の鴨が騒ぐ入江の浮草のように、心の落ち着きを失って物思いを続けることであろうか。

389 うきなみの雄島の海人の濡れ衣濡るとな言ひそ朽ちは果つとも

【訳】海面の浮き波は、雄島の漁夫の衣を濡らす。だがそのように私も泣き濡れているなどとは言わないでほしい、たとえ恋い焦がれて死のうとも。

○うきなみ=表面近くの碎け泡立つ波。○雄島=宮城県松島湾北西の島。○朽ちは果つ=死ぬ。腐る意を含み、「濡れ衣」の縁語ともなっている。

390 伊勢島や一志の海人の捨て衣あふことなみに朽ちや果てなむ

【訳】伊勢の一志の漁夫の捨てた衣が、波間で朽ち果てるように、あの人に逢うことのできぬ私は、やがて空しく死ぬことであろうか。

○海人=漁夫。

391 淡路島通ふ千鳥のしばしばも羽搔く間なく恋ひやわたらむ

【訳】休みなく羽ばたいて淡路島に通う千鳥のように、私も絶え間なくあの人を恋い慕い続けるのだろうか。

392 豊国の企救の長浜ゆめにだにまだ見ぬ人に恋ひやわたらむ

【訳】豊国の企救の長浜ではないが、長い間噂に聞いてきて、しかも夢にさえまだ見たことのない人に、私は恋心を抱き続けるのだろうか。

○豊国=九州北東部の古称。豊前・豊後の国。○企救の長浜=北九州市小倉の海岸。長く聞く意を掛ける。

393 須磨の浦に海人のともせる漁火のほのかに人を見るよしもがな

【訳】須磨の海辺で、漁夫の灯した漁火がかすかに見える。同じように、ほんの少しいからあの人を垣間見る術がないものだろうか。

○漁火=沖で漁をする際に焚く、魚を誘いよせ

る火。

394 芦の屋の灘の塩焼われなれや夜はすがら  
にくゆりわぶらむ

【訳】恋の炎を胸の中に秘めている私は、芦屋の灘で塩を焼く海人のようなもの。今日もその炎で一晩中くすぶり悩むことだろう。

○芦の屋の灘=兵庫県芦屋市の海岸。波が荒い。

○すがらに=・・・の終わるまでずっと、の意。

429 難波潟浦より遠に鳴く鶴の声よそこに聞き  
つつ恋ひやわたらむ

【訳】難波潟の岸から遠く隔たって鳴く鶴、私も同じようにその人の慕わしい声を遠く離れて耳にしなが、ひたすら恋い続けることだろうか。

503 君によりわれとはなしに須磨の浦に藻塩  
たれつつ年の経ぬらむ

【訳】あなたを恋したばかりに、須磨の浦で塩水が藻から垂れるように、われ知らず涙を流しながら日々を送って何年になるだろうか。

○須磨=神戸市須磨区。○藻塩たれ=製塩用の藻のかけた海水がしたたること。涙を流す意をも掛ける。

505 かくてのみ荒磯の海のありつつも逢ふ世  
もあらばなにかうらみむ

【訳】荒磯の海というけれど、このように耐え忍ぶ日々があり通しても、あなたに逢える時さえあれば、どうして恨みに思おうか。

506 み熊野の浦の浜木綿言はずとも思ふ心の  
数を知らなむ

【訳】熊野の浦の浜木綿ではないが、口に出して言うこともできずにいる。だが絶え間なくあなたを思う心の丈を、どうか察してほしい。

○み熊野の浦=紀伊半島の南沿岸一帯。「み」は美称。○浜木綿=浜万年青。暖かい地方の海岸

砂地に自生。葉が重なって成長するため。幾度にも重なる意に用いられる。○数=繁く思いを寄せる、その回数。

507 わが恋は百島めぐる浜千鳥ゆくへも知らぬ  
かたになくなり

【訳】数知れぬ島々を飛び渡り、行く先を見失って干潟に鳴いている浜千鳥。恋におちた私もどうなるのやらわからず、千鳥に倣って泣いている。

508 沖つ鳥鶺の棲む石に寄る波の間なくもの  
思ふ我ぞかなしき

【訳】沖の鳥の鶺の棲む岩に寄せ返す波、そのように絶え間ない物思いに沈む、悲しい私・・・。

○鶺=全蹠目ウ科の水鳥。巧みに潜水して魚を捕える。

509 田子の浦の荒磯の玉藻波のうへの浮きて  
たゆたふ恋もするかな

【訳】田子の浦の荒磯の玉藻が、波に浮んで揺れている。恋する私も落ち着かず、心はおのき揺れている。

○田子の浦=静岡県東部の海岸。現在は陸となった庵原川流域にあたる。○玉藻=美しい藻。「玉」は美称。

510 かもめゐる荒磯の洲崎潮みちて隠ろひゆ  
けばまさるわが恋

【訳】鷗の棲む荒磯の洲崎が潮の満ちるにしたがって隠れてしまうように、あの人も姿を見せなくなってゆく。私の恋心はかえって募るばかり。

○洲崎=洲が長く海に突出し、岬となった所。

511 武庫の浦の入江の洲鳥朝なあさなつねに  
見まくのほしき君かも

【訳】武庫の浦の入江に、毎朝のように群れている洲鳥。あなたもあのように、いつも私の眼

の前においてほしいのだ。

○武庫の浦＝兵庫県尼崎市から西宮市にかけての海岸。○洲鳥＝海や川の洲にいる鳥。千鳥・鳴など。

525 旅寝する伊勢の浜萩露ながらむすぶ枕に  
やどる月かけ

【訳】旅寝の仮の枕として、露の置く伊勢の浜萩を結んだ。露のたたえたその枕には月が宿っていた。

○伊勢の浜萩＝伊勢の国（三重県中央部）の浜辺に生えている萩。葦の別称ともいう。

536 塩釜の浦の松風かすむなり八十島かけて  
春や立つらむ

【訳】塩釜の海岸を吹く松風も、霞を含んでいるかのように、長閑にやさしく吹きわたる。数知れぬ島々いっせいに、今日立春を迎えたのだろうか。

【釈】塩釜の浦の景観を素材にして立春を詠んだもの。

○塩釜の浦＝宮城県中部の塩竈湾の古称。かつての製塩地。松島湾南西部にあたる歌枕。○八十島＝多くの島。松島湾には二百六十余りの島が点在する。

543 難波潟漕ぎいづる舟の目もはるに霞に消  
えて帰る雁がね

【訳】難波潟を漕ぎ出る舟が、はるか遠く霞の中に姿を消した。空では雁の一群が、北へ北へと遠ざかってゆく。

○難波潟＝大阪地方の海面の古称。○目もはるに＝目の届くかぎり、はるか遠くに。この句は、舟の遠ざかる様と、帰雁の飛び去る様との両方に掛っている。

566 住の江の岸の松ふく秋風を頼めて波の寄  
るを待ちける

【訳】住の江の松に秋風が吹くと、波が声を添

えるということだから、岸の松を吹く秋風は、やがて波が寄せてくるだろうと期待しているのだ。

【釈】「寄る」には「夜」を掛けたか。夜になると男が女を訪れるように、波は松風に期待を抱かせ、岸に寄せる時を待っているのだと、恋歌めかして詠んだ。

567 玉津島和歌の松原夢にだにまだ見ぬ月に  
千鳥鳴くなり

【訳】玉津島の和歌の松原に、夢にさえ現れなかったほど美しい月に、千鳥の鳴く声が聞えてくる。

【釈】「和歌の松原」は『万葉集』によれば伊勢の国（三重県中央部）の地名であるが、実朝は「和歌の浦」への連想から、玉津島の松原と誤解して詠んだのだろう。

○玉津島＝和歌山市和歌浦、玉津島神社の裏にある奠供山の古称。

568 春といひ夏と過ぐして秋風の吹上の浜に  
冬は来にけり

【訳】春になった夏が来たなどと言っているうちに、秋風の吹く吹上の浜にとうとう冬が訪れた。

【釈】四季を詠みこんだ即興的な歌。

569 いつもかく寂しきものか葦の屋に焚きす  
さびたる海人の藻塩火

【訳】ふだんからこのように寂しいものなのだろうか。葦葺きの粗末な家で漁夫の焚く藻塩火が、勢いを失ってくすぶりかけているありさまは。

【釈】藻塩火に寂しさを感じ取っている実朝の孤影が想像される。

○焚きすさびたる＝焚いた火の勢いが衰える意。逆にこれを、燃え盛るとする解もある。

570 みづとりの鴨の浮寝のうきながら玉藻の

床に幾夜経ぬらむ

【訳】鴨の浮寝さながらに、気も安まらぬ憂き夜を、玉藻の寝床の上に送って、もう何日が過ぎただろう。

【釈】鴨に寄せて漁夫の生活を詠んだもの。

○みづとりの＝「鴨」の枕詞。○浮寝＝水鳥が水に浮いたまま寝ること。ここは心落ち着かぬ眠りをさす。

573 月の澄む磯の松風冴えさえてしろくぞ見ゆる雪の白浜

【訳】澄みきった月が照らす中、磯を吹く松風も冷えに冷え、雪の白浜は文字どおり、雪が積ったようにしらじらと光っている。

○雪の白浜＝但馬の国（兵庫県北部）の歌枕。

585 春秋は代りゆけどもわたつうみの中なる島の松ぞ久しき

【訳】春や秋は入れ替りつつ去来するが、海中の島の松は、色も変らず幾星霜を経てきている。

【釈】「松」に「待つ」が掛けてあると解すれば、男の訪れを待ち続ける女の恋歌となり、上四句は序と考える。しかし詞書に「雑」とあるので、ここでは老松を詠んだ叙景的な歌とみておきたい。

○わたつうみ＝海。○中なる＝中にある。

586 磯の松幾久さにかなりぬらむいたく木だかき風の音かな

【訳】磯辺に立つ松は、どれだけの時間を生き抜いてきたことだろう。その高い梢で鳴る松風の音も、高く響いて爽やかだ。

【釈】現地を実際に訪れての詠。建暦二年（一二一二）三月の三崎行の際のものであろうか。

○磯久さ＝長い間。

587 あづさゆみ磯辺に立てるひとつ松あなつれづれげ友なしにして

【訳】磯辺に立っている一本松は、ああ何と寂

しげなことか。連れ添う友もないではないか。

【釈】松と同じく孤独な生を歩む実朝の共感がにじむ。

○あづさゆみ＝「弓」を「射る」の心で「磯辺の」「い」に掛る枕詞。

589 住の江の岸の姫松古りにけりいづれの世にか種はまきけむ

【訳】住の江の岸の姫松が老い古びてしまった。いったいいつの世に種を蒔いたものであろう。

【釈】屏風絵中の老松を見ながら、その木の種が蒔かれた遙かな昔に思いを馳せた歌。

○姫松＝丈の低い松。

603 難波渦うき節しげき葦の葉に置きたる露のあはれ世の中

【訳】難波渦の節の多い葦の葉に置く露のように、何とまあつらいことばかりの世の中なのだろう。

○うき節しげき＝葦に節の多い意と、この世が浮き節、つまり憂わしい時に満ちていることとを掛ける。

604 世の中は常にもがもな渚こぐ海人の小船の綱手かなしも

【訳】世の中はいつまでも変わらないでいてほしいものだ。波打ち際を漕ぎゆく漁夫の小舟の引綱を見ていると、たまらなく切なくなってくる。

【釈】舟の綱を引くのに懸命な漁夫を見て、この世が彼らにとって、苛酷・無常なものではないようにと祈っているのだろう。

○もがもな＝・・・であってほしい。○綱手＝舟につけて引く綱。○かなしも＝悲しくも切ないことだ。

605 朝ぼらけあとなき波に鳴く千鳥あなことごとしあはれいつまで

【訳】夜がほのぼのと明けるころには、舟の残した航跡はすでにあとかたもない。それをわか

なんで大げさに鳴きたてている千鳥よ。お前たちこそああ、いつまでの命だと思っているのか。○朝ぼらけ＝ほのぼのと夜が明けるところ。○あなことごとし＝ああ仰々しいぞ。

637 陸奥の国ここにやいづく塩釜の浦とはなしに煙立つ見ゆ

【訳】ここは陸奥の国なのか。でなければいったいどこなのだろう。藻塩を焼く塩釜の浦というわけではなからうに、煙の立ち上がっているのが見える。

639 箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

【訳】箱根の山道を超えてくると、急に視界が開け、広々とした伊豆の海の沖の小島に、波の打ち寄せているのが手に取るように見える。

○沖の小島＝熱海市東方にある初島をさすか。

640 空や海うみやそらともえぞ分かぬ霞も波も立ち満ちにつつ

【訳】空なのか海なのか、まるで区別がつかない。霞が一面に満ち、波しぶきも高いこの夜明け時……。

641 大海の磯もとどろに寄する波破れて砕けて裂けて散るかも

【訳】磯もとどろくほどに寄せる大海の荒波は、割れ、砕け、裂け、そして四方に飛び散ってゆく。

【訳】岩頭に砕け散る大波の勇壮さを見事に捉えた歌。ただしその背後には、波とともに砕け散ることに快感を覚えるような虚無・孤独の影が漂っている。

686 藻塩焼く海人の焚く火のほのかにもわが思ふ人を見るよしもがな

【訳】海辺で漁師が藻塩草を焼くほのかな火。そんなほのかな機会でもいいから、私の恋い慕

う人を一目見る術があったらなあ。

○藻塩焼く＝製塩のため塩分を含む海藻を焼くこと。

688 風吹けば波うつ岸の岩なれやかたくもあるか人の心の

【訳】あの人の心は、風が吹くと波の寄せる岸の岩なのだろうか。なかなか打ち解けようとしないよ。

【訳】恋人のつれなさは海岸の岩同然で、私は打ち寄せる波のように、心も千々に砕けるばかりだと嘆いている。

702 湊風いたくな吹きそしなが鳥猪名の湖に舟泊むるまで

【訳】湊風よ、あまり強く吹いてくるな。猪名の湖に舟を停泊させるまでは。

○湊風＝河口を吹く風。○しなが鳥＝「猪名」の枕詞。○猪名の湖＝兵庫県南部、猪名川の河口にあった港。

703 やらの崎月影さむし沖つ鳥鴨といふ舟浮寝すらしも

【訳】やらの崎は月が冷たく照っている。この光のもとで、鴨という名の舟が、沖で浮寝をしているらしい。

○やらの崎＝福岡市能古島北端の荒崎という岬のこと。○浮寝＝水に浮いたまま寝ること。ここでは舟の停泊の形容として用いた。

704 沖つ波八十島かけて住む千鳥心ひとつといかが頼まむ

【訳】沖の波が寄せかけている大小さまざまな島々。この島々を渡り歩いて暮す千鳥があてにならぬように、目移りの多いあなたと心が通い合っているとは思えない。浮気者をどうして頼みにできよう。

708 鶴のゐる長柄の浜の浜松の待つとはなしに千世をこそ経れ

【訳】いつも鶴の棲んでいる長柄の浜の浜松は、鶴の訪れを待つなどという心労もないままに、もう千年もの樹齢を誇っている。

【釈】鶴・松・長柄の浜など、長寿の関わりの深いものを並べて慶祝の意を表わそうとしている。

738 舟とむる虫明の磯の浜千鳥浦風さむく夜  
はに鳴くなり

【訳】舟が幾艘も泊っている虫明の磯。夜更けに耳を澄ますと、岸を吹く風の冷たさに、浜千鳥の鳴いている声が聞えてくる。

746 月ぞ澄む馴れこし秋は夢なれや虫明の磯  
の夜はの松風

【訳】月が澄んだ光を投げている。これまで馴染んできた秋は夢だったのか。夜更けの虫明の磯にはただ松風が吹くばかりだ。

【釈】月の照る冬の海岸で、過ぎ去った秋に対する喪失感を詠んだ。

750 松風の音こそかはれ紀の国や吹上の浜に  
秋や来ぬらむ

【訳】松風の音が変わった。紀伊の国の吹上の浜に、秋が訪れたのだろうか。

【釈】海岸の松風の音の変化に、秋の到来を感じている。

○紀の国や吹上の浜＝和歌山県の紀ノ川河口と雑賀の間の浜。歌枕。

## 5. 菟玖波集引用句一覧

後鳥羽院御製

2 いづれのうらをながめわくらむ

【訳】どの浦をそれだと眺め分けられようか、どの浦もとりどりに美しい。

30 あし火たくなだのしほやの浦風

【訳】灘の塩でたく火の煙が浦風に吹きなびいて、そのために月が霞んでゆく。

前中納言定家

41 誰かはきかむあまのとま屋に

【訳】誰が聞くものか、聞きはしない。こんな風流な海士の住む苫屋に

42 まてしばし浦路もふけぬさよ衛

いま暫く鳴かずに待ってくれ。ここの浦も大分夜がふけてきた、もう夜明けも近いことだろう。小夜千鳥よ、今鳴いたとして、こんな苫屋に誰が聞く人があろうか。

○小夜千鳥＝夜中に鳴き騒ぐ千鳥

前大納言爲家

25 漁火の影遠ざかる蟹小舟

【訳】ちらちらする漁火の影が次第に沖へ遠ざかっていく。漁火のあやつる小舟の火影である。

64 生の浦のあまのもしほ火焼きさして

【訳】生の浦の海士達が、藻塩焼く火をとうとう焚き止してしまった。なんとか燃えぬ梨よ。

後深草院少将内侍

28 あさりするしほひのかたのうつせ〔貝〕

【訳】潮がひいた跡の干潟に散らばっている空の貝殻よ、その貝殻のように実のないことでは、たつ評判が悲しい。

道生法師

16 うらのはま松まつとしらずや

【訳】私が心ひそかに待ち焦がれているということは、知らないことではないのかなあ。

良阿法師

31 玉しくなぎさいせにこそあれ

【訳】玉を敷いたような白砂青松の美しい渚、そんな浜辺は伊勢の国こそある。

頓阿法師

2 住吉のうらよりかすむ淡路島

【訳】住吉の浦から海上は霞をこめて、波上遥か彼方に淡路島が相對して見える。

26 入日にちかきおきのつり舟

【訳】水平線に今しも夕陽が沈もうとしている、それを背景に釣舟が木の葉のように浮き沈みしている。

救済法師

37 松をふきこす風のあらうみ

【訳】海浜に生い茂っている老松を吹き越してくる烈風、その向うには荒海の白い波頭がうねっている。

42 住吉のうらの南に月みえて

【訳】住吉の浦の遥か彼方の南の空には、月が際やかに照っている。

81 しほひに遠し難波うら〔舟〕

【訳】海潮がひいてしまって、今は遠く彼方に難波の浦舟が小さく見える。

161 もろこし舟の旅の夜どまり

【訳】貿易船である大きな支那船が、異国の港に、夜しずかに碇泊している。侘しい夜船の姿に感慨をよせて詠んだもの。

166 なにはのあしはいせのはまおぎ

【訳】難波の蘆は、伊勢では浜荻といわれている。

169 風にこたふる浦波の音

【訳】蕭条とした風の吹く音に答えるように、浦波の音が高く低く聞える。

192 松原の汐干にかすむ旅の道

【訳】潮水の遠くひいた松原の辺りには春霞がたちこめ、これから旅行く道筋が霞んでみえない。

【釈】道のわからぬのはうらめかしいが、春霞の朧々とした海浜の景には心慰む思いがする。

197 松のかげより汐やひくらむ

【訳】海浜の松林の林間に見えていた海潮が、次々にひいていくようだ。

権少僧都永運

31 淡路の國は波の遠嶋

【訳】淡路の国は、波上はるか彼方に浮かぶ遠い島である。

32 影あれば月と水との二こほり

【訳】遠島に淡く影のあるところから推せば、月影と水に映る影の二つが水のように輝いている。月に照らし出された淡路島の遠景。

關白前左大臣(良基)

9 岩こす浪は松のあらしか

【訳】岩を越して打ち寄せる波の音は、海浜の松林に吹く松風の音だろうか。

11 一むらの松の木の間に見て

【訳】海浜の松林の緑の間を通じて白い波頭が、見え隠れする。

113 ききなれたるはすまの波風

【訳】須磨のすさまじい波風の音も、もう大分

聞き馴れてしまって、そんなに淋しくも感じなくなった。

周阿法師

2 伊勢〔しま〕かすむ浦の明仄

【訳】伊勢や志摩の国の浦々にも春霞がかすんで、ほの明るい曙の景である。

27 浪と風とのたかさごの松

【訳】荒波と吹きすさぶ風とともに名高い高砂の松。

○高砂の松＝兵庫県加古川の河口にある風光明媚な名所。その高砂神社にある二本双生、相生の松。

28 友鶴のあひおひになく音をそへて

【訳】雌雄一番の友鶴が相並んで、諸声に音をあげて波風の音にそえて鳴いている。

35 旅にやどとふしほがまのうら

【訳】旅先の宿である名勝の地塩釜の浦を訪れ尋ねる。

## 6. 新撰菟玖波集引用句一覧

宗叡法師

32 むしあけや夏のひがたの夕すゞみ

【訳】夏の日の蒸し暑い、虫明の干潟に夕涼みして、この形見の扇は鄭重にあつかってくれよ。

智蘊法師

70 おきつ舟空にから櫓を鴈なきて

【訳】沖ゆく舟のように空に櫓の音を響かせていくのは、雁の鳴き声である。

84 大海のとほきしほひにあさりして

【訳】果しもしない大海の遠い潮干に漁獵しながら。

【釈】海土の日々の労働して生活する哀れさを謡っている。

86 橋だてにやあまのみるめを我がかりて

【訳】天の橋立の漁夫達は海松布を採って生活している。自分は、その海土の潜って海松布を採る様子の面白さに見とれている。

法印行助

12 月さむきよのしほひに鴈おちて

【訳】晩秋の月の冴えた寒い夜の干潟に、病雁が一羽さびしく舞い降りてきている。

14 難波江やあかつき月に鐘なりて

【訳】難波の入江には暁の月が冴えかえり、入江の水面には遠寺の鐘が鳴り響く。

能阿法師

24 おもひあかし夜な～の月

【訳】さやかに明るい明石の浜の月を夜毎に眺めつつ思いあかしていると、どんなに奥深い所でも、美しい月故に住まれる。

32 君が代のかずこそはまの真砂

【訳】大君の御代は、何時までも尽きることのない浜の真砂の数ほど続いてほしい。

権大僧都心敬

4 もしほやくけぶりにかすむ鴈なきて

【訳】藻塩焼く煙がゆるやかにたち上っている。その煙のように大空が春霞にかすんで、その彼方から雁の鳴き声が聞えてくる。

53 しほかぜさむし行すゑのあき

【訳】海から吹き付ける潮風が日毎にすさまじく寒々と吹いてくる。

【釈】秋の海辺の荒涼さ

57 暮れぬる色にかほる浦かぜ

【訳】日暮れの色と変化とともに浦風も吹き変わってはげしさを増してきた。

121 石見の海のかほる浪かぜ

【訳】石見の国の波荒い北海の海の急変する浪風、そのすさまじさよ。

122 人ごゝらうらのあらしほまつこえて

【訳】自分につれない人の心が恨めしく、その浦、石見の海の浦の荒潮が、すさまじく吹き変わって松を越してしまった。即ちあの人のは変って冷たくなった。

136 舟に風みるおきのうきぐも

【訳】出航するのに、嵐になるかならないか、沖に動く雲の気配で荒模様を予見しなければならぬ。

158 舟人も棹をわたるゝ秋の海

【訳】哀れをしらぬ舟人さえも、秋の海の哀感には暫し棹さすことも忘れるほどだ。

【釈】秋の海辺の景で応じた。

160 よな～のつりの火ともす浪のうへ

【訳】海上はるか波の上には毎夜のように釣舟が漁火をとます。その美しい眺めに、風雅の心つい誘われて夜を明かしてしまう明石潟

220 あさしほはひさぎかぜふく濱邊かな

【訳】朝潮が遠くひいて、辺りの浜楸の枯葉に風が吹きわたる浜辺の叙景

○楸(ひさぎ)=河辺などに生えるキササゲ。夏に円錐形の花、暗紫の点のある黄味

法眼専順

20 なが井のはまのみじか夜の月

【訳】おなじように長井の浜といって、長居する浜というが、今は明けやすい短夜の淡い月が、もう白けて暁近い。だから長井の浜も名のみである。

55 海のうへとなるとほやまのかげ

【訳】海上遙か水平線上に霞む遠山連峰の島影の眺望を詠んだもの。

56 あさもよひきのふみざりし雪降りて

【訳】今朝の朝明に、昨日までは見えなかった雪の降り積もっている気配が遠望される、海上遙かの島影に。

64 たつ鳥のつがひはなれぬ波に来て

【訳】番いの鳥が、波に驚いて飛び立ったが、再び波の上に舞い戻ってきて並んで浮いている。

101 くるしき袖に浪もかけけり

【訳】堪え忍んで苦しみに泣き濡れている袖に、そのうえ波さえ降りかかってくる。

【釈】海士の苦しい生活か、恋に泣く涙の句か。

102 かれぬるか人もこぬみのはまつづら

【訳】とうとう通いが絶えてしまったのか、人も訪れてこない我が身、その許奴美の浜に生い茂る青葛に、波さえ降りかかって一層濡れそぼ

っている。

○こぬみの浜=駿河国(静岡県)興津町の磯。○浜つづら=浜辺に生えている青かずら。

110 浪の間のありその濱路いそぐ日に

【訳】越中の荒磯の浜路は、波と波の合間をみて急ぎわたる旅を続ける。

○葛=荒磯の浜。越中国(富山県)有磯の海、葛の名所。

151 そこともしらぬ海の中道

【訳】満潮の時には、しかとそこだとも知られない海の中道である。

○中道=海中に浅瀬が長く続いてできる所、洲。

175 あかしのなみのよるひるの聲

【訳】明石の浦にうち寄せる波は、夜昼の区別もなく、常時、凄い音を立てている。

宗祇法師

76 朽ちのこる松がうらしまなみこえて

【訳】朽ち残る松が浦島の松の上を、とうとう波が越えた。

肖柏法師

17 霜よりしろき高砂の月

【訳】名所高砂の浜の白砂青松に照っている月の美しさは、一面においた霜よりも冴えて見える。

48 いづる日のはるかにほふわだの原

【訳】東天の海原には、はるかに旭日が匂うように輝き、近くの海上には暁闇の蒼ぐろさが漂い残っている。

宗長法師

44 舟よする野嶋がさきの秋の風

【訳】寄航する野嶋が崎に、蕭条と秋風が吹き添って一層しめっぽい

52 ぬれてなく夕浪千どり行きかへり

【訳】夕波の上を飛び交う千鳥が波に鳴き濡れて行きかえりしている。

53 かず〜かへるあまのつり舟

【訳】漁民たちの小さい釣舟が、数多く沖合いから漁をすませて帰ってくる。

54 いかゞすむ浪にちひさきはなれじま

【訳】絶海の波に揉まれている小さい島、そこに数多くの釣舟が帰っていく。

## 7. 松尾芭蕉集引用句一覧

34 波の花と雪もや水の返る花

【訳】寒い冬の海に白い波の花が立っている。もしかしたらあれは、本来水である雪がもとの水に帰り、波の花となって返り咲きしたものか。

72 龍宮も今日の潮路や土用干

【訳】年中最大の今日の潮干には、遠い海底の龍宮城も姿を現して、土用干をしていることだろう。

107 滄海の浪酒臭し今日の月

【訳】青海原から満月が昇ったが、今日の海は何だか酒臭い。だがそれもそのはず、巨大な杯を海という盃洗で洗ったようなものだから。

137 藻にすだく白魚やとらば消えぬべき

【訳】海辺の藻に群がって泳ぐ小さな白魚。清く透きとおった体は、手ですくい上げれば消えてしまいそうなのはかなげな感じだ。

216 冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

【訳】雪の庭に咲く冬牡丹が見事だ。この珍花

を眺めていると、海辺を鳴きわたるあの千鳥も、この世に得がたい雪中の時鳥のように思われる。

217 まだほの暗きうちに浜のかたに出でて  
明けぼのや白魚しろきこと一寸

【訳】曙の浜辺で網に魚を掬い上げてみた、一寸ばかりの小さな白魚。その白さが目にしみる。

227 海辺に日暮して 海暮れて鴨の声ほのかに白し

【訳】冬の海が寒々と暮れて、薄明の彼方に鳴く鴨の音が、どこか仄白い感触を孕んで聞こえてくる。

244 鳴海瀉眺望 船足も休む時あり浜の桃

【訳】浜辺には桃の花が散り満ち、はるか沖合を行く船も、時折動きを止めたような錯覚を誘う

323 鳴海にとまりて 星崎の闇を見よとや啼く千鳥

【訳】星崎の闇夜の景趣を見よとでもいうのか。鳴海瀉の闇の奥で鳴く、あの名所の千鳥は。

327 雪や砂馬より落ちよ酒の酔

【訳】砂浜に雪が積って、これなら落馬しても大丈夫。酒に酔って馬上でぐらぐらしている越人よ、ひとつずんと落ちてみる。酔いもいっぺんにさめようぞ。

395 行く春に和歌の浦にて追ひ付きたり

【訳】今まさに海の彼方に遠ざかろうとする春に、和歌の浦の海辺ぎりぎりの所で追いついたよ。

410 蛸壺やはかなき夢を夏の月

【訳】夏の月が海上を明るく照らしている。海底の蛸壺の中で、蛸は明日の朝には捕らえられることも知らずに、明けやすい夏の短夜のはか

ない夢をむさぼっていることであろう。

438 鳴海眺望 初秋や海も青田の一みどり  
初秋は海やら田やら緑哉鳴海潟や青田に変わる一みどり

【訳】秋に入って海の碧(アオ)もひとしお深く、目の前に波打つ稔(ミ)りの青田の向こうに広がって、見渡す限り緑一色の、まことに清らかな眺めである。

473 皆拝め二見の七五三を年の暮

【訳】まだ年の暮だか、すでに新年に備えて真新しい注連縄が張り渡されたこの神々しい二見が浦の夫婦岩を、さあ、皆で拝めよ。

535 夕方雨やみて、処の何がし舟にて江の中を案内せらるる

夕晴や桜に涼む波の華

【訳】さわやかに晴れ上がった夏の夕晴に、西行ゆかりの桜の下に涼んでいると、潟のさざ波が夕日に輝いて花のように美しく見える。

536 汐越や鶴脛ぬれて海涼し

【訳】外海の潮が象潟の中に注ぎ込んで来る汐越の浅瀬に、鶴が降りて餌をあさっている。その長い脛がしぶきに濡れて、海はいかにも涼しげだ。

537 温海山や吹浦かけて夕涼み

【訳】南に遠く温海山を越え、北ははるかに吹浦の浜へと続く、この雄大な袖の浦の大景を前にして、心ゆくばかりの夕涼みをすることだ。

540 荒海や佐渡に横たふ天の河

【訳】荒波すさぶ夜の日本海。はるかな闇の中に佐渡の島影が黒々と横たわり、その中天高く銀河が横切って、初秋の冴えた夜空に光っている。

542 小鯛挿す柳涼しや海士が家

【訳】海辺で漁師の妻が、捕れたての小鯛を柳の小枝に挿している。柳の緑が、見るからに涼しそう。

○新潟県西頸城郡の海岸一帯の称

544 早稲の香や分け入る右は有磯海

【訳】早稲の香の漂う一面の早稲。その中を分け進む右手はるかに、紺碧の有磯海が開けて見える。

○有磯海=富山湾伏木港西北一帯の海

571 月いづく鐘は沈める海の底

【訳】今宵の月はどこに隠れているのか。雨雲に閉ざされて海は暗く、開けばこの海底には釣鐘が深く沈んだまま、引き上げるすべもないという。

572 月のみか雨に相撲もなかりけり

【訳】名月の夜だというのに、あいにくの雨で月が見られないばかりか、浜で興行されるはずの相撲もお流れという。まことに残念なことだ。

573 古き名の角鹿や恋し秋の月

【訳】咬々たる月の光に照らし出される敦賀の港を眺めていると、いつのまにかこの世ならぬ気分が駆られ、遠い古代の角鹿という名が妙に恋しくなる。

574 寂しさや須磨に勝ちたる浜の秋

【訳】古来あわれ深いものとして知られる須磨の浦の秋よりも、種の浜の秋景色は、さらにも寂しくてあわれ深い。

575 浪の間や小貝にまじる萩の塵

【訳】波の引いた合間に渚を覗くと、波に洗われた萩の花屑がますおの小貝に入り交じって、見紛うばかり美しく散り敷いている。

○敦賀湾の西岸、立石岬中部の海岸。敦賀市色

浜

576 小荻散れますほの小貝小盃

【訳】種の浜辺に咲き乱れる小荻よ。いま渚で小盃に拾い集めたこの美しいますおの小貝の上に、はらはらと散りかかれよ。

577 衣着て小貝拾はん種の月

西行に倣って黒染の衣をまとい、月の清く照らす種の浜辺で、ますおの小貝を拾おうと思う。

591 硯かと拾ふやくぼき石の露

【訳】浜辺でくぼみのある石を見つけた。おや、西行上人の使った硯かと、うれしく拾い上げてみると、くぼみにはきれいな秋の露がたまっている。

## 8. 与謝蕪村集引用句一覧

211 菜の花や鯨もよらず海暮ぬ

【訳】鄙びた漁村は菜の花盛り。鯨のきたという情報もなく、海原は静かに夕暮れてしまった。暮れなずむ菜の花の雌黄も闇の中に吸い込まれていく。

452 薫風やともしたてかねついつくしま

【訳】海上の廻廊を薫風が吹きぬける。燈籠に灯を奉納しようとするが、思うようにいかぬ。○巖島神社でのできごと

517 初汐に追れてのぼる小魚哉

【訳】海が近いらしく磯の香りが漂い、ひたひたと大潮が満ちてくる。その潮に追われるように川上へと上ってゆく小魚の群れがはっきりと見える。

665 茯苓は伏かくれ松露はあらはれぬ

【訳】茯苓は土中深く伏してくれ、海岸の松林に生ずる松露は秋になってまた世にあらわれた。

709 磯ちどり足をぬらして遊びけり

【訳】静かに寄せては返す白波にたわむれながら、二、三羽の千鳥が遊んでいる。波頭を避けて千鳥足で逃げるが、たちまち波に足をとられてしまう。

758 凧(カガシ)に鰓(アギト)吹るゝや鉤の魚

【訳】木枯しが吹きすさぶ海辺の漁家に大きな魚が鉤に吊るされている。頭でっかちの魚のいかつい鰓が木枯しを吸い込んで干乾びてゆく。

## 9. 島崎藤村集引用句一覧

おさよ

潮さみしき荒磯の 巖陰にわれは生れけり

明星

朝の潮と身をなして 流れて海に出でざれば  
などしるらめや明星の 清みて哀しききらめきを

潮の朝のあさみどり 水底深き白石を 星の光に透かし見て 朝の齢を数ふべし

草枕

夕波くらく啼ぐ千鳥 われは千鳥にあらねども  
心の羽をうちふりて さみしきかたに飛べるかな

蘆葉を洗ふ白波の 流れて巖を出づるごと

野のさみしさに堪えかねて 霜と霜との枯草の  
道なき道をふみわけて きたれば寒し冬の海  
朝は海辺の石の上に こしうちかけてふるさとの  
都のかたを望めども おとなふものは溝(けい)ばかり

暮はさみしき荒磯の 潮を染めし砂に伏し 日の  
入るかたをながむれど 湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の 岩に砕けて散れるとき

かなしいかなや冬の日の 潮とともに帰るとき  
誰か波路を望み見て そのふるさとを慕はざる  
誰か潮の行くを見て この人の世を惜まざる  
曆もあらぬ荒磯の 砂地にひとりさまよえば  
みぞれまじりの雨雲の 落ちて潮となりにけり  
遠く湧きくる海の音 慣れてさみしき吾耳に  
怪しやもるゝものの音は まだうらわかき野路  
の鳥  
春きにけらし春よ春 うれしや風に送られて  
きたるらしとや思へばか 梅が香ぞする海の辺  
に  
磯辺に高さ大巖の うへにのぼりてながむれば  
春やきぬらん東雲の 潮の音遠き朝ぼらけ

#### 潮音

わきてながるゝ やほじほの そこにいぎよふ  
うみの琴 しらべもふかし もゝかはの よろ  
づのなみを よびあつめ ときみちくれば う  
らゝかに とほくきよゆる はるのしほのね

#### 春の歌

春はきぬ 春はきぬ 春をよせくる朝潮よ 蘆  
の枯葉を荒い去れ 霞に酔へる雛鶴よ 若きあ  
したの空に飛べ

#### 哀歌

かなしいかなやはたとせの ことばの海のみな  
れ棹 磯にくだくる高潮の うれひの花とちり  
にけり

#### かもめ

波に生れて波に死ぬ 情の海のかもめどり 恋  
の激波たちさわぎ 夢むすぶべきひまもなし  
聞き潮の驚きて 流れて帰るわだつみの 鳥の  
行衛も見えわかぬ 波にうきねのかもめどり

#### 鷺の歌

みるめの草は青くして海の潮の香ににほひ 流  
れ藻の葉はむすぼれて蟹の小舟にこがるゝも

あしたゆふべのさだめなき大竜神の見る夢の  
聞きあらしに驚けば海原とくもかはりつゝ  
とくたちかへれ夏波に友よびかはす浜千鳥 も  
しほやく火はきえはてゝ岩にひそめるかもめど  
り 蟹は苦やに舟は磯いそうちよする波ぎはの  
削りて高さ巖角にしばし身をよす二羽の鷺  
いかずちの火の岩に落ち波間に落ちて消ゆるま  
も 寝みだれ髪が黒雲の風にふかれつそらに飛  
び 葡萄の酒の濃紫いろこそ似たれ荒波の 波  
のみだれて狂ひよるひゞきの高くすさまじや  
げにいかめしものゝふの盾にもいづれ翼をば  
張りひろげたる老鷺のふたゝびみたび羽ばたき  
て 踊れる胸は海潮の湧きつ流れつ鳴るごとく  
力あふれて空高く舞ひたちあがるすがたかな  
あゝさだめなき大空のけしきのとくもかはりゆ  
き 聞きあらしのをさまりて光にかへる海原や  
細くかゝれる彩雲はゆかりの色の濃紫 薄紫の  
うつろひに楽しき園となりけらし  
命を岩につなぎては細くも糸をかけとめて 腋  
羽(和ハ)につゝむ頭をばうちもたげたる若鷺の  
鉤にも似たる爪先の雨にぬれたる岩ばなに か  
たくつきたる一つ羽はそれも名残か老鷺の  
霜ふりかゝる老鷺の一羽をくはへ眺むれば 夏  
の光にてらされて岩根にひゞく高潮の 砕けて  
深き海原の巖角に立つ若鷺は 日影にうつる雲  
さして行くへもしれず飛ぶやかなたへ

#### 夏草

さては秋津の島が根の 南の翼紀の国を 回り  
て進む黒潮の 鳴門に落ちて行くところ 天際  
遠く白き日の 光を泄らす雲裂けて 目のはる  
かなる遠海の 波の踊るを望むとき いかにか  
うつ音高く 君が血潮のさわぐらん  
または名に負ふ歌枕 波に千とせの色映る 明  
石の浦のあさぼらけ 松方代の音に響く 舞子  
の浜のゆふまぐれ もしそれ海の雲落ちて 淡  
路の島の影暗く 狭霧のうちに鳴き通ふ 千鳥  
の声 をきくときは いかにか浦辺にさすらひて  
遠き古を忍ぶらん

げに君がため山々は 雲を停めん浦々は 磯に  
流るゝ白波を 揚げんとすらんよしさらば

終焉の夕

潮は落ちて帰りけり 生命の岸をうつ波の や  
がて夕に回れるを ひきとゞむべきすべもなし

月光五首

さなり巖を撃つ波の 夕の夢を洗ふとも 緑の  
岸に枕して 松眠りなばいかにせむ

新潮

彼あげまきのむかしより 潮の音を聞き慣れて  
磯辺に遊ぶあさゆふべ 海人の船路を慕ひしが  
やがて空しき其夢は 身の生業となりけり

七月夏の海の香の 海藻に匂ふ夕まぐれ 兄も  
ろともに舟浮けて 力をふるう水馴棹 いづれ  
舟出はいさましく 波間に響く櫂の歌

夕潮青き海原に すなどりすべく漕ぎくれば  
巻きては開く波の上の 鷗の夢も冷やかに 浮  
び流るゝ海草の 目にも幽かに見ゆるかな

まなこをあげて落つる日の きらめくかたを眺  
むるに 羽袖うちふる鶺鴒(ハヤブサ)は 彩なす  
雲を舞ひ出でゝ 翅の塵をはらひつゝ 物に  
かゝはる風情なし

飄々として鳥を吹く 風の力もなにかせむ 勢  
竜の行くごとく 羽音を聞けば葛城の そつ彦  
むかし引きならず 真弓の弦の響あり

希望すぐれし鶺鴒よ せめて舟路のしるせばよ  
げにその高き荒玉は 敵に赴く白馬の 白き鬣  
うちふるひ 風を破るにまさるかな

海面見ればかげ動く 深紫の雲の色 はや暮れ  
て行く天際に 行くへや遠き鶺鴒の もろ羽は  
彩にうつろひて 黄金の波にたゞよひぬ

朝夕を刻みてし 天の柱の影暗く 雲の帳もひ  
とたびは 輝きかへる高御座 西に傾く夏の日  
は 遠く光彩を沈めけり

見ようるはしの夜の空 見ようるはしの空の星  
北斗の清き影沍えて 望みをさそう天の花 と

はの宿りも舟人の 光を仰ぐためしかな  
潮を照らす篝火(カガリビ)の きらめくかたを窺  
へば 松の火あかく燃ゆれども 魚行くかげは  
見えわかず 流れは急しふなべりに 触れてか  
つ鳴る夜の浪

二

またゝくひまに風吹きて 舞ひ起つ雲をたとふ  
れば 戦に臨むますらおの あるは鉦うち貝を  
吹き あるは太刀佩き劍執り 弓矢を持つに似  
たりけり

光は離れ星隠れ みそらの花はちりうせぬ 彩  
美しき巻物を 高く舒べたる大空は みるまに  
暗く覆はれて 目にすさまじく変りけり

聞けばはるかに万軍の 鯨波の音色ほがらかに  
野の空高く吹けるごと 聞き潮の音のうち い  
と新しき声すなり

彼あまたゝび海にきて 風吹き起るをり～の  
波の響に慣れしかど かゝる清しき音を立てゝ  
奇しき魔の吹く角かとぞ うたがはるゝは聞か  
ざりき

こゝろせよかしはらからよ な恐れそと叫ぶう  
ち あるはけはしき青山を 凌ぐにまがふ波の  
上 あるは千尋の谷深く 落つるにまがふ瀟の  
影

戦ひ進むものゝふの 劍の霜を払ふごと 溢  
るゝばかり奮ひ立ち潮を撃ちて漕ぎくれば 梁  
はふたりの盾にして 柁は鋭き刃なり

たとへば波は西風の 梢をふるひふることなく  
舟は枯れゆく秋の葉の 枝に離れて散るごとし  
帆檣なれば折れ砕け 篝は海に漂ひぬ

哀しや狂ふ大波の 舟うごかすと見るうちに  
檣をうしなひしはらからに げに消えやすき白  
露の 落ちてはかなくなれるごと 海の藻屑と  
かはりけり

あゝ思のみはやれども 眼の前のおどろきは  
劍となりて胸を刺し 千々に力は砕くとも 怒  
りて高き逆浪は 猛き心を傷ましむ

命運よなにの戯れぞ 人の命は春の夜の 夢と

やげにも夢ならば いとゞ悲しき夢をしも 見  
るにやあらむ海にきて まのあたりなるこの夢  
は

これを思へば胸満ちて 流るゝ涙せきあへず  
今はた櫂をうちふりて 波と戦ふ力なく 死し  
て仆るゝ人のごと 身を舟板に投げ伏しぬ  
一葉にまがふ舟の中 波にまかせて流れつゝ  
声を放ちて泣き入れば げに底ひなきわだつみ  
の上に行衛も定めなき 鷗の身こそ悲しけれ  
時には遠き常闇の 光なき世に流れ落ち 朽ち  
て行くかと疑はれ 時には頼む人もなき 冷た  
き冥府の水底に 沈むかともこそ思はるれ  
あゝあやまちぬよしや身は おろかなりともか  
くてわれ もろく果つべき命かは 照る日や月  
や上にあり 大竜神も心あらば 賤しきわれを  
みそはなせ

かくと心に定めては 波のものかはと励みたち  
闇のかなたを窺ふに 空はさびしき雨となり  
潮にうつる燐の火(不知火)の乱れて燃ゆる影青  
し

彼よるべなき海の上に 活ける力の胸の火を  
わづかに頼む心より 消えてはもゆる闇の夜の  
その静かなる光こそ 漂ふ身にはうれしけれ

危ふきばかりともすれば 波にゆらるゝこの舟  
の 行くへを照らせ燐の火よ 海よりいでゝ海  
を焚く 青きほのほの影の外 道しるべなき今  
の身ぞ

砕かば砕けいざさらば 波うつ櫂はこゝにあり  
たとへ舟路は暗くとも 世に勝つ道は前にあり  
あゝ新潮にうち乗りて 命運を追ふて生きて帰  
らん

#### 落梅

言ふに足らじ貝の葉の たがひに二つ相合ふて  
情の海にたつ波の そこによせてはかへすとも

#### 農夫

さなり波たつ海原の 底はありとも吾恋は そ  
こひ知らずとかこちつゝ 汝になげきしけふま

でを

#### 深夜

またはいざよふ大舟の 海に流れて落つるごと  
または秋鳴く雁がねの ひとりみそらに飛べる  
ごと 身はよるべなくうらぶれて 道なき野辺  
に分けて入り あるは身に添ふ光なく 遠き浦  
辺にさまよひて 知る人もなき花草に 埋れて  
はてんと思ふなり

誰か破れにし古瓶に みどりの酒をかへすべき  
誰か波うつ磯際に 流るゝ砂をとゞむべき さ  
らばこれより亡き人の 家のほとりを尋ね見て  
雲に浮びて古里を のがるゝ時の名残にもせむ

#### 椰子の実

名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実一つ  
故郷の岸を離れて 汝はそも波に幾月 旧の樹  
は生ひや茂れる 枝はなほ影をやなせる われ  
もまた渚を枕 独身の浮寝の旅ぞ 実をとりて  
胸にあつれば 新なり流離の憂 海の日沈む  
を見れば 激り落つ異郷の涙 思ひやる八重の  
潮々 いづれの日にか国に帰らん

#### 海辺の曲

よのわずらひをのがれいでつゝ、ひとりうみべ  
にさまよいくれば、あゝはや、わがむねは、こ  
ひのおおなみ、こゝろにやすきひとゝきもなく、  
くらきうしほのうみよりいでゝ、あふれてきし  
にのぼれるみれば、つめたきかぜの、ゆめをふ  
くとき、とゞめもあへずなみだしながる。

#### 蟹の歌

波うち寄する磯際の 一つ穴に蟹二つ  
鳥は鳥とし並び飛び 蟹は蟹とし棲めるかな  
日毎の宿のいとなみは 乾く間もなき砂の上  
潮引く毎に頭れて 潮満つ毎に隠れけり  
やがて天雲驚きて 落ちて風雨となりぬれば  
流るゝ砂と諸共に 二つの蟹の行衛知らずも

寂寥

岸うつ波は波羅蜜の 海潮音をとどろかし

鳥なき里

磯菜遠近砂の上に 舟干すすかなた夏潮の 鯨  
藻に響く海の音を 山にうらやむ宗助のゆめ

## 10. 与謝野晶子集引用句一覧

佐保姫

鎌倉の由比が浜辺の松もきけ君とわれとは相お  
もふ人

火の鳥

木蓮の散りて干潟の貝めける林の道の夕月夜か  
な

絵巻のために

青海の波しづかなるさまを舞ふ若き心は下に鳴  
れども  
人恋ふる涙と忘れ大海へ引かれ行くべき身かと  
思ひぬ

海の声

真昼日のひかり青きに燃えさかる炎か哀しわが  
若さ燃ゆ  
空の日に浸みかも響く青々と海鳴るあはれ青き  
海鳴る  
白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まず  
ただよふ  
闇冷えぬいやがうへにも砂冷えぬ渚に臥して黒  
き海聴く  
春や白昼日はうらかに額にさす涙ながして海  
あぶく子の  
忍びかに白鳥啼けりあまりにも風ぎはてし海を  
怨するがごと  
われまよふ照る日の海に中ぞらにころねむれ  
る君が乳の辺に

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひながら  
死せ果てよいま

接吻くるわれらがまへに涯もなう海ひらけたり  
神よいつこに

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るい  
ざ唇を君

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ海  
にとられむ

君かりにかのわだつみに思はれて言ひよられな  
ばいかにしたまふ

誰ぞ誰ぞ誰ぞわがこころ鼓つ春の日の更けゆく  
海の琴にあはせて

夕やみの磯に火を焚く海にまよふかなしみども  
よいぎよりて来よ

海の声そらにまよへり春の日のその声のなかに  
白鳥の浮く

春のそら白鳥まへり鶯紅しついでみよ海の  
みどりを

幾千の白羽みだれぬあさ風のみどりの海へ日の  
大ぞらへ

御ひとみは海にむかへり相むかふわれは夢かも  
御ひとみを見る

わが若き双のひとみは八百潮のみどり直吸ひ尚  
ほ飽かず燃ゆ

人とひふものあり海の真蒼なる底にくぐりて魚  
をとりに食む

海の声たえむとしてはまた起る地に人は生れま  
た人を生む

風風ぎぬ松と落葉の木の叢のなかるわが家いざ  
君よ寝む

潮光る南の夏の海走り日を仰げども愁ひ消やら  
ず

わが涙いま自由なれや雲は照り潮ひかれる帆柱  
のかけ

檳榔樹の古樹を想へその葉陰海見て石に似る男  
をも

椰子の実を拾ひつ秋の海黒きなぎさに立ちて日  
にかざし見る

あはれあれかすかに声す拾ひつる椰子のうつろ

の流れ実吹けば  
日向の国の都井の岬の青潮に入りゆく端に独り  
海聴く

独り歌へる  
とき折りに淫歌うたふ八月の燃ゆる浜ゆき燃ゆる海見て  
物ありて追はるゝごとく一人の男きたりぬ海のほとりに  
藻草焚く青きけむりを透きて見ゆ裸体の海女と暮れゆく海と  
日は日なりわがさびしきはわがのなり白昼なぎさの砂山に立つ  
こゝよりは海も見えざる砂山のかげの日向にものおもひぬ  
海に行かばなぐさむべしとひた思ひこがれし海に来は来つれども  
うちよせし浪のかたちの砂の上に残れるあとをゆふべさまよふ  
安房の国海のなぎさの松かげに病みたまふぞとけふもおもひぬ  
山ざくら咲きそめしとや君が病む安房の海辺の松の木の間

別離  
恋ふる子等かなしき旅に出づる日の船にかこみて海鳥の啼く  
山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の国を旅ゆく  
岡を越え真白き春の海辺のみちをはしれりふたつの人車  
ものおほく言はずあちゆきこちらゆきふたりは哀し貝をひろへる  
わがうたふかなしき歌やきこえむゆふべ渚に君も出で来ぬ  
ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかへる彼の岡の上に  
男あり渚に船をつくるへり背にせまりて海のかがやく

春白昼ここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

#### 路上

秋かぜの信濃に居りてあを海の鷗をおもふ寂しきかなや  
浪、浪、浪、沖に居る浪、岸の浪、やよ待てわれも山降りて行かむ  
地よりいま生れしに似る、あを海にむかひて語るふたつ三つの言葉  
またもわれ旅人となり、けふ此処のみさきぞ過ぐ、可愛しきは浪  
あさなあさな午前は曇るならひとて今日も悲しく海をおもへり  
わが渡る曇れる海にうすうすと青海月なしうつれる太陽  
わが渡る五月の海に魚海月、さみしく群れてさざ波もなし  
身揺らば青き岬もゆれやせむ昼の月浮くさびしき海に  
水無月の崎のみなどの午前九時赤き切手を買ふよ旅びと

#### みなかみ

有明の海のにごりに鴨あまたうかべり、船は島原へ入る  
船に乗り海を渡る、なんのたのしみぞ、船に乗り縁もなき海を渡る

#### 溪谷集

(八幡岬に在りて図らず満月を見る)  
ありがたやけふ満つる月としらざりしこの大きな月海にのぼれり  
月ひとつ大わだつみのきはまりにのぼりてぞ居るわが向ふかたに  
(松原の海に向へるかたに美しき長浜があり、駿河湾深く湛へて伊豆は真向ひにやや遙けく遠江見ゆ)

此処ゆ見る伊豆の国辺に二並びならびて国の背

をなせる山  
この浜の浜石まろく深ければわが歩む音わきひ  
びくなり

黒松

(旅の途中の浜にて鶴の遊ぶ姿をみて、馬上なが  
らに朗詠している歌)

潮干潟ささらぐ波の遠ければ鶴おほどかにまひ  
遊ぶなり

うちわたす干潟のくまの岩のうへに真鶴たてり  
波あがる岩に

### 11. 石川啄木集引用句一覧

我を愛する歌

東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹  
とたわむる

頬にふたつ なみだのごはず 一握の砂に示し  
しを忘れず

大海にむかひて一人 七八日 泣きなむすと家  
を出でにき

いたく錆びしピストルも出でぬ 砂山の 砂を  
指もて掘りてありしに

ひと夜さに嵐来りて築きたる この砂山は 何  
の墓ぞも

砂山の砂に腹這ひ 初恋の いたみを遠くおも  
ひ出づる日

砂山の裾によこたはる流木に あたり見まほし  
物言ひてみる

いのちなき砂のなかしさよ さらさらと 握れ  
ば指のあひだより落つ

しつとりと なみだを吸へる砂の玉 なみだは  
重きものにしあるかな

大といふ字を百あまり 砂に書き 死ぬことを  
やめて帰り来れり

忘れがたき人

一

潮かをる北の浜辺の 砂山のかの浜薔薇(ハマス)  
よ 今年も咲けるや

しらなみの寄せて騒げる 函館の大森浜に 思  
ひしことども

巻煙草口にくはへて 浪あらき 磯の夜霧に立  
ちし女よ

しらしらと氷かがやき 千鳥なく 釧路の海の  
冬の月かな

さらさらと氷の屑が 波に鳴る 磯の月夜のゆ  
きかへりかな

波もなき二月の湾に 白塗の 外国船が低く浮  
かべり

二

港町 とろろと鳴きて輪を描く鳶を圧せる 潮  
もぐりかな

ゆゑもなく海が見たくて 海に来ぬ ころろ傷  
みてたへがたき日に

たひらなる海につかれて そむけたる 目をか  
きみだす赤き帯かな

大海の その片隅につらなれる島島の上に 秋  
の風吹く

短歌拾遺 明治40年 22歳

新詩社詠草

磯ゆけば浪きてわれの靴跡を消せりわれはた君  
忘れ行く

藻しほ草

森ゆけば酒息すなる白髪の蝦夷に逢ひぬ月の光  
に

北の海白きなみ寄るあらいその紅うれし浜茄子  
の花

秋の牧さびしきに居て物言はず人をたのまぬ友  
たづねける

秋の夜小暗き辻に飴をうる女声よし月踏みゆけ  
ば

海土の子が憂き目に見やる夕浜の藻をやく煙行  
方かなしも

明治41年 23歳

緑の旗

はるかなる海の彼方の島に似て相見る日なし思  
ひつかれぬ

あかへと血のいろしたる落日の海こそみゆれ砂  
山来れば

山にみて海のかなたの潮騒を聞くとしもなく君  
を思ひぬ

物いはぬつれなし人とだゞふたりあれば日長し  
春ならなくに

月のぼり海しらぐとかがやきて千鳥来啼きぬ夜  
の磯ゆけば

春の雨夜のまどぬらしぞぼふれば君か来るらむ  
鳥屋の鳩なく

頬につたふ涙のごはぬ君を見て我がたましひは  
洪水に浮く

北の磯氷れる砂をふみゆけば千鳥なくなり月落  
つる時

君をみて我は怖れぬ我をみて君はわらひぬその  
夕ぐれに

石破集

大海にうかべる白き水鳥の一羽は死なず幾億年  
も

あな苦しむしろ死なむと我にいふ三人のいつれ  
先に死ぬらむ

わが友は北の浜辺の砂山のはまなすの根に死に  
てありにき

津軽の海はその南北と都とに別れて泣ける父と  
母と子

新詩社詠草其四

青ざめし大いなる顔ただ一つ空にうかべり秋の  
夜の海

音もなくうごきめぐれるかなしみの大渡津海の  
目無しかもめよ

虚白集

幾山川遠き津軽の早潮の瀬戸をへだてて我等か  
つ恋ふ

我が酔はずでに全く死になむと泣くを聞きつつ  
海思ふほど

明治42年 24歳

莫復問(マ外ヲカレ)

秋の風海をわたりて殺倒す小児ちまたに犬と闘  
ふ

いのちの舟

大海中の詩の真珠

浮藻の底にさぐらむと、

風信草の花かをる

吾家の岸をとめて漕ぐ

海幸舟の真帆の如、

いのちの小舟かるやかに、

愛の帆章額に彫り、

鳴る青潮に乗り出でぬ。

遠海面に陽炎の

夕彩はゆる夢の宮、

夏花雲と立つを見て、

そこに、秘めたる天の路

ひらきもやする門あると、

貢する珠、歌の珠、

のせつつ行けば、波の穂と

よろこび深く胸をゆる。

悲哀(カシミ)の世の黒潮に

はてなく浮ぶ椰子の実の

むなしき殻と人云へど、

岸こそ知らね、死の疾風

い捲き起らぬうたの海、

光の窓に凭(ヨ)る神の

瑪瑙(マナ)の蓋の覆らざる

うまし小舟を我は漕ぐかな。

マカロフ提督追悼の詩

嵐も黙せ、暗うつその翼、  
夜の叫びも荒磯の黒潮も、  
潮にみなぎる鬼哭の啾々も  
暫し唸りを鎮めよ。万軍の

二つの影

浪の音の

楽にふけ行く

荒磯辺の夜の砂、

打ふみて我は辿りぬ。

海原にかたぶける

秋の夜の月は円し。

ふと見れば、

まろしき砂に

影ありて際(か)やかに、

わが足の歩みはこべば、

影も亦歩みつつ、

手あぐれば、手さへあげぬ。

とどまれば、

彼もとまりぬ。

見つむれど、言葉なく

ただ我に伴なひ来る。

目をあげて、空見れば、

そこにまた影ぞ一つ。

ああ二つ、

影や何なる。

とする間に、空の影、

夢の如、消えぬ、流れぬ。

海原に月入りて、

地の影も見えずなりぬ。

我はまた

荒磯に一人。

ああ如何に、いつこへと

消えにしや、影の二つは。

そは知らず。ただここに。

消えぬ我、ひとり立つかな。

落櫛

磯回の夕のさまよひに

砂に落ちたる牡蠣の殻

拾うて聞けば、紅の

帆かけていにし曾保船の

ふるき便もこもるとふ

青潮遠きみむなみの

海の鳴る音もひびくとか。

古城の庭に松笠の

土をはらふて耳にせば、

もも年過ぎしその昔の

朱(アケ)の欄(か)めぐらせる

殿の夜深き御簾の中、

千鳥縫ひたる匂ひ衣

行燈の灯にうちかけて、

胸の秘恋泣く姫が

七尺落つる秋髪の

慄ひを吹きし松の風

かすけき声にわたるとか。

ああさは君が玉の胸、

青潮遠き南の

海にもあらず、ももとせの

古き夢にもあらなくに、

などかは、高き彼岸の

うかがひ難き園の如、

消息もなきふた年を

靄のあなたに秘めたるや。

君夕毎にさまよへる

ここの桜の下陰に、

今宵おぼろ夜十六夜の

月にひかれて来て見れば、

なよびやかなる弱肩に

こぼれて匂ひ添へにけむ

落葩よ、地に布きて、

夢の如くもほの白き

中にかがやく波の形、一

黄金の蒔絵あざやかに

ああこれ君が落櫛よ。

わななきごころ目をとちて、

ひろうて耳にあてぬれど、

君が海なる花潮の  
響きもきかず、黒髪の  
見せぬゆらぎに秘め玉ふ  
み心さへもえも知れぬ。  
まどひて胸にかき抱き  
泣けば、百の齒皆生きて、  
何のうらみの蛇や、  
ああふたとせのわびしらに  
なさけの火蓋もえ〜て  
痩せにし胸を捲きしむる、

たはぶれ  
答へもなきに、寄せては  
氷れる岩に砕けて、  
帯とまくなる海や、  
声白き波々の  
穂がしら枯葉をかざすさまも  
寒けき荒磯の小犬よ。  
津軽の瀬戸の大船  
函館がよひ行く帆の  
帆足を遅み、波間、  
海の鳥羽氷る  
冬の日後なり。ここは日ざし  
こほりて散りくる西海。  
巖間の沙の冷たさ、  
散らばふ枯藻ふみつつ、  
小犬よ高く吠えぬ、  
おごそかに絶間なく、  
大洋広みの胸をしぼる  
叫びに孤し答へて。  
吠えては、波のさしひき、  
しぶきそのまま凍りて  
(えならぬけしき、) 閃ら、  
日に照らふ珠ちらす  
渚辺、波の穂追ひつ、追はれ、  
足痕消されつ、印しつ。  
酒荷つむらむ能代の  
三帆檣よ、はるかに、  
(いのちの重みのせて影くろき凶帆船、)

沖をば走りぬ。——それも見じな  
波追ふ小犬の寒けさ。  
出づる日むかへ走せつつ、  
入日を追ひて走せつつ  
この世さびしき渚、  
我も亦人なれば、  
興じて見にけれ、波と犬の  
たはぶれ、人なき荒磯辺。  
巖にくだけて珠ちる  
波の穂、声も黒みて、  
冬の日いつか来れぬ。  
犬の声後にきく  
氷る夜闇がり、磯回はづれ、  
いつしか弦月てらせり。

ハコダテの歌

辻

今わが立つは、海を見る広き巷の  
船多き海も眺めず、  
今五月、霽れたる一日、  
日の光曇らず、海に  
牙鳴らす浪もなけれど、

蟹に

潮満ちくれば穴に入り、  
潮落ちゆけば這ひいでて、  
ひねもす横にあゆむなる  
東の海の砂浜の  
かしこき蟹よ、今此処を  
運命の浪にさらはれて  
心の籠の燈明の  
汝が眼よりも小やかに  
減えみ明るみすなる子の、  
行方も知らに、草臥れて  
辿りゆくとは、知るや、知らずや。

流木

わだつみの青き鼓は

とどろけり、去年も今年も。  
しらしらと明けゆく朝も  
曇りたる夕も、恒に  
かはるなきひびきをあげて、  
たうたふと砕くる浪の  
浪頭日も夜も白し。  
白砂の長き渚は  
弓のごと海を抱けり。  
ちりしける枯藻のなかに  
足痕も印さず。はたや、  
沖をゆく帆も見の日なし。  
時ありて嵐は来り、  
渚辺のところどころに  
砂山を築きてぞ去る。  
あはれ、その渚の上に  
横たはる大き流木、  
さしわたし七尺ばかり、  
砂山に根をうち上げて、  
枝もなき長き幹をば  
その半ば海に入れたり。  
海鳥は時にかがなき、  
その上に翼やすめぬ。  
われ来り、この流木の  
かたはらに、小犬のごとく  
寝ころびて、青き鼓の  
とどろきを直にぞ開ける。  
身じろがず、荒磯の砂の  
つよき香を直にぞ吸へる。  
あなあはれ、覚むる期もなく。

## 参考資料2 港湾で景観要素抽出に活用した詩歌

港湾で景観要素抽出に活用した詩歌一覧を以下に整理した。

### 1. 時代 I (~1100) で引用した詩歌

(新編国歌大観編集委員会 (2003) : 新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver. 2, 角川書店)

#### 二 1 万葉

1166 まとかたの みなとのすどり なみた  
てや つまよびたてて へにちかづく  
も

#### 二 1 万葉

3173 みなとみに みちくるしほの いやま  
しに こひはあまれど わすらえぬか  
も

#### 二 4 古六帖

1675 にほ鳥のさわがすかたのいけ見ればみ  
なととのみぞたつべかりける

#### 四 29 為忠後

211 おもはずにときのとりこそきなくなれ  
よをうみはつるみなといりえに

#### 三 125 山家

552 やせわたるみなとのかぜに月ふけてし  
ほひるかたに千鳥なくなり

#### 二 4 古六帖

1849 人しれぬこひのくるしさもかり舟みな  
と入えにたづぞ鳴くなる

#### 二 1 万葉

1811 とりがなく あづまのくにに いにし  
へに ありけることと いままでに …

#### 二 1 万葉

4042 みなとかぜ さむくふくらし なごの  
えに つまよびかはし たづさはにな…

#### 三 13 忠岑

66 とめふれどみなとたちいでぬしらさぎの  
ぬれぎぬをだにきせんとぞおもふ

#### 二 4 古六帖

1967 みなと風いたくふくらしなごのえにつ  
まよびかはしたづさわぐみゆ

#### 七 14 能宣

321 さしてゆくみなとをとほみいかだしのい  
まいくたれかうらやどりせん

#### 五 292 綺語抄

80 みなと風さむくふくらしなごのえにつま  
よびかはしたづさはになく

#### 三 106 散木

678 みよのしのみなとなへつるしるしにはつ  
みもやこよひのこらざるらん

#### 十 180 五代枕

997 みなとかぜさむくふくらしなごの江のつ  
まよびかはしたづさはになく

#### 二 1 万葉

355 あしへには たづがねなきて みなとか  
ぜ さむくふくらむ つをのさきはも

#### 二 1 万葉

2474 みなとに さねばふこすげ ぬすまは  
ず きみにこひつつ ありかてぬかも

#### 三 1 人丸

256 ながれあふみなとの水のむまければか  
たへもしほはあまきなりけり

#### 一 1 古今

293 もみちばのながれてとまるみなとには  
紅深き浪や立つらむ

#### 二 3 新撰和

114 紅葉ばのながれてとまるみなとにはく  
れなみふかき浪やたつらん

#### 二 4 古六帖

204 紅葉ばの流れてよどむみなとをぞくれ  
ゆく秋のとまりとは見る

#### 七 45 六条宣

27 みなとがはなさへかくるるさみだれに  
おもひわづらふわたしもりかな

#### 二 12 月詣

279 みなと川時雨せざりしうきねには波の

- みさすが袖はぬれしか くにか きみがふねはて くさむすび  
 二 13 玄玉 …
- 402 みなと河おなじうきねの浪の音もけさ 三 1 人丸  
 立ちかはる秋のはつ風 291 みなとさる舟こそけさはあやしけれ日  
 二 1 万葉 たけて風の吹きてかへるに
- 2472 みなとあしに まじれるくさの しり 一 3 拾遺集  
 くさの ひとみなしりぬ わがしたも… 638 みなといづるあまのを舟のいかりなは  
 くるしき物とこひをしりぬる
- 二 1 万葉 三 89 相模  
 4017 ふちなみは さきてちりにき うのは 3 うきしまにみなとをいかではなれけん  
 なは いまぞさかりと あしひきの … のりかよひけるふねのたよりに
- 三 9 素性 七 45 六条宣  
 50 もみちばのながれてとまるみなとには 90 ひばかりはみなとのせとにたててけり  
 くれなゐふかきなみぞたちける はやこぎいでよとさのともぶね
- 三 19 貫之 五 271 歌仙落  
 238 もみちばのながるる時は立田河みなと 60 湊にはよふね漕出づるおひ風に鹿のこ  
 よりこそ秋は行くらめ ぬさへせと渡るなり
- 二 4 古六帖 五 171 文治合  
 4061 もみちばのながるるときはたつた川み 60 月さゆるみなとをいでぬともぶねはこ  
 などよりこそ秋はゆくらめ ほりをいでぬこちこそすれ
- 四 28 為忠初 五 171 文治合  
 190 ひとしれずみなといりえのあやめ草み 66 みなとにもおきにもうつる月のふねす  
 ちひるしほやけふはひくらん ぐとやいはむとまるとやいはむ
- 二 10 続詞花 一 7 千載  
 76 芳野河みなとのなみによる花やあをね 315 みなと川夜ふねこぎいづるおひかぜに  
 が峰にきゆる白雲 鹿のこぬさへせとわたるなり
- 七 46 出観 三 125 山家  
 809 あまつほしまがふなみまのいさりびは 1486 みなと川とまにゆきふく友舟はむやひ  
 みなとのあしにくもがくれしぬ つつこそよをあかしけれ
- 五 164 右大安 五 431 松浦宮  
 4 判 もみち葉のながれてとまるみなと 58 しらざりしもろこし舟のみなとよりう  
 にはくれなゐふかき浪やたつらん きたる恋に身をくだきつつ
- 五 348 日本紀 十 212 源氏注  
 120 瀬難度能みなとの 于之&#35026;能矩 42 みなといりのたなしを船こぎかへり  
 娜利うしほのくんだり 于那俱娜梨うな おなじ人をや恋しと思ひし  
 くだり 于之廬母俱例尼うしろもくれ 二 1 万葉  
 に 飢岐底舸&#24254;舸武おきてかゆ 2755 みなといりの あしわけをぶね さは  
 かむ りおほみ あがおもふきみに あはぬ
- 二 1 万葉 …  
 1173 あふみのうみ みなとはやそち いづ

- 二 1 万葉  
3011 みなといりの あしわけをぶね さは  
りおほみ いまこむわれを よどむと  
…
- 二 1 万葉  
3012 みなといりに あしわけをぶね さは  
りおほみ きみにあはずて としぞへ  
…
- 三 1 人丸  
222 みなといりのあしわけを舟さはりおほ  
みこひしき人にあはぬころかな  
一 3' 拾遺抄  
272 みなといりのあしわけをぶねさはりお  
ほみ恋しき人にあはぬころかな  
一 3 拾遺集  
853 みなといりの葦わけを舟さはりおほみ  
わが思ふ人にあはぬころかな  
三 116 林葉  
277 五月雨にたななし小舟湊いれば棹にぞさ  
はる蘆のは末も  
十 212 源氏注  
361 みなといりのあしわけをぶねさはりおほ  
みこひしき人にあはぬころかな  
十 212 源氏注  
442 みなといりのあしわけをぶねさはりお  
ほみおなじ人にやこひむと思ひし  
二 1 万葉  
1406 ことさけば おきゆさけなむ みなと  
より へつかふとくに さくべきものか  
三 24 中務  
53 たきのいとはみなとちつらんよしのや  
まゆきのたかさにおとをかへつつ  
七 10 中務☆  
68 たきのいともみなとちつらんよしのや  
ま雪のたかさにおとをかへつつ  
三 106 散木  
1316 いさやまたみなとのさきの心ちして思  
ひたたれぬなげきをぞする  
四 5 実国  
59 とまりするみなとのかぜも気あしきを  
なみたかさごの浦はいかにぞ  
七 55 頼輔  
126 すみなれぬわたりなれどもみなとがは  
こぎはなるればそでぞぬれけり  
一 7 千載  
312 みなと川うきねのとこにきこゆなりい  
く田のおくのさをしかのこゑ  
七 58 中御門  
38 みくさおひいなくしげきみなとだに  
なになりそめに月やどるらん  
四 9 長方  
87 とまりする湊に影のやどる夜は月も旅  
ねの心ちこそすれ  
四 9 長方  
111 湊風さむく吹くらしたづのなくなごの  
入江につららみにけり  
二 1 万葉  
1292 みなとの あしのうらばを たれかた  
をりし わがせこが ふるてをみむと…  
二 1 万葉  
3464 みなとの あしがなかなる たまこす  
げ かりこわがせこ とこのへだしに  
三 5 小町  
5 みるめかるあまの行きかふみなとちに  
なこそその関も我はすゑぬを  
五 5 寛平中  
18 年毎の紅葉ばながす立田川みなとや秋  
のとまりなるらん  
一 1 古今  
311 年ごとにもみちばながす竜田河みなと  
や秋のとまりなるらむ  
五 254 紀寛宴  
42 みつのあのそこにしなへるはなのいろ  
やすめらみことのみなとなりけん  
二 4 古六帖  
1660 みなといりはなみさわがしみあしまよ  
ふえにこそ人を思ふべらなれ  
二 4 古六帖

1969 もみちばのながれてとまるみなとには  
くれなゐふかきなみぞたちける

二 4 古六帖  
2524 みなとなるあしのかばをたれかをり  
てわがせこがふる袖をみんとてわれぞ…

三 36 小大君  
145 みるめかるあまのゆききのみなとちに  
なこそせきもわれはすゑぬに

四 27 永久百  
590 涙川みなとにうかぶうき草のうきねと  
どめむかたのなきかな

十 180 五代枕  
1257 としごとにもみちばながすたつたがは  
みなとやあきのとまりなるらん

三 125 山家  
220 ふねすゑしみなとのあしまさをたてて  
心ゆくらんさみだれのころ

二 1 万葉  
1292 水門 葦末葉 誰手折 吾背子 振手  
見 我手折

二 1 万葉  
1811 鶏鳴 吾妻乃国尔 古昔尔 有家留事  
登 至今 不絶言来 勝壮鹿乃 真間  
…

## 2. 時代Ⅱ (1100~1600) で引用した詩歌

(新編国歌大観編集委員会 (2003) : 新編国歌  
大観 CD-ROM 版 Ver. 2, 角川書店)

五 197 千五百  
1901 ありあけの月のでしほにみなとぶね  
いまやいるらんちどりたつなり

二 14 新六帖  
231 たづのなくゆふしほさゐのみなとす  
にもかりをぶねもいまやいるらし

二 14 新六帖  
1161 みなと川わかすのさぎはこころせよ  
なぎさのふねもちかづきにけり

二 16 夫木  
12293 たづのなくゆふしほさゐのみなとす

にもかり小舟もいまやいるらん

一 16 続後拾  
465 あり明の月の出しほの湊舟いまか入  
るらむ千鳥鳴くなり

八 10 草根  
10086 しほさゐにかもめ鳴きたつみなと舟  
月にぞならふあけぬ此夜は

六 31 題林愚  
5490 有明の月のでしほのみなと舟今か入  
るらんちどりなくなり

六 31 題林愚  
5493 あまを舟みなとさしこす夕しほのみ  
ちくる末に千鳥鳴くなり

八 17 松下  
1457 湊田にこゑせぬほどはもがみ川ただ  
いな舟ぞわたる雁がね

五 197 千五百  
2036 さ夜ちどりみなとふきこすしほかせ  
にうらよりほかのともさそふなり

三 131 拾玉  
3127 みなと河ひとりうきねの友千鳥しば  
しも浪にたつ空ぞなき

二 15 万代  
1429 みなといるおきつしほかせきむきよ  
はかはしまがくれちどりなくなり

二 15 万代  
1435 ありあけのつきのでしほのみなとぶ  
ねいまかいるらしちどりなくなり

六 13 新和歌  
325 みなと風さむき夕べのしほさゐにい  
はがはのぼる鴨のむらどり

十 75 宗尊合  
217 風さゆる湊入えのみがくれにうきて  
波よるあぢのむら鳥

七 94 瓊玉  
294 風むかふ湊は浪の立帰りおなじ入江  
に鳴く千鳥かな

六 14' 東六抜  
412 高砂のみなともふかく満つ汐に川上

さして衛鳴くなり

七 95 柳葉

759 みなと川夕しほこして吹くかぜのさ  
むけくもあるか千どり啼くなり

七 106 資平

83 みなとかぜ月ふきおくる浪のうへに  
むれてとわたるちどりなくなり

七 119 茂重

138 有明の月かげうすくあくるよのみな  
とのなみにちどりなくなり

五 319 和歌口

72 さ夜ちどりみなとふきこすしほかぜ  
に浦よりほかの友したふなり

四 37 嘉元百

556 難波がたゆふなみ千どり声たててみ  
なと入江に浦風ぞ吹く

十 181 歌枕名

7464 いみづ河 みなとのすどり あさなぎ  
に かにあさりし しほみてば つ…

十 181 歌枕名

8614 円方のみなとのすどり波たてばつま  
よびたててへにちかづくも

十 181 歌枕名

9587 水鳥をさわがすたかの池なればみな  
とにのみぞ波も立ちける

二 16 夫木

6898 みなと河霜ふきまよふ山おろしには  
ねうちしほりなくちどりかな

二 16 夫木

11884 まとかたのみなとのすどринаみたて  
ばつまよびたててへにちかづくも

二 16 夫木

11885 人しれぬねをこそなかめまとかたの  
みなとのすどринаみにぬれつつ

七 123 伏見院

1532 よせかへりゆふなみあらきはまかぜ  
にみなとのちどりたちさわぎなく

四 38 文保百

2263 難波がたしほひのかたやさむからし

みなとにかへる友千どりかな

一 18 新千載

670 しほかぜに夕波たかく声たててみな  
とはるかに千鳥鳴くなり

一 18 新千載

672 難波がたしほひのかたや寒からしみ  
なとにかへる友千鳥かな

一 22 新葉

444 みなと入のしほやくしけんおく霜の  
又露となる蘆のむらだち

八 6 慕風

17 みなと川水もおちあひの浪まとてむ  
べもともなふ友ちどりかな

八 5 為富

377 もるを田もはや秋風は満つしほに湊  
のたづの声ぞちかづく

八 10 草根

620 ひらの海や湊の春の荒小田に夕浪こ  
えて雁ぞむれゐる

八 10 草根

5529 湊川なみさかのぼる満しほに声のみ  
おちてゆく千鳥かな

八 10 草根

5636 いかかねんこほる浜名の湊田に海わ  
たりきぬくらみかりがね

六 31 題林愚

5461 しほ風に夕波たかく声たててみなと  
はるかに千鳥なくなり

八 23 卑懐

253 霧まよひ夕しほむかふ湊田に雁がね  
さわぐ浦かぜぞふく

八 21 宗祇

165 みなと川夕しほみてば山の端にいた  
るもさわぐあぢのむら鳥

八 17 松下

2887 湊川雲しく浪の郭公なはずはおなじ  
鳩の通路

八 17 松下

3056 風向ふ湊入江の村雨にふかれて帰る

鷺の一つれ

八 32 春夢

463 はるかなる夕浪千どり湊入の月のみ  
ふねにかぶ声かな

八 35 雪玉

4173 みなとりに千鳥なくなりあかつき  
のうしほもいまや遠のうら風

一 21 新続古

518 みなと風夕塩はやき松かげの入江の  
浪におつる雁がね

二 16 夫木

10344 みなと風いたくな吹きそしなが鳥み  
な野の海に舟とむるまで

八 10 草根

1916 雁ぞ鳴く有明の空に月の舟さしかへ  
る春の湊をしへよ

八 10 草根

4538 あまのかる早田のいな湊舟こぎわ  
かるるやわたる雁がね

八 10 草根

5527 湊いでのかいのしづくにぬれぬれず  
舟につれゆくむら千鳥かな

八 23 卑懐

410 舟出する暁ふかき湊江に友よびそへ  
てたつ千どりかな

八 21 宗祇

16 ゆらのとやみなとこぎ出づる梶の音  
もはるかに霞む雁のひとつら

八 17 松下

2522 湊田やあまのかるてふ稲舟をほなみ  
にみればわたる雁金

八 17 松下

2768 よる舟の棹とりなほす音深けて湊の  
月に千鳥なくなり

八 28 柏玉

1144 ともしの人をや頼む湊入の小舟に  
つれて千鳥なくなり

八 28 柏玉

2360 友なしと人をやたのむ湊入の小舟に

つれて千鳥なくなり

八 35 雪玉

4764 友なしと人をやたのむ湊入のをぶね  
につれてちどり鳴くなり

二 16 夫木

12113 みなと川こぎいでてきけばほととぎ  
すわだのみさきの松に鳴くなり

八 17 松下

693 湊田やあまのかるてふいな舟をほな  
みにみればわたる雁がね

五 215 冬題合

51 みなと河しも吹きまよふ山おろしに  
はねうちしをれ鳴く千鳥かな

四 15 明日香

603 きりはるる月はあかしのみなとかぜ  
さむくふくらしちどりしばなく

七 88 信実

104 みなといる沖つしほかぜ寒きよにか  
はしまがくれ千どり鳴くなり

四 35 宝治百

2777 人しれぬ音をこそなかめまとかたの  
湊のす鳥なみにぬれつつ

一 10 続後撰

501 みなとかぜさむくふくらしつづのな  
くなごの入江につららみにけり

六 10 秋風集

1147 みなと風さむく吹くらしなごの江に  
つまごひかはしたづさわぐなり

六 12 別兼作

8 みなと風さむくふくらしなごのらに  
つまどひかはしたづさわぐなり

十 123 新三撰

57 しながどりみなのしば山雲きえてみ  
なとにきよき秋のよの月

十 123 新三撰

318 さ夜千鳥みなと吹きこすしほ風にう  
らよりをちの友さそふなり

一 11 続古今

1635 みなとかぜさむくふくらしなごのえ

につまよびかはしたづさはになく

四 37 嘉元百

655 みなと風吹きもたゆまずさゆる夜の  
なごの入江に千鳥鳴くなり

四 37 嘉元百

1454 浦かぜにみなと江こほるよもすがら  
なくや千鳥の声ぞさむけき

十 181 歌枕名

4437 みなといりのおきつしほ風さむき夜  
に川島がくれ千どりなくなり

十 181 歌枕名

7606 みなと風さむくふくらしなごの江に  
つまよびかはしたづさはになく

十 181 歌枕名

7609 みなと風さむく吹くらしたづのなく  
なごの入江につららみにけり

六 19 続門葉

479 なごのえのみなどの風やさむからし  
霜夜のつるもつまよばふなり

二 16 夫木

6784 みなといるおきつしほ風さむき夜は  
かはしまがくれちどりなくなり

二 16 夫木

6798 風おろすふじのかはとのさよちどり  
みなとにむかふこゑのあけぼの

二 16 夫木

6799 さえわたる雪げはふじのかは千鳥み  
などちかしとらみてぞなく

二 16 夫木

7740 みなと風さむく吹くらしなごのえに  
つまよびかはしたづさわぐなり

二 16 夫木

10860 鳩鳥のさわぐ姿の池なればみなとと  
のみぞたつべかりける

二 16 夫木

11283 みなと河夕しほみちて風寒みふるき  
みやこに千鳥啼くなり

二 16 夫木

12701 いさやまたみなとの鷺の心ちして思

ひたたれぬなげきをぞする

一 15 続千載

632 友さそふみなとの千鳥声すみて氷り  
にさゆる明がたの月

七 127 藤谷

185 風おろすふじの川せのさよちどりみ  
なとにむかふ声の明ぼの

十 39 頓阿B

62 湊かぜさむく吹くらしあかし方とわ  
たる千どり声まさるなり

十 174 隠岐高

61 みなと河うらはよそなるしほかぜの  
吹きこすたびに千鳥なくなり

六 29 菊葉集

367 湊田におりたつ田子のみしまつよも  
すそはぬれて取る早苗かな

四 43 為尹千

459 こと草もみなとりまぜていとど猶わけ  
こそかぬれ野べの葛まき

四 43 為尹千

535 みなと田の一ほもいまはのこらぬに霜  
おきみだすあしの夕風

八 6 慕風

270 うきねするみなとの浪のあはれにも又  
さびしくもなく千どりかな

十 115 後崇合

60 判 友さそふみなとの千鳥声すみて氷  
にさゆるあけがたの月

八 10 草根

4445 しなが鳥ふすさへゐなの湊田に又た  
ちあかすさをしかの声

八 10 草根

5530 むらねする鳥も生田の湊川おなじ淵  
せになく千鳥かな

八 10 草根

5531 千鳥なくみなとのあまはたがために  
ぬるるならひのなき袂かな

八 10 草根

5533 みなと川わたる千鳥も今朝みれば涙

- やこほる鳴くこゑもせず  
八 10 草根  
9804 秋田もるあまのかりほの湊江にしほ  
みちくらしたづぞ鳴くなる
- 六 31 題林愚  
5465 うら風にみなと江こほるよもすがら  
鳴くや千鳥の声ぞさむけき
- 六 31 題林愚  
5473 さよ千鳥みなと吹きこすしほ風にう  
らより外の友さそふなり
- 八 17 松下  
3170 湊田や冬の日よりとまふ鶴におくて  
かる男もうたふ声ごゑ
- 八 28 柏玉  
1137 妻恋もいたづらならば湊川瀬に入ら  
ねども千どり鳴くらし
- 八 35 雪玉  
4733 からでみよ小鳥みづとりみなれ行く  
みなとの田面秋はすぐとも
- 八 35 雪玉  
4765 湊こす夕なみちどりこととはむ世を  
うみべとやなれも鳴くらん
- 六 9 秋風抄  
158 湊入りの蘆まもわけぬ小夜千鳥なに  
にさはりの妻をこふらん
- 六 10 秋風集  
1133 みなとりのあしまもわけぬさよ千  
鳥なににさはりのつまをこふらむ
- 七 96 中書王  
223 たちまよふみなとのきりのあけがた  
に松ばら見えて月ぞのこれる
- 十 181 歌枕名  
9665 蘆辺にはたづがね啼きてみなと風さ  
むく吹くらし津をの崎はも
- 六 30 新三井  
341 みなとこす浦風さむみ松かげの入海  
遠く千鳥鳴くなり
- 一 19 新拾遺  
606 湊江やあしのかれはに風さえて霜夜  
の月に千鳥なくなり
- 一 22 新葉  
61 みなと江の蘆のくち葉の霜のうへに  
むれみし雁もたち帰るなり
- 八 1 雅世  
460 あしの葉もかれてみだるる白すげの  
湊を寒み千鳥しばなく
- 六 31 題林愚  
5458 みなと江やあしのかれはに風さえて  
霜よの月にちどりなくなり
- 六 31 題林愚  
5486 みなとりのあしまをわけぬさよ千  
鳥なににさはりの妻を恋ふらん
- 八 17 松下  
1075 玉章をたれにこしぢの湊川入江の里  
にかよふ雁金
- 八 35 雪玉  
5382 みなとりの塩風さむみあしのはに  
かくれもはてず立つちどりかな
- 四 34 洞院百  
462 波さわぐ湊の海やにごるらんたかせ  
のよどのさみだれの比
- 三 132 壬二  
1551 わたつうみに月も出でたる湊河あく  
るもまつな春の舟人
- 七 81 如願  
333 むやひするふなびといかにさわぐら  
むみなとあらしのさむきよはかな
- 二 14 新六帖  
964 こぎまはるみなとの舟のこひはをに  
ひれのさばきのなみたかくみゆ
- 二 14 新六帖  
1214 かぜあらきみなとのおきのいちのす  
にちがふをぶねははやいりにけり
- 二 14 新六帖  
1216 みなと江にかしふりたつとまり舟  
ながるるまでに塩はみちきぬ
- 四 35 宝治百  
2788 浪たかき湊にさわぐうき舟のよるか

たもなき我がこころかな

七 95 柳葉

23 みなとこそゆふ波すずしいせの海の  
をのふるえの秋のはつかぜ

五 407 都路

17 湊より入海遠くさすしほに棹をまか  
せてのぼるあま舟

十 8 安五百

397 身をなげくなみだのすゑのみなと舟  
さのみなどよをうみわたらん

七 112 蓮愉

515 みなと山なみちはなれぬよこ雲にう  
かみいでたるあまのつり舟

七 113 隣女

2476 みなとより入うみとほくさすしほに  
さををまかせてのぼるあまぶね

十 83 伊勢合

119 よそにのみ人をばみつのみなとぶね  
うきてこがるるこひぞくるしき

一 13 新後撰

357 雲はらふなごの入江のしほ風にみな  
とをかけてすめる月影

四 37 嘉元百

986 ひくるればおなじとまりのみなと舟  
あくる浪路にこぎわかるなり

四 37 嘉元百

2085 ゆふさればしほさしのぼるみなと川  
とわたる舟もいまぞ入らし

二 16 夫木

13170 こぎまはるみなとのふねのこひはぜ  
にひれのさばきの浪たかくみゆ

二 16 夫木

13200 夕なぎのみなとかたかけみつしほに  
すずきつるふねさしわたす見ゆ

二 16 夫木

15813 みなとえにかちふりたつとまり船  
ながるるまでにしほはみちきぬ

四 38 文保百

963 みなと江やとま引きおほふ船のうへ

にしほにたまらぬ雪をみるかな

四 38 文保百

1092 みなと舟浪のおとにも心をば都にか  
けてうきねをぞする

十 154 龜七百

312 あかしても出でこそやらねみなと舟  
浪間の月のよはのうきねに

十 154 龜七百

629 こぎとむるみなとの舟の今朝も又し  
らぬとまりにかかる夕なみ

一 16 続後拾

572 船とむる湊の浪のよるの夢うきねな  
ればやさだかにもなき

六 8' 現六抜

149 こぎまはるみなとの舟のこひはせに  
ひれのさばきの浪たかくみゆ

十 160 建住吉

99 けふもはやかぜのとがなるみなとぶ  
ねあすのしほせやなほさはりなき

一 18 新千載

1195 いかにせん夕波あるる湊舟おもひよ  
るべきたよりだになし

四 22 草庵

1307 一夜だに明しもはてず湊船月の出し  
ほに漕ぎやわかれん

一 19 新拾遺

823 漕出でし湊へだててわたの原かさな  
る雲にかかるしら波

十 2 耕雲千

784 浪あらきみなとをさしてこぐ舟の心  
はよれどはてぞあやふき

十 2 耕雲千

859 浪あらきみなとの舟のうき枕いかに  
ぬる夜も夢はむすばず

十 3 宗良千

787 波におろすみなどの船のいかりなは  
くるしやつひに身をしづめつも

一 20 新後拾

914 うら風のみなとによわるあけがたも

塩にまかせてふなでをぞする

七 140 李花

44 はるばるとあさうつしほのみなと舟  
こぎ出づるかたは猶かすみつつ

七 140 李花

686 湊江やよせてはかへる浪のまにさし  
おくれじといそぐ舟人

七 140 李花

713 暮行けばうらこぐ舟の湊入に夕波た  
ててしほかせぞ吹く

七 144 経氏

117 とまりぶね波はおとなきみなとえに  
なほゆめさそふをぎの上風

八 10 草根

1940 海土もうし湊の小舟行く春をこぎも  
かへさぬ浪にかすみて

八 10 草根

9204 しながどりふしうきあなのみなと舟  
あまのかるもの浪の枕は

八 10 草根

10080 大舟のともかちおろせみなと風浪あ  
らからで追手ふくなり

八 10 草根

10102 みなと舟うきねの夢に入るなみのか  
へるやぬるる枕なるらん

八 10 草根

10117 みなと風おろすいかりやかろからむ  
枕の浪に舟ぞたゆたふ

八 10 草根

10124 興かけて夕なみくらし湊風舟ごとに  
たく煙みだれて

六 31 題林愚

7723 波たかきみなとにさわぐうき舟のよ  
るかたもなきわが心かな

六 31 題林愚

8329 いかがせん夕なみあるるみなと舟お  
もひよるべきたよりだになし

八 17 松下

395 したふとも春ゆくかたのみなと舟こ

ぎはなれなば跡の白浪

八 17 松下

1695 おもひたつもろこし人や湊舟よせて  
枕にさわぐ浪かな

八 27 碧玉

964 さしすてし夕しほかせのみなと舟行  
末しらぬうらみにぞふる

四 34 洞院百

853 さゆる夜の湊の舟のあし分けに氷を  
そへてみちやたえなむ

四 20 隆祐

78 みなといりの月の御舟もさはりおほ  
み蘆間の波にかすみ比かな

二 14 新六帖

1165 みなと入はなぎさづたひにこぎまは  
せとあさもあらば舟もこそいれ

六 8 現存六

159 あさじものかれはのあしのひまをあ  
らみやすくやふねのみなといらん

六 10 秋風集

1033 舟とめてみなともわかずまつかぜの  
なみよせかくるあまのはしだて

四 37 嘉元百

1585 いでやらぬみなとの船のいぎよひに  
あしべのさ浪まづさわぐなり

五 244 南朝合

922 次 歌 湊舟うきねの波もさびしきは  
おなじみ山の松風の声

八 10 草根

1067 みなと舟おひてなぎさのうきねより  
猶いそがるる山桜かな

八 10 草根

10071 みなと舟みつしほたかく磯こえきう  
きねにもあらぬ松の下ぶし

八 10 草根

10079 浪にさへ夜舟ただよふみなと川夢を  
しみばと松風ぞふく

十 193 佚穂久

31 ながめやるころも海もはてぞなき

みなとのほかにすめる月かげ

四 42 仙五十

218 秋の夜のうきねに夢をみなと河さむ  
る枕に月ぞながるる

五 197 千五百

1754 みなと河なみのまくらにわきかぬる  
しづくはとまのしぐれにぞしる

三 131 拾玉

2519 わたし守なからましかばみなと川く  
るしき海もこれよとぞしる

四 34 洞院百

1717 はるかなる湊のおきのながれずにし  
ほ風かけてとまるしら波

五 220 石清水

12 したさわぐ高瀬の川の浪間より霞む  
や袖のみなとなるらん

七 81 如願

582 みなと川いくしほあひにおくあみの  
ひとめをつつむこひもするかな

二 14 新六帖

643 夕なぎにしほみちらしみなと田の  
ほなみにつたふ秋のうらかぜ

二 14 新六帖

1085 この川はみなとやちかく成りぬらん  
ひろせをこえてしほみちにけり

四 35 宝治百

2764 風ふけばみなとに波のさわぎつつた  
ちみに袖をぬらす比かな

四 35 宝治百

2776 身を秋の袖に波たつみなと河これや  
うき名のとまりなるらん

四 35 宝治百

2780 たちかへりみなとにさわぐしらなみ  
のしらじなおなじ人にこふとも

四 35 宝治百

2783 湊河さらでもふかきわが恋をいかに  
せよとてしほのみつらん

四 35 宝治百

2784 みなと川瀬瀬にうづまくたまさかも

ほすまあらせよ袖のしら波

四 35 宝治百

2787 我が恋はみなとをさしてみつしほに  
せかれてかへる水のしらなみ

四 35 宝治百

2795 今はとてみなとに出づる河なみの又  
はいづくの逢瀬待つらん

四 35 宝治百

3849 浪の音のさすがならはぬうきねかな  
袖になれにしみなとなれども

五 230 建百合

986 夜とともに雪の浪こすふじのねやあ  
まのかはらの湊なるらん

十 9 宗三百

103 みなとかぜすずしくなりぬ水ぐきの  
をかのあさけに秋やきぬらん

六 13 新和歌

206 みなとこす入江のなみの引くしほに  
行かたとほき月のかげかな

六 13 新和歌

756 みなと河にほのかよひちみゆるまで  
なみのそこにも月はすみけり

五 231 大歌合

31 みなと河秋ゆく水のいろぞききのこ  
る山なくしぐれふるらし

一 11 続古今

293 みなとこすゆふなみすずしいせのう  
みのをのふるえのあきのはつかぜ

一 11 続古今

970 たちかへりみなとにさわぐしらなみ  
のしらじなおなじ人にこふとも

十 143 白七百

187 奥つ浪おと吹きたててしほ風の湊に  
かかる夕立の雲

六 14 東撰六

311 行く水にかへらぬ花やみなと川くれ  
ぬる春の跡のしらなみ

六 14 東撰六

312 春の行くとまりやいづこみなと河花

とのみこそ波はたつらん

六 14' 東六抜

201 みそぎするけふとはしりぬ湊川ゆふ  
しでかけてかへる浦浪

七 87 時朝

211 もみぢ葉のながれていづるみなとが  
はこれや錦のうらといふらん

五 235 新時代

203 湊川あきゆく水の色ぞこきのこるや  
まなくしぐれふるらし

七 98 為家

834 秋の色のかへらぬ水のみなと出でに  
紅葉の色をよするうら風

七 106 資平

76 秋のいろのながれもやらぬみなと江  
にたつしら浪ももみぢしにけり

十 8 安五百

167 冬はなほなみのうへさへうらさびて  
みなとのあしにさむきしほ風

十 8 安五百

370 みなといるにほのうきすのうき浪に  
よる方なきやわが身なるらん

十 8 安五百

496 水うみにしほさしのぼるみなとちの  
はまなのはしを猶やわたらん

七 112 蓮愉

273 みつしほのさすにまかせてみなとよ  
りいなさほそ江をのぼる月かげ

十 83 伊勢合

83 みなと入の河辺のまこもこすなみに  
さとかたかけてとぶほたるかな

七 115 法為信

78 さみだれにゆふしほむかふみなと河  
せかれていとど水まさりつつ

七 115 法為信

167 たちくだる山本とほくみなと川きり  
のたえまはせだえしにけり

一 13 新後撰

214 五月雨にゆふしほむかふみなと河せ

かれていとど水まさりつつ

四 37 嘉元百

1826 湊川うは浪はやくかつこえてしほま  
でにごる五月雨の比

十 181 歌枕名

3450 したさわぐたかせの川の波まよりか  
すむや袖のみなとなるらん

十 181 歌枕名

4192 みなと川ゆくせの波のくんだりやなは  
るの日よりにはやさしてけり

十 181 歌枕名

4702 みなとこす夕波すずしいせの海のを  
ののふる江の秋のはつかぜ

六 20 拾遺風

414 遥なる湊の興のはなれすにしほかせ  
かけてとまる白なみ

二 16 夫木

3002 みなと河うはなみはやくかつこえて  
しほまでにごる五月雨の比

二 16 夫木

10131 ゆふなぎにしほみちくらしみなとだ  
のほなみにつたふあきのうら風

二 16 夫木

10656 かげろふのをののふる江をこす塩の  
みなとやいづく春のゆふなぎ

二 16 夫木

11034 したさわぐたかせのかはの波間より  
かすむや袖のみなとなるらん

二 16 夫木

11285 こきいれし秋のこの葉の湊河となせ  
の波ににしきたつなり

二 16 夫木

11346 このかはのみなとやちかく成りぬら  
むひろせをこえてしほみちにけり

二 16 夫木

11878 なみさわぐみなとのうみやにごる  
らんたかせのよどの五月雨のころ

二 16 夫木

11882 さしのぼるみなとせがはの夕しほに

みなとの月のかげぞちかづく  
二 16 夫木  
12294 はるかなるみなとのおきのながれす  
にしほ風かけてとまるしら波  
二 16 夫木  
14281 ふねとむるみなとやいづこさぎなみ  
の大津のみやの秋の夕霧  
六 21 柳風抄  
53 みなと河ながれもはやくこす浪にし  
ほまでにごるさみだれのころ  
一 14 玉葉  
2790 あまくだる神やねがひをみつしほの  
みなとにちかきちぎのかたそぎ  
一 15 続千載  
322 おきつ波音ふきたててしほ風のみな  
とにかかる夕だちの雲  
七 127 藤谷  
79 みなと川かは波はやく立ちこえてし  
ほまでにごる五月雨のころ  
七 127 藤谷  
128 さしのぼるみなとせ川の夕しほにみ  
なとの月のかげぞちかづく  
一 17 風雅  
445 みなと川夏のゆくてはしらねどもな  
がれてはやきせぜのゆふしで  
七 136 光吉  
73 みなと江もみづのみかさはたかしま  
の河なみさわぐさみだれのころ  
四 39 延文百  
1025 みなと田におりたちかねてみつしほ  
のながれひるまや早苗とらん  
四 39 延文百  
1543 いとどなほ夕浪かけてみなと田のわ  
さほおしなみ秋風ぞ吹く  
四 22 草庵  
312 しほくまぬ袖さへぬれてみなと田の  
早苗とるなりあまの乙女子  
四 22 草庵  
561 伊勢の海やをのふるえのはるばる

とみなとをかけてすめる月影  
六 27 六華集  
917 湊川秋行く水の色ぞこきのこる山な  
くしぐれふるらし  
十 168 正三百  
61 行く春を下に心や浅からぬみなとの  
波のおとにたてつつ  
十 112 頓阿合  
53 みなと江やあさみつ汐は磯こえて氷  
のうへによするしらなみ  
十 173 熱田歌  
175 みなと田のみでさしこゆるゆふしほ  
に雨をもまたでさなへとるなり  
十 2 耕雲千  
640 いかにせんみなとの塩の引きはへて  
かかるうらみにさわぐ心を  
十 3 宗良千  
819 みなと風ふくたびごとのうちなびき  
入江によする波のしらすげ  
一 22 新葉  
493 みなとこすしほ風さむしかるもかく  
みなのは山の雪のあけぼの  
一 20 新後拾  
236 みなと河うは波はやくかつこえて塩  
までにごる五月雨の比  
七 144 経氏  
339 夕しほのさすをたよりにかへるなり  
みなと入江のあまのつりふふ  
八 6 慕風  
426 しほこゆる湊のうきねうらぶれて浪  
なれごろもいくよかさねつ  
八 5 為富  
121 湊田や水せきかけよ海士人の春は釣  
する縄しろの比  
四 40 永享百  
434 みなと田のかりしほまでとしづのめ  
がからきみるめもいとまなのよや  
四 40 永享百  
437 なみのよるおとかとさきげば湊田のほ

ずゑぞよわしわたる秋風

八 1 雅世

216 ひらの海や湊田近き秋風にかりしほ  
ならぬ浪ぞよりくる

八 1 雅世

533 湊田やなるこのつなも引くしほの跡  
に軒もる月ぞさやけき

四 44 正徹千

178 湊川しほに瀬のなる夕波に小田の蛙  
ぞ声けたれ行く

八 10 草根

411 霞さへあれ行く比良のみなと風かへ  
るやあまの袖ならぬ浪

八 10 草根

1773 湊川しほに瀬のなる夕浪に小田の蛙  
ぞこゑけたれ行く

八 10 草根

2533 湊川しほひしほみち波こえぬ海まで  
まさる五月雨の空

八 10 草根

2620 湊風あら塩こえて川浪のくだればの  
ぼる夕立のあと

八 10 草根

3093 浦ちかく落ちあふ水の湊川にごるや  
あまの田草とらん

八 10 草根

7795 からくなど袖の波こす玉ゆらの湊さ  
しこし塩のぼらん

八 10 草根

9188 湊より興中川に行く水のながれはる  
かにはるる雲かな

八 10 草根

10087 浪こゆるうきねの袖のみなと川夢を  
見るめははやくかれつつ

八 10 草根

10399 老の浪よりくる袖のみなと川さても  
ながれをせくしほはなし

六 31 題林愚

2271 湊田のさなへとるてふ里のあまはし

ほくむよりも袖やぬらん

六 31 題林愚

2977 みなとこす夕波すずしいせの海のを  
ののふるえの秋のはつ風

六 31 題林愚

7717 立ちかへりみなとにさわぐ白波のし  
らじなおなじ人にこふとも

六 31 題林愚

7721 風ふけばみなとに波のさわぎつつ立  
みに袖をぬらす比かな

六 31 題林愚

7726 わが恋はみなとをさしてみつしほに  
せかれてかへる水のしら浪

六 31 題林愚

7728 いさやさはみなと入えのなみのまに  
我が思ふかたのみるめもとめん

六 31 題林愚

7731 今とはとて湊に出づる河なみのまたは  
いづくのあふせまつらん

六 31 題林愚

9195 なみだ川みなとにかぶうき草のう  
きねとどめんかたのなきかな

八 23 卑懐

85 すき返し苗代いそぐ湊田にひくしほ  
とほくにごる浪かな

八 23 卑懐

361 湊こす浦かぜさむみ水ぐきのをかの  
葛はも色ぞうつろふ

八 14 垂槐

956 やちたびもながれし袖のみなと川か  
へらぬ名こそかひなかりけれ

八 17 松下

2081 いつかさていとまも浪の湊田になだ  
の塩やき取る早苗かな

八 27 碧玉

705 よる浪もしほならぬ海の湊田に氷く  
もらぬあさかぜぞ吹く

八 28 柏玉

760 せとわたる鹿のこゑして湊田をもる

- もうきねの浪の上かな  
八 33 邦高  
147 みなとこす夕波冷しいせの海の小野  
のふるえの秋の初風  
八 35 雪玉  
2393 さざ浪やうみ吹く比良の湊かぜたか  
ねの雪のかげはらふなり  
八 35 雪玉  
2791 風さわぐ湊江さむき夕なみにこゑを  
かはしておつるかり金  
五 301 古来風  
612 紅葉葉の流れて止まる湊には紅深き  
波や立つらん  
一 9 新勅撰  
1364 みなとやまどことはにふくしほ風に  
ゑしまのまつはなみやかくらむ  
四 35 宝治百  
2778 いさやさはみなと入江の波のとに我  
が思ふかたのみるめもとめむ  
四 35 宝治百  
3483 なごのえに蘆の葉そよぐ湊風今夜も  
波にさむくふくらし  
二 15 万代  
3259 なごのえのあしのはそよぐみなとか  
ぜこよひもなみにさむくふくらし  
五 384 著聞  
190 とまりする湊の風もけあしきに浪た  
かさごのうらはいかにぞ  
一 11 続古今  
1094 さもこそはみなとはそでのうへなら  
めきみにこころのまづさわぐらん  
七 106 資平  
55 みなとがは月のひかりにみがかれて  
そこの玉もぞあらはれぬべき  
十 181 歌枕名  
4193 みなと山とことはにふくしほ風に  
じまの松は浪やかくらん  
十 181 歌枕名  
8777 みなと山とことはにふくしほ風に  
じまの松は浪やかくらん  
二 16 夫木  
10678 なごの江に蘆の葉そよぐ湊風こよひ  
も浪に寒く吹くらし  
二 16 夫木  
13411 はるかなるみなとのしほのながれ江  
にあしの葉さむくこほるうら風  
四 38 文保百  
1858 かれのこる蘆の末ばに浪こえて湊江  
さむく浦風ぞ吹く  
四 38 文保百  
2203 みなと江の波より上にもえ出でて末  
葉みじかきあしの一むら  
四 38 文保百  
2291 うきねするまつらの浪にうちそへて  
湊吹きこす松かぜの声  
一 15 続千載  
642 うちよする波も氷りてみなとえのあ  
しのはさむくむすぶあさ霜  
一 16 続後拾  
447 なごの江に蘆の葉そよぐ湊風今夜も  
波に寒く吹くらし  
五 329 桐火桶  
108 もみち葉の流れてとまる湊には紅ふ  
かき浪や立つらむ  
四 21 兼好  
166 みなと河ちりにし花のなごりとやく  
もの浪たつ春のうら風  
一 17 風雅  
1704 浦かぜはみなとのあしに吹きしをり  
夕ぐれしろき浪のうへの雨  
四 22 草庵  
1311 蘆の葉によるの雨きく湊江の波の枕  
をいかであかさむ  
十 40 頓阿句  
155 湊田の田面はるかにみつ塩は風にな  
みよる稲葉なりけり  
一 19 新拾遺  
831 臥しわびぬ蘆のはそよぐ湊風さむく

吹くよの波のまくらに

十 111 南朝合解

11 みなと入のしほやこしけんおく霜の  
又露となる蘆のむらだち

一 20 新後拾

734 湊田のいなばに風のたちしよりかり  
なきわたる秋の浦波

七 140 李花

312 湊江や夕しほふかく成るまに月に  
ぞうかぶうらの松ばら

八 23 卑懐

400 湊川ながれ入江の塩あひに氷りこほ  
らぬあしまをぞみる

十 118 将軍合

111 うら風にかれはそよぎてみなと江の  
あしまはなみのおとぞこほれる

十 118 将軍合

116 みなと川ながれいり江のしほあひに  
こほりこほらぬあしまをぞみる

八 17 松下

2062 湊河にごりにしまぬ白浪の花や蓮の  
五月雨の比

八 24 基綱

126 みなと河ながれ入江のしほあひにこ  
ほりこほらぬあし間をぞ見る

二 16 夫木

11002 よしのがはみなとの波による花やあ  
をねがみねにきゆるしら雲

十 135 建十首

58 みなと川ほのかにしらむ霞よりこゑ  
のみいづるあまの友舟

四 14 金槐

570 みなと風いたくな吹きそしながどり  
あなの水うみに船とむるまで

三 131 拾玉

892 みなと川けふのとまりをめにかけて  
ゆふ日にいそぐおきの友舟

四 34 洞院百

207 山風にさくらこぎ入れて行く舟のみ

などをいそぐ春のくれかな

四 34 洞院百

1163 風に行くみなとのおきのあまを舟は  
やくも人にあひ見てしかな

四 34 洞院百

1724 こぎきゆるおきつ雲みの海士小舟お  
のが河瀬のみなといるらん

六 6 御裳集

486 秋ふかきわがともぶねやみなどがは  
いくたのもりのこのはなるらん

一 9 新勅撰

651 みなといりのたまつくり江にこぐ舟  
のおとこそたてねきみをこふれど

三 132 壬二

1102 こぎとめてしばし宿かせ海士を舟湊  
の跡も人にしられじ

二 14 新六帖

975 夕なぎのみなとかたかけみつ塩にす  
ずきつるふねさしわたすみゆ

四 35 宝治百

2782 おもふ事みなとにちがふはや舟のと  
まりもあへぬ恋もするかな

四 35 宝治百

2789 するべせよみなとを出づるあまを舟  
人をみぬめのうらはかひなし

四 35 宝治百

2790 たのまじよたななしを舟行末もこぎ  
かへるべきみなとならねば

四 35 宝治百

2791 湊出のあまのを舟もうらやましつら  
きさはりもあらじと思へば

十 123 新三撰

330 行く月の御舟ながるるあまのがは山  
よりにしやみなどなるらむ

四 36 弘長百

533 あらばあれあらずはなにのみなと川  
いふかひもなきあまの捨舟

六 13 新和歌

535 なみだ河みなとは袖のうらながらわ

が身こがれてよるふねもなし

十 143 白七百

269 みつしほのみなとはるかにこぐ舟の  
こゑをほにあぐる秋の雁金

十 143 白七百

437 山の井のみなと別れて行く舟のあか  
でも人にぬるる袖かな

七 87 時朝

117 なみだがは湊は袖のうらながらわが  
身こがれてよる舟もなし

七 87 時朝

234 なみだがはみなとは袖のうらながら  
わが身こがれてよるふねもなし

七 95 柳葉

824 あしまゆく湊の小舟とにかくにさは  
りおほかる世の中のうさ

五 405 嵯峨路

33 あしわくるみなとのを舟うきふしに  
さはりがちなる程をうらむな

五 405 嵯峨路

34 あしわくるみなとのをぶねさもこそ  
は思はぬかたのさはるなるらめ

十 80 和漢合

85 竜田山霞もやへのみなと川紅くくる  
舟やいつらん

七 119 茂重

178 いまのまの涙かからじかぜむかふみ  
などのをぶねこぎかへる見ゆ

七 113 隣女

878 みなと入りのあし分けぶねにあらぬ  
身のさはりがちなるよにもふるかな

七 113 隣女

1476 わが恋はひく塩むかふみなといりの  
あまのをぶねのよるべだになし

七 113 隣女

1477 あしわくるみなとのを舟うきふしに  
さはりがちなるほどをうらむる

一 13 新後撰

595 吹きおくる風のたよりもしらすげの

みなとわかれていづる舟人

十 181 歌枕名

4186 秋ふかきわがともぶねやみなと川い  
く田の森の木のはなるらん

十 181 歌枕名

4188 みなと川夜舟こぎ出づるおひ風に鹿  
のこゑさへせとわたるなり

十 181 歌枕名

4191 みなと川わかすのさきも心せよなぎ  
さの舟もちかづきにけり

十 181 歌枕名

4455 風あらしきみなとの奥のいちのすにむ  
かふ小舟ははや入りにけり

十 181 歌枕名

5048 吹きおくる風のたよりもしらすげの  
みなとわかれていづる舟人

十 181 歌枕名

5877 あふみの海みなとやそありいづくに  
かきみが船とめんくさむすびかね

十 181 歌枕名

7187 みなと入りのたまつくり江にこぐ船  
のおとこそたてね君をこふれど

十 181 歌枕名

7188 みなとちにいざ船とめむ今宵われた  
まつくり江にてる月をみて

二 16 夫木

2986 船とめしみなとのあしまさをたてて  
こころゆくらん五月雨の比

二 16 夫木

7085 みなといづるかこのとも船ゆすれど  
もひわれもやらぬあさごほりかな

二 16 夫木

10666 湊ぢにいざ舟とめて今夜われ玉つく  
り江にてる月をみん

二 16 夫木

11058 なみだ河ふなでやせましいせの海の  
みかはへわたるみなとたづねて

二 16 夫木

11284 夜をかさねかれゆくあしの湊河さし

- 入るふねもとどこほるらん  
 二 16 夫木  
 11660 　しるべせよみなとをいづるあまをぶ  
 ね人をみぬめのうらはかひなし  
 二 16 夫木  
 11908 　ふきおくるかぜのたよりもしらすげ  
 のみなとわかれていづるふな人  
 二 16 夫木  
 11917 　山の井のみなとわかれてゆくふねの  
 あかでも人にぬるる袖かな  
 二 16 夫木  
 12205 　ひばかりはみなとのせとにたててけ  
 りはやこぎいでよとさのとも舟  
 十 28 国冬百  
 39 　みなとぶねゆききやすくなりぬら  
 んはへにさはらぬさみだれのころ  
 四 38 文保百  
 2085 　みなと舟いかなるかたにこぎ出でて  
 さしも恨に袖ぬらすらん  
 七 124 他阿  
 1415 　舟よせてかち路にかかる湊川幾度も  
 ゆくもりの下陰  
 七 124 他阿  
 1416 　まうけては出づればくる湊舟風に  
 帆まきて月をまつかな  
 五 332 悦目抄  
 64 　ろかいたてみなとを知らぬ夕やみに  
 舟まちいだす夜半の月しろ  
 五 431 松浦宮  
 58 　しらざりしもろこし舟のみなとより  
 うきたる恋に身をくだきつつ  
 七 41 為忠  
 234 　さみだれにみなとのかたへ水越えて  
 つなげる舟をおしながしけり  
 七 111 親清五  
 83 　なみあらきみなとのふねのかちまく  
 らふるさと見つる夢もたえにき  
 十 212 源氏注  
 42 　みなといりのたななしを船こぎかへ  
 りおなじ人をや恋しと思ひし  
 四 39 延文百  
 489 　ゆくすゑの契もいさやしらすげのみ  
 などの小舟こぎわかれつつ  
 一 18 新千載  
 1196 　思ふ事みなとにちがふはや舟のとま  
 りもあへぬ恋もするかな  
 一 18 新千載  
 2078 　月影のよるさす外はみなと江に行方  
 もなきあまのすて舟  
 四 23 続草庵  
 240 　みなと江のたななし小舟あくがれて  
 月のよすがらこぎもかへらず  
 四 23 続草庵  
 315 　冬さむみ雪ぞふりつむ湊江にくちて  
 のこれるあまの捨舟  
 十 40 頓阿句  
 309 　暮るる日に里とひかねて湊江のあま  
 の舟をぞ宿と定むる  
 十 40 頓阿句  
 310 　あまの子のとへど答へぬみなと江は  
 舟にもぬしや定めざるらん  
 十 111 南朝合  
 18 　ふる雪をかたしく袖のみなとぶね夜  
 のまにとまのひまやもりけん  
 十 111 南朝合  
 209 　みなとぶね又こぎいでつ一夜だにみ  
 はてぬ夢の八重の塩風  
 十 111 南朝合  
 211 　かぜさわぐみなとの小舟とまをあら  
 みうきねの床にもる時雨かな  
 五 244 南朝合  
 922 　いくよ我かたしく袖のみなと舟うき  
 ねの夢に都みつらん  
 十 3 宗良千  
 423 　影やどす袖は涙の湊かかつきの御舟  
 のよるぞしらるる  
 十 3 宗良千  
 640 　たちさわぐ涙の袖のみなと船わが心

からよるべなきかな

七 145 為重

157 めぐりあふ月のみ舟のみなといでに  
おひても涼し天の川風

八 10 草根

412 あまのきぬ霞の袖のみなと江はもろ  
こし船のから衣かも

八 10 草根

1917 月の舟湊におくれ行く春の別路にか  
すむ有明の空

八 10 草根

2980 夕波に夏もやいな湊風秋をよせく  
る興つ舟人

八 10 草根

3905 湊山かげをうつして月の舟漕ぎいづ  
る嶺の天の川なみ

八 10 草根

5835 湊舟とまもふきあへずこぼしくる雪  
にただよふひらのねおろし

八 10 草根

6019 あるる日の湊入りくる友舟はかず限  
なき雪のとまぶき

八 10 草根

7011 かたしくもこほれる袖のみなと川涙  
うきねによる舟もなし

八 10 草根

7792 契のみ朽ちにし袖の湊江にそれもか  
よはぬあまの捨舟

八 10 草根

7793 人心さてもやいな湊舟夜るみつ塩  
に遠ざかるらん

八 10 草根

9200 湊出のおほ舟おくるはし舟に玉もか  
りつみかへるうら人

八 10 草根

10078 みなと川入江に舟をとどむれば月と  
しほとぞさしのぼり行く

八 10 草根

10088 やどりかる湊のさとの川橋にともづ

なかけておるる舟人

八 10 草根

10109 興つ風追手まつまの湊舟梶こそふる  
き枕なりけれ

八 10 草根

10119 大船のつかふはし舟いとまなみみな  
との里にいくかへりせん

八 10 草根

10126 うちもねぬあかせば明けぬ湊舟とま  
もる雨に蓑をかさねて

六 31 題林愚

3746 みなと川夜舟こぎ出づるおひ風に鹿  
の声さへせとわたるなり

六 31 題林愚

4140 雲はらふなごの入江の塩風にみなと  
をかけてすめる月かけ

六 31 題林愚

7718 おもふともみなとにむかふはや舟の  
とまりもあへぬ恋もするかな

六 31 題林愚

7725 たのまずよたななしを舟ゆく末もこ  
ぎかへるべきみなとならねど

六 31 題林愚

7727 おもふことみなとにむかふはや舟の  
とまりもあはぬ恋もするかな

八 23 卑懐

216 湊風入江しづかに月ふけて荻のはわ  
くる舟のおとかな

八 23 卑懐

315 つなぎおく湊入江の舟のうちに月ま  
ちいでてうたふあまの子

八 23 卑懐

640 くだしおかむをのふる江の湊舟こ  
れはかへさをいそぐ旅かな

八 17 松下

91 霧ふかきわだの御崎のみなと川人は  
声して寄る船もなし

八 17 松下

686 風こえてすずしき袖の湊舟もろこし

人や秋をよすらむ

八 17 松下

951 湊河わかれよとてのはし舟のかいの  
しづくぞ袖にちりそふ

八 17 松下

1653 湊舟あらそひのりてうき枕恋のやつ  
子ぞ我をせばむる

八 17 松下

1758 そことなくかすめば袖の湊舟こやも  
ろこしの明ぼの空

八 17 松下

1907 さ夜深けて湊によする舟をみて浦の  
とまやにあぐる火のかげ

八 24 基綱

95 つなぎおく湊入江の船のうちに月待  
出でてうたふ海士の子

八 35 雪玉

2417 わが袖はもろこし舟の往来のみおも  
ふにさわぐ湊をぞしる

九 1 衆妙

755 名残ある月やともづなみなと舟

四 32 正治後

945 みなと川あしま分行くそほ舟のさを  
にしらるうす氷かな

五 301 古来風

135 湊入りの葦分け小舟障り多み吾が思  
ふ君に逢はぬ頃かも

十 177 定家八

1201 みなと入のあし分け小舟さはりお  
ほみ我が思ふ人にあはぬころかな

十 137 道五十

569 みなと入のあし分小舟こぎいでて  
難波の奥の月をみるかな

四 15 明日香

641 風のおともみなといり江のさはり  
おほみあしわけをぶねなみやかくらん

十 24 為家百

91 夜とともにあしのはさやぐ湊舟う  
きねの夢は風もゆるさず

三 131 拾玉

2209 秋ふかきわが友ぶねやみなと川い  
く田の杜の木のはなるらん

三 131 拾玉

4633 みなと川しかのねおくるまつかぜ  
の遠ざかり行く舟をしぞおもふ

七 75 光経

331 みなといりのあしわけをぶねこぎ  
出でてなにはのおきの月をみるかな

五 274 秀歌大

96 みなといりのあしわけを舟さはりお  
ほみ我が思ふ人にあはぬ頃かな

五 221 光明峰

197 湊いるあまのをぶねのあしわけに  
又このくれもまちぞわづらふ

十 1 為家千

550 みなといりのふねもやいとどさはる  
らんみぎはのあしのゆきのしたをれ

三 134 拾員外

64 みなといりのあしまのこほり今朝と  
ちてさはりさはらず舟もかよはず

七 81 如願

82 つらしともおもはざらなむ湊いりの  
あしわけをぶねわれひとりとは

七 88 信実

149 湊舟われいたづらにすてられてわけ  
し蘆まもえやはかよはん

四 35 宝治百

2772 みなと入のあしかりを舟さはらねど  
ひとりかなしき恋の道かな

四 35 宝治百

2796 湊入のあしまをわけてこぐ舟も思ふ  
中にはさはらざりけり

七 83 寂身

155 みなと川冬行く舟のさはりおほみあ  
しのたえまもうす氷して

五 230 建百合

1223 舟とめぬみなとの蘆のたえまよりと  
ぼすかがりや夜はの夏虫

十 23 祐茂百

77 あしのはもまだみごもりのみなとぶ  
ねなにのさはりにとはずなるらん

四 36 弘長百

511 蘆ま行くみなとのを舟さしもはやか  
よひし道のさはりはつべき

七 114 雅有

724 よのなかはみなといりえにこぐふね  
のあしまをわけてゆくかたもなし

六 17 閑月集

296 みなとがはもみちふきこす木枯にや  
まもとくだるあけのそほぶね

七 113 隣女

424 みなとえのあしのしげみをわけわび  
て月のみふねもさはる比かな

七 113 隣女

1120 みなといりのを舟のかがりやすらは  
であしまを行くやほたるなるらん

六 20 拾遺風

267 舟とむる湊やちかくなりぬらむ入海  
みえてむかふ松原

二 16 夫木

3218 船とめぬみなとのあしのたえ間より  
ともすかがりやよはの夏むし

二 16 夫木

8439 朝かぜにみなとをいつる友舟はたか  
しの山のもみぢなりけり

二 16 夫木

15748 蘆分のみなとのいかださはりおほみ  
我がおもふ道やこほりはつらん

一 14 玉葉

2104 夕塩のさすにまかせてみなと江のあ  
しまにうかぶあまのすて舟

十 98 詩歌合

24 湊江やあしまの小舟こぎこぎてかす  
める方にまたさかりつつ

四 38 文保百

2847 湊田のおくてのおしねかりつみてあ  
しやのおきにいつる舟人

一 16 続後拾

1118 小船こぐ湊の蘆まともすればさはり  
ある世ぞ袖はぬれける

五 239 永福合

131 蘆間わくる湊の小舟とにかくに障り  
やすさをこりず待つかな

十 212 源氏注

361 みなといりのあしわけをぶねさはり  
おほみこひしき人にあはぬころかな

十 212 源氏注

442 みなといりのあしわけをぶねさはり  
おほみおなじ人にやこひむと思ひし

一 17 風雅

792 みなといりのたななし小舟あとみえ  
て蘆の葉むすぶうす氷かな

四 39 延文百

1689 こよひさへさはるときけば湊船人の  
こころやあしまなるらん

四 22 草庵

983 さはるともせきてはいかでみなと船  
あしのよのまに漕ぎかへるらん

一 19 新拾遺

1023 湊入のあしまを分けてこぐ舟もおも  
ふ中にはさはらざりけり

十 2 耕雲千

535 冬がれのみなとのあしの追風にさ  
はらで出づるあまの釣船

十 3 宗良千

535 しほれあしのおちばまじりに氷と  
ちて猶わけかぬる湊舟かな

十 4 師兼千

732 あしま行くみなとの小舟さしもな  
どさはりがちなる中のちぎりは

七 143 公義

183 霜枯の蘆の落葉のながれ江に数そ  
ふをのの湊舟かな

七 143 公義解

3 霜枯の蘆の落葉のながれ江に数そ  
ふをのの湊舟かな

- 七 140 李花  
43 夕暮はみなともそことしらすげの  
入海かけてかすむ松原
- 七 144 経氏  
203 みなと舟わけしあしべはかれはて  
てむすぶこほりにさはる比かな
- 八 4 持為Ⅲ  
88 あまを舟おしねかるなり湊田のほ  
にいでし秋の日数うつりて
- 一 21 新続古  
631 湊川もみち吹きこす木がらしに山  
本くだるあけのそほ舟
- 八 10 草根  
632 舟よせぬ春風ながら梅がかのとま  
るや袖のみなとなるらん
- 八 10 草根  
709 みなと川もろこし舟や陰にきてか  
ら藍そめし青柳の糸
- 六 31 題林愚  
5128 湊川もみち吹きこす木がらしに山  
もとくだるあけのそほぶね
- 六 31 題林愚  
5191 みなと入るたなしを舟跡みえて  
あしのはむすぶうす氷かな
- 六 31 題林愚  
5196 朝霜のかれはの蘆のひまをあらみ  
やすくや舟のみなと入るらん
- 六 31 題林愚  
6925 あしま行くみなとのを舟さしもや  
はかよひし道のさはりはつべき
- 六 31 題林愚  
7719 みなとりの蘆まをわけてこぐ舟  
も思ふ中にはさはらざりける
- 六 31 題林愚  
7724 しるべせよみなとを出づるあまを  
舟人をみぬめのうらはかひなし
- 六 31 題林愚  
9583 を舟こぐ湊のあしまともすればさ  
はりある世ぞ袖はぬれける
- 八 14 亜槐  
60 霜がれてみなと入江の舟の音もあ  
るかなきかのあしのむら立
- 八 27 碧玉  
699 みなと江のあしまを出づるあま小  
船かれはは風のおひてやは吹く
- 八 35 雪玉  
3512 みなとかぜ吹きつくしてし冬がれ  
にあし分け小舟さはらでや行く
- 八 39 通勝  
161 をれふすも波にくちつつ湊江の蘆  
分小舟冬やさはらぬ
- 五 194 水無瀬  
95 おもふ人をうきねの夢にみなと河  
さむる袂にのこる面かけ
- 五 194 水無瀬  
96 思ひねの夢ちに人をみなと河さむ  
ればもとのうきねなりけり
- 五 198 影建仁  
65 夏の夜は名のみうきねの湊川なが  
むるままのありあけの月
- 四 15 明日香  
1560 浦にいづるみなとはおなじおきつ  
がはたえずやせぜのなほふかくして
- 三 131 拾玉  
4231 みなと川うきねの夢に見てしかな  
いづくか春のとまりなるらん
- 七 75 光経  
520 みなとかぜさむくふくらしふな人  
のうきねあらそふあか月のこゑ
- 三 133 拾遺愚  
282 さもこそは湊は袖の上ならめ君に  
心のまづさわぐらん
- 一 9 新勅撰  
341 みなと河秋ゆくみづのいろぞこき  
のこる山なく時雨ふるらし
- 一 9 新勅撰  
407 さ夜ちどりみなとふきこすしほか  
ぜにうらよりほかのともさそふなり

四 18 後鳥羽

1604 思ふ人をうきねの夢にみなと川さ  
むるたもとにのこる面かけ

二 14 新六帖

1032 みなと川行せの水のくだりやなは  
るの日よりにはやさしてけり

四 35 宝治百

1190 みそぎする今夜は夏のみなと河あ  
らぶる神もすずしかるらん

四 35 宝治百

2767 せきかねぬ物おもふ袖のみなとが  
は今はつつまぬ名をやながさん

四 35 宝治百

2770 かたしきの袖のしたなるみなと河  
これや涙のうきねなるらん

四 35 宝治百

2773 逢ふとなき涙の川の行末やふかき  
うらみのみなとなるらん

四 35 宝治百

2785 とし月に涙のつもる我が袖のみな  
とや恋のとまりなるらむ

四 35 宝治百

2794 おもひつついはねばいとど心のみ  
さわぐは袖のみなとなりけり

四 35 宝治百

3851 磯なれぬうきねのそらはふけにけり  
湊のおきにのこる月影

七 85 家良

190 湊風いまや寒けき難波人なみかけ  
衣よ半に打つなり

五 231 大歌合

170 紅葉葉の色なる袖のみなとこそこ  
ころのあきのとまりなりけれ

十 143 白七百

173 みなと川とほつひがたもなかりけり  
水まさり行く五月雨の比

七 112 蓮愉

647 よこ雲にみなのおしほ山あけそめて  
みなとにのこるしのめの月

七 119 茂重

177 うらとほきみなとの雲のあけがた  
にかげもかすかにのこる月かな

十 83 伊勢合

128 たのめしはあだなみこゆるみなと  
江にみつとばかりも名にやたちなむ

一 13 新後撰

815 せきかねぬ物おもふ袖のみなと川  
今はつつまぬ名をやながさん

一 13 新後撰

842 袖の浦のみなと入江のみをつくし  
くちずは猶やうき名たちなん

十 181 歌枕名

4143 みなと川うきねの床にきこゆなり  
いく田のをののさをしかのこゑ

十 181 歌枕名

4187 湊川うきねの床にきこゆなりいく  
田のをののさをしかの声

十 181 歌枕名

4189 みなと川秋ゆく水の色ぞきこの  
るやまなくしぐれふるらし

十 181 歌枕名

4190 みなと河なつの行てはしらねども  
ながれてはやきせぜのゆふしで

十 181 歌枕名

4703 かげろふのをののふる江にこす塩  
のみなとやいづこ春のゆふぐれ

十 181 歌枕名

6870 袖の浦のみなと入江のみをつくし  
くちずはなほやうき名立つらん

十 181 歌枕名

7611 雲はらふなごの入江のしほ風にみ  
なとをかけてすめる月かけ

六 20 拾遺風

122 河かみに里あれのこるみなと山み  
し物とては月ぞ澄むらん

七 132 自葉

192 もしほやく煙もきえてみなと風さ  
むく吹くよは月ぞさやけき

二 16 夫木

2829 うきねするみなとはすぎぬ郭公いく  
たのもりやとまりなるらん

二 16 夫木

4691 みなと河うきねのところにこよひこ  
そ秋をつげののしかもなくなれ

二 16 夫木

4692 みなと川と山のきりになくしかの  
声するかたにとまりさだめん

二 16 夫木

5382 入海のみなとの霧ぞはれやらぬ今  
日はひかりになりやしぬらん

二 16 夫木

9703 みなとがはうきねのところにこよひ  
こそあきをつげののしかもなくなれ

二 16 夫木

10474 玉津島みがるるよの湊より時に  
あへりと月やすむらん

二 16 夫木

10502 湊こす塩風さむし紀の国やうらの  
初しま雪は降りつつ

二 16 夫木

11052 涙がはみなとにかぶ浮草のうき  
ねとどめんかたのなきかな

二 16 夫木

11267 思ふ事水ぐき河にかきながしみな  
とわたりの人に見せばや

二 16 夫木

11312 たのまじななれし名ごりの一よが  
はまくらにさわみなどありとも

二 16 夫木

11881 けぶりたつたかねはよそのくもみ  
にてみなとにわたるふじのかはぎり

二 16 夫木

15970 みなと田のかりたの面に雪ふれば  
八にかぎらであるくらあかな

二 16 夫木

16352 みなとなふ人はあま夜の月なれや  
くもはれねどもにしへこそ行け

一 14 玉葉

1239 みなと風さむきうきねのかぢ枕都  
をとほみいも夢にみゆ

四 38 文保百

1993 月入らばみなとの霧も猶くらしあ  
けてやこえんみなの葉山を

七 124 他阿

1180 聞えたるみなと思はば有りしにも  
かはる心をなにかはせん

七 124 他阿解

2 聞得たる御名とおもはば有りしにも  
替る心を何にかはせん

一 15 続千載

1091 おもひつついはねばいとど心のみ  
さわぐは袖のみなとなりけり

一 16 続後拾

762 年月は涙のさわぐ我が袖のみなど  
や恋のとまりなるらん

六 24 臨永集

567 みなとかぜのどかになりて春のく  
るなごの入江ははやかすみけり

七 41 為忠

163 あはれなりみなとが原は冬枯にの  
こるますげもこほりしめけり

七 41 為忠

233 みなと川岸うつなみのあらくして  
塩さきにごるさみだれの比

六 8' 現六抜

158 湊川ゆくせの水のくんだりやな春の  
ひかりにはやさしてけり

四 39 延文百

1928 みなと川おちくる水やまさるらん  
塩干もみえぬ五月雨の比

四 22 草庵

227 よし野川みなとやいづこ山吹のか  
げこそ春のとまりなりけれ

一 19 新拾遺

240 けふも又うら風あれて湊田につり  
せぬあまや早苗とるらん

四 24 慶運

265 泉郎人の塩やく浦のみなとだに庵  
もる賤もけぶりたつなり

十 216 道行触

5 たび衣朝たつ袖のみなと川かはら  
ぬせにとなほやたのまむ

七 142 貞秀

79 あま人のかるてふ袖のみなと田に  
いなばもさわぐ秋かぜぞふく

十 5 長慶千

74 みなと田の露にしをれてふすしぎ  
のつばさふきほす秋のうら風

一 20 新後拾

686 五月雨に猶水ふかき湊田はいそぐ  
早苗もとりぞかねぬる

十 174 隠岐高

34 なる神のなるさはすぎていなづま  
のみなとにかかる夕だちの雲

五 251 秘蔵抄

99 うらしまが子をとぶらひて島つ人  
たまかへるらしみなとしらむめり

四 43 為尹千

392 しほ風やこえて吹くらむみなと田  
のほなみなみよる秋の夕暮

八 6 慕風

348 みなと江やうきねさだむるかぢ枕  
さても心はやすむまもなし

四 40 永享百

243 あま人のしほたれ衣ほしもあへず  
みなとの小田に早苗とるなり

一 21 新統古

1883 湊田のいほもる程やあまの子もか  
りそめながら宿さだむらん

八 1 雅世

135 しらすげのみなと吹きこす浦風に  
笠もとりあへず夕立の空

四 44 正徹千

816 湊出づる沖中河の水すぢはうしほも  
けたずながれてぞすむ

八 10 草根

33 今朝のまにあつき氷をみなとくや春  
たつ風もはげしかるらん

八 10 草根

575 影みえぬ湊の小田ににごるなり春の  
雪げの水ぐきの岡

八 10 草根

873 ひらの海や雪吹きおろす山風に霞み  
てしづむみなと江の月

八 10 草根

4086 秋ぞ猶うきねの袖の湊川よそになが  
れぬ床の月かけ

八 10 草根

6138 さ乙女のおりたつならぬしめのうち  
に冬のようにたふ湊田の声

八 10 草根

7794 まどろまぬうきねを夢に湊川名にお  
ふ袖の下にせきつつ

八 10 草根

9142 あま人のもしほたれぬる袖かともみ  
なとに遠き雲ぞ残れる

六 31 題林愚

2379 みなと河とほつひがたもなかりけり  
水まさり行く五月雨の比

六 31 題林愚

2641 おきつ風おと吹きたててしほ風のみ  
なとにかかる夕立のそら

六 31 題林愚

2771 名にしおへばみぎりにたえぬみかは  
水きよく涼しきみなとなりけり

六 31 題林愚

3743 みなと川うきねのところに聞ゆるい  
く田のおくのさをしかの声

六 31 題林愚

5042 もみちばのとまる瀬みれば立た川氷  
ぞ秋のみなとなりけり

十 118 将軍合

65 うら風のいろになり行く湊田やほに  
いでてくるあきをみすらむ

- 八 21 宗祇  
260 みなとかぜさよふけぬらしうきねするゆらの外山に月かたぶきぬ
- 八 18 拾塵  
770 霞をや雨と見るらん湊川月に苦ふく春のふな人
- 八 19 蓮如  
79 われしなばいかなる人もみなともに雑行すてて弥陀をたのめよ
- 八 24 基綱  
43 みなとだやうみのはまもをかる海士も同じ緑のさなへ取るらし
- 八 34 雲玉  
262 紅葉ばの色なる袖のみなとこそ心の秋のとまりなりけれ
- 八 32 春夢  
522 夏衣いつしかすずし湊風ふきやこすらんあなのささ原
- 八 35 雪玉  
2915 思ひせく湊は袖のここながらもろこしばかりとほつふな人
- 八 35 雪玉  
4811 袖の色の千しほや名にも立田川秋のもみちのみなとならでも
- 八 35 雪玉  
7898 おもひなきいづくの袖の湊にか氷をしかぬうきねならまし
- 八 36 称名  
870 うきねする衣手さむしみなと風よごろかさねていま氷るらし
- 八 39 通勝  
1160 紅葉葉のちらぬかげせく山河をながれてとまる湊とぞみる
- 三 131 拾玉  
2343 あかしより月影おくる浦かぜはみなとがはらの秋のまつ原
- 四 34 洞院百  
1071 もらすなよ袖の涙のみなと川したはふあしの下にくつとも
- 一 9 新勅撰  
652 みるめかるあまのゆききのみなとちになこそそのせきもわがすゑなくに
- 七 81 如願  
759 みなといりのたななしをぶねあとみえてあしの葉むすぶうすごほりかな
- 七 90 珍誉  
4 ちるはなのながれていづるみなとがはいづくか春のとまりなるらむ
- 六 9 秋風抄  
189 湊路のあまのゆききのかひもなし我がためにかかるみるめならねば
- 六 8 現存六  
157 わけわぶるほどをしれつつみなとえのあしのわかばをたをるふな人
- 四 36 弘長百  
625 松かげの入海かけてしらすげのみなとふきこす秋のしほ風
- 六 13 新和歌  
285 もみちばのながれていづるみなとがはこれやにしきのうらといふらむ
- 五 231 大歌合  
6 松かげの入海かけてしらすげのみなとふきこす秋の山かげ
- 一 11 続古今  
1329 あしまゆくみなとのをぶねさしもやはかよひしみちのさはりはつべき
- 一 11 続古今  
1555 ゆふだちのまだすぎやらぬみなとえのあしのはそよぐ風のすずしさ
- 一 11 続古今  
1564 松かげのいりうみかけてしらすげのみなとふきこすあきのしほかげ
- 七 95 柳葉  
578 みなと入るあしわけぶねのおなじ江におもひこがれて行くほたるかな
- 一 12 続拾遺  
688 たちまよふみなとのきりの明がたに松原みえて月ぞのこれる

七 118 長景

37 としごとにあさのはながすみなど  
〔 〕おなじみそぎにかくるなみかな

六 16 和漢兼

814 たちまよふみなとのきりのあけがた  
にまつばら見えて月ぞのこれる

七 109 政範

9 おぼろなる光をみがけみなといりの  
たまつくりえの春のよの月

十 83 伊勢合

122 よそにのみ人をばみつのみなと江に  
しげれるあしのねこそなかるれ

十 83 伊勢合

125 ほのかにも人をば三津のみなと江に  
おきふしあしのねこそなかるれ

五 319 和歌口

71 松かげのいり海かけてしらすげのみ  
など吹きこす秋のしほかせ

一 13 新後撰

471 あさ霜のかれ葉のあしのひまをあら  
みやすくや舟の湊入るらん

四 37 嘉元百

2152 もみぢ葉のとまる瀬みればたつた川  
氷ぞ秋のみなとなりける

十 181 歌枕名

2424 年ごとにもみぢ葉ながる立田川みな  
とや秋のとまりなるらむ

十 181 歌枕名

2425 紅葉葉のながる時はたつた川みな  
とよりこそ秋はゆくらめ

十 181 歌枕名

5047 松かげの入海かけてしらすげのみな  
とふきこす秋のしほ風

十 181 歌枕名

5049 立ちまよふみなとのきりの明がたに  
松ばら見えて月ぞ残れる

十 181 歌枕名

7045 みるめかるあまのゆききのみなとち  
になこそそのせきも我すゑなくに

二 16 夫木

6315 もみぢばのながるるときは竜田河み  
なとよりこそ秋はゆくらめ

二 16 夫木

9343 みなとちのあまの行きのかひもなし  
わがためにかるみるめならねば

二 16 夫木

10940 はまながはみなとはるかに見渡せば  
松ばらめぐるあまのつりぶね

二 16 夫木

11282 あかしがた月影おくる浦風はみなと  
がはらの秋の松ばら

二 16 夫木

11910 こずゑにはみえずなりゆくもみぢば  
のとまるやあきのみなとなるらん

二 16 夫木

11911 もらすなよ袖のなみだのみなとがは  
したはふあしのしたにくつとも

二 16 夫木

13442 みなとあしの蘆の中なる玉こすげか  
りこわがせことこのへだしに

二 16 夫木

15860 みなと入りのあしわけをぶねさはり  
おほみわがおもふ君にあはぬ比かな

四 38 文保百

1228 ゆふやみにそこともみえぬみなと江  
のあし間あらはに飛ぶ蜚かな

四 38 文保百

2953 浦かぜにあしの葉なびき時雨れきて  
みなとの月にかかる村雲

六 22 続現葉

221 ゆふやみにそことも見えぬみなとえ  
のあしまあらはにとぶ蜚かな

七 126 俊光

196 ゆふやみはそことも見えぬみなと江  
のあしまあらはにとぶ蜚かな

六 23 松花集

94 いろしほのさしこす程や湊江の蘆間  
の水も氷とづらん

- 五 329 桐火桶  
116 年毎にもみぢ葉流る竜田川みなとや  
秋のとまりなるらむ
- 十 211 伊勢注  
64 湊入りのあしわけ小舟さはりおほみ  
いまくる我をこずと思ふな
- 六 25 藤葉集  
45 みなと江のなみよりうへにもえ出で  
て末葉みじかきあしの一むら
- 一 17 風雅  
1598 みなとえの氷にたてるあしの葉に夕  
霜さやぎうらかぜぞ吹く
- 一 18 新千載  
1054 あしまなき涙の袖のみなとにもさは  
るは人のよるべなりけり
- 五 335 井蛙  
349 松かげの入うみかけてしらすげのみ  
なとふきこす秋のしほかぜ
- 六 27 六華集  
629 松原の入うみかけてしらすげのみな  
と吹きこす秋の塩風
- 七 141 嘉喜門  
122 うらとほくしほ引きはててみなとえ  
のあしのかれ葉にのこる朝霜
- 十 4 師兼千  
392 蘆のはにむすぼほれたる玉章や湊を  
渡るかりの一つら
- 十 4 師兼千  
534 みなと江や夕しもはらふ塩風のよわ  
れば氷るあしのむら立ち
- 一 21 新統古  
1775 霜さむきあしのかれ葉はをれふして  
いつくかかげのみなとなるらん
- 八 10 草根  
2326 うゑはててかへり見すれば湊田に秋  
のほなみは早苗にぞたつ
- 八 10 草根  
2329 汲むひまもなだのしほやき湊田にほ  
す袖ぬれてとる早苗かな
- 八 10 草根  
2335 小乙女がもすそのみしぶしほじみて  
湊の小田にとるさなへかな
- 八 10 草根  
2372 湊田のをぐろの上にむれゐるやいき  
づく海士の早苗取るらん
- 八 10 草根  
4883 行末も湊を秋のとまりとや稲葉をさ  
らぬを田の秋風
- 六 31 題林愚  
2640 夕立のまだ過ぎやらぬみなと江のあ  
しのはそよぐ風の涼しさ
- 六 31 題林愚  
5193 霜さむきあしのかれははをれふして  
いつくかかげのみなとなるらん
- 六 31 題林愚  
5199 みなと江の氷にたてるあしのはに夕  
霜さやぎうら風ぞ吹く
- 六 31 題林愚  
7732 あししげきみなとも立たぬ月日にも  
さはるは人の契りなりけり
- 十 118 将軍合  
66 いなばふくおとかはりぬるみなと田  
にうら風ながら秋はきにけり
- 八 13 常縁  
194 みなと江のあしの下葉はかげもなし  
霜にしほかぜこほりかさねて
- 八 17 松下  
1512 湊田にあまる早苗よ和歌の道人はこ  
と葉をとりつくす世に
- 八 17 松下  
2018 湊河はる行く水のうき草にさそはば  
とてや花の散るらん
- 八 18 拾塵  
921 浦風は湊の葦にはげしくて遠島めぐ  
るむら雨の雲
- 八 28 柏玉  
1099 みなとえのあしの枯はや身をつくし  
深きしるしの霜をみすらん

八 28 柏玉  
2065 湊江のあしのかれはや身をつくしふ  
かきしるしの霜をみすらん

六 28 津守集  
178 蘆まなき涙の袖のみなにもさほる  
は人のよるべなりけり

六 28 津守集  
290 霜寒き蘆の枯葉はをれふしていづく  
かかげのみなとなるらん

八 40 惶窩  
195 見ずしらぬいづくの袖のみなとより  
かへりよるべのみづぐきのあと

### 3. 時代Ⅲ (1600~1800) で引用した詩歌

(新編国歌大観編集委員会 (2003) : 新編国歌  
大観 CD-ROM 版 Ver. 2, 角川書店)

(古典俳文学体系 CD-ROM 版編集委員会  
(2004) : 古典俳文学体系 CD-ROM 版, 集英社)

六 37 霞関集  
1125 漕出でし名残をおもふみなと江のゆ  
く末へだつをちのうらなみ

九 32 柿園  
88 近江の海湊八十あり何しかもおもひと  
まらで雁のゆくらん

六 39 大江戸  
1208 汐かぜになみもたかしの浜千鳥みなと  
にかへる声きこゆなり

六 39 大江戸  
1210 吹く風にうらわの浪やたかからし湊入  
江に千鳥しばなく

六 37 霞関集  
614 かち枕暁寒き湊江にめざめてきけば千  
鳥啼くなり

九 21 六帖詠  
890 梓弓いるさの月にまとかたのみなとの  
すどりたちさわぐみゆ

九 23 鈴屋  
919 袖の浦やもろこし船もよらなくに湊に  
さわぐむら千鳥かな

九 27 亮々  
652 みなと風吹きしづまれる小夜中にわが  
舟ちかく千鳥なくなり

九 33 浦しほ  
643 きり立ちて湊は見えずあしたづの鳴く  
なるかたに舟はとどめん

九 2 黄葉  
1065 水上はたえぬ涙のみなと川海にかはれ  
るそでをみせばや

六 35 鳥の迹  
691 漕ぎいれん湊やいづこ行末も跡もいく  
重のなみのうらぶね

六 36 新明題  
2339 こぐ舟はみなとによるの月独うかべる  
影のなみのしづけき

六 36 新明題  
4419 都とふ袖しをれとや湊舟波のまくらに  
月ぞ更けゆく

九 11 霊元  
239 ゆく春のみなとをしらば舟よせむかす  
みの浪ち千里なりとも

九 12 芳雲  
3959 契あらむよるべもしらで湊入のあし分  
け小舟猶ぞこがるる

六 37 霞関集  
99 湊江の末は霞のひまみえて波路さだか  
にかへるかりがね

六 37 霞関集  
200 ちる花のうかべる水に舟とめてくれゆ  
く春の湊をぞしる

六 37 霞関集  
479 湊舟泊さだめて猶も見ん夕浪よする月  
の光を

九 17 為村  
1903 心あてのみなとやいづこ浪の上にごぎ  
わかれ行く沖の友船

九 25 藤簾  
261 湊入の五手の船は早きかも漕ぎそけて  
くる沖のゆふだち

- 九 26 琴後  
561 みなと田に朝夕かよふいなぶねはただ  
かりしほにまかせてぞ漕ぐ
- 六 38 八十浦  
315 武蔵のや 荏原のうみを はるばると  
八重の潮合に 見わたせば 安房に…
- 九 31 桂園拾  
159 湊江のよどのわかごもからぬまにひき  
てもしほのほしてけるかな
- 九 33 浦しほ  
1446 ももとせの泊りさだめよさざ波のあふ  
みの海はみなと八十有り
- 九 32 柿園  
199 波絶えし沖は夕日に雨かけて湊田遠く  
早苗とるなり
- 九 32 柿園  
321 みなと川瀬瀬のしら波いくかへりおな  
じまとゐに更けし月夜ぞ
- 九 32 柿園  
326 秋風にくぐひ羽うちて湊田の穂のへを  
こゆる月のしらなみ
- 九 32 柿園  
1105 みなとの うしほのくんだり いかさま  
に くんだりゆく世ぞ なみふりて 屋…
- 九 34 草徑  
206 うきねする湊はわびしき波さへひたひ  
たとうつ音のきこえて
- 九 4 後十輪  
900 波にふす末葉もこほる湊入のあし分小  
舟猶やさはらむ
- 九 31 桂園拾  
193 松かげにとまらぬ舟もなかりけりあら  
しやなつの湊なるらむ
- 九 33 浦しほ  
1119 浪花なるみつの湊のみなと入りあなさ  
わがしの恋のこころや
- 八 39 通勝  
1160 紅葉葉のちらぬかげせく山河をながれ  
てとまる湊とぞみる
- 九 1 衆妙  
755 名残ある月やともづなみなと舟
- 八 40 惺窩  
195 見ずしらぬいづくの袖のみなとより  
かへりよるべのみづぐきのあと
- 九 5 逍遊  
617 をしめどもよどみもやらで行く春の  
みなとはあすの飛鳥川かな
- 九 10 漫吟  
896 あち村の遠よりあとのみなと田に人  
こそさわげ早苗とる日は
- 六 36 新明題  
1369 塩やかぬ海土も此比湊田のさなへと  
る手もいとまなの身や
- 六 36 新明題  
4290 みなと舟今や待ちえしおきつ風きそ  
ふかたほの遠ざかり行く
- 九 12 芳雲  
477 浦かぜに深き霞の湊出よみるめすくな  
し春の月影
- 九 12 芳雲  
1486 秋をまつ夕河なみに飛ぶ蛩よるせや夏  
の湊なるらん
- 九 12 芳雲  
2817 漕ぎよする浪はさわがで湊舟棹に氷の  
音ぞ砕くる
- 六 37 霞関集  
88 はるばると湊をかけてかすむなり小野  
のふる江の春のあけぼの
- 九 21 六帖詠  
889 あこがれてよはにや出でしみなと舟か  
らろの音の月にきこゆる
- 九 22 六帖拾  
326 筑紫路のみなとみなどによるの舟そも  
いく度か漕ぎかはるらん
- 九 26 琴後  
335 もろ人のけふのためしの舟づつみつど  
ふや法のみなと成るらん
- 九 27 亮々

- 1100 ゆふされば涼しかりけり湊江の岩もと  
こすげ風にみだれて  
九 27 亮々
- 1496 風まつと湊にかかる大舟のいつともし  
らぬ恋もするかな  
六 38 八十浦
- 191 水門辺に 舟はよるとふ ありそわに  
みるはよるとふ 何方に 思ひより…  
九 31 桂園拾
- 145 日かずのみふるさみだれに湊川とらぬ  
真楫もくちやしぬらむ  
九 33 浦しほ
- 989 雪のごとつもりし罪をゆきのごとけよ  
と仏のみなとなふなり  
九 32 柿園
- 861 みなと川底のうもれ木得てしがなつか  
ふる道のしをりにをせん  
九 34 草径
- 111 いははなをやがてもをれずゆたにめぐ  
り千船もおなじ湊出かな  
九 34 草径
- 115 のる人も立てりながらに行きちがふ港  
の船のことぞともなき  
九 34 草径
- 309 あきふけてみなとや寒くなりぬらむそ  
ばうりめぐるさよ中の舟  
九 34 草径
- 587 いくばくか今はきぬると人毎にとひき  
くけさの港出の舟  
九 36 調鶴
- 218 ゆふ立の沖のはやてをのりぬけてみな  
といる舟ほこらしげなる  
九 35 志濃夫
- 116 湊川御墓の文字は知らぬ子も膝折りふ  
せて嗚呼といふめり  
八 39 通勝
- 161 をれふすも波にくちつつ湊江の蘆分小  
舟冬やさはらぬ  
九 2 黄葉
- 1362 あなたふと嶺の松かぜ谷の水なむあみ  
だ仏をみなとなふなり  
九 3 挙白
- 1195 なには江や蘆もしどろにかれふしてみ  
なとたどらぬ舟のかよひぢ  
六 34 難波捨
- 343 湊江や霜がれはつる蘆のはに音淋しく  
もうら風ぞふく  
九 11 靈元
- 159 みなと入る小舟もみえずみだれあしの  
よをかさねつとづる氷に  
十 186 大嘗会
- 759 のきちかくはなさきにけりむめのはら  
みなとにほふかぜもしるくて  
六 37 霞関集
- 135 舟とめし湊の春のはなぎかりふかばと  
たのむ風もまたれず  
九 21 六帖詠
- 1064 みなと江にさはれるあしもかれふせば  
やがて小舟にこぎしかれつつ  
九 23 鈴屋
- 745 みなといりのあし分小船たどらじな雲  
もさはらぬ月の光に  
九 24 うけら
- 275 みなと江の岸のやなぎもいとゆふも心  
ひかるるつなでなりけり  
九 27 亮々
- 636 冬ふかき湊入江のかち枕あしのさわぎ  
に夢もむすばず  
九 30 桂園一
- 204 茜さす日はてりながら白菅の湊にかか  
るゆふだちのあめ  
六 38 八十浦
- 800 みなとのあしの葉さやぎ初秋風けさは  
すずしくなりにけるかも  
九 31 桂園拾
- 106 みなと川うきねに春やくれぬらむ生田  
のもりの花ものこらず  
九 31 桂園拾

- 609 よさのうみの湊にいりしかひもなく松  
のは見えぬ夕まぐれかな  
九 32 柿園
- 318 水門川小舟の水棹さしわけてあしまに  
もらす月のかげかな  
十 211 伊勢注
- 64 湊入りのあしわけ小舟さはりおほみい  
まくる我をこずと思ふな  
九 10 漫吟
- 1259 浜松に舟はかくれてみなと田のわせに  
ほさきの出でて見えける  
六 37 霞関集
- 1125 漕出でし名残をおもふみなと江のゆく  
末へだつをちのうらなみ  
九 32 柿園
- 88 近江の海湊八十あり何しかもおもひと  
まらで雁のゆくらん  
六 39 大江戸
- 1208 汐かぜになみもたかしの浜千鳥みなと  
にかへる声きこゆなり  
六 39 大江戸
- 1210 吹く風にうらわの浪やたかからし湊入  
江に千鳥しばなく  
六 37 霞関集
- 614 かち枕暁寒き湊江にめざめてきけば千  
鳥啼くなり  
九 21 六帖詠
- 890 梓弓いるさの月にまとかたのみなとの  
すどりたちさわぐみゆ  
九 23 鈴屋
- 919 袖の浦やもろこし船もよらなくに湊に  
さわぐむら千鳥かな  
九 27 亮々
- 652 みなと風吹きしづまれる小夜中にわが  
舟ちかく千鳥なくなり  
九 33 浦しほ
- 643 きり立ちて湊は見えぬあしたづの鳴く  
なるかたに舟はとどめん  
九 2 黄葉
- 1065 水上はたえぬ涙のみなと川海にかはれ  
るそでをみせばや  
六 35 鳥の迹
- 691 漕ぎいれん湊やいづこ行末も跡もいく  
重のなみのうらぶね  
六 36 新明題
- 2339 こぐ舟はみなとによるの月独うかべる  
影のなみのしづけき  
六 36 新明題
- 4419 都とふ袖しをれとや湊舟波のまくらに  
月ぞ更けゆく  
九 11 霊元
- 239 ゆく春のみなとをしらば舟よせむかす  
みの浪ち千里なりとも  
九 12 芳雲
- 3959 契あらむよるべもしらで湊入のあし分  
け小舟猶ぞこがるる  
六 37 霞関集
- 99 湊江の末は霞のひまみえて波路さだか  
にかへるかりがね  
六 37 霞関集
- 200 ちる花のうかべる水に舟とめてくれゆ  
く春の湊をぞしる  
六 37 霞関集
- 479 湊舟泊さだめて猶も見ん夕浪よする月  
の光を  
九 17 為村
- 1903 心あてのみなとやいづこ浪の上にごぎ  
わかれ行く沖の友船  
九 25 藤簍
- 261 湊入の五手の船は早きかも漕ぎそけて  
くる沖のゆふだち  
九 26 琴後
- 561 みなと田に朝夕かよふいなぶねはただ  
かりしほにまかせてぞ漕ぐ  
六 38 八十浦
- 315 武蔵のや 荏原のうみを はるばると  
八重の潮合に 見わたせば 安房に…  
九 31 桂園拾

- 159 湊江のよどのわかごもからぬまにひき  
てもしほのほしてけるかな  
九 33 浦しほ
- 1446 ももとせの泊りさだめよさざ波のあふ  
みの海はみなと八十有り  
九 32 柿園
- 199 波絶えし沖は夕日に雨かけて湊田遠く  
早苗とるなり  
九 32 柿園
- 321 みなと川瀬のしら波いくかへりおな  
じまとみに更けし月夜ぞ  
九 32 柿園
- 326 秋風にくぐひ羽うちて湊田の穂のへを  
こゆる月のしらなみ  
九 32 柿園
- 1105 みなとの うしほのくんだり いかさま  
に くんだりゆく世ぞ なみふりて 屋…  
九 34 草徑
- 206 うきねする湊はわびしさ波さへひたひ  
たとうつ音のきこえて  
九 4 後十輪
- 900 波にふす末葉もこほる湊入のあし分小  
舟猶やさはらむ  
九 31 桂園拾 193 松かげにとまらぬ  
舟もなかりけりあらしやなつの湊なるらむ  
九 33 浦しほ
- 1119 浪花なるみつの湊のみなと入りあなさ  
わがしの恋のこころや  
八 39 通勝
- 1160 紅葉葉のちらぬかげせく山河をながれ  
てとまる湊とぞみる  
九 1 衆妙
- 755 名残ある月やともづなみなと舟  
八 40 惺窩
- 195 見ずしらぬいづくの袖のみなとよりか  
へりよるべのみづぐきのあと  
九 5 道遊
- 617 をしめどもよどみもやらで行く春のみ  
なとはあすの飛鳥川かな
- 九 10 漫吟
- 896 あぢ村の遠よりあとのみなと田に人こ  
そさわげ早苗とる日は  
六 36 新明題
- 1369 塩やかぬ海士も此比湊田のさなへとる  
手もいとまなの身や  
六 36 新明題
- 4290 みなと舟今や待ちえしおきつ風きそふ  
かたほの遠ざかり行く  
九 12 芳雲
- 477 浦かぜに深き霞の湊出よみるめすくな  
し春の月影  
九 12 芳雲
- 1486 秋をまつ夕河なみに飛ぶ蛭よるせや夏  
の湊なるらん  
九 12 芳雲
- 2817 漕ぎよする浪はさわがで湊舟棹に氷の  
音ぞ砕くる  
六 37 霞関集
- 88 はるばると湊をかけてかすむなり小野  
のふる江の春のあけぼの  
九 21 六帖詠
- 889 あこがれてよはにや出でしみなと舟か  
らろの音の月にきこゆる  
九 22 六帖拾
- 326 筑紫路のみなとみなとによるの舟そも  
いく度か漕ぎかはるらん  
九 26 琴後
- 335 もろ人のけふのためしの舟づつみつど  
ふや法のみなと成るらん  
九 27 亮々
- 1100 ゆふされば涼しかりけり湊江の岩もと  
こすげ風にみだれて  
九 27 亮々
- 1496 風まつと湊にかかる大舟のいつともし  
らぬ恋もするかな  
六 38 八十浦
- 191 水門辺に 舟はよるとふ ありそわに  
みるはよるとふ 何方に 思ひより…

- 九 31 桂園拾  
145 日かずのみふるさみだれに湊川とらぬ  
真楫もくちやしぬらむ
- 九 33 浦しほ  
989 雪のごとつもりし罪をゆきのごとけよ  
と仏のみなとなふなり
- 九 32 柿園  
861 みなと川底のうもれ木得てしがなつか  
ふる道のしをりにをせん
- 九 34 草径  
111 いははなをやがてもをれずゆたにめぐ  
り千船もおなじ湊出かな
- 九 34 草径  
115 のる人も立てりながらに行きちがふ港  
の船のことぞともなき
- 九 34 草径  
309 あきふけてみなとや寒くなりぬらむそ  
ばうりめぐるさよ中の舟
- 九 34 草径  
587 いくばくか今はきぬると人毎にとひき  
くけさの港出の舟
- 九 36 調鶴  
218 ゆふ立の沖のはやてをのりぬけてみな  
といる舟ほこらしげなる
- 九 35 志濃夫  
116 湊川御墓の文字は知らぬ子も膝折りふ  
せて嗚呼といふめり
- 八 39 通勝  
161 をれふすも波にくちつつ湊江の蘆分小  
舟冬やさはらぬ
- 九 2 黄葉  
1362 あなたふと嶺の松かぜ谷の水なむあみ  
だ仏をみなとなふなり
- 九 3 挙白  
1195 なには江や蘆もしどろにかれふしてみ  
なととらぬ舟のかよひち
- 六 34 難波捨  
343 湊江や霜がれはつる蘆のはに音淋しく  
もうら風ぞふく
- 九 11 霊元  
159 みなと入る小舟もみえずみだれあしの  
よをかさねつとつづる氷に
- 十 186 大嘗会  
759 のきちかくはなさきにけりむめのはら  
みなどにはほふかぜもしるくて
- 六 37 霞関集  
135 舟とめし湊の春のはなぎかりふかばと  
たのむ風もまたれず
- 九 21 六帖詠  
1064 みなと江にさはれるあしもかれふせば  
やがて小舟にこぎしかれつつ
- 九 23 鈴屋  
745 みなといりのあし分小船たどらじな雲  
もさはらぬ月の光に
- 九 24 うけら  
275 みなと江の岸のやなぎもいとゆふも心  
ひかるるつなでなりけり
- 九 27 亮々  
636 冬ふかき湊入江のかち枕あしのさわぎ  
に夢もむすばず
- 九 30 桂園一  
204 茜さす日はてりながら白菅の湊にかか  
るゆふだちのあめ
- 六 38 八十浦  
800 みなとのあしの葉さやぎ初秋風けさは  
すずしくなりにけるかも
- 九 31 桂園拾  
106 みなと川うきねに春やくれぬらむ生田  
のもりの花ものこらず
- 九 31 桂園拾  
609 よさのうみの湊にいりしかひもなく松  
のは見えぬ夕まぐれかな
- 九 32 柿園  
318 水門川小舟の水棹さしわけてあしまに  
もらす月のかけかな
- 十 211 伊勢注  
64 湊入りのあしわけ小舟さはりおほみい  
まくる我をこずと思ふな

- 九 10 漫吟
- 1259 浜松に舟はかくれてみなと田のわせに  
ほさきの出でて見えける
- 01-007 崑山集
- 7670 湊みなとなは錦か岸にはなとなみ 治  
定
- 01-008 紅梅千句
- 685 米こめ船ぶねのどんどといれる湊みなと  
口ぐち 政信
- 01-011 俳諧独吟集
- 564 黒船の湊みなと入いりする月の秋
- 01-011 俳諧独吟集
- 1268 引ひきかぬる大石をつむみなと舟
- 01-011 俳諧独吟集
- 1619 唐船の数はあまたに湊みなと入いり
- 01-013 俳諧塵塚
- 3 湊船二三月よりこしらへて 同
- 02-002 時勢粧
- 1935 新酒もや重かさねの袖の湊風
- 02-002 時勢粧
- 4266 初汐もやらんやらよし湊みなと舟ぶね  
翁
- 02-002 時勢粧
- 4306 湊みなと舟ぶね酔ゑひをすすむる乗の  
り初ぞめに
- 02-002 時勢粧
- 4754 客は舟に嬉しき今の湊みなと入いり  
同
- 02-002 時勢粧
- 5480 湊みなとには市こそさかれ気け比ひの  
海 同
- 02-002 時勢粧
- 6145 ぎやう水ずいをせばやとあがる湊みな  
と舟ぶね
- 02-002 勢粧
- 6935 湊みなと川がは追風願ふかかりぶね
- 02-009 続山井
- 1576 はりまはす霞や春の湊みなと紙がみ  
井狩 常信
- 03-001 ゆめみ草
- 1609 井の内は桐の葉は舟ぶねの湊みなと哉  
菅田 一十
- 03-003 続境海草
- 1089 三さん国ごくの湊 142 みなとや秋の泊  
とまり舟 天満 西翁
- 03-003 続境海草
- 1105 朝霜や身にしむ秋の湊みなと塩じほ  
備中 信元
- 03-003 続境海草
- 1376 早さ乙をと女めか湊みなと田だうたふ  
神楽みこ 大坂 如貞
- 03-003 続境海草
- 1985 花塩もこぼれて春の湊みなと哉
- 03-007 信徳十百韻
- 141 商あき人んどや湊みなとにおゐ (い)  
て組がしら
- 03-011 俳諧大句数
- 692 みなと川ゆく其舟をまて
- 03-011 俳諧大句数
- 746 湊 (湊) みなとや秋の舟がかたぶく
- 03-019 江戸蛇之酢
- 259 赤せき壁へきや栴もみぢもあをき湊み  
なと紙がみ 米内 貞政
- 03-019 江戸蛇之酢
- 360 舟問屋みなとを袖に松さは (わ) ぐ
- 04-018 江戸広小路
- 347 端たん物もののみな 53 水と門やあきの  
織おりどまり 一鉄
- 04-019 坂東太郎
- 443 西瓜船唐たう人じん宿やどを湊かな  
調機
- 04-024 松島眺望集
- 1166 無常河の湊の冬やちごくぼら 遠州  
一柳
- 04-025 大坂辰歳旦
- 68 霞かすみたる湊みなとが際きはにふね  
舟よせて 梅雲
- 05-002-126 江戸桜(半歌)

- 8 みなと港入る帆のみ見ゆるやね屋根  
越シ 雪  
05-002-140 凧の(三十句)  
6 湊みなとに舟の入りかかる声 舟泉  
06-007 阿羅野  
566 のどけしや湊みなとの昼の生なまざかな 荷兮  
06-012 俳諧勸進牒  
529 はる風は湊の市を知ち行きやうして 扇角  
07-013 続有磯海  
556 湊を出てもまだ海のつら 然  
07-020 正風彦根舩  
186 木綿帆の幟<ノポリ>節句や湊いり 曰良  
08-052 支考  
1019 湊みなとへは鉤<カギ>にまはるや雁 かり一羽は  
09-033 諷竹  
101 夜の明あくる芦あしの若葉やみなとかぜ  
09-071 嵐蘭  
12 次つぎ信のぶが矢(屋)島楠くすのきが湊みなと川がは葺あさがほ  
11-018 渭江話  
390 湊みなとにつど(濁ママ)ふ秋も万石 竹ちく烏う  
11-023 古来庵発句  
45 舟よ呼ぼ(ば)ふみなとや春の朝がすみ  
12-001-035 蕪村発句  
968 花火見えて湊がましき家百戸  
12-002-017 はしだ(歌仙)  
13 帆も月も一ぱい持もつてみなと湊入り 竜  
12-004-186 蕪村書簡  
11 花火見えて湊がましき家百戸  
13-006 平安二十歌仙  
45 船ふな玉だまへ湊の花をたてまつり
- 祇  
13-006 平安二十歌仙  
651 湊での月を都に帰りなば 古  
13-009 俳諧新撰  
1605 初雁や湊の空のそぞろ声 春来  
13-016 春秋稿  
269 船路経て桜かひある湊かな 上田 麦二  
13-016 春秋稿  
667 新酒船湊の乞こ食じき涎よだれせり 求魚  
13-017 統一夜松前  
493 もろこしの湊に春の歌よみて 二  
14-015 新雑談集  
590 塩買に湊へあがる舟子ども 獅  
15-002-036 我のみ(歌仙)  
25 貝がら殻の庇ひさしも由良5ゆらの湊 みなと也 春耕  
15-005-028 一茶書簡  
5 青柳や梅が香もする湊みなと口  
16-006 佳気悲南多  
206 狩倉の賄まかなひ荷物湊みなと来て 可か来らい  
16-011 蕪本集  
283 さみだれも湊になりぬうつぼ草  
16-012 続蕪本集  
107 遅き日やみなと湊の長をさが天居なし  
16-012 続蕪本集  
269 高たか萱かやも色もつ夏のみなとかな  
16-012 続蕪本集  
481 水鳥のみなと湊しら白むとさ騒はぐ哉  
16-016 あなうれし  
808 鶏声かくぼ雀は落葉の湊みなとかな 常州 蔵ざう六ろく  
17-001 大発句帳  
1138 雁の声かすむや船のみなといり 同  
17-001 大発句帳  
1163 やまかすむ月や春行みなとぶね 同  
17-001 大発句帳

1860 ちらぬまや下行花のみなと川 同  
 17-001 大発句帳  
 2301 さくふぢやはる行つなで湊ふね 同  
 17-001 大発句帳  
 2316 ふちなミのよるべや春のみなと風 同  
 17-001 大発句帳  
 2393 吹むかへふねこそはるのみなと風 同  
 17-001 大発句帳  
 2489 みなと入のふねのまかぢや春の風 同  
 17-001 大発句帳  
 2571 夏山やおくまではなをみなと川 同  
 17-001 大発句帳  
 3031 郭公ゆくへをふねのみなとかな 同  
 17-001 大発句帳  
 3380 さみだれや松の木ずゑにみなと舟 同  
 17-001 大発句帳  
 3386 さみだれのにごりや沖にみなと河 同  
 17-001 大発句帳  
 3520 影みだるほたるやあし火みなと風 同  
 17-001 大発句帳  
 3660 白雨やうみにいでたるみなとかぜ 同  
 17-001 大発句帳  
 3661 吹こせばなみやゆふだつみなと風 同  
 17-001 大発句帳  
 4037 なつの日もむすべば水の湊かな 同  
 17-001 大発句帳  
 4249 あきやけさみなとふきこす初あらし  
 宗碩  
 17-001 大発句帳  
 4251 秋やふね出たつ八十のみなとかぜ 同  
 17-001 大発句帳  
 4322 ちりそはば一はや秋のみなとぶね 同  
 17-001 大発句帳  
 5069 月やふねいつる夜さそふみなと風 同  
 17-001 大発句帳  
 5125 よるさへやつきの度会みなとぶね 同  
 17-001 大発句帳  
 5710 木々の色も初しほひたすみなと哉 同  
 17-001 大発句帳

6562 うら波もこほりををしめみなと河 肖  
 柏  
 17-003 鷹筑波  
 3081 湊みななどにはおもひの外の四国木に  
 17-004 玉海集  
 1919 南北に湊はなきか月のふね 京平尾小  
 兵衛 幸以  
 17-004 玉海集  
 2504 湊田をはやすやきねが神楽領 尾州名  
 護屋住 身  
 17-004 玉海集  
 3640 嬉しくも湊に付し舟子ども  
 17-005 毛吹草  
 2471 うはまへをとりかぢなれや湊みなと舟  
 17-006 山の井  
 219 壺つぼ底そこをはらふや春のみなとじ  
 ほ 正式  
 よき連歌二月のなげ松湊舟

#### 4. 時代Ⅳ(1800～)で引用した詩歌

(現代俳句協会：現代俳句データベース

<<http://www.haiku-data.jp/>> ,

2005. 9. 5 更新, 2006. 5. 5 参照)

(大野雑草子(1989)：俳句用語用例小事典⑤

海の俳句を詠むために：博友社

(俳句囊編集委員会(2002)：俳句囊 CD-ROM :

日外アソシエーツ)

(俳句情報検索 :

<<http://www.jfast.net/~takasawa/>> ,

2000. 5. 15 更新, 2006. 5. 5 参照)

いちにち雨の流れた海港を身に湛える

林田紀音夫 現代俳句協会

秋立てる港の音の中にある

岡本眸 俳句用語例小事典

朝霧晴れて漁港の活気づく

高島さだ子 俳句用語例小事典

朝霧をひらきてフェリー入港す

馬場一扇 俳句用語例小事典

一燈に火蛾の舞いくる島港  
           前田鈴子          俳句用語例小事典  
 うす虹をかけて暮秋の港かな  
           飯田蛇笏          俳句囊  
 江田島の軍港しのぶ渡り鳥  
           尾形不二子          俳句用語例小事典  
 ガイガー死魚をわらう港にさくら浮き  
           隈治人          現代俳句協会  
 牡蛎筏軍港たりしとき知らず  
           山口浪津女          俳句用語例小事典  
 郭公も鳴きて湊の神事能  
           村田芙美子          俳句用語例小事典  
 風光る寄港の船とちぎれ雲  
           大川酔浪子          俳句用語例小事典  
 かぞへ日の港出でゆく船の数  
           柳下良尾          俳句用語例小事典  
 冠雪の富士正面に入港す  
           近藤日影子          俳句用語例小事典  
 寄港船傘妻の若潮汲みにけり  
           北川わさ子          俳句用語例小事典  
 凍港の鴉固りみて鳴かず  
           木村敏雄          俳句用語例小事典  
 凍港をななめに朝のけもの道  
           中台泰史          俳句用語例小事典  
 ここに着く三角倉庫のならぶ港  
 金子兜太 現代俳句協会  
 總帆を畳み母港の春潮に  
           広瀬河太郎          俳句用語例小事典  
 時雨るるや油の臭ふ港尻  
           永井一穂          俳句用語例小事典  
 島帰る艦に船の名母港の名  
           石渡ひろし          俳句用語例小事典  
 島港去年の芥のただよへる  
           田中つとむ          俳句用語例小事典  
 しみじみと年の港といひなせる  
           富安風生          俳句囊  
 出港の汽笛の余韻寒の晴  
           長竹千子          俳句用語例小事典  
 出港の汽笛短し冬の旅  
           蒲生正春          俳句用語例小事典  
 出港の船に異国旗南風の海  
           百崎象子          俳句用語例小事典  
 出港の別離を深むものに霧  
           浅野右橋          俳句用語例小事典  
 鱈船の還りし母港春の雪  
           小原弘幹          俳句用語例小事典  
 築港の荷役なき夜の海月かな  
           三宅荻女          俳句用語例小事典  
 築港の祓ひは冬の沖へ向け  
           松浦アキノ          俳句用語例小事典  
 築港へきてとぶかもめ雪催ひ  
           大野喜久子          俳句用語例小事典  
 纜を集めて漁港年新たに  
           米田周平          俳句用語例小事典  
 鳥賊火燃え島の寝静まる  
           秋山育江          俳句用語例小事典  
 鳥も消え凍港息をひそめけり  
           田川博子          俳句用語例小事典  
 入港の船の灯濡るる佐渡時雨  
           森沢義二          俳句用語例小事典  
 入港の真白き巨船夏来る  
           山下都風          俳句用語例小事典  
 ハーブひく漁港の船の夏至白夜  
           飯田蛇笏          俳句囊  
 廢港に沈む朽船春北風  
           白井常雄          俳句用語例小事典  
 廢港に残る船錆び冬霞  
           新信子          俳句用語例小事典  
 廢港や怒涛と暮るる石菫の花  
           牧山千代          俳句用語例小事典  
 はじめての寄港地すでに年明けて  
           山口浪津女          俳句用語例小事典  
 初潮や島の港の嫁荷船  
           岩佐逸子          俳句用語例小事典  
 初風や旧軍港に手漕船  
           宮原双馨          俳句用語例小事典

船揚げて凍港鷗（かもめ）飛ぶばかり	磯貝よしじ	俳句用語例小事典	軍港の黄昏 水仙と鉄匂う	伊丹公子	俳句囊
船溜めて月の漁港となりにける	湯浅清	俳句用語例小事典	繋りたる鞆の港や羽子日和	山口誓子	俳句囊
ふるさとの月の港をよぎるのみ	高浜虚子	現代俳句協会	港で編む毛糸続きは故郷で編む	大串章	俳句囊
短夜の旧軍港に来てあたり	徳丸峻二	俳句用語例小事典	港に/鱧は古い/遠き/海の大祭	高柳重信	現代俳句協会
三日はや鮪（まぐろ）漁船の入港す	草部薫	俳句用語例小事典	港に雪ふり銀行員も白く帰る	金子兜太	現代俳句協会
港町煉瓦の道も梅雨に入る	鈴木夢忠	俳句用語例小事典	港灣こゝに腐れトマトと泳ぐ子供	金子兜太	現代俳句協会
港見る椅子に涼しく相識らず	永山篁	俳句用語例小事典	港灣にくそまり雪をつのらしむ	佐藤鬼房	現代俳句協会
桃咲いて港に殖ゆる寄港船	吉川与音	俳句用語例小事典	傘さして港内漕ぐや五月雨	前田普羅	俳句囊
行く秋の定かな数の漁港の灯	田鎖雷峰	俳句用語例小事典	春を待つ港に船はなかりけり	増永波那女	俳句囊
をみなとはかかるものかも春の闇	日野草城	現代俳句協会	春暁や漁港の秩序ある活気	郡司吾郎	俳句囊
炎天の影もちあるく港町	八尾とおる	俳句囊	春灯の山へのびゆき港町	高浜年尾	俳句囊
黄塵来「みなとみらい」の一丁目	新井康村	俳句囊	初汐の船に米積む港かな	赤木格堂	俳句囊
河豚釣りやボロ石炭船入港す	村山古郷	俳句囊	清水湊富士たかすぎて暮の春	飯田蛇笏	俳句囊
郭公や韃靼の日の没（い）るなべに	山口誓子	現代俳句協会	船の名の月に読まるゝ港かな	日野草城	俳句囊
巨き船造られありて労働祭	山口誓子	現代俳句協会	船飾る港の初荷眼のいたり	塩谷華園	俳句囊
胸中の港ひらけ一隻ごとに沈黙し	和田悟朗	現代俳句協会	袖にみなとおもひやよりし舟灯籠	季吟	俳句囊
銀漢や安房の湊に土佐の舟	大串章	俳句囊	鶴凍ててとほき湊の白浪す	大野林火	俳句囊
空の深みに紙片港灣夫の夕餉	金子兜太	現代俳句協会	凍港や旧露の街はありとのみ	山口誓子	俳句囊
軍艦入港朝の舳に乳張らせ	金子兜太	現代俳句協会	日本船日毎入港年の暮	保田白帆子	俳句囊

氷菓売倦めば港の景を見る  
山田弘子 現代俳句協会  
来て異邦海港の夜のポストオフィス  
三橋敏雄 現代俳句協会  
利根川のふるきみなとの蓮かな  
水原秋桜子 俳句囊  
水仙花湊手錠の形して  
ぱらりとせ 冬 俳句データベース  
さいはての貨車を塩もて充たしをり(山川港)  
飴山實 少長集俳句データベース  
港の少女 今日のはじめての船名 読む  
伊丹公子 俳句データベース  
初荷船着きし港の煌々と  
伊藤一子 俳句データベース  
水中花港まつりの灯に買へり  
伊藤京子 俳句データベース  
銀積みし港の跡や秋の蠅  
磯貝碧蹄館 俳句データベース  
恋猫や屋根ばかりなる桑名港  
永井龍男 俳句データベース  
日曜日舟虫奔る焼津港  
燕音十月 俳句データベース  
定年近く年の港に舳ひける  
燕音 十二月 俳句データベース  
雪しまく港にあぐる魚青し  
遠藤 はつ 俳句データベース  
さいはての港夜寒の灯を撒けり  
遠藤梧逸 俳句データベース  
港出て霞の船となりゆけり  
遠藤八重 俳句データベース  
夏至の夜の港に白き船数ふ  
岡田日郎 俳句データベース  
唐ゆきの悲しき港花八つ手  
岡部六弥太 俳句データベース  
ここよりの港もつとも芙蓉実  
岡本 眸 俳句データベース  
新港にはじめての船冬かもめ  
下田稔 俳句データベース

港深く原潜灯り暦売  
加倉井秋『真名井』 俳句データベース  
夏蝶のはるかにくだる港かな  
夏井いつき 俳句データベース  
港埠はるか焦土は蒼き六月野  
河野南畦 「黒い夏」 俳句データベース  
のどけしや港の昼の生肴  
荷兮 俳句データベース  
水鳥や港に近き遊女町  
会津八一 俳句データベース  
港を覆ふふなだま祭りの林立旗冬を葬りのこ  
ゑにはためく  
鎌田純一 俳句データベース  
土佐湊鳩のゆらゆら朝寝して  
寒暑 四月-六月 俳句データベース  
断崖の隠れ湊に鳥渡る  
関森勝夫 俳句データベース  
密談のごとくにヨット風港  
関森勝夫 俳句データベース  
みなと未来メタリックなる薄暑光  
吉原文音 俳句データベース  
風待ちの港の見ゆる避寒宿  
吉田槻水 俳句データベース  
港人が皆持つ眼鏡蚊喰鳥  
久米正雄 返り花 俳句データベース  
凍港に起重機鷺の嘴の如し  
久米正雄 返り花 俳句データベース  
凍港のどこに鉋打つ連れて打つ  
久米正雄 返り花 俳句データベース  
船津屋はかの湊屋の夜長かな  
久保田万太郎 流寓抄以後 俳句データベース  
翻車魚の揚がる港の月夜かな  
宮坂静生 俳句データベース  
港のはづれ貨車とかならず荒地野菊  
宮津昭彦 俳句データベース  
港よりの青空ここに返り花  
宮津昭彦 俳句データベース  
尾花寂ぶしろがね積みし古港  
宮津昭彦 俳句データベース

荻枯れて石州浜田港かな  
京極紀陽 俳句データベース  
ゴム管が一つの肺に垂れている港  
橋本夢道 無礼なる妻 俳句データベース  
白南風の異人墓地発港行  
橋本榮治 麦生 俳句データベース  
兄逝く日卯の花の咲く港にあり  
金子皆子 俳句データベース  
青森の夜半の港の根釣かな  
嚮田 進 俳句データベース  
軍艦の泊まる港や植木市  
栗原利代子 俳句データベース  
雪しまき港の景をうばひけり  
五十嵐播水 俳句データベース  
夜の港極暑の芥たたへたる  
五十嵐播水 俳句データベース  
港出てヨット淋しくなりにゆく  
後藤比奈夫 花匂ひ 俳句データベース  
青北風や港気付の手紙束  
工藤義夫 俳句データベース  
夜寒さの二階から見る港の灯  
貢太郎 俳句データベース  
水盤や由良の港の舟もなし  
高浜虚子 俳句データベース  
晩涼や網戸に透ける港の灯  
高浜年尾 俳句データベース  
港に鱧は老い遠き海の大祭  
高柳重信 俳句データベース  
はせを忌の敦賀に月の港かな  
黒田杏子 俳句データベース  
能面のくだけて月の港かな  
黒田杏子 俳句データベース  
葉牡丹に植ゑ替へられし港かな  
黒田杏子 俳句データベース  
秋燕港に理髪発祥碑  
今井真寿美 俳句データベース  
花ミモザ港にクイーンエリザベス  
佐土井智津子 俳句データベース

紅毛も聞けや港の不如帰  
佐藤春夫 能火野人十七音詩抄  
俳句データベース  
竹煮草三国湊へ道別れ  
佐野美智 俳句データベース  
小樽港桜桃の花ともに暮れ  
細見綾子 俳句データベース  
青バナナ子に買ひあたふ港のドラ  
細見綾子 俳句データベース  
小湊の婆がそだてて罌粟坊主  
三浦桃甫 俳句データベース  
凍港や日露の街はありとのみ  
山口誓子 俳句データベース  
凍港や舊露の街はありとのみ  
山口誓子 俳句データベース  
鯖の子の潮に乗りくる波切港  
山崎新多浪 俳句データベース  
運命のいたずらなのだが美しい波浮の港の夕  
焼けにあう  
山崎方代 こおろぎ 俳句データベース  
野毛坂の坂のあかりにしたい来る名に負う港  
の乞食貴族よ  
山崎方代 方代 俳句データベース  
大漁の港鰯刺鳴き群るる  
山本満義 俳句データベース  
港より見えて廓の土用干  
篠原鳳作 俳句データベース  
秋の夜の星なく燈なく湊ねむる  
篠原梵 雨 俳句データベース  
朝日まだささぬみどりの湊を発つ  
篠原梵 雨 俳句データベース  
峰雲の映りみちたる湊に寄る  
篠原梵 雨 俳句データベース  
サボテンの花爛々と古港  
柴田白葉女 俳句データベース  
凍港の真中一筋解けはじむ  
守谷順子 俳句データベース  
港何処か鼓動し止まず春近き  
手島靖一 俳句データベース

葎茂る港埠の貨車は扉を閉さず  
秋元不死男 俳句データベース  
港坂秋果の店に「餌あります」  
秋庭俊彦 果樹 俳句データベース  
にぎりそむ港の空や立葵  
小原菁々子 俳句データベース  
干し烏賊の港見下ろす島の墓地  
小原菁々子 俳句データベース  
栈橋の影引く卯浪たつ港  
小原菁々子 俳句データベース  
船神事終りし港浮寝鳥  
小西魚水 俳句データベース  
陽はかつと港にあふれ菊人形  
小俣桑雨 俳句データベース  
盆踊り見に来てくらき港かな  
小林愛子 俳句データベース  
夕焼の港に鳩の降る日かな  
小林康治 『存念』 俳句データベース  
うき寐すなりひとつ湊の鴈と船  
松岡青蘿 俳句データベース  
帰る漁夫に夜の港の繁華かな  
松原地蔵尊 俳句データベース  
瞬くや大つごもりの港の灯  
松本陽平 俳句データベース  
真夜中の港を煌と螢烏賊  
菖蒲あや 俳句データベース  
さより釣港の音にまぎれある  
森 澄雄 俳句データベース  
長崎は港に音す花檣  
森 澄雄 俳句データベース  
港の灯瞬きもせず虎落笛  
水原春郎 俳句データベース  
水澄みて外輪船の港絵図  
杉山青風 俳句データベース  
港空ラつば鯉をいぶす煙流れ  
杉本寛 俳句データベース  
水母浮く引き揚げ港がわが生地  
杉本寛 俳句データベース

雪解富士清水港も昏れてきし  
星野椿 俳句データベース  
かげろひて港は夏をおもはしむ  
誓子 俳句データベース  
中華街ぬけておぼろの港の灯  
青木不二子 俳句データベース  
よごれたる凍港犬もよごれをり  
青葉三角草 俳句データベース  
くさいろの眼鏡をかけて北国をのぞめば春の  
留萌(るもえ)港見ゆ  
斉藤史 『ひたくれなみ』 俳句データベース  
本更津も港めくとき鱒雲  
石井とし夫 俳句データベース  
小樽港花風に潮満てりけり  
石原舟月 俳句データベース  
凍港を素描す画架を石廊に  
石原八束 俳句データベース  
みちのくの月の港の閑古鳥  
石原八束 『風信帖』 俳句データベース  
小湊や五日の磯のうつせ貝  
石塚友二 俳句データベース  
桐の花港を見れば母遠し  
石田波郷 俳句データベース  
蟬の穴あまたありける港かな  
石鴛岳 俳句データベース  
春雪や誰にともなく港の灯  
川村静子 俳句データベース  
子鯨の迷ひ入りたる港かな  
川田十雨 俳句データベース  
あけつびろげの 港のヨーコ ヨコハマ 夏  
素抱 七月・九月 俳句データベース  
黒南風や昼なほ耀の羅臼港  
村上喜代子 俳句データベース  
凍港の氷を解くと砲をうつ  
太田ミノル 俳句データベース  
凍港やからすの落す魚の腑  
泰史 俳句データベース  
港いつも寒き漢の声に満つ  
大橋敦子 俳句データベース

台風を告ぐる港の拡声器		西瓜船唐人宿を湊かな	
大島民郎	俳句データベース	調機 選集「板東太郎」	俳句データベース
伏見港失せて狐火絶えにけり		凍港や天主の鐘の夕告ぐる	
大島民郎	俳句データベース	葛花	俳句データベース
歩道橋くぐる港の冬かもめ		来世またをみなと生れむ雛納め	
大島民郎	俳句データベース	殿村菟絲子 『菟絲』	俳句データベース
花桐や港を出ざる船一つ		凍港に旗古るシブプレストラン	
大木あまり 火球	俳句データベース	田村了咲	俳句データベース
巢の蜂のみな出払つて港かな		花エリカ風待ち港情厚し	
大木あまり 火球	俳句データベース	田中英子	俳句データベース
港を出る船のあかるさ穴子釣		烏賊干して焼津の港夏近し	
滝春一	俳句データベース	田中冬二 俳句拾遺	俳句データベース
ただ海のかはらぬ貌をたしかめに休日を雨の		料理屑浮かべ港の春の潮	
港へと寄り		田中冬二 麦ほこり	俳句データベース
辰巳泰子	俳句データベース	秋灯下長崎港の古図赤し	
霧の海大博多港の灯を蔵す		筒井珥兔子	俳句データベース
竹下しづの女	俳句データベース	二人乗るあらくれ港飛魚舟	
阿媽港(あまかは)へ銀河ながれて文まゐる		藤後左右	俳句データベース
筑紫磐井 婆伽梵	俳句データベース	松過の港泊りの女づれ	
俯瞰に北風の港契約がんじがらみ		藤田湘子 春祭	俳句データベース
中戸川朝人	俳句データベース	開帳や港と共に古りし寺	
くもるとき港さびしや春浅き		洞外道子	俳句データベース
中村汀女	俳句データベース	凍港より大洋並べ誓子の忌	
松手入してみちのくの港かな		南部富子	俳句データベース
中村汀女	俳句データベース	凍港に人の匂ひの無い酒場	
朝曇港日あたるひとところ		能城 檀	俳句データベース
中村汀女	俳句データベース	湊名の呼子とよんで磯鴨	
梨食うぶ雨後の港のあきらかや		能村登四郎 天上華	俳句データベース
中村汀女	俳句データベース	港まで追ひ来る鰯鱒大漁	
花火揚がるは島の港か夜の秋		梅島 くにお	俳句データベース
中拓夫	俳句データベース	水草生ふさゞなみしゞに川湊	
新涼の港に大き魚影入る		麦南	俳句データベース
中拓夫	俳句データベース	下田港きだちちょうせんあさがお咲く	
鰯に塩ふる港の波のうつくしく		鳩信 玄帝	俳句データベース
中拓夫	俳句データベース	唐物を揚げし湊や秋風裡	
寒くなりぬ港の見ゆる窓に雨		鳩信 白帝	俳句データベース
町田しげき	俳句データベース	秋の船風吹く港出てゆけり	
油屋に秋の湊はしらねども		飯田龍太 麓の人	俳句データベース
調翁子 選集「板東太郎」	俳句データベース		

いさざ糺るのみの淋しき港かな

富岡桐人 俳句データベース

屋根屋根はをとこをみなと棲む三日月

富澤赤黄男 俳句データベース

青森の港は暗し夜鷹蕎麦

府金静波 俳句データベース

花火見てえ湊がましき家百戸

蕪村遺稿 秋 俳句データベース

夕立のあとの港へ船かへる

福岡清子 俳句データベース

炎天の船みぬ港通りけり

福田甲子雄 俳句データベース

日盛りや流木いろの港まち

福田甲子雄 俳句データベース

野ざらしに見ゆ炎天の蟹港

福田甲子雄 俳句データベース

大なる港に作る霞かな

碧梧桐 俳句データベース

小木港子ども花火の屋根越えず

蓬田紀枝子 俳句データベース

町角に干網垂らす秋刀魚港

蓬田紀枝子 俳句データベース

うぐひすや潮なめらかに石鏡(いじか)港

堀口星眠 樹の雫 俳句データベース

凍港や天主の鐘の夕告ぐる

堀端鳶花 俳句データベース

船寄らぬ港となりて花藻殖ゆ

茂里正治 俳句データベース

窓にすぐひろがる港金魚玉

木下夕爾 俳句データベース

波音に榎の実こぼるる港趾

木村蕪城 俳句データベース

サーカスの象吊る港十二月

野溝サワ子 俳句データベース

くだけたる船の湊やほととぎす

野澤凡兆 俳句データベース

のどを焼く酒や残暑の港街

有馬朗人 天為 俳句データベース

白日傘消え何事もなき港

鈴木鷹夫 俳句データベース

渴きつつ濡れて来したそがれの港

鈴木六林男 俳句データベース

てのひらは己れの港秋晴るる

和田耕三郎 俳句データベース

宗教の赤き港を乳母叱る

攝津幸彦 俳句データベース

凍港や楽器売場のごと光り

權未知子 貴族 俳句データベース

父を地に還す凍港ひかるころ

權未知子 貴族 俳句データベース

凍港の中央碧き潮動く

齋藤慎爾 俳句データベース

## 謝辞

本研究は九州大学芸術工学研究院環境計画部門、包清博之教授の終始懇切な御指導と御激励によって遂行されたものです。御教授からは、景観の捉え方などの座学に始まり、論文作成に当たっての留意事項や、全体構成の設計方法、データ分析手法など、基礎的知識から応用・計画論に至るまで、多くのことを学びました。また、東京在住時も、遠方から、電話、メール等にて対応して頂いたこと、心より感謝致します。

併せて、論文査読に当たり、九州大学芸術工学研究院環境計画部門、田上健一教授、朝廣和夫准教授からは有益な御助言と綿密な御校閲を頂きました。

九州芸術工科大学大学院時代では、青木わかさ氏、中村哲也氏に、現地調査に同行していただき、自然公園における海辺の現況を肌身で知ることが出来ました。

以前勤めていた職場では、武藤薫氏、小川孝也氏から、港湾計画の基礎を指導して頂き、未開分野に対する有益な経験を積むことが出来ました。また、住吉徹氏には、本研究の重要な基礎資料の収集を手伝っていただきました。

更に現職場では、溝口伸一氏、白石悦二氏から、広域地方計画の策定に関し、地域の特徴分析や、計画の進捗評価の手法などで指導を頂き、多くの知見を得ることが出来ました。

本研究には、作成に多くの時間を要しましたが、この同時間を共有して頂いた全ての方々から得た助言の賜物となります。この場を借りて関わりある全ての人々に感謝の意を示したいと思います。

平成 26 年 2 月 19 日

中江 亮太